ファンタジーなヒーロー

UFOキャッチャー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分の部屋で寝ていたのに起きたら真っ暗な空間にいた。そして目の前には転生設定といものが！これは転生した先で自分のやりたいことを色々ドタバタとやる主人公の物語である。

※本作は作者なりの台本形式ですので台本形式がお嫌いな方はお控えになるようにしてください。

目次

主人公設定（改）――― 1
他人物設定 ――― 6
第1話　転生 ――― 11
第2話　俺！起動!! ――― 16
第3話　遭遇！ ――― 20
第4話　遭遇！その後！ ――― 46
第5話　発見緑君！そして授与！
58
第6話　デート？そしてライバルと大切な人⁉ ――― 93
第7話　出たなヘドロ野郎！＆君ヒーローになれるって!! ――― 133
第8話　治療とちょっと修行…そして入試！おや3人目？… ――― 177
第9話　体力テストだ！…ついに拳藤が!? ――― 235
第10話　やったな拳藤!!そして戦闘訓練だ！ ――― 282
第11話　A対D！　ちゃんと前を見ようね!! ――― 303
第12話　B対I　油断は禁物だよ轟くん!! ――― 342
第13話　C対E　峰田ほどほどにしとけよ！ ――― 358
第14話　F対J　漢らしいのはいいよ

ね!!　――――――

主人公設定（改）

名　前【機神クラフト】
フリガナ【ハタガミ　クラフト】
性　別【男】
身　体【身長】１８１㎝
　　【年齢】１４歳→１５歳（７話から）
外　見【モデル：レッド○ード】【異形型】
　　目の色は基本白色か薄い水色、感情の起伏によって変化あり。
　　口は閉じているとよく見ないと分からない。体の色は黒に近い紺色。

好きな事やもの
・漫画／アニメ／ゲーム等
・お菓子
・絵を描くこと

・新しいことを知ること
好きな料理
・基本的になんでも好き。その時の気分による
嫌いな事やもの
・自己中な奴ら（マナーやルールを守らないマスコミ等）
・特定の虫（害虫）一応対処は出来る
・辛すぎる食べ物

【個性：空想】
頭の中で空想した力や事象を具現化または使うことが出来る。
体に定着させることも可。他人にも可
例：鑑定能力を定着↓個性：空想／鑑定

【所持個性】
・空想
（自分で空想した力・能力・事象を具現化し使う事ができる）
・鑑定
（人・物を鑑定し詳細を知ることができる）
・悪魔の実

（某海賊漫画の能力。任意で選んで発動できる）

・ＬＢＸ

（ダ○ボール戦機の機体を召喚又は機体に変身できる。必殺技も使える）

・治癒

（傷を治すことができる。すでに失った部位も可）

（怪我などによる後遺症も可）（病気は不可、あくまで外傷によるもの）

（補足：怪我による後遺症は怪我によって生じたものなので可にします）

・天才

（頭がめちゃくちゃ良い）

・デメリット削除

（個性使用で生じる体へのデメリットをなしにできる。常時発動）

（補足：このデメリットは体力の消費、疲労などは含みません）

（例：青山のネビルレーザー使用に起きる腹痛、お茶子の酔いなどを無しに出来る）

（ＬＢＸに変身して運動して体力を消費するのは適用外。ですがＬＢＸに変身してる時点で体が機械の状態なので余り体力の消費はありませんが…）

・アイテムボックス

（別の空間にものを収納できる。人は不可。）

・肉体強化改造
（自身の肉体を強化改造できる。骨の密度を最大化、筋肉の量を増量）
（筋肉をピンク筋に変化、視力を強化など肉体をある程度自由に強化できる）
（骨を金属にしたりは不可あくまで最大限強化したり多少変化させるまで）（第６話で追加）
・個性防壁
（自身に干渉する個性から身を守る。）
（例：物間のコピー、相澤の抹消、ＡＦＯの個性など）（第２１話で追加）
肉体強化改造の個性については今後追加する個性です。
主人公はチート個性を持っていますが今ある個性で十分満足ですので、肉体強化改造の個性を追加したらそれ以上は増やすということは今のところありません。【時間を止める個性】【個性無効化個性】【未来予知個性】【無敵になる個性】などそういった個性を出したりはしません。ぶっちゃけますとこういう個性は考えてはいなかったですね。
《チートすぎてこいつだけでいいのでは?》なく《チートだけどみんなと協力していく》といった感じで話を作っていきます。チートを前面に押し出さない感じですね。出すときには出しますがいつもではないです。
あと身長ですが最初高すぎるかなと思いましたが、障子や砂藤は雄英入学時の時から

でかいので問題ないと思いこの身長にしました。
後々たまーに変更点があったりするかもしれませんがご了承ください。
２０２０年１１月１２日
個性防壁を加えて書き直しました。

他人物設定

名　前【緑谷出久】
フリガナ【ミドリヤ　イズク】
性　別【男】
身　体【身長】１６６㎝
【年齢】１４歳↓１５歳（７話から）
【個性：ＯｎｅＦｏｒＡｌｌ】
何人もの力が蓄積され継承され続けた個性。瞬間的にものすごい力を出せたり、体全体
をパワーアップ出来るぞ！まだ１００％の力は出せない。
【個性：メラメラの実の能力】
クラフトから授与された個性。体そのものが火であるため物理攻撃は効かない。某海賊
漫画だとカナヅチになるが普通に泳げる。だが火であるため水の個性などには若干不利

である。

【技】

《火足(かそく)》

足の裏から火を噴出し空を飛ぶ技。しかし足から噴射させているだけなのでそこまでス

ピードはそこまで出ない。そのかわり旋回能力等の小回りは利く。クラフトとの個性練

習で編み出した技であり、本人が疲れない限りは飛び続けることは出来る。

《火足墳式(かそくふんしき)》

火足の機動力を高めたもの。火の噴出をジェット機の様に噴射する部分を絞り込み高い

速度を確保したのが火足墳式かそくふんしきである。ただし、速度が速いかわりに小回

りなどの旋回能力は落ちている。

名　前【耳郎響香】

フリガナ【ジロウ　キョウカ】

性　別【女】

身　体【身長】１５４㎝
【年齢】１４歳→１５歳（７話から）
【個性：イヤホンジャック】
　耳たぶが長いコードの様になっており先端がプラグの様になっている。左右ともに６ｍ
まで伸びる。プラグの先端を相手に刺すことで自身の心音を相手に爆音で衝撃波のよう
に放つことができる。また壁、地面に刺すことで索敵することができる。室内の様子を
探ったり災害救助などでは重宝されるだろう。
【技】
　Ｃｏｍｉｎｇ　Ｓｏｏｎ
名　前【爆豪勝己】
フリガナ【バクゴウ　カツキ】
性　別【男】
身　体【身長】１７２㎝
【年齢】１４歳→１５歳（７話から）

【個性：爆破】
　掌の汗腺からニトロのようなものを出し爆破できる。高い攻撃力を誇り爆破を利用し空
　中移動も可能。ただし街中だと周りへの被害を考慮するとあまり大規模な攻撃はおすす
　めできない。
【技】
　Ｃｏｍｉｎｇ　Ｓｏｏｎ

名　前【飯田天哉】
フリガナ【イイダ　テンヤ】
性　別【男】
身　体【身長】１７９㎝
【年齢】１４歳→１５歳（７話から）
【個性：エンジン】
　足のふくらはぎにエンジンのような器官がある。個性を使うと足が速くなりその速度を
　生かした足技がある。最初から速度Ｍａｘではなく１速２速３速というよ

うに段階を上げて
速くなる。燃料はオレンジジュースであり、炭酸系はエンストしてしまう。
【技】
Ｃｏｍｉｎｇ　Ｓｏｏｎ

第1話　転生

事の始まりは中国軽慶市発光する赤子が生まれるというニュースであった
それを皮切りに世界各地で『超常』が発見される。
なにが原因なのかも判然としないまま時は流れ、

――『超常』は『日常』に――

――『架空』は『現実』に――

世界総人口の八割が何らかの『特異体質』である超人社会となった現在
混乱渦巻くこの世の中で、かつて誰もが空想し憧れた一つの職業が脚光を浴びていた

???「……っ……んっ？……ここどこ？」

目が覚めると真っ暗な空間にいた。そして目の前にはＳＦ映画やアニメに出てくる空中ディスプレイのようなものがある。

???「なんだこれ？……てゆーか俺は確か部屋で寝てたはずなんだけど…なんでこんな真っ暗な場所にいるんだ？」

辺りを見渡すがどこを見ても真っ暗である。

???「真っ暗でなんも見えねぇ…いや見えないというより何もないって感じだな…」

辺りを見渡しても仕方がないので俺は目の前のディスプレイに目を向ける。ディスプ

レイには【ｔｏｕｃｈ】の文字があった。
???「タッチ？触ればいいのかな？」
彼は人差し指で【ｔｏｕｃｈ】の文字を触る。触られたことによりディスプレイの画面が変わる。
???「おっ変わった」
画面が変わると画面中央に文字が表示される。
???「ん～何々……転生設定？」
???（……転生？転生ってあの転生か？これは…）
彼はもしやこれはラノベや漫画のあれでは!?と思った。
???「いや待て待て、そんな都合よく、それに夢という可能性もある……だが、もし本当ならば……よし、ここは信じてやってみるか。」信じる者は何とやら～ってね！
彼は気持ちを切り替え設定に取り掛かる。
???「え～と設定項目は名前／性別／身体／外見／能力／転生先／その他設定……転生先まで決めれるのか、テンション上がるな！」
彼は手際よく設定入力をしていく。

ピッ，ピピッ；ピッピッピ……

???「よし！こんなもんやろ！」

―設定―

名　前【機神クラフト】

フリガナ【ハタガミ　クラフト】

性　別【男】

身　体【身長】１８１cm

【年齢】１４歳

外　見　モデル【レッド〇ード】【異形型】

目の色は基本白色か薄い水色、感情の起伏によって変化あり。体の色は黒に近い紺色。

能　力【個性：空想】

頭の中で空想した力や事象を具現化または使うことが出来る。

体に定着させることも可。他人にも可

例：鑑定能力を定着↓個性：空想／鑑定

転　生　先【僕のヒーローアカデミア】

そ　の　他　原作開始約1年前

この設定で完了しますか？【ＹＥＳ／ＮＯ】

クラフト「よ～し……それじゃいってみますか！」

彼は完了のボタンを押す。ピッ

押した瞬間体の周りに光の粒子がキラキラと舞う。

クラフト「ウオッ!?ん？なんだ意識が……」

そして彼の意識はそこで一度シャットアウトした。

第2話　俺!起動!!

クラフト「・・・っんあ・・・ここは?」
光の粒子が体の周りを舞った後、俺は意識を失った。そして目を覚ますとそこは元々俺が寝ていた部屋とは別の部屋だった。
クラフト「ここは・・俺の部屋じゃねぇな。それに体も以前より大きい感じがする。」
クラフトは部屋と自分の体を確認し部屋にあったテレビの電源を付ける。リモコンでテレビを付けるとそのには漫画の中でしか見たことがないヒーローが映っていた。
テ　レ　ビ「オールマイト氏速攻で事件解決!」「ベストジーニストの今日のコーデ!」
テレビを付けて改めて自分は転生したことを確認する。
クラフト「マジで転生したんだな…痛っ!?」
自分が転生した世界へ来たことを確認した瞬間頭に激痛が走った。
クラフト「イイデデデデ!!」
あまりの痛さに床に倒れ悶えるが激痛は2秒ほどたったらゆっくりと引いていく。
クラフト「しっ死ぬかと思った・・・」ハァハァ

激痛の正体はこの世界における自分の情報だった。転生設定のその他の設定において自分の立ち位置を決める項目において色々と設定したことを思い出した。

クラフト「そういえば設定したな、だけどこんな激痛がくるとは思わなかった・・・えーと両親は事故によって死んで現在は一人暮らしだったかな。あと、家はマンションの一室（１ＬＤＫ）で、場所は静岡県で雄英高校も電車で3駅ぐらいの近さだったかな?」

クラフトは自分の情報を少しずつ確認した。

クラフト（それにしてもなんか暑いな）

部屋が暑いことに気づいた俺はふと部屋にあったカレンダーが目に留まった。

クラフト「今は7月だったのか・・・そうか今は夏休みだ!」

クラフトは自分の頭の中に入ってきた設定以外の情報を思い出す。設定以外の情報とはなにか?それは自分が設定した情報以外の情報である。自分の情報を全て、正確には詳細に設定することは中々骨の折れる作業である。ではその骨の折れる作業はどうしたのかというとなんとも便利なものがあった。それは設定画面のなかにあった【ご都合主義自動設定】というボタンがあった。これは自分が設定した以外の情報を自動設定してくれるという何ともありがたいシステムである。まあ設定してくれるのは、自分の身分に関するものとかだけどね。生年月日やこれまでの学歴云々現在の自分の家の情報、人間関係とかね。

クラフトは一通り自分の身辺の事を確認した。
　クラフト「さて夏休みか、一応原作開始約1年前ってしたけど色々行動するにはちょうどいいな。今は中学2年生で、緑谷たちも同じかな?とにかく準備しないといけないな。個性も確認しないと。」
そこから彼は色々と準備を始めた。まずは自身の個性についてだ。これは問題なく使えた。彼の個性は【空想】自分で空想した力・能力・事象を具現化し使う事ができる。また、一々空想して力や能力を使うのは面倒なので便利な能力は新たな個性として体に定着させた。
【個性】
・空想（自分で空想した力・能力・事象を具現化し使う事ができる。使いこなすには練習が必要）
・鑑定（人・物を鑑定し詳細を知ることができる）
・悪魔の実（某海賊漫画の能力。任意で選んで発動できる）
・ＬＢＸ（ダ○ボール戦機の機体を召喚又は機体に変身できる。必殺技も使える）
・治癒（傷を治すことができる。すでに失った部位も可）
・天才（頭がめちゃくちゃ良い）
・デメリット削除（個性を使う事で生じる体へのデメリットをなしにできる。常時発

動）

クラフト「ふぅ、今のところはこんなもんでいいかな。
あんまり多く合っても使いこなせなきゃ意味がねぇからな。」

俺は一息入れるとベランダに出る。ベランダに出ると心地良い風がひゅうと吹く。

クラフト「フッフッフさ～てせっかく転生できたんだし思う存分楽しんでやる!!」

その日世界に一人の男が舞い降りた。

第3話　遭遇!

転生した日は個性について把握&調整をし、その日を終えた。

――翌朝――

クラフト「さ～て今日は何をしようかな～」

クラフトは朝食を食べながらやりたいことと、そのための準備について軽く考える。モグモグ

クラフト「まずは…基本の『衣・食・住』は揃っている、お金も親の貯金や保険金があるので問題なし…」

親は設定で俺からしたら初めからいないけど、ご都合主義自動設定のおかげで記憶（情報）はある。そのため親の親に関するものは俺が相続やらなにやらしている。

クラフト「ということは次はゲームに例えると探索だな!街に出るついでに買い出しとかもしないと…荷物を手で持つのは面倒だな、かといって車は運転できねぇし自転車だと制限が…」ん?

クラフトはふと何か大事なことを忘れている気がした。

クラフト（ん～?なんだ?今なにか引っかかったような?大事なことを忘れているよ

うな…)

クラフトは思考をめぐらす…自転車だと制限…荷物…探索…ゲーム…能力…ハッ!思い出した!忘れてた!そうだよ!なんで忘れてたんだ!転生物のですべての主人公が手にするわけではないけど、チート能力として出てくる…【アイテムボックス】!別の空間にものを収納できる能力。なんで忘れてたんだ…

クラフト「まぁ忘れてたもんはしょうがねぇ…、とりあえず新たに個性として作るか」

空想!アイテムボックスからの…定着!

クラフト「よ~しできた。では【アイテムボックス】も作ったし街に行ってみるか」

クラフトはパパッと準備をして街を探索しに家を出た。

・・・・・・・・・

・
クラフト（ふぅけっこう大きい街だなショッピングモールやスーパーもある、色々と便利な街だな。）グゥゥゥ…
クラフト「腹減ったな…飯を食いに行きたいがその前に銀行でお金をおろさないとな」
お昼を食べに行く前に今後の生活費等のお金をおろしに銀行に向かう。
――銀行――
ワイワイ…ガヤガヤ…ザワザワ…
クラフト（お昼だからけっこう混んでいるな…まぁ気長に待つk「全員動くなぁ!!」…え?）
客「「きゃあああああああっ!!!」」「ヴィッ！敵（ヴィラン）だぁ!!」「じゅじゅっ！銃持ってるぞ!?」
敵①「うるせぇぞ！テメーら!!!」バァン！（銃の音）
敵②「全員その場を動くな！おい店員！早くシャッターおろせ！」
銀行員（（ブルブル））
敵③「早くしねぇか!!」ダァン！（机を叩く音）
銀行員「ははははっはい！」

銀行員は端末を操作し出入り口のシャッターをおろす。ウィィィンガシャァン

クラフト（マジかよ…マジのマジかよマジですか。まだ2日目だよ、2日目でヴィランに遭うってオイ…とりあえず大人しくしておくか…）

敵②「よし…リーダー！出入口閉まりました！」

敵①「分かったさて…テメーらは俺たちが無事逃げるまでの人質だ！それまで大人しくしてもらうぞ！」

客「こんなことをして…すぐにヒーローと警察がくるぞ！」「そっそうだ！お前らなんかすぐに」

敵①「そのための人質なんじゃねぇか、バカなのか？テメェらは俺たちが逃げるまでの盾なんだよ」

客「そっそんな……」

敵③「おい店員！はやくこの鞄にありったけ金を入れろ！はやくしろ！」

銀行員「はっはい！」タッタッタッタ…

銀行員はヴィランが出した鞄を持って奥の金庫へ向かった。

敵①「金が手に入るまで少し時間が掛かる、その間にテメェらは拘束させてもらうおい」

敵（ヴィラン）のリーダーが部下に客を拘束するように命令する。部下はそれにうなずき行動す

る。
敵②「オラッ！テメェら後ろに手回して並びな！」
１５分後…約２０名の客及び銀行員が拘束され床に座らされる。もちろんこの俺も。
クラフト（どうしよう…こういう場合映画やドラマとかだと勇敢に動いて犯人制圧！なんてしてるけど…普通に考えて下手に動くのは危険だし、やっぱヒーローと警察に任せるか…だがいざという時は個性を使って…）
人質「うぅぅ…ママぁ…」「だっ大丈夫よすぐにヒーローが」
敵③「うるせぇぞ!!ガキがピーピー泣いてんじゃねぇよ！」ドォンッ！（銃の音）
敵（ヴィラン）の一人が天井に向け銃を発砲。
人質「「きゃあああああ!!!」」「おいまだ子供だぞ！」
敵③「あぁ？だから何だよガキだからって俺は容赦しねぇぞ!?」
クラフト（う～んまだ小さい子供にとってこの状況は怖すぎるよなぁ…なんとか落ち着かせねば…）
敵（ヴィラン）が子供に危害を加えないように子供を落ち着かせるため俺は少年に話しかけた。
クラフト「ＨＥＹ少年」
子供人質「ぐすん……なぁに？」
クラフト「大丈夫かい？」

敵③「おいお前、なに勝手にしゃべってんだ?」
クラフト「まぁまぁ少しぐらいいいじゃないですか、それにこれ以上子供が怖がって泣かれたらあなたも困るのでは?」
敵③「……まぁいいその子供を落ち着かせるまでだ…」
クラフト「ありがとうございます」
クラフトは子供落ちつかせるために話しかける。
・
・
・
クラフト「へ〜じゃあ将来はヒーローになりたいのか」
子供人質「うん!そしてたくさんの人を助けるんだ!」
クラフト「お〜立派じゃないか将来が「そこまでだ」」
子供が十分に落ち着いてきた頃合いに先ほどのヴィランが話をさえぎった。
敵③「もう十分落ち着いたろ?お話はここまでとする」
子供人質「まっまだ「ああ?」……」
クラフト「少年どうやらお話はここまでのようだ」

子供人質「…うん……」涙目
クラフト「少年…ヒーローになりたいのならまず泣き虫を治さないとな」
子供人質「!」
クラフト「そしてまず君のお母さんを安心させないとな」
子供人質「うん!」
母親人質「息子をありがとうございます…」
クラフト「いえいえ」
敵③「よかったでちゅね～このお兄ちゃんに慰めてもらって～w」ゲラゲラ
子供をバカにするように敵(ヴィラン)が茶化していると次の瞬間
敵②「おい!外にヒーローと警察が来てるぞ!」
敵①③「ダニィ!!」
外から見えないようにおろした窓のブラインドに隙間を作りながら外を確認する敵(ヴィラン)達。
敵①「チっ!外の誰かが通報したのか!」
敵②「リッリーダーどうするんだ?」
敵①「ああ慌てるんじゃねぇ…こういう時こそ冷静にやるんだよ。かっ金のほうは?」

クラフト（めっちゃ動揺してんじゃん…）

敵③「いま終わったぞ！」

敵①「よし、あとは逃げるだけだな！」

敵（ヴィラン）達はあとは逃げるだけと言った…この時人質達はこれで助かると安心する。だが敵のリーダー（ヴィラン）が人質の方へ目を向け歩いてくる。そしてある1人の少女の前に立つ。

敵①「お前は俺たちと一緒に来てもらうぞ」

????「……えっ？」

少女は突然のことに固まる。

敵①「だから俺たちが安全に逃げるため一緒に来てもらうんだよ！」グイッ！

「…いっいや！」

????「響香!!」

敵のリーダー（ヴィラン）は少女の腕を掴み立たせるが少女は拒否し少女の母親が娘に向かって叫ぶ。

響香「かっ母さん！」

クラフト（きょうか？それにこの声…もしかして…）

クラフトは声のする方へ顔を向ける。そこには耳たぶがイヤホンのようなものになっていて髪に心電図のような模様が入った女子がいた。

クラフト（エエエーー!!あれって耳郎じゃん!!まさかこんなところで原作キャラと遇うとは!!うんカワイイ!じゃなくて!このままじゃ耳郎ちゃんが危ない目にあってしまう…どうすれば……正直めっちゃ怖いけど俺が人質に変われば…うんめっちゃ怖いだが、耳郎ちゃんのためにも!!クラフトいきまぁーーーす!!）

耳郎響香（いっいやだ!怖いよ!だれか…だれか助けて!!ヒッヒーロー!）涙目

耳郎が心の中で助けを求めたその瞬間…

クラフト「おっ?」

全員「「「「「「「!!?????」」」」」」」

敵①「……なんだ…」

クラフト「その娘を放してくれ、俺が人質になる（ヒィィ～心臓バックバク!!）」

敵③「おいおいなんだぁ!ヒーローにでもなったつもりかぁw」ゲラゲラ

敵②「女の子の前だからカッコつけてんのかw」ゲラゲラ

敵①「この状況で自ら人質になろうてか?……いいだろう人質はテメェだ。「「リーダー!?」」黙ってろ!ただし妙な真似はするなよ?したらどうなるか分かるだろうな?」

クラフト「わかった…（どうしようこのあと…）」

敵②「リーダー!外の連中が慌ただしいぞ!」

敵③「おい！オールマイトいるじゃねえか！」
人質「オールマイト！」「やった！これで助かるぞ！」
人質達はオールマイトの名を聞きそれぞれ安堵する。だがその状況にイラついたのか敵（ヴィラン）の1人が天井に向け銃を発砲。《バァン!!!》
人質「「「きゃあああぁぁ!!!」」」「「「ひぃっ!!!」」」
敵③「うるせえぞテメェら!!何がオールマイトだ！こっちにはテメェら人質がいることを忘れんなよ！」
敵②「しかしリーダーどうやって逃げるんだ？」
敵①「ああ？簡単よ人質のコイツを盾にして燃料満タンの車を要求してトンズラよ！」
敵②③「「リーダーあったまいいー!!」」
敵①「ふふん！」ドヤァ！
クラフト（コイツら頭良いのかアホなのかようわからん（；^　ω^　））
敵①「よしそろそろ逃げるぞ！」
敵②③「「へいっ!!」」「おらテメェもだ来い！」
クラフト「あっハイ」
俺は腕を引っ張られ連れていかれる。

耳郎響香（あの人大丈夫かな……）
自分の代わりに人質になった男の人を見ながら耳郎は彼の安否を心配した。
敵①「よしシャッター開けろ」
敵②「へい」ガチャガチャポチッ！
敵（ヴィラン）の１人が出入口のシャッターの端末を操作しシャッターを開ける。
ガシャッ　ウィィィィィ
クラフト（うーんどうしよう…）

――銀行入口付近――
??警部「中の様子はまだ分からないのか？」
警官「ハッ！内部の監視カメラにアクセスしたのですが全てノイズがかかっており中の様子は確認する事ができません！」
??警部「ふーむ…立て籠っている敵（ヴィラン）の個性かな？」
警官「おそらくその可能性が…」
??警部「敵（ヴィラン）からの要求とかは？」
警官「いえ現在ところありません！」

??警部「我々が来たことによって下手に動けなくなったのかな?…」
野次馬「なんで警察とヒーロー止まってんの?」「中の様子がわかんないんじゃね?」
ヒーロー「くっ下手に突っ込めば人質となっている人がかえって危険になってしまう…」
ヒーロー「どうすれば…」
警察とヒーローが状況をどのように打開するか悩んでいると…
「ハッ――ハッハッハ――!!」
野次馬「この声は!」「あそこだ!」
????「わぁーたぁーしぁーがぁーー来たぁっ!」ドスン!!
野次馬「「「オールマイトだ!」」」ワアァァァ!!!
No.1ヒーローの登場に沸き立つ野次馬。
??警部「オールマイト」
(オ)マイト「やぁ塚内君!事件はどういう状況だい?」
塚内警部「中の様子もわからず、ヴィランからの要求とかもないといった所だね」
(オ)マイト「ウゥム…それは中々に困った状況だね」
塚内警部「それに我々が到着したあと店内で発砲音が2回あった」
(オ)マイト「なっ!人質は無事なのかい!?」

塚内警部「落ち着いてオールマイト、中の様子がわからなければ確認の仕様がない!」
（オ）マイト「……すまない塚内君…クッ!一刻も早く助けなければ!」
塚内警部「気持ちは一緒さオールマイt」
警官「警部!銀行のシャッターが開きます!!」
塚内警部・オールマイト「!!」
事件の状況が動こうとする。
（オ）マイト「塚内君…」
塚内警部「ああ…どうやら動き出したね…頼むよヒーロー」
（オ）マイト「もちろんだとも!」
事件を速やかに解決しようと息巻くオールマイト。

――銀行入口――

敵①「よぉぉしいくぞお前ら!」
敵②③「「おう!リーダー!!」」
クラフト（どうやって倒すか…う～ん…）
敵①「おらぁ!ヒーロー共近付くんじゃねぇ!」ドオンドオン（銃の音）
敵③「近づいたらこの人質の命はねぇと思え!!」カチャ…

敵（ヴィラン）のリーダーは空に向け銃を発砲もう1人は俺の頭の横に銃を突きつける。
敵②「人質を解放してほしければ燃料満タンの車を用意しろ！」
敵（ヴィラン）達は逃げるために警察とヒーロー達に逃走用の車を要求する。だが帰ってきた答えは別の言葉だった。
警官「君たちは完全に包囲されている、人質達を開放し大人しく投降しなさい」
クラフト（すげーテンプレ通りの言葉だ…）
この言葉は逆に敵（ヴィラン）達を怒らせた。
敵①「あ〃ぁ!?そんな答え求めてねぇんだよ!!車を用意しろってんだよ!!」
敵③「おらっテメェも人質の演技しろや」ボソボソ…
敵（ヴィラン）の1人が小声で言ってきた。
クラフト「えっ?えーと…ウワータスケテ―ヒーロォー」クッソ棒読み
敵②③「「……なんでそんなクソ棒読みなんだよ（怒）」」ボソボソ…
クラフト「（やべぇちょっとおもろい）ウワータスケテ―コワイヨーヒーロー」
更にふざけるクラフト。
塚内警部（人質の少年…肝が据わってるのか言っている言葉が完全に棒読みだよ…）
（オ）マイト「くっ！少年もう少しの辛抱だ！もう少し耐えてくれ！」
塚内警部「えっ?」

ヒーロー・警官「「「えっ?」」」
野次馬「「「「えっ?」」」」
(オ)マイト「…えっ?なんだい?何かおかしなこと言ったかな私…」
どう見ても棒読みなのにそれを真に受けとるオールマイト。
敵①「……ハッ!オラァッ!早く車を用意するんだよぉ!」
ヒーローも警察も手が出せない状況が続くかと思われたその時…
????「そっ…そのお兄ちゃんをはなせぇ!!」
敵①②③「「「?!?!」」」
クラフト「!?」
(オ)マイト「!?」
塚内警部「!?」
ヒーロー・警官「「「?!?!」」」
野次馬「「「「?!?!」」」」
全員声のする方へ顔を向ける。そこには1人のまだ幼い少年が震えながら立っていた。

――少しさかのぼること銀行内部――

人質「あっあの少年は大丈夫だろうか?」「だっ大丈夫さヒーローが何とかしてくれる

さ」

人質「それよりこの拘束解けないか？」「だれか刃物系の個性の人いるか？」

人質「俺刃物系の個性だぞ」「おおっよしバレないようにこっそりと…」

・　・　・

人質「よしこれで全員」「やったぁ！」「今のうちに裏口から逃げよう」

人質「案内しますこちらです」「皆様ゆっくり静かに」

人質になっていた客たちは自力で脱出を始める。

耳郎響香（あの人大丈夫かな……）

耳郎母親「響香どうしたの？」

耳郎響香「え！いっいやあの人大丈夫かなって……」

自分の代わりに人質となった男子の事が心配になる耳郎。

耳郎母親「……事件が無事に解決したらあとでお礼言いましょうね…」

耳郎響香「うん…」

子供人質「……」

母親人質「どうしたのリュウト？」

耳郎響香「?」
リュウト「…」ダッ!
母親人質「ちょっリュウト!!」
リュウト少年は突如出入口の方へ走った。
耳郎響香「ちょっ!」ダッ!
耳郎母親「あっ!響香!」
耳郎は数秒遅れて少年のあとを追いかける。
耳郎響香（何やってんだウチ!?体が勝手に!?）
先に走り出したリュウト少年は出入口にいる敵（ヴィラン）達のところについた。そして…
リュウト（ぼっ僕はなるんだ!みんなを助ける…ヒーローに!）

リュウト「そっ…そのお兄ちゃんをはなせぇ!!」
耳郎響香「!!」

少年は叫んだ

――銀行出入口――

リュウト「そっ…そのお兄ちゃんをはなせぇ!!」

クラフト「少年!?」

声がした方に顔を向けると先ほど話をした少年が震えながら立っていた。

敵③「…お兄ちゃんをはなせぇ?ギャハハハハハwおいクソガキおめぇマジで言ってんのか?テメェみてぇなクソガキになにができるんだ?w」

敵②「大人しくしときゃあ助かったのかもしれないのによw」

警官「警部!敵(ヴィラン)達の後方に子供が!!」

(オ)マイト「まっまずい!!」

オールマイトが行動を起こそうとする。だが…

敵①「おっと動くなヒーローコイツがどうなってもいいのか」カチャ…

敵(ヴィラン)のリーダーが俺の頭に銃を突きつける。

(オ)マイト「くっ…(くそどうすれば…)」

クラフト(まずいマズイ不味い非常にまずい状況だ…少年を守りに行きたいが動けない!)

敵①「おい見せしめにあのガキ殺れ」

敵③「わかりやした」ボッ!

敵(ヴィラン)の1人が少年の方に手をむける、すると火の玉が出てくる。

敵③個性【ファイヤーボール】
手のひらから火の球を撃ち出せる!威力は体力を消費することで上がるぞ!
大きい威力を出そうとするとその分体力は大きく消費される!

リュウト「ひっ!」ガクガク…
敵③「出しゃばったことをあの世で後悔するんだなぁ!!」
クラフト(ヤバい!!)
少年に火の球が撃ちだされそうになった瞬間1人の少女が少年を庇うために飛び出る。
クラフト(あれは!)
飛び出した少女は耳郎であった。耳郎を確認した瞬間俺は後頭部を敵(ヴィラン)のリーダーの顔面にぶつける。
敵①「ガッ…こっの…」ふらっ…
敵②「なっコイツ!?」
顔面をぶつけられたため敵(ヴィラン)のリーダーはよろけ拘束が緩み俺は2人の元へ走った。突然のことによりもう1人の敵(ヴィラン)は反応が遅れた。

クラフト（なんとかなるだろうと楽観視していた…こんなことになるなら最初から個性使っとけばよかったな…後悔しても仕方ないか今は2人を！いくぜ！トランスフォォォム！ＬＢＸ　アキレス！）

個性を使った瞬間小さい正方形の薄水色の光の粒子が体の周りに現れる。

敵③「なんだあれは!?」

敵②「かまわねぇ3人とも殺っちまえ!!」

塚内警部「オールマイト！」

（オ）マイト「!!…私としたことが!!」

敵③「死ねぇ!!」ボシュウッ!!

!!!!ボオオオオオオオオオオン!!!!

オールマイトが反応した時には遅かった。敵（ヴィラン）の火の球が3人に当たり爆発を起こした。

母親人質「いやあああ！リュウトォォ!!」

耳郎母親「響香ぁぁぁ!!!」

敵①「ハハハハハハハハハ!!人質のくせに出しゃばるからこうなるんだ!!哀れだなぁNo.1ヒーローオールマイト!!さっさと俺たちに車を用意しとけば死人が出ずにすんだのによぉ!!」

（オ）マイト「くっ貴様ぁ…」
敵③「おやぁ～どうしたオールマイトォ?いつもの笑顔はどうしたあw?」ゲラゲラ
（オ）マイト「君たちこれは罪が重いぞ…」
オールマイトは3人の敵(ヴィラン)を捕まえようと動き出す。しかし…
敵①「おっとオールマイトまだ人質はいるんだぞ!」
（オ）マイト「なに!」
敵①「おい近くに親がいたはずだ連れてこい」
敵③「へい」
オールマイト(まずいこれ以上は「あの一勝手に人を殺さないでほしいですね」!!)
敵①②③「「「!?!?!?」」」
塚内警部「!?」
警官・ヒーロー「「「!?!?!?」」」
先ほど火の球が撃たれ煙が舞っている所から声が発せられた。そして煙が徐々に晴れるとそこには2人を庇うように赤いマントを羽織った機械の騎士がいた。
敵①「なっ!なんだてめぇは!?」
クラフト「俺?俺は…いや…我は名はアキレス!」ビシッ!
俺はカッコよくポーズを決める。

リュウト「おっ…お兄ちゃん?」
クラフト「んっ?少年ケガはないか?そちらの君も」
リュウト「うっうん!」
耳郎響香「だっ大丈夫…」
クラフト「ならよかった」
敵③「アキレスだぁ〜?はっ!たかが姿が変わっただけで調子こいてんじゃねえ!もう一度くらいなぁっ!」ボシュゥウッ!!!
敵(ヴィラン)はもう一度火の球を撃ちだす。クラフトはシールドを取り出しかまえる。
!!!!ボオオオオオオオン!!!!
敵③「ハアッハアッ…はっ!他愛ねえ!!」
(オ)マイト「少年!」
クラフト(すごいな…衝撃は多少あるがなんともねぇ…)
煙が晴れると傷一つないアキレスが姿をあらわす。
敵③「なっ!無傷だと!?ありえねぇ!?」
敵①②「「ならこいつはどうだ!」」ガチャッ!!
残りの2人の敵(ヴィラン)が銃をかまえてきた。即座に盾をかまえなおす。
!!!バンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバンバン!!!

!!カキンッキンッキンッカキュンッキンッカキンッキンッキンッ!!

カチッカチッカチッ……

敵①②「クソ弾切れだ」「こっちもだ」

クラフト「終わりか?ならば今度はこちらの番だ!」

敵①②③「「「!?!?!」」」

敵②「させるかあ!」メキメキッ!!

敵(ヴィラン)の1人が上半身を大きくさせこちらに向かってくる。

塚内警部「オールマイト!」

(オ)マイト「わかっている!」

オールマイトが駆けだそうとする。しかし

クラフト「これ以上はやらせん!いくぞ必殺ファンクション!!」

(オ)マイト「!?」

塚内警部「!?」

クラフトはランスを取り出しかまえる

!!!!!

アタックファンクション

!!!!!

☒トライデント☒

ギュシュイイイン!!
ランスを片手で回転させランスの先端にエネルギーが集める。
そしてランスの先端を相手に向けたまま後ろに引き勢いよく前に突く。
ズキュゥゥウ!!
勢いよく放たれたエネルギーの槍は3方向に分かれる。
敵①「なっ！なんなんだこれはあああああああ!!!」
敵②③「「うおおおおあああああああああああ!!!」」
!!!!ドゴオオオオオオオオン!!!!
3!!!方向に分かれたエネルギーの槍は敵(ヴィラン)全員に当たり爆発、吹っ飛ばされた敵(ヴィラン)はそのまま銀行前の道路に落ちた。
敵①②③「「……」」ドサッ…
敵(ヴィラン)を倒した数秒後…野次馬の歓声が沸いた。
野次馬「「うっ…うおおおおおおお!!!」」「すげーなにあの子!?」「なんか光の矢みたいなのだしたよ!?」「一発で3人も!?」
マスコミ「ちょ！あの子にカメラ回して！」「写真写真！」「こちら現場！…」

同時に周りにいたマスコミも騒ぎ出した。
塚内警部「敵(ヴィラン)を確保!並びに人質を保護!あと周りの警備を!」
警官「「「「ハッ!!」」」」
警察が行動しようとしたそのとき…
敵②「うっ…ウオオオッ!俺はまだやられてねぇ!!!」
やられたはずの敵(ヴィラン)の1人が起き上がる。
警官「うわっ!まだ意識あるぞ!」「おいヒーロー頼む!」
敵②「くそっ!あのガキぜってぇ許さねぇ!殺さねえと「テキサアアス!スマッシュ!」ごはっ!」
再び起き上がったヴィランはオールマイトの一撃で倒れた。
警官「オールマイトありがとうございます」
(オ)マイト「うむ!ではあとはよろしく頼むよ!」
警官「ハッ!」
塚内警部「オールマイト助かったよ」
オールマイト「……いや今回私は何もできなかった…あの少年のおかげで敵(ヴィラン)を逮捕できた」
塚内警部「…そうだねまぁ今は後悔するより事件が解決できたことを喜ぼう」

オールマイト「うむそうだね…」

こうして転生2日目にして巻き込まれた事件は幕を閉じた。

クラフト（お腹すいた……）

第４話　遭遇!その後!

転生2日目にして敵（ヴィラン）による銀行強盗にまきこまれるが結果的に俺が敵（ヴィラン）を倒して解決す
るという形で幕を閉じた。その後人質は無事にヒーローと警察に保護され、各々事情聴
取や救急隊による診察や治療を受けていた。ちなみに俺がぶっ飛ばした敵（ヴィラン）達は警察
に拘束され早々と連行された。そして俺は現在ヒーローと警察に保護され事情聴取で
いいのかな?まぁお話をいろいろとしている。あっそれと俺が守った2人はちゃんと今
は親と一緒にいる。
子供母親「リュウト!あぁよかった無事で!本当に良かった!!」ハグッ!
少年の母親は包み込むように抱く。
リュウト「ママ……」

少年は目を涙目にしながら母親にゆっくりを抱きつく。
耳郎母親「響香！よかったわ無事で！突然走り出して行っちゃうもの…」
耳郎響香「うん…その…ゴメンナサイ…」
2人の母親は自分の子供が無事なことを確認し安堵する。
耳郎母親「今回はケガもなく無事ですんだけど、もし彼がいなかったらあなた死んぢゃったかもし
れないのよ…」
耳郎響香「ほんと…ゴメンナサイ…」カチカチ
響香は左右のイヤホンジャックの先端を合わせながら母親に謝る。響香の母親はそれを
見て少し苦笑いしながら響香に抱き着く。
耳郎母親「でもあなたが無事で本当によかったわ…あとで彼にちゃんとお礼をいいましょうね？」
耳郎響香「！…うん！」
そしてクラフトはなにをしているかというとヒーローと警察の人とお話をしている。
塚内警部「なるほど、君はお金をおろしに銀行へ来てその時まきこまれて今に至ると

…よし、あり
がとう色々と話してくれて」
クラフト「あのー刑事さん俺個性使ったんすけどそれについてなんかあるんですか？」
個性の使用には《許可証》又は《免許》が必要で無断で使うことは法律で禁止されてい
る。そうすることにより社会は一応秩序を保っている。ただ全く使ってはいけないとい
うわけではない。例えば『物を操る』個性の人が自分の鍵を落としたとき、個性を使っ
て拾うことは問題にならない。法律に照らし合わせれば違反行為であるが一々言ってい
てはキリがないので黙認されている。また常時発動型の個性もちゃんと手続きをすれば
問題はない。
塚内警部「本来ならば注意とかお説教とかがあるんだけど…今回は事が事だけにお咎めはないよ。

といより君のおかげで犠牲者も出ずに事件が解決できた。むしろこちらが助かった、

一警察官として礼を言う…ありがとう」

塚内警部はそういうと頭を下げた。

クラフト「え～と…その自分もあの時は必死だったので…だけど刑事さん自分が行動できたのもあ

の子のおかげですよ」

クラフトが少年のほうに顔を向けるとこちらに気づき小走りで自分のもとに来た。

リユウト「おっお兄ちゃん…あの…助けてくれてありがとう！」

クラフト「少年大したケガもなくてよかった…だが俺もあまり偉そうには言えないが…あの時の少

年の行動は無謀に等しかった…」

リユウト「!?……」しゅん…

塚内警部「……」

クラフトはあの時の行動について語り少年は突然言われたことに落ち込む。

クラフト「だが同時にあの状況を動かしたのも事実…そして何よりヴィランに立ち向

かう姿は…」

「かっこいいヒーローだったぜ!」ニカッ!

リュウト「!?」……ウルッ

クラフトは少年に向けて親指を立てて笑い少年はヒーローだったと言われ目が潤む。

そこに少年の母親が来る。

子供母親「息子を助けていただきありがとうございます……よかったねリュウト…」

リュウト「ぅっぅん…」ぽろぽろ…

子供母親「では主人も心配していると思いますので私たちはこれで…さぁリュウト行こっか?」

母親がお礼を言い息子の頭をなでると少年は涙腺が崩壊し大粒の涙を流す。

そして母親

と共にこの場を後にしようとしたとき少年がこちら振り返って再び戻ってくる。

子供母親「あっリュウト!」

タッタッタ…

リュウト「お兄ちゃん！」

クラフト「どっどうした少年？」

リュウト「なっなまえ…おしえて！」

少年はこちらに戻ってきたと思ったら名前を聞いてきた。

クラフト「（そういえば言ってなかったな…）俺の名前は機神クラフト…クラフトでいいぞ」

リュート「はたがみ…くらふと……おれリュウト！」

クラフト「リュウトか…いい名前じゃないか！」

リュウト「！…ありがとう！」

クラフト「さっお母さんが待ってるぞ」

リュウト「うん！ありがとうクラフトお兄ちゃん！」タッタッタッタッ……

リュウトは母親のもとにたどり着くとこちらに振り返り腕をふってきた。

（＾＾）ノシ

クラフトは流石に腕は恥ずかしいので手を軽く振る。そしてリュウトと母親はこの場を

後にした。

クラフト「(お兄ちゃんか…改めて思うとちょっと恥ずかし「カッコいいじゃないか少年!」う

おっ!オールマイト!(やべぇ画風すげぇ)」

オールマイト「遠くから見させてもらったよ君とあの少年のやり取りを!」

塚内警部「オールマイトのぞき見はいけませんよ(笑)」

オールマイト「ハッハッハ!すまない少し気になっちゃってね!」

クラフト「あのオールマイト何かご用ですか?」

オールマイト「いや~特に用はないんだけど、あのやり取り見たから思わず声かけちゃったよ!

だけどこれだけは言おう…少年!君もあの子にとってのヒーローだったぜ!」

クラフト「ヒーローに…なれてましたでしょうか…」

オールマイト「ハッーハッハッハ!謙遜するなよ~!自身の身を挺してヴィランの攻撃から守る姿

は間違いなくヒーローだった!だから胸を張っていいんだぞ!!」

オールマイトにそう言ってもらい嬉しく思うクラフト。

クラフト「!…ありがとうございます!」

オールマイト「うむ！では塚内君あとは任せていいかい？」
塚内警部「ああ、事後処理とかはもうほとんど終わっている、あとはこちらで済ませておくよ」
オールマイト「分かった！では後はよろしく頼んだよ！では！」シュバッ！
マスコミ「あっオールマイト！何か一言！」「一言お願いしますオールマイト！」
　マスコミがオールマイトにコメントをもらおうとしたが時すでに遅し、オールマイトは
　もう見えない場所まで移動していた。
クラフト「さて塚内さんもう帰っても大丈夫ですか？」
塚内警部「えぇ、もう帰っても大丈夫…あれ？名前言ったっけ？」
クラフト「さっきオールマイトが言ってましたので（笑）」
塚内警部「ああ、そういえばそうだね、あっもう帰っても問題ないよ1人で大丈夫かい？」
クラフト「1人で大丈夫ですよ」
塚内警部「分かった気を付けて帰るんだよ」
クラフト「ありがとうございます、では失礼します」
　クラフトは塚内さんにお礼を言いその場を後にした。ちなみにマスコミと

かは塚内さん
　達警察が抑えてくれている為問題ない。そして帰ろうとしたとき俺は自分の用事を思い
出す。
クラフト（あっそうだお金おろしに来たんだった、でも銀行は…仕方ない手数料かかるけどコンビ
ニでおろすか）
　コンビニによってお金を降ろすことに決めたとき後ろから声をかけられた。
????「あっあの!」
クラフト「んっ?」
　声がした方にふりかえるとそこには耳郎響香がいた。
クラフト「おっ君は…（おっとーすっかり忘れていたぞ～）」
耳郎響香「あの、お礼言いたくて…」
クラフト「お礼?なんの?」
耳郎響香「えっ?いや2回助けてくれたじゃん…」
クラフト「もしかして人質の代わりと敵（ヴィラン）の攻撃のとき?」
耳郎響香「そう!2回も助けられちゃったしさちゃんとお礼言いたくてさ!ホントあ

りがとう！」

クラフト「えっあ～うん！まぁ無事でよかったよ／／」照れ…

俺は耳郎に言われたせいか少し照れた。

耳郎響香「／／／!!」ドキッ！

クラフト「うん？どうしたなんか顔赤いぞ？」

耳郎響香「なっなんでもない！そっそうだよかったら連絡先交換しない？／／／」

クラフト「連絡先？いいぞ」

クラフトと耳郎はお互いの連絡先を交換した。

耳郎響香「そういえばまだ名前言ってなかったねウチ耳郎響香よろしく／／！」

クラフト「俺は機神クラフト、よろしく…／／」

耳郎響香「……」

クラフト「……」

耳郎響香「じゃっじゃあなんか用があったときとか連絡するね／／／」

クラフト「おっおう／／」

耳郎響香「じゃぁまたね／／／」タッタッタッ…

クラフト「おう…（やべぇ最後おうってしか言ってねぇ…）」

コミュニケーション能力を上げるべきかと思うクラフトであった…

耳郎響香（照れた顔…思わずドキってしちゃった……でも守ってくれてるときの背中…かっこよか
　　ったな／／／）
耳郎母親「あらあらどうしたの響香ちゃん?なんだかうれしそうな顔しちゃって!」
耳郎響香「ふぇ!?なななんもないよっ／／!!」
耳郎母親「え～気になるな～あっ!もしかしてさっきの彼のことかしら!?連絡先も交換したんで
　　しょ!」
耳郎響香「なっなんもないってば／／／!!」カァァ…
耳郎母親「きゃ～お母さん!いろいろ楽しみだわ!」
耳郎響香「／／／／…」ぷしゅ～～
　　響香は母親におちょくられ顔を真っ赤にしながら帰路についた。

クラフト「ぶわっくしょん!」
　　クラフトは耳郎と別れた後コンビニでお金をおろし必要なものを買って帰宅した。

――クラフト宅――

クラフト「2日目にしていろいろ疲れた……だけど嬉しいこともあったからいいか……」グウゥ～

クラフト「そういえば昼飯食えなかったな事件のせいで……もう夕方だけどぉふあぁぁ～」

ｚｚｚｚｚｚｚｚ…

クラフトは緊張の糸が切れたのかでかいあくびをした。そして同時に眠気がきて俺はそのまま座っていたリビングのソファで眠ってしまいその日を終えた…。

第５話　発見緑君!そして授与!

銀行強盗事件から数日…あれから俺はこの世界について色々と調べ物をしたり、個性の練習&調整&体を鍛えたりなどしていた。そして夏休みも８月に入り俺はあることをするために折寺中学校とその周辺の地図をパソコンで確認していた。

カチッ…カチカチ……ツィー……（マウス操作音）

クラフト「たしか漫画もアニメも団地のマンションだったはず…中学校から近い団地はここか?…

そういえば最初のシーンで公園の背景に団地があったな…ということはたぶんこの辺りかな?緑谷出久…デクが住んでいる場所は…」

なぜ緑谷のいる場所を確認しているかというとそれは…緑谷に個性を授けようと思ってね!このまま来年まで何もせずに原作通りに進めばオールマイトからワ

ンフォーオ
ール（ＯＦＡ）を譲渡されるけど、どうせなら緑谷がちがう個性を使うのを見たいしね！
クラフト（さて…緑谷に個性を授けるとしてどんな個性が良いかな……緑谷の親の個性は母親が【物を引きつける個性】で、父親は【火を吹く個性】だったかな…周りにあまり違和感を持たないようにするならこの２つのどちらかか、この２つが混ざった複合型の個性にするべきだな。複合型となると、【火を操作する個性】とかになるのかな？）
緑谷に授ける個性を考えるがどうせなら強い個性にしたいと思い悩む。
クラフト「操作系の個性と火の個性か…う～ん……火を生み出して操る…この２つの個性からだと
これが答えかな～？」ギィ…
自分の部屋の座っている椅子の背もたれにもたれながら自分の部屋の天井を見上げる。

火の個性について考えていたせいかふと某海賊漫画の能力を思い出す。
クラフト「……火を操るか…火を操る能力だとすぐに思いつくのはメラメラの実とかだな……いっ
そのことメラメラの能力に…ＯＦＡとメラメラって超強くね?あの火の力とパワー…それ
に物理攻撃無効って超強いな…」
クラフトは少し悩むが…
クラフト「でもまぁ…小さい時から個性が無いせいで、周りからイジメられてきたわけだし…しか
も今まで無個性と思っていた奴が強個性でしたーっていうのもおもしろいな…よし緑谷
に授ける個性はメラメラの実の能力に決定～♪」
おもしろそうという理由で決めてしまったがこれで緑谷に授ける個性は決まった。
あとは緑谷に会ってそれとなく理由やらそういう雰囲気にもっていって授けるだけにな
った。

クラフト「まぁ強個性だからって無敵ってわけじゃないし大丈夫でしょう。さてと探すのは明日からにするか…ちょっとドキドキするな、まぁすぐ会えるか分からんけど（笑）」

・
・
・
・
・
・

～～翌日～～

クラフト「いたわ…」

探し物というのは探しているときに見つからずそうでないときに見つかるものである…

次の日、クラフトは緑谷に会うため彼が住んでいるであろう該当地域を探索

した。最初
からそう簡単に見つかるはずもなく、午後１２時をまわったとき昼食を兼ねて一旦休憩
をする。昼食を食べ終わったあとクラフトは再び探索を再開した。
・
・
・
～約２時間後～
クラフト（やっぱそう簡単には見つからねえよな～）
クラフトはそう思いながら土手を歩いていた。すると土手と繋がっている橋の高架下に
複数の人影が目に入る。クラフトは立ち止まって何をしているのかと人影がいる方を凝
視する。すると小さい爆発のようなものが見えた。クラフトはまさか!と思い個性を
使って詳しく見ることにした。
クラフト（個性悪魔の実、ギロギロの実の能力!）

俺はギロギロの実の能力を使い高架下にいる人物を確認すると…

クラフト「いたわ…」

そして今に至る。

クラフト「まさか探索初日で見つかるとは…てか今気づいたけど、最初からギロギロの能力使えば

よかったじゃ…いやギロギロの能力の1つ、千里眼は視線は飛ばせるけど特定ができ

るわけじゃないからそんなに変わらんか…まぁ今はそれよりあっちをなんとかしないと

な…ではここは1つ助けに行くか！」

クラフトは緑谷を助けに高架下に向かう。

――高架下――

ボォン！

爆豪「おらデクゥ!!避けてんじゃねぇ!!」

爆豪は緑谷に向かって爆破の攻撃をする。

緑谷「ひっ！やっやめてよかっちゃん！」

爆豪　「あぁ～?.現実を見れていないお前に教育してやってんだろ?.むしろ感謝してもらいたいもんだ!.」

友達①「おいおい爆豪その辺にしておけよｗ」

友達②「まぁでも爆豪の言ってることは一理あるけどな～これ読んだところでヒーローになれるわけでもないし」ヒョイ

爆豪の周りにいた取り巻きの1人が地面に落ちている雑誌を手に取る。

友達②「月刊ヒーロー、今月の特集は《ヒーローになるためには!?.オールマイト氏に直接取材!!》ねぇ…いくらこれ読んだからって無個性じゃ厳しいんじゃね?」

取り巻きが手に取った雑誌は緑谷がコンビニで購入したヒーロー関連の雑誌であった。

緑谷「いっいいじゃないか無個性でヒーロー目指したって!それにやってみないと《ボォンー!》ひっ!」

爆豪「無個性のデクが何言ってんだ!?個性がねぇテメェに何ができるんだぁ?.あ

☒ぁ!?」

緑谷　「……」

緑谷は爆豪に言い詰められ黙ってしまう。

爆豪　「だが俺はちげぇ、この個性で必ずオールマイトをも超えるヒーローなって

「フッフッフ

w」あ?」

緑谷　「?」

友達①②「??」

クラフト「オールマイトをも超えるといってる奴が人をイジメちゃぁいけねぇなあ」

爆豪　「なんだてめぇは?」

俺は某海賊漫画に出てくるピンク色の上着を着た七武海の男の口調を真似て喋る。

クラフト「フッフッフwなぁにただの通りすがりの中学生さ」

友達①「なんだコイツ?てか俺らとタメかよ」

爆豪　「その通りすがりが何の用だ?用がねぇならとっとと失せろモブ野郎!」

クラフト「いやぁ歩いてたら爆発のようなものが見えたんだ、そして何をしているか気になったも

んだから来てみたら…まさかイジメの現場だったとはなぁ」
爆豪「あぁ?イジメじゃねぇよ!コイツが現実見えてねぇから教育してやってたんだよ!」
クラフト「教育ねぇ…それにしては随分暴力的じゃないか?オールマイトをも超えるヒーロー目指
してるやつが人に暴力をふるっちゃぁいけねぇなぁ?」
イラッ…
爆豪は自分がしたことについて指摘されたことが癪に障る。
爆豪「あ⊠ぁ?なんだテメェ喧嘩売ってんのか!?痛い目にあいてぇのか!?あ⊠ぁオイ!?」
友達②「おい爆豪ケンカはまず「黙ってろぉ!」…」
爆豪は取り巻きに忠告されるが途中で遮ってしまう。
クラフト「フフフフw自分が気に入らない事があると癇癪を起こす、ヒーローというよりはガキ
じゃぁねえか…それに人に個性を使って暴力をふるう時点で敵(ヴィラン)と同じだなw」

ブチッ‼

爆豪　「俺がガキで敵（ヴィラン）だとぉぉ…テメェ覚悟はできてんだろうなぁ…？おい黒肌野郎！今すぐ土下座して謝ったら許してやる！やらねぇと…どうなるか分かってんだろうな？」イライラッ…ゴゴゴ…

爆豪はブチ切れクラフトに謝罪を要求する。

友達①　「おっおいこれマズくねぇか？」

友達②　「あっああ爆豪のやつブチ切れだ」

緑谷　（まっまずい！僕を助けに来てくれたのかは分からないけどこのままじゃあの人が危ない！）

緑谷と取り巻き2人は危険な未来を察知する。

友達②　「おいあんた！さっさと謝れ！じゃないと本当に大怪我するぞ！おい緑谷もあの人説得しろ！」

友達①　「爆豪！これ以上はダメだ！もしバレたら後々面倒だぞ！」

緑谷　「あっあの！本当に早く謝った方がいいです！あなたが怪我を「フフフフフ

w」!!」

クラフト「誰が誰に謝るって?悪いことをしたのはそいつだろ!悪いことをした奴になんで謝らなきゃいけない?」

緑谷と取り巻きの1人が俺に謝るように言うがクラフトはそれを拒否。すると爆豪が…

爆豪「そうか…だったら…ぶっ殺すまでだなぁ!!」ボォン!

友達①「おい爆豪!」

爆豪は自身の爆破を推進力にしてクラフトに突っ込む。取り巻きの1人が呼び止めるがもう遅い。

爆豪「死ねえぇぇぇ!!!」

!!!ボオォォォン!!!

爆豪は容赦なく爆破攻撃をし爆破をうけた場所は煙が立ち込める。

友達②「おっおい…大丈夫かこれ…」

友達①「さすがに手加減はしてる…はず…」

緑谷（あわわわわわ!あああの人大丈夫かな!?）

爆豪以外の3人はこの状況を見守ることしかできない。

爆豪　「はっ!俺に歯向かうからこうな「あっぶないねぇ〜」なっ!!」

立ち込める煙の中から声が発せられる。そして平然とした顔で姿を現す。

クラフト「俺じゃなきゃケガしてたよぉ〜」

爆豪　「なっ!なんで無傷なんだてめぇ?確かに手ごたえはあったはずだ!?」

爆豪は一応手加減をしていたとは言え相手に確実なダメージを与えたと確信していた。だが相手はダメージどころかカスリ傷一つ負っていなかった。

クラフト「なんでだろうねぇ〜、おっやぁ〜どうしたんだい?鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして?」

クラフトが無傷なのはもちろん個性を使ったからだ。そしてクラフトは自分が攻撃したはずの相手が無傷だったことに驚愕している爆豪に挑発をする。また黄色の海軍大将の喋り方が爆豪を更に苛立たせる。

イラァツ!…

爆豪　「!?…あ☒ぁ!!てめえ調子に乗ってんじゃねぇぞ!!攻撃が当たってねぇんならテメェに当たるまで攻撃すりゃいいだけだ!!」ボォン!

爆豪は再び突っ込んでくるのに対しクラフトは迎撃する。

クラフト（個性悪魔の実、ピカピカの実の能力…）シュン!

爆豪　「消えっ?!なっ!?」

相手が消えたと思いきや次の瞬間自分の目の前に現れた。

爆豪　「けっ!だが手間が「光の速さで蹴られたことはあるかぁい?」…!?」

ドゴォッ!!!

クラフトは爆豪の腹に重い蹴りをいれる。蹴りを入れられた爆豪は１ｍほど飛ばされ

そのまま地面に叩きつけられ地面を転がる。

ドシャッ!ゴロゴロゴロ…

爆豪　「!?…ゴっ!ほォ……ぐぅっ…がはっごほっ!…おぇ…」

クラフト（みぞおちに入ったか?）

爆豪は片手を腹に当てもう片方の手と両膝を地面に付けている状態で伏せている。

緑谷　（あっあのかっちゃんが…膝をついている…）

友達①②「「爆豪!!」」タッタッタッ…

取り巻き2人が蹴飛ばされた爆豪の元へ駆けつける。

友達①「爆豪大丈夫か!?」

友達②「腹にもろに入ったけど大丈…夫?」

緑谷　（かっちゃんを一撃で…一体どんな個性なんだ?…そういえば蹴る前に光が何とかって…

まさか光に関する個性なのか!?もしそうならいくらかっちゃんの個性でも…）

緑谷は自分をイジメていた幼馴染が蹴飛ばされたことに驚愕する。そしてそんな幼馴

染を蹴飛ばした相手の個性について考察を始める。

爆豪　「くっクソ!こっ…この俺が!?ありえねぇ!!こんな奴に!?」

クラフト「そのこんな奴に君は吹っ飛ばされたんだよぉ～まぁだ分からないのぉ?これで大人しく

引いてくれるとありがたいんだけどねぇ～」

クラフトは爆豪にこのまま帰ってくれないかと促す。

爆豪　「あ⊠ぁ!?ふざけんな!テメーをぶっ飛ばすまでこのまま引き下がれるか‼」

友達①「おっおい爆豪もう帰ろうぜ!こんなこと言いたくはないけどあいつお前より強えーって‼」

友達②「そっそうだぜ!それにアイツも「あ⊠ぁ!!んなおめおめと引けるか!!」…」

爆豪は取り巻きの２人の言葉を拒絶する。

クラフト「ん～?あんまりこういう手は使いたくないんだけどねぇ～」スッ…

クラフトはズボンのポケットからスマホを取り出し爆豪たちに向ける。

爆豪　「あ⊠?んだよそれ?」

クラフト「これに写っているのは君が彼に暴力を振るっているシーンだよぉ」

爆豪　「!!……てめぇ…」ギリリ…

クラフト「これが世間に出たら君はどうなってしまうんだろうねぇ～?まぁ君がこのまま大人しく

引いてくれたら何もしなんだけどねぇ～」

クラフトは脅しと言われてもおかしくない行為で爆豪にこのまま帰るように促す。

爆豪　「てめぇ!!脅しのつもりか!!そんなもｎ「爆豪もうやめとけ!もう帰ろう!」あ☒ぁ俺に指
図すんじゃ…!」ガシッ!
取り巻きの1人が爆豪の腕をつかみ制止させる。
友達①　「おいあんた!このまま帰ればいんだな!?」
クラフト「あぁこのまま身を引いてくれればこちらは何もしないよぉ～」
友達①　「本当だな?その写真もバラさないだろうな?」
クラフト「約束は守る…こちらもこういう行為はしたくないからねぇ～」
友達①　「分かった…爆豪行こｕ「あ☒ぁ!?なんで俺がこのまま…」爆豪!」
爆豪は反発するが取り巻きが大声で名前を呼び制止させる。
友達①　「このまま写真をばらされてみろ、タダじゃすまない上に進路にまでに影響するぞ!」
爆豪　「～～～っ…チっ!!クソ!!てめぇ覚えとけよ!!いくぞお前ら!!」
友達②　「おっおう…」
友達①　「……おう…」
爆豪はようやく大人しくなりそのまま取り巻き2人を連れてこの場から離れていった。

クラフト「(やっと行ったか…さてと次は…)…大丈夫か?あとこれほい」スッ…
　クラフトは爆豪が離れたのを確認すると緑谷のもとに歩み寄り落ちていた雑誌を緑谷に
　渡す。
緑谷　「うっうん…あっありがとう…あと助けてくれて…」
クラフト「いや～どうってことないよ～君が怪我をする前に止められてよかったよ～」
緑谷　「あっあの口調さっきとかっ…変わってませんか?」
　緑谷は自分を助けてくれた人の口調が変わっていることを指摘する。
クラフト「ん?あぁさっきまでの口調は演技みたいなもんだよ!こっちがいつも通りだよ!」
緑谷　「そ…そうなんですか「それよりなんであんなことに?」そっ…それは…」
　クラフトは原作を知っているためなんで緑谷があんな目にあっているか知っているが、
　この世界に来てから初めて会うわけだからそれっぽく聞いてみる。
緑谷　「……」
クラフト「…とりあえず場所変えようか?」

クラフトと緑谷は場所を変えるため近くの公園に移動し近くの自販機で飲み物を買いベンチに座っている緑谷に渡し隣に座る。

クラフト「ほいお茶」ヒョイ

緑谷　「あっありがとう…そういえばまだ名前言ってなかったね、僕は緑谷出久、中学2年だよ」

クラフト「俺は機神（はたがみ）クラフト、緑谷と同じ中学2年だ」

緑谷　「ええ!?機神くん同い年だったの!?あっごめんね驚いちゃって…背高いからてっきり年上かと…」

2人は自己紹介をし緑谷はクラフトと同い年ということに驚く。

クラフト「あぁ別に気にするな（笑）それで?なんであんなことに?」

緑谷　「うっうん実はね……」

緑谷は自身の過去と一緒に話し始める。

・
・
・

緑谷　「……というわけなんだ」
クラフト「なるほどな…（やっぱ聞いてみると重い…）」
　一応ある程度は知っていたが改めて聞くとなかなかに重いと感じるクラフト。
緑谷　「やっぱ無個性が夢を見るのはおこがましいのかな…」
クラフト「まぁ…確かに周りが言うことも一理ある」
緑谷　「はは…やっぱりそう思ｕ「だが…」」
　緑谷はクラフトの意見に肯定しようとするがそれをクラフトが遮る。
クラフト「だからってヒーローになれないとも言えないよね!」
緑谷　「えっ?」
クラフト「無個性だからヒーローになれない?じゃあ逆に個性があれば誰でもヒーローになれる?
　そんなわけないよね?それって他に例えると、銃が扱えないと軍隊に入れないって言っ
　てるようなもんじゃない?銃が扱えるからって軍隊に入れるとは限らない。ヒーローも

同じだと俺は思う、個性があるからヒーローになれるとは言えない。まぁ無個性で目指すのはかなり厳しい道だけどな…」

クラフトは自分の持論を緑谷に話すと…

緑谷「うっ…くぅ…ううぅ…」涙ポロポロ

クラフト「ちょぉー!どうした緑谷!!なんで泣いてる!」

突然涙を流す緑谷に驚くクラフト。

緑谷「ごっごめん!でも今までそんなこと言われたことなくて…それで…うぅ…」

クラフト「わっ分かったからとりあえず落ち着け」

・

・

・

～～数分後～～

クラフト「落ち着いたか?」

緑谷「機神くん…ごっごめんね…いっ今までこんなこと言われたことなかったからつい…」

クラフト「まぁ気持ちは理解できるよ」
　ここでクラフトは前日決めたことを含めて緑谷に聞いてみる。
クラフト「…なぁ緑谷、もし個性が持てると言われたらどうする?」
緑谷　「えっ…個性を?どっどういうこと?」
　緑谷は唐突に聞かれたことに動揺する。
クラフト「無個性のお前を個性持ちにできると言われたらどうする?」
緑谷　「えっ…そっそりゃぁそんなこと出来るなら…でもそんな都合のいいこと……」
クラフト「緑谷…俺の個性を使えばお前に個性を持たせることができる」
緑谷　「……えぇ!?こっ個性を僕に!?そんなこと…いやその前に機神くんの個性って光に関
　する個性じゃないの!?」
　緑谷は突然言われたことに驚く。それもそうだ、個性を持てるようにできると言われた
　ら大抵の人は誰でも驚く。
クラフト「俺の個性を分析していたのか?だがそれは違うぞ、お前の幼馴染と闘ったときに見せた

のは一部の力に過ぎない」

緑谷　「…機神くんの個性って一体どういう個性なの?……」

緑谷は一体どういう個性なのかクラフトに質問するが…

クラフト「悪いな緑谷、俺の個性はあまり詳しく話せない。あと語弊があったな個性を持たせると

は言ったが、正確には個性を目覚めさせると言ったほうが正しいかな?（俺が個性作っ

て緑谷に授けるんだけど、まぁこっちの方が違和感はないかな）」

クラフトは自身の個性に関して詳しく話せないと誤魔化し個性を持たせることをあまり

違和感がない方へ訂正する。

緑谷　「あっいや僕の方こそごめんね!いきなり聞いちゃってあんまり他人に話せないこともあ

るはずなのに…あと個性を目覚めさせるって?…」

クラフト「俺の個性を使えばお前の中に眠っているかもしれない個性を目覚めさせることができ

る。個性ってのは未だに詳しい事は分かってない、世の中には個性を持って

いたとし
ても何が発動のきっかけになるか分からない人もいる。中には一生使わずに終わると
いうパターンもある、もしかしたらお前もそういうパターンかと思ってな、まぁある
いは本当に無個性なのかもしれないが…どうする緑谷?俺の提案を受けるのはお前次
第だ、それに本当に無個性だったら傷つくのはお前だ…」
緑谷「もし本当に僕に個性があるのなら…でも…」
緑谷は迷った。もし自分に個性があるなら欲しいと、だが逆に本当に何もない無個性
だったらと、しかし…
緑谷「(だとしてもやってみないと分からない!それにこんなチャンスは滅多にない!)お願い
…できるかな!」
緑谷は了承の返事を返し俺は口角を上げる。
クラフト「わかった…後悔はするなよ!あっそれと今携帯持ってる?持ってたら連絡

先交換しよう
ぜ」
緑谷　「うっうん持ってるよ！」
クラフトと緑谷は連絡先を交換する。
クラフト「じゃあ緑谷明日予定空いてるか？」
緑谷　「えっうん特に予定はないから空いてるよ」
クラフト「じゃぁ明日この海浜公園に来てくれるか？そうだな１３時頃でいいか？個性については明
日することにする。いいか？」
緑谷　「うっうんわかったよ！」
クラフト「よし今日はこれで解散とするか、じゃあ緑谷明日この海浜公園でまた会おうぜ」
緑谷　「うんまた明日機神くん！」
俺と緑谷は翌日海浜公園でまた会うことを約束し別れた。
クラフト（おっっしゃぁぁ～～何とかなったぁ～あとは明日緑谷に個性を授けて一応アドバイス
やら色々言えばいいかな～）

クラフトは無事緑谷に個性を授ける段取りがうまくいったことに安心し帰路についた。

～～翌日～～

――多古場海浜公園――

クラフト「さて緑谷は来てるかな…それにしてもやっぱクッソ汚ねぇな」

緑谷　「あっ!機神くんおはよう!」

クラフトが海浜公園に到着し砂浜にあるゴミ山を見ていると緑谷がこちらを見つけ合流する。

クラフト「おはよう緑谷、ってもお昼だけどな（笑）」

緑谷　「ははっ確かにそうだね（笑）」

お互い他愛ない会話をし挨拶をする。

クラフト「よし緑谷、さっそくだが昨日言った通りお前の個性を目覚めさせる。言っておくがこれは絶対じゃねぇことは分かってるよな?あくまできっかけを与えるだけだ、何もなかっ

たらそれまでだ。後悔はないな？」

緑谷　「うん！後悔はないよ！それに僅かに希望があるなら僕はそれに賭けたい！」

クラフト「オーケーオーケー、覚悟はできているようだな。あと個性が出た場合この事は秘密にし
てもらいたい。理由は目立ってしまうからだ、そんなことになったらクソ面倒くさいこ
と極まりない」

クラフトは個性が出た場合秘密にするよう緑谷にお願いする。

緑谷　「うん分かったよ機神くん！確かにそうだね！」

クラフト「よしそんじゃぁいくぞ」ガシッ

緑谷の了承を確認するとクラフトは緑谷の頭を鷲掴みする。

緑谷　「へっ？はっ機神くんなんだかとっても恐ろしいんだけど（汗）」

クラフト「大丈夫だ全然痛くはない、これは俺の感覚の問題だから気にするな」

緑谷　「そっそうなんだ分かったよ…」ゴクリ

クラフトに頭を鷲掴みにされ少し動揺し緊張する。

クラフト「いくぞ緑谷」

緑谷　「うん…お願いします…」
クラフト「(よし…空想、悪魔の実メラメラの実の能力、メラメラの実の能力を緑谷出久に定着…
　鑑定…定着完了…)終わったぞ緑谷…」
緑谷　「えっ!?もう!?」
　緑谷は自分が予想していたよりも早く終わったため驚く。
クラフト「なんだもっと長いと思ってたか?案外こういうもんはあっけないもんだよ、それよりも
　早く確認したらどうだ?」
緑谷　「うっうん!でも今まで個性なかったからいまいち感覚が…」
クラフト「あーそうだよな、緑谷まずは意識を集中させろ、それを体の内側や手足に向けるんだ。
　個性が目覚めてるなら何かしらの変化があるはずだ」
緑谷　「意識を…うんわかったやってみる!」すうぅぅ…はあぁぁ…
　クラフトは緑谷に軽くアドバイスをし緑谷は意識を体や手足を集中させる。
　すると…ボゥッ!!
緑谷　「うわぁっ火が!?熱っ!あつ…熱くない?」

パチッパチッパチッパチッパチッ！

クラフト「おめでとう緑谷出久!!君は個性を手に入れた!!見たところ火・炎系の個性だね！」

緑谷　「これが僕の…個性…」ボゥッ…涙ウルウル

緑谷は自分が個性を持てたことに涙を流す。

クラフト「ＨＥＹＨＥＹ緑谷!まだゴールじゃないぜ!これからその個性をものにしなくちゃいけないぜ！」

緑谷　「うっうんそうだけど…今まで無個性だった僕に個性がって思うと…うぅぅ」涙ボロボロ

クラフト「うんうん気持ちは理解できるぜ!だけどこれから色々やんなくちゃいけないぞ！」

緑谷　「うっうんそうだね!!」ゴシゴシ

俺は緑谷に泣いてる暇はないという趣旨を伝える。そして緑谷はそのことに頷き涙を拭う。

クラフト「でだ緑谷、俺からお前にできる事はまあ個性とかのアドバイスとかだけど

その前に…」

「まず体鍛えろ」

緑谷　「…へ?」

クラフト「ん?いや個性の制御とか調整も大事なんだけどさ、緑谷見た感じ全然鍛えてないよね?

だからまずは体鍛えたほうがいいかなーって」

クラフトは緑谷にまずは体を鍛えろと提案する。

緑谷　「えっぁぅんそうだね、確かに個性も大事だけどその個性を使う体が弱かったら意味な

いもんね!」

クラフト「個性に関する事はレイン（通話アプリ）とか電話で聞いてくれ、体鍛えるのは緑谷に任せ

るわ。なんか色々考えるの得意そうだし」

クラフトは個性に関する事はアドバイスするが体を鍛えることは緑谷に丸投げした。

緑谷　「ううん！むしろここまでしてくれたんだ、ここからは僕が頑張る番だよ!!」
クラフト「おーその意気だぜ緑谷！まぁ体鍛えろとは言ったが個性の制御も大事だからな、今日は
　夕方くらいまで緑谷の個性の練習に付き合ってやるぜ！この海浜公園はそれにうってつ
けだからな！」
緑谷　「本当!?ありがとう!!そうかそれでこの海浜公園を待ち合わせの場所にしたのか」
　緑谷はクラフトが個性の練習に付き合ってくれることに感謝し、なぜこの海浜公園に
集まったのか疑問に思っていた事に納得した。そして夕方まで緑谷の個性練習をした。
・
・
クラフト「よーしこの辺にしておくか、おつかれさま緑谷！」
緑谷　「はぁはぁ…うんありがとう機神くん、個性練習に付き合ってくれて…」
　ちょうど夕方ごろになり2人は個性の練習を終わらせる。

クラフト「じゃあ緑谷明日からは体も鍛えるんだぞ!あぁ後、親に個性のことちゃんと話しておく
　んだぞ、もちろん俺の事は秘密にしてな。役所とかにも個性の変更届提出しないといけ
　ないしな」
緑谷　「うん何から何までありがとう機神くん!そうか役所に届け出出さないいけないのか。そ
　れにお母さんにも……お母さんたぶん驚いて泣いちゃうだろうなハハ…」
クラフト「緑谷…一応言っておくがその個性はお前の力だ、胸張って自信を持て!ヒーロー目指す
　んだろ!」
　また下向きな気持ちになっている緑谷にクラフトは激励を送る。
緑谷　「うっうんそうだね!ありがとう機神くん!」
クラフト「じゃ緑谷俺は先に帰るぜ!何か用があれば連絡してくれ!じゃあな!」
タッタッタッ…
緑谷　「うん分かったよ機神くん!いろいろありがとうじゃあね!」タッタッタッ…

クラフトと緑谷は別れ帰路についた。その後緑谷は母親に個性が出たことを話し

床が浸水するのではないかとくらい泣かれるのであった。

・
・
・

――クラフト宅――

クラフト「おっしゃぁぁぁ～無事緑谷に個性を授けられたぁぁ～」ボフンッ

クラフトはリビングのソファーに横たわる。

クラフト「緑谷に個性を授けるのは終わったから次はオールマイトの傷を治すことだな。だが問題はどうやって接触するかだな、あなたの傷を治してあげますって直接行くのは違和感ぁりまくりだし、そもそも何で知っているということになるし…まぁこれは後々考えるか

…ん?」ブゥー…ブゥー…ブゥー…

オールマイトの傷をどうやって治すか考えているとスマホにレイン（通話ア

プリ）の着信
が入り確認すると着信相手は耳郎からだった。
クラフト「誰からだ?おっ耳郎からだ」ピッ
耳郎『やっほー機神!急にごめんね元気にしてる?、実は聞きたいことがって連絡したんだ。
8月×日って予定空いてる?空いてたら一緒に遊びに出かけない(・ω・)?』
着信内容は耳郎からの遊びの誘いだった。クラフトは一瞬固まる…まさか耳郎から
遊びの誘いがあるとは思いもしなかったからだ。クラフトは少し戸惑いながら返信
をする。
クラフト『その日は空いてるぞ、いいよ一緒に遊ぼうぜ!場所とかはもう決めているのか?』
クラフトは返信内容はこれでいいのかと思いながら耳郎に返信した。数分経つと
返信が返ってくる。
耳郎『わかったありがとう!うん場所とかは近くのショッピングモールとかにし

ようかなと

思ってるんだ。もし他に行きたい場所とかあったら聞くよ♪』

遊びに行くのは近くのショッピングモールらしい。クラフトは他にいきたい場所がある

かと聞かれ特に思いつかないので大丈夫という趣旨の内容を返信する。

耳郎　『了解♪じゃあ◇◆駅前に１０時集合でいいかな?』

クラフト『おうわかった!◇◆駅前に１０時集合な!（＾―＾）』

耳郎　『うん♪じゃおやすみ!』

こうして耳郎との会話は終わった。会話を終えた後クラフトはこう思う。

クラフト（これってもしやデートでは…いやいやいや早まるな俺、ただ遊ぼうと誘いがあった

だけだ…だがしかし…ぬぉおぉぉわからんもう寝よう!!）

クラフトは少し悶悶としながらベットに入ったのであった。

・

・

――耳郎宅――

耳郎　『うん♪じゃおやすみ!』……

耳郎　「…さっ誘っちゃった…ぬあぁぁぁ～／／／」ボフンッ…
　耳郎は自分の部屋のベッドにうつ伏せで横たわる。あの事件で知り合いになったのでお
　礼を兼ねて遊びに誘った耳郎。
耳郎　「てかこれってデッ…デートになるんじゃ…いやいや違うただ一緒に遊ぶだけだし／／／
　だけど2人だから周りからみたら……／／／」プシュ～
　耳郎は自分で想像して頭から湯気が出る勢いで赤面しその様子を部屋のドアの隙間から
　見ている者がいた。
耳郎母親「あらあら～／／」
　耳郎の母親であった。耳郎は声がした方へ向く。
耳郎　「!?ちょっなにみてんの／／／」
耳郎母親「あら～いいじゃない響香ぁ～お母さんは応援してるわよ～」
耳郎　「そっそんなんじゃないからー!!／／／」
　母親にまたいじられる耳郎であった。

第6話　デート?そしてライバルと大切な人⁉

～～8月×日～～

――◇◆駅前――

クラフト「一応10分前に来たがまだ耳郎は来てないか…」

今日は前に耳郎に一緒に遊ばないかと誘われた日である。俺は少し緊張しながら耳郎が

来るのを待つ。そこに…

耳郎　「機神!」タッタッタッ…

クラフト「おー耳ろｕ（…我が人生に一片の悔いなし）」

クラフトは声のしたほうへ向くとそこには耳郎が小走りでこちらへ走ってくる。

笑いながらこちらへ向かってくる姿は可愛かった。

耳郎　「機神来るのはやいね?待った?」

クラフト「……」

耳郎　「…機神?」

耳郎がクラフトに問いかけるが黙ったままなので耳郎は少し困惑する。
クラフト「かわいい…（いや俺もさっき来たばっかだ）」
耳郎　「へっ!?／／／」カァッ
クラフト「ん?…あっいや!俺もさっき来たばっかだ／／」
クラフトは頭で思っていたことが口に出てしまい耳郎は突然かわいいと言われ顔が赤くなる。
クラフト「あーそのすまん…気分を害したなら謝る…」
耳郎　「いっいや大丈夫!その…急に言われたから…それに嬉しいしゴニョゴニョ…」
クラフト「まぁ耳郎が大丈夫なら…ん?すまん最後のほうよく聞き取れなかったもう一度頼む」
耳郎　「なっなんでもないなんでもない!あっほら早く行こ!」グイッ
クラフト「えっ?おっおうそうだな…おっとと」あたふた
耳郎は自分が言ったことを聞き返され慌ててそれを誤魔化すためクラフトの手を
引っ張り急に手を引っ張られ少し足がもたつくクラフト。

・　・　・

――ショッピングモール――

耳郎　「ここだよ！」

クラフト「おー！結構というかかなり大きいモールだな！」

耳郎　「そっ！最近できたばっからしくてちょっと来てみたかったんだ！」

クラフトと耳郎２人は耳郎が遊びに行こうと言っていたショッピングモールに到着する。初めてきたがかなり大きいショッピングモールである、服飾・雑貨・本・飲食・ゲームセンターｅｔｃ．かなりの数の店がある。これは来てみたいのもわかる。

クラフト「どこから回るか迷ってしまうな！」ワクワク！

耳郎　「そっそうだね！（ヤバッ！ワクワクしてるのかわいい／／）」

クラフト「？…どうした耳郎？」

耳郎　「えっ!?ううんなんでもないよ／／」

テンションが上がっているクラフトを見てかわいいと思ってしまった耳郎。

耳郎「(あっ危なかった…もしかしてかわいいと思ったことが「ところで耳郎」ひゃい!」

クラフト「……」

耳郎「……／／／／／」カァ～～

頭の中で色々考えていたらクラフトから声をかけられ裏返った声で返事をしてしまう。

クラフト「耳郎…その…大丈夫か?」

耳郎「(はっ恥ずかしい／／／)うっうん大丈夫…それより何か聞こうとしてたけど……」

クラフト「ん?あぁその…いつまで手は握っているんだ?耳郎がいいなら別にこのままでいいが?……」

耳郎「えっ?…」チラッ

耳郎はクラフトに手をいつまで握っているのか?といわれ自分の右手に目を向ける。

そこにはクラフトの左手を握ったままの自分の右手があった。

耳郎　「!?／／／／／／／／」カァァァァ……ボンッ!プッシュ～　クラッ……

クラフト「うおっ耳郎!?」ガシッ

耳郎は自分が言われるまで手を握っていることに気づかず恥ずかしさが一気にこみ上が

り赤面する。そして恥ずかしさのあまり頭がのぼせてしまい少し立ちくらんでしまいク

ラフトは肩を掴み支える。

クラフト「じっ耳郎!?大丈夫か?って顔アカっ!」

耳郎　「うっうん／／だっだいじょ…「うん大丈夫じゃないね!」／／／」

クラフト「とりあえずどっかで休憩しよう」キョロキョロ…

耳郎を休ませるために近くにあるオープンカフェに耳郎の肩を支えて向かう。

クラフト「耳郎大丈夫か?ほらゆっくり座って…」

耳郎　「うっうん…／／あっありがとう／／／ごめんね…」

クラフト「な～にどうってことないよ、それより大丈夫?」

耳郎　「うん…さっきより少し落ち着いた／／」

席についたことにより少し落ち着きをもどす耳郎、そこへ席についたことにより店員が
やってくる。
コッコッコッ…
店員　「いらっしゃいませ!ご注文をお伺いいたします!」
クラフト「あっ俺メロンソーダお願いします、耳郎は何にする?」
耳郎　「ウチはカフェオレで…」
クラフト「オッケー、メロンソーダとカフェオレお願いします」
店員　「メロンソーダとカフェオレですね!ご注文承りました!」コッコッコッ…
注文した飲み物がくるまで少しあるので耳郎にさっきの事をやんわりと聞いてみる。
クラフト「…手を繋いでいるのを確認したのと同時に、顔赤くなってふらついたけど…もしかして
手を繋いでいたのが原因だったりする?」
耳郎　「……うっうん…／／／男子と…その…手ってほとんど繋いだこと…なかったから／／／」
クラフト「なるほど…なら俺はそのほとんど繋いだことがない、男子の1人になれた

のか～（笑）」

耳郎　「うえっ!?うっうん／／／…そう…なるのかな／／／／」カァァァァ

クラフトに言われことでまた赤面してしまう耳郎。その様子をクラフトは少し楽しんで

いると注文した飲み物がくる。

クラフト「（実際見てみるとかなり乙女だな～まぁそこがかわ「お待たせいたしました。」）！おっ

きた」

店員　「ご注文のメロンソーダとカフェオレでございます！」

クラフト「どーもありがとー…ほら耳郎カフェオレきたよ」

耳郎　「うんありがと…／／」

店員　「それではまたご注文等がありましたらお呼びください！」コッコッコッ…

店員は飲み物をテーブルに置くとお店に戻っていく。

クラフト「まぁとりあえずそれの飲んで心を落ち着かせなよ」チューゴクゴク

耳郎　「うん…／／ありがと／／／」カチャ…コクリ

カップを手にとりカフェオレを飲む。そしてカフェオレを飲んだことにより心身ともに

落ち着く耳郎。
クラフト「落ち着いたか耳郎?」
耳郎　「ふぅ……うん／／だいぶ落ち着いたよ」
クラフト「いや～それはよかった、にしてもあれだな耳郎って…」
耳郎　「?…なに?ウチがどうかした?」
クラフト「今日の服装とか見るとこう…ロックな感じってするけど、中身はかわいい乙女だなーっ
て思った」
耳郎　「かわっ!?乙女!?／／／／」カァァ…
クラフト「あら?もしかしてあんまりこういうのって…」ヒュゥン……ブスッ!
クラフト「ノオオォォォォ!!?」
耳郎　「あっ!?ごっごめん機神!?（恥ずかしさのあまりやっちゃった!）」ガタッ!
クラフト「おっおう…のーぷろぶれむ（　⊠ω⊠）（とっさとはいえ結構ダメージあるな…体の防御力を
上げておいた方がいいな…体を強くする…肉体強化と少し体を改造できる個性を作って
おくか…）」

クラフトは耳郎のイヤホンジャックの攻撃をもらってしまう。その攻撃を受けて俺は体
の防御力を上げておいた方がいいと思い肉体強化系の個性を作っておくことにした。
クラフト（空想…肉体強化改造…個性として定着…定着完了…よし）
耳郎「機神ゴメン!!体大丈夫?」
耳郎は恥ずかしさ故にやってしまったとはいえ、自身の個性で攻撃してしまったクラフ
トに声をかけ安否の確認をする。
クラフト「あぁ大丈夫だよ…この通り!」グルングルン
耳郎「よかった…ゴメン恥ずかしくなってつい…ほんとゴメン!」
クラフトは腕を軽く回して大丈夫だということを耳郎に言う。耳郎は合唱のポーズを
作って謝ってくる。
クラフト「いや~ほんとに大丈夫だって、俺もデリカシーがなかったよ」
耳郎「いやでも…」
クラフト「あ~気にしない気にしない（笑）やってしまったもんはしかたない。それ

より折角遊びに
　来たんだし色々回ろうぜ！」ニッ！
耳郎　「！……うん！／／／」
　気持ちが下向きになっている耳郎を励ましモール内を回ろうと誘う。その後会計をして
　クラフトと耳郎はモール内にあるお店を数件巡り、昼食を食べ終わったあとゲームセン
　ターに行こうと決めゲームセンターのほうへ足を進めた。だがその直後…
!!!ドオオオオオオオオオオオオオン!!!
　ショッピングモール内に爆発音が響き渡る…
客　「きゃあああ!!」「なっなんだ!?」「おいあそこだ！」「まさか敵(ヴィラン)か!?」
　突然の爆発音にショッピングモール内の人々は混乱する。クラフトと耳郎も爆発
　音を聴き何事かと辺りを見回す。
クラフト「おっ!?なんだ?」

耳郎　「あっあそこ見て！」
　耳郎が爆発が起きているほうへ指を指す、指しているほうへ目を向けるとそこには1人
　の男が暴れていた。
????　「あ☒ぁっはははははははははははは!!」
　男の高らかな笑い声が響き渡る。
????　「これはいい力だ！この力があれば俺様を見下してきた奴らに報復できる！」
客　「ヴィッ…敵(ヴィラン)だぁー!?」「えっ!? 敵(ヴィラン)!?」「うわぁぁ!!」
　「早くヒーローを！」「だっ…だれか助け…」「い…痛ぇよぉ…」
　敵(ヴィラン)の出現によりモール内は大混乱となってしまう、さらに敵(ヴィラン)が起こした爆発に巻き込
まれた通路に倒れる人々。
　ヴィラン「まずは手始めにここにいる奴らをぶっ殺してやる！どいつもこいつも満ち足りた顔しや
　がって!!ムカつくんだよぉ!!」グァッ！
　!!ドゴオオォォン!!
　敵(ヴィラン)の男は右腕を振り上げ地面に向かってパンチをする。たったそれだけで

凄まじい衝撃が起こり周りに被害をもたらす。

耳郎「うわっやば…機神はやく避難しよう!」

クラフト「んっ…あぁそうだな…だけどここ2階だからすぐには出来ないぞ、それにしてもすげー

パワーだな、増強型か?」

耳郎は避難しようと機神に言いクラフトはそれに軽く頷きつつ敵(ヴィラン)の個性を分析をする。

客「キャアアア!!」「早く逃げろぉ!」「おい!押すなって!」「お☒母ざぁぁん!!」

「早くヒーローを!」「うわぁぁぁ!!」「助けてぇぇ!」「皆さん慌てず行動を!」

モール内の人々は敵(ヴィラン)から早く逃げようとするが人の数が多いため思うように避難が進まない。そこに連絡を受け近くにいた2人のヒーローが通常より少し早く到着する。

HERO①「皆さんもう大丈夫です!、私たちが来ましたのでもう大丈夫です!」

ＨＥＲＯ②「落ち着いて避難を！すいません警備員ですか？避難誘導をお願いします、自分らは敵（ヴィラン）
に対処しますので！」
警備員「はっはいわかりました！」「皆様こちらです慌てずに！」
客「ヒーローだ！」「助かった！」「いけぇヒーロー！」ワアアアアア!!
モール内の人々はヒーローが来たことにより安心する。そしてヒーローは騒ぎの元凶の
敵（ヴィラン）の元に駆けつける。
ＨＥＲＯ①「大人しくしろ敵（ヴィラン）!!」
ＨＥＲＯ②「これ以上は好きにはさせんぞ!!」
敵（ヴィラン）「はっ!!テメェらみたいなクソ雑魚ヒーローに俺様が捕まるかよ!!」
ヒーローと敵（ヴィラン）が対敵する、俺と耳郎はその様子を2階の通路から確認する。
耳郎「よかった…ヒーローが来てくれたからもう大丈夫だね」
クラフト「あぁそうだな、俺らも早く避難をしよう」
耳郎「うんそうだね」
ヒーローが来たからもう大丈夫と思い耳郎と避難しようとしたその時…
!!ガシャアアアアン!!

HERO①②「ガハッ…」「グッ…なに…が…」ガクッ…

大きな音がしたと思ったらこの場に駆けつけた2人のヒーローが吹っ飛ばされていた。

避難をしていたモール内の人は目を疑った。大きな音がしたと振り返れば駆けつけた

2人のヒーローが倒れているではないかと。

客「なっ…なにが起きたんだ?」「なんでヒーロー倒れているんだ…」

「敵(ヴィラン)を捕まえようとしたら…」「はっ?嘘だろ?」

ヒーローが吹っ飛ばされたことに驚きを隠せない人々…そこにヒーローを吹っ飛ばした

張本人が口をひらく。

敵(ヴィラン)「はっはっはっはっはっ!!ヒーローが聞いてあきれるぜ!!たった一発でやられちまうとは

情けねぇもんだ。さ~て邪魔なヒーローが《カラン…》……あ?」

敵(ヴィラン)が上機嫌に喋っていると缶が倒れたような音が響く…敵(ヴィラン)が音のした方へ顔を向ける

とそこには1人の女子がいた。

??女子「やばっ…」
敵(ヴィラン)「まぁだ人がいたとわなぁ～しかも結構かわいい女じゃねぇか」ジュルリ…
??女子「ひっ…」ゾワワ…
クラフト「マズイ！（ピカピカ！）」ガシャ…シュン…
耳郎「えっ機神!?」
爆発に巻き込まれなかった逃げ遅れた女子が2階の通路を支える柱に隠れていたのがバレてしまい敵(ヴィラン)に捕まりそうになる。クラフトは即座にピカピカの能力を使い助けに行く。耳郎はいきなり2階の柵を乗り超えようとした途端機神が消えたことに驚く。
敵(ヴィラン)「へっへっへ～やっと俺にもツキが回ってきたもんだｗ」
??女子「くっ来るな！」ズムッ　ブォンブォン！
女子は掌を大きくする個性で掌を大きくし振り回しながら後ろに下がる。
しかし敵(ヴィラン)は近づいてくる。そしてこれ以上下がれなくなってしまったその時、敵(ヴィラン)の後頭部の後

ろに人影が現れる
??女子「しまっ…」
敵（ヴィラン）「どうしたもう下がらないのか?なら大人しく俺様に「女の子に乱暴は良くないよねぇ
～」!?」
??女子「!?」
クラフト「光の速さで蹴られたことはあるかぁい?」ヒュッ…ドゴォッ!!
ヴィラン「グォッ!?」ゴッツシャアアアン
ピカピカの能力で敵（ヴィラン）の後頭部にかかと落としを食らわせそのまま顔面から落ちる形で
地面に激突させる。
??女子「……」
クラフト「大丈夫?（あれ?この人もしかして…）」
??女子「えっ?うっうん大丈夫……」
クラフト「よかった、んじゃ話してる暇ないんで…失礼!」ヒョイ
??女子「えっ…きゃっ!ちょっ／／」
クラフト「ごめん恥ずかしいと思うけど我慢して、じゃっ移動するよ（人を抱えたま

ま光の速さで
　移動はたぶんダメだからフワフワでいいか…フワフワの能力！）」フワッ…
??女子「ちょ／／うわっ!!」
　突然現れヒーローすら敵わなかった敵（ヴィラン）を一発の蹴りで無力化したことに驚く女子。
　そして自分の安否を確認するとお姫様抱っこをしゆっくりと飛び2階の通路まで移動
　する。
クラフト「着地しまぁす！よっ…とと」トッ…
耳郎　「機神！いきなり消えたからビックリしたじゃ…ん」
クラフト「えっ？あぁすまんすまん（笑）言う時間なくて、あっお嬢さんごめんねいつまでもこの状
　態は恥ずかしいよね」
??女子「…ううんそのありがと…う／／」
　いきなり消えたと思ったらなぜか女子をお姫様抱っこした状態で現れた機神を見て漫画
　のような固まってしまう耳郎。助けられた女子は少し顔を赤らめながらお

礼を言う。
　クラフト「さてと…通路に倒れている人とヒーローを助けてヴィランを何とかしないと…」
??女子「えっあんた1人で!?」
耳郎　「……ハッ!…機神あんたまさかあのヴィランに挑む気!?」
クラフト「誰かが相手しないと一般の人に危害が及んでしまう」
耳郎　「ヒーローを一撃で倒すヴィランだよ!下手したらあんたタダじゃすまないよ!!」
クラフト「ヒーローが倒されたからといって俺もそうとは限らん、まぁまずは倒れている人を…
（オペオペの能力）ＲＯＯＭ!!」ブゥゥン!
耳郎　「!?」
??女子「!?」
　敵（ヴィラン）を何とかしようと口にすると耳郎と女子は驚き耳郎はクラフトに警告する。クラフ
　トは耳郎の警告を受け流しつつ倒れている人とヒーローを助けるため個性（オペオペの

能力）を使い助ける。
クラフト「ジャンブルズ！」シュン！…ドサッ
耳郎　「えっ!?人?えっ!?」
??女子「この人達もしかして倒れていた人達!?」
客　「なんだ爆発に巻き込まれた人とヒーローが!?」「おい！それより早く手当てしないと」
「おい大丈夫か!?」
オペオペの能力で倒れている人達を救助すると2階の通路にいた人達は急に倒れていた
人達が現れたことに驚く。
クラフト「さて…耳郎俺は敵(ヴィラン)を拘束してくるからここにいろ」
耳郎　「はぁっ!?機神あんたマジで行くの!?」
クラフト「本気(マジ)も何も、敵(ヴィラン)に一発入れたとはいえまだ無力化してないし、他のヒーローも来
てないし…それに誰かがやらなきゃいけないでしょ」
耳郎　「でも…もしあんたに何かあったら…えっ?」ぽん…
クラフト「大丈夫だってー!死ぬ気なんてねーし、それにせっかく耳郎と知り合えた

んだし（笑）」

耳郎　「!!／／／…頭は…ズルい」ボソボソ…

クラフト「さてと…それじゃいくか!!（ピカピカ!）」シュン…

耳郎　「あっ機神!……」

??女子「あっちょっと…!」

頭を撫でられたことにより耳郎は少し俯いて赤面する。もう1人いた女子が何か言おう

としたがクラフトはもうその場にはいなかった。

クラフト「ん?なにか言われたような…まぁ今は目の前の敵（ヴィラン）に集中!」

目の前の敵（ヴィラン）に集中するために気を引き締めると同時に気絶していた敵（ヴィラン）が目を覚ます。

敵（ヴィラン）「うっ…いってぇ…声が後ろからしたと思ったら…いきなり頭に衝撃が…」ガラッ…

クラフト「あっ起きた」

敵（ヴィラン）「あっ?…なんだてめぇは……いやその声…まさか俺様の頭を蹴ったやつか!?」

クラフト「いや〜思いのほか綺麗に入ったから気持ちよかったです」

敵（ヴィラン）「てんめぇぇ…どうなるか覚悟できてんだろうな!!」ゴゴゴゴゴ…

客　「おい！誰かいるぞ！」「おい君そこから早く逃げるんだ!!」「殺されてしまうぞ!!」

自身の頭を蹴ったことに激しく激昂する敵（ヴィラン）と叫ぶ避難客。

敵（ヴィラン）「お～その通りだぜクソガキ～殺されたくなければ謝ることをおすすめするぜぇ～wまぁ

謝ったところで許す気はないけどなぁ～ｗｗ」

クラフト「いや～全然そんな気はないっすね…てか謝らなくちゃいけないのはあんただろ、こんな

ことしてんだから」

敵（ヴィラン）「!!…ほぉ～クソガキいい度胸じゃねぇか…なら……死んどけやぁぁぁ!!!」グアッ!!

客　「うわっ！逃げろ君!!」「きゃあぁぁぁ!!」

シュン……クンッ…

敵（ヴィラン）「!?…なっなんだ体が…動か…」ググッ…

客　「えっ…なにが？敵（ヴィラン）の動きが…」「止まってる?」

敵（ヴィラン）の動きがなぜ止まったのか不思議に思う避難客。

クラフト「（イトイトの能力…動きを止めるにはうってつけだな）…だがこういう増強

型とかに対し
　てのみかな、不定形の個性とかだと他に考えないといけないな」
敵（ヴィラン）「てめぇ何言ってやがる!?俺様に何したァァ!!」
クラフト「えっ言うわけないじゃん、あとこのままヒーローが来るまで拘束させてもらう」クイッ
敵（ヴィラン）「く…そがぁぁ!!っんなものぉぉぉ!!」グググッ!!
　イトイトの能力の拘束から逃げようとするがビクともしない。
クラフト「おい暴れんな（個性は見た感じ増強型かな?一応鑑定使っておくか…鑑定……なるほど）
　あんた個性をブーストさせる薬使ってんな」
敵（ヴィラン）「!?…なっなんでそれを!?」
クラフト「まぁでも使っているのは粗悪品っぽいな…それにさっきよりパワーが下がってない
　か?まぁいいやとりあえず正座してろ」クイッ
敵（ヴィラン）「ぐっ体が勝手に!!くそぉ今すぐにでも…ヌグググッ!!!」
　敵（ヴィラン）を無理やり正座をさせ少し待っていると応援に駆け付けたヒーローと警察が到着

する。

客　「あっオイ見ろ他のヒーローが来たぞ!」「やっとかよ!」「でもこれで助かった!!」

クラフト「どうやらヒーローが来たみたいだな」

敵（ヴィラン）「くっクソッ!てめぇぇぇ!!こんのぉぉはなせえぇぇ!!」ググググ!!

客　「あのコスチュームはもしかして…」「18禁ヒーローミッドナイト!!」「えろっ!」

警察　「現在の状況を確認!」「モール内にいる人たちを避難誘導!」「警備員に状況を聞いてこい!」「ヒーローは誰がきている!?」「ミッドナイトが先ほど!」

（ミ）ナイト「すいません状況は!?」

客　「ヒーロー早く敵（ヴィラン）を!」「学生と思われる子供が敵（ヴィラン）を止めてる!」

警察　「なんだと!」「早く現場に!」

（ミ）ナイト「なんですって!?」

他HERO　「「なんだと!?」」

ショッピングモールに警察とヒーローが到着し避難誘導と状況確認をしていると避難

をしている人から子供が足止めしていると知らされ驚愕するヒーローと警察。そして

敵(ヴィラン)と子供がいる現場に急行する。

ダダダダダッ!!!

（ミ）ナイト「いたっ!あそこよ!」

警察　「そこの君早く下がっ…て?」「これは…どうなってるんだ?」

他ＨＥＲＯ「あのでかいのがヴィランでいいんだよな?」「どうなってるんだ?」

（ミ）ナイト「敵(ヴィラン)が正座している?」

クラフト「おっ…やっと来た…ってもしかしてミッドナイト!?コスチュームすげぇ…」

（ミ）ナイト「えっと…これは君がやったの?」

クラフト「えぇまぁ…まだ拘束中なので早く無力化をお願いできますか?」

敵(ヴィラン)「くそぉぉぉ!てめえぇぇ放せやぁぁぁ!!」ググググッ!!

（ミ）ナイト「!?…えぇっわかったわ!!」ビリッ…ファァ…

敵(ヴィラン)「ぐおぉぉおっ!?っ…なん…だっ」ガクッ

敵(ヴィラン)を正座させていることに驚くがミッドナイトは素早く個性を使い敵(ヴィラン)を無力化する。

あとコスチュームやべぇ…

18禁ヒーローミッドナイト【個性：眠り香（ねむりが）】

自身の体から眠らせる香りを発生させ対象を眠らせる。香りを吸ってしまった者は必ず

眠ってしまう。単純にして強力、女性より男性のほうが効きやすい。

クラフト「あっ寝た、やっぱすげー個性だな…さてと俺はこのまま「待ちなさい《ガシッ》」です

よねー…えー…何でしょうミッドナイト」

（ミ）ナイト「あなたには色々と聞きたいことがあるの、そのまま帰すわけにはいかないわ」

クラフト「えっえーと…友達が待っているので…」

（ミ）ナイト「あら？ならその友達は待ってもらいましょうか、とにかくあなたには色々聞かなく

ちゃいけないの♡」

クラフト「（やべぇ捕食されそう…）イッイエッサー…」ゾワッ…

その後眠らされたヴィランは拘束され移動牢（メイデン）に入れられて連行された。

クラフトはこっそりその場を後にしようとしたがミッドナイトに肩を掴ま

れ事情聴取さ
れることになり、一応耳郎も関係者なのでスマホで連絡しこの場に来てもらう。
耳郎「機神あんた大丈夫!?」
クラフト「あぁこの通りなんともないよ」
耳郎「……そう」ポフッ…
クラフト「…耳郎?」
耳郎「心配したんだから…」ぎゅ…
クラフトの胸に額を軽く乗せ左手でシャツを握る耳郎。
クラフト「……スマン」
(ミ)ナイト「ふふっ♡なかなか青臭いじゃない、でも女を泣かせるのはあんまりよくないわよ」
クラフト「ミッドナイトさん、こういう時はそっとしておくんじゃないんすか?」
(ミ)ナイト「そうしたいけどまだ事後処理があるし君にも事情聴取しなくちゃいけないの♡」
クラフト「まぁ…そうなら仕方ないっすね、ほら耳郎…言いたいことあるかもしれないけどそれは

一旦後にしてくれるか?それに周りからチラホラ見られてるよ」

耳郎「うんわかっ…えっ?」キョロキョロ…

周りから見られていると言われ恥ずかしさが込み上がる耳郎。

耳郎「〜〜〜!!!／／／」カァァァ…／／

クラフト「耳郎大丈夫か…?」

耳郎「うっうんだいじょう…ぶ／／／それより事情聴取あるんじゃないの／／?」

クラフト「今朝よりは大丈夫っぽね…おっとそうだったミッドナイト、事情聴取はどちらで?」

(ミ)ナイト「聴取はあちらの刑事さんの所でお願い」

クラフト「刑事?…あの人はもしかして塚内さん?」チラッ

恥ずかしさが込み上がったがなんとか耐えた耳郎。そして刑事さんがいる方を見たら以

前お世話になった塚内警部がそこにはいた。

コッコッコ…

クラフト「塚内さん」

塚内警部「おや君はこの間の…たしか機神くんだったかな?」

クラフト「はい機神です、少しお久しぶりですねまさかまたお会いするとは」
塚内警部「ははっまさか敵(ヴィラン)に立ち向かった子供が君だったとは驚いた」
クラフト「いやーははは…すいません…あっ事情聴取あるんですよね?」
塚内警部「うん事件の詳しい内容を話してくれるかな?」
クラフト「分かりました」
俺は塚内警部に軽く挨拶する、すると敵(ヴィラン)に立ち向かったのが俺とわかると軽く驚
かれる。そして今回の事件の内容を塚内警部に詳しく話す。
耳郎「……」
(ミ)ナイト「ねぇねぇ!」ボンッ!
耳郎「うわ!…なんですかミッドナイト?(コスチュームすご…とゆーか胸でか…)」
(ミ)ナイト「あなた彼の彼女かなにか?」(ソワソワ)
耳郎「かっ／／いっ…いえ友達でしゅ／／」
(ミ)ナイト「あらそうなの…でもその割には…フフッ♡」
耳郎「なっなんですか／／?」ドキドキッ…
(ミ)ナイト「彼のこと…好きなんでしょ?♡」

耳郎　「ぶふっ!?なっななな何を!?／／いって!?／／／」アタフタ!!
（ミ）ナイト「あら、その反応を見る限り嘘でもなさそうね♡」
耳郎　「～～～／／／／／」カァァァァ／／／／
（ミ）ナイト「気持ちというのはなるべく早く伝えた方がいいわよ♡」
耳郎　「いやだから／／／そんなんじゃ…／／／～～」
　ミッドナイトに振り回されるが最後にアドバイスを言われる耳郎。あと顔はずっと赤面
　したままであった。
耳郎　（…好きとか／／……しかも彼女とか／／／／／～～…でも……）
クラフト「（なに話してんだ?…）…ということです塚内さん」
塚内警部「なるほど…ヴィランが逃げ遅れた女子に手を出そうとしたから君は動いたわけか、助け
　たのはいいけどそのあと敵（ヴィラン）を拘束しに、再び敵（ヴィラン）の前に出たのはあまり褒められた行為
　ではないかな…」
クラフト「うっ…否定できません…（苦笑）」
塚内警部「まぁしかし君が敵（ヴィラン）を止めてくれたおかげで、被害も最小限に抑えられたあ

りがとう。

　でもヒーローからの注意は一応あるよ」

クラフト「まぁそうっすよね」

（ミ）ナイト「そうよ～敵（ヴィラン）を止めていたとは言え資格未取得者が個性を使う事はいけないことよ」

クラフト「あっ、ミッドナイト」

（ミ）ナイト「とはいえ本来敵（ヴィラン）を何とかしなくちゃいけないヒーローが、何もできなかった

　から私たちヒーローもあまり強くは言えないわ」

クラフト「ヒーローも万能というわけではないし…それに違反なのは事実なので…（笑）」

（ミ）ナイト「ふふ、ありがとっ♡…ねぇ君名前と学年は?」

クラフト「えっ名前っすか?機神クラフトっていいます、今中学2年です…」

（ミ）ナイト「機神くんね…うんありがとう」

クラフト「いえ…あのどうして名前を?」

（ミ）ナイト「えっ?あぁ気にしないでなんとなくよ」

クラフト「はぁ…そうですか（そういやミッドナイト、耳郎となに話してたんだろ、あ

とで耳郎に
聞いてみるか…）」
塚内警部とミッドナイトに少しだけ軽いお叱りを受け、ミッドナイトから名前を聞かれ
たことを不思議に思うクラフト。
クラフト「まぁいっか…塚内さん聴取はまだありますか？」
塚内警部「いや、詳しい内容は分かったからもう聴取は終わりだよ、あぁそういえば君が助けた女
子が探していたよ」
クラフト「俺をですか？」
塚内警部「うんたぶんお礼とか言いたいんじゃないのかな？あっちの方にさっきはいたよ」
クラフト「分かりましたありがとうございます…では失礼します」コッコッコ…
聴取が終わると助けた女子が俺を探していると言われ俺はお礼を言い女子がいたほうへ
足をむける。
クラフト「こっちにいるって言ってたけど…移動したの「あっ！ねぇあんた!!」おん

?」
??女子「いたいた、やっと見つけた～」
クラフト「あー俺が助けた女子でいいのかな?」
??女子「そうそう!あんたに助けてもらった…あっまだ名前言ってなかったね私拳藤一佳よろし
く!」
クラフト「(やっぱ拳藤であってたか)俺は機神クラフトよろしく拳藤」
拳藤　「よろしく機神!あとあの時助けてくれてありがとう!」
クラフト「どういたしまして…あと助けるとはいえ急に抱っこしてスマンな」
拳藤　「いっいや…その／／あれは仕方ないよ…うん気にしないで／／／」カァッ
クラフト「そういってもらえるとありがたい…どうしたなんか顔赤いぞ?」
拳藤　「なっなんでもないから／／」
クラフト「そっそうか…ならいんだけ「機神ー!」ん?」タッタッタッ…
　拳藤といろいろ話をしていると耳郎が名前を呼びながらこちらへ来た。
耳郎　「機神ここにいたんだ!移動したんなら声かけてよね」
クラフト「あーごめんごめん、拳藤が俺のこと探してたっぽいから…」
耳郎　「拳藤?」

クラフト「あぁすまん、紹介するよ俺があの時助けた人、拳藤一佳だ」
拳藤「初めまして私は拳藤一佳よろしく！」
耳郎「あっ初めましてウチは耳郎響香よろしく…」
拳藤「ねぇ機神！よかったら連絡先交換しない？今親戚の家に来てんだけど実家は千葉なんだよね」
クラフト「連絡先？いいよ」
拳藤「本当!?ありがとう／／」
耳郎「……」
クラフトと拳藤が連絡先を交換する様子を見て耳郎はモヤモヤした。
拳藤「…そういえばさ2人は今日一緒にショッピングモールにきていたの？」
クラフト「ん？あぁそうだよ、今日は一緒に遊んでたんだ」
拳藤「へぇ～……」チラッ…
耳郎「！……」バチッ…
拳藤「!!……」バチバチッ…
2人の目が合うと間に見えない火花が散る。
クラフト「2人で一緒に遊んでて今に至るって感じだけど…それがどうかしたか？」

拳藤「いやなんとなく聞いてみただけ、気にしないで！」
耳郎（……）
拳藤「じゃぁ私あっちに迎え着てるから…じゃあね機神、耳郎」
クラフト「あぁまたどっかで会えたらいいな」
耳郎「……うんまたね」
　その時拳藤が耳郎に近寄る。
拳藤「……」スッ…
耳郎「?」
拳藤「負けないから…」コソッ
耳郎「⁉それってどういう…」
拳藤「じゃあね!!」タッタッタッタッ…
　突然「負けないから」と言われたことに驚く耳郎。
クラフト「…さて、どうする耳郎?ゲーセンと他にどっか行くか?それともう帰るか?…耳郎?」
耳郎「…えっ⁉あっうんそうだねどうしよっか」アタフタッ
クラフト「……ちょっと歩くか耳郎?」
耳郎「…うん、そうする……」

耳郎がなにやら心ここにあらずといった感じだったので2人で近くの川沿いを歩く
ことにした。
・
・
・
――川沿いの歩道――
クラフト「耳郎さっきから静かだがどうかしたか?」
耳郎「……ねぇ機神はさ……」
クラフト「…うん?」
耳郎「今気になる人とか…いるの?」
クラフト「…えっ…となんだその、また急だな」
耳郎「どうなの?」
クラフト「そうだな…もし告白されたらOKしちゃうなって人はいるかな……」
耳郎「!……そっそうなんだ……」
クラフト「どうした急にこんなこと聞いてきて?」
耳郎「……もし2人の女の子から告白されたら機神はどうする?」

クラフト「おい耳郎?」
耳郎　「答えて…」
クラフト「……そうだな、出来る事なら2人ともOKしたいな」
耳郎　「……」
クラフト「まぁでも実際その時の俺の気持ち次第によるかな」
耳郎　「へぇ……」
クラフト「なぁ耳郎どうした?急にこんなこと聞いてきて…」
耳郎　「ウチが…」
クラフト「うん?」
耳郎　「ウチがあんたのこと好きって言ったらどうする?／／／…」ぎゅっ…
耳郎は立ち止まり少し下を向いたまま顔を赤らめながら俺の袖を握りながら聞いてくる。
クラフト「俺のことを…」
耳郎　「…／／／……ごめっ今のやっぱ忘れ「逆に…」えっ?」
クラフト「逆に俺でいいのか?」ジッ…
真剣な表情で耳郎の顔を見つけるクラフト。

耳郎　「～～～／／／／…」
クラフト「なぁ耳郎…今言ったことはどっちだ?」ズィッ
耳郎　「!～／／／…どっ…どっちって?／／／」
　顔を近づけ耳郎に聞く。
クラフト「今のはただの質問なのか…それとも耳郎の本心か?ってことだ」
耳郎　「そっそれは／／……ほっ本心って…いったらどうな…の?／／／」
クラフト「答えはさっき言ってるんだけどな／／」
　耳郎はさっきまでしていた会話を思い返す。
耳郎　「えっ?……（もし告白されたらＯＫしちゃう……）…～～／／／／／／／」
カァァァ
クラフト「耳郎もう一回聞くけど…俺でいいのか?」
耳郎　「機神も…ウチなんかでいいの?／／もっとその…ウチより…」
クラフト「俺は耳郎がいいんだけどな」
耳郎　「～～～／／／／…うぅ…そのよろしく…／／／」
クラフト「おう!よろしく!」ニパッ!
　耳郎は顔を真っ赤にしながら返事をし俺も返事を返す。
　そうして俺と耳郎は恋仲になった。

・・・・・・

その日の夕方

――雄英高校・校長室――

コンコンコン…

「どうぞ」

????「失礼します根津校長」ガチャ…

根津校長「やぁミッドナイト！お昼の事件はご苦労様なのさ！」

（ミ）ナイト「ありがとうございます、その事件のことでお話が…」

根津校長「ん？お話？」

（ミ）ナイト「えぇ、実は先に現着したプロを倒したヴィランを1人の中学生が抑えていたんで

す」

根津校長「へぇそれはすごい！…なるほど君が言いたいのはあの制度の事だね」

（ミ）ナイト「お話が早くて助かります校長」
根津校長「詳しく話してくれるかいその少年のこと」
（ミ）ナイト「わかりました」……
・
・
・
（ミ）ナイト「…ということです校長」
根津校長「なるほど…なかなか興味深い話だね」
（ミ）ナイト「塚内警部の話では最初見たときはロボットの騎士?、に変身していたみたいなんで
すが、私が見たときは違っていたので…」
根津校長「分かったこちらも調べてみて問題なかったら彼に話を持ち掛けるとしよう。時期的には
来年でも問題ないだろうし丁度よさそうだしね」
（ミ）ナイト「わかりました、まぁ見た感じ問題はなさそうでしたけど♡」
根津校長「ハハッ!期待してるよ、この話は相澤くんにも話しておくよ」
（ミ）ナイト「彼にですか?いいと思いますよ、まぁどういう反応するか分からないです

けど」

根津校長「彼の判断力はいいものだからね」

（ミ）ナイト「なるほどわかりました」

・

・

・

ミッドナイトと根津校長はクラフトについて話をし彼に何か持ちかけると決める。

はたしてクラフトは何を持ちかけられるのか?

第7話　出たなヘドロ野郎!&君ヒーローになれるって!!

耳郎と恋人同士になって数カ月が経ち俺は中学3年になった。耳郎と恋人同士になった

あと俺は彼女に我儘を1つお願いした。

クラフト「耳郎、実は1つ俺の我儘を聞いてくれるか?」

耳郎　「我儘?どんなこと?」

クラフト「まぁそうないとは思うけど…もし仮に他の女子が好意を伝えてきたらそれを受け入れて

いいか?」

耳郎　「えっ…それってウチ以外にも彼女ができるってこと…だよね?」

クラフト「あぁその通りだ…」

耳郎　「……ウチじゃその…物足りな「違う」えっ…?」

クラフト「耳郎だけじゃ物足りないとかそんなんじゃなくて、そのーせっかく俺に好意を向けてく

れたんだし、それにあんまり悲しい顔をさせるのは…あぁ言っとくが全員を受け入れる
わけじゃないからな、俺にも好みや相性や色々考えはあるから先に言っておくぞ」
耳郎「……ふーんなんか機神らしいね…わかったいいよ♪」
クラフト「…本当にいいのか耳郎?俺はてっきり拒否されるかと…」
耳郎「まぁ普通はね、でもなんかあんたならいいかなーって…それにちゃんと平等に接してく
れるんでしょ♪?」
クラフト「うおー!ありがとう耳郎!!」がばっ!ぎゅっ!
耳郎「ちょ!?／／機神!?／／／」カァァ
急に抱きつかれた耳郎は顔を赤くする。
クラフト「耳郎ありがとー!こんな我儘を聞いてくれて」ぎゅ～
耳郎「うっうん／／その機神…ウチも1つ我儘を言っていい?／／（やばい!恥ずかしさと嬉しさ
が／／）」
クラフト「おっいいぞ、どんなこと?」

耳郎　「その…下の名前で呼んでくれる?／／／」
クラフト「下の名前?そんなことでいいのか?」
耳郎　「うっうんお願い／／／」
クラフト「…響香♪」
耳郎　「～～～／／／っ…クッ…クラフト／／」
クラフト「やべぇ目の前にかわいさの塊が…」
耳郎　「かっかわい／／／うぅ～そんなぽんぽん可愛い言うな／／!!　」ビシッ!
クラフト「あいたっ!」
　顔を赤くしながら可愛いと言われ慣れていない耳郎は少し怒ってイヤホンの先端をおで
　こに当てる。
　その後は耳郎の家にお邪魔して両親に挨拶をしたりした。母親には歓迎されたが父親は
「娘はやらんぞぉ!!」と言ってきたが言った直後、響香に爆音をプレゼントされる。
　その後の夏休みが終わっても週末に会って一緒に遊んだりした。比較的住んでいる場所

は近いが通っている学校が違うため平日とかは会えない。そんな風に過ごしているとあ

っという間に3年生である。そして3年になったため進路を決めなければいけない。

まぁもう決まってはいるが…

――市立天手羅（あまてら）中学校――

担任　「えー君らも3年になったからいよいよ進路を決めなくちゃならない、だからよく考えて

決めるようにね」

クラフト（進路か…まぁ雄英だな…）

クラス　「「「はーい!!!」」」

担任　「はい良い返事です、あーあと機神、あとで職員室に来てくれ話がある」

クラフト「?…はいわかりました…」

・　・　・

～～放課後（お昼）～～

――職員室――

コンコンコン…ガラッ

クラフト「失礼します機神ですが…」

担任　「おー機神きたかこっちに来てくれ」

クラフト「はい…」

職員室のドアをノックし開けると担任が自分のほうへ手招きしそこへ行く

担任　「機神お前進路はどこかもう決めているのか?」

クラフト「進路ですか? 一応雄英高校ですけど…」

呼ばれた内容は進路に関することでだった。

担任　「雄英か、それなら話が早い、実はお前に雄英からある話がきている」

クラフト「雄英から俺にですか? 一体どんな?」

担任　「それは雄英の人に聞いた方が早い、実はいま来ているんだ案内するよ」

クラフト「えっ!?今来ているんすか?」

担任　「あぁほら早くしろ」

クラフト「はっ…はぁ」

今来ていることに驚きつつも担任の後を追いかける。

担任　「今この応接室に待ってもらっている」
クラフト「あっこちらに…」
担任　「話が終わったら悪いが職員室に知らせに来てくれるか?」
クラフト「はいわかりました」
担任　「じゃあんまり失礼のない様にな」コッコッコッ…
クラフト「じゃぁ入るか…」コンコンコン…
　担任の注意に返事をしドアをノックする。
????「どうぞなのさ!」
クラフト「失礼します（今の声聞いたことあるような…）」ガチャッ
????「やあ!君が機神くんかい?」
クラフト「はい自分が機神ですが…えーと雄英高校の人で…?」
????「イエス!ネズミなのか犬なのか熊なのか、かくしてその正体は校長さ!!」
相澤　「俺は雄英で教師をしている相澤だ、まぁとにかく座ってくれ」
クラフト「はい失礼します」
　応接室にはネズミっぽい人と首周りに包帯のようなものを巻いた人が座っていた。
根津校長「改めて初めまして、僕は雄英高校の校長をしている根津、よろしくなのさ

！」

相澤　「そして俺はさっきも言ったが雄英で教師をしている相澤だ、よろしく…」

クラフト「機神クラフトです初めまして、俺に話があると聞きましたが（まさかこんな形で会うとは…）」

互いに自己紹介をするのと同時にこんなところで会うことに心の中で驚くクラフト。

根津校長「うん！君に我が校のある制度の話をしにきたのさ！」

クラフト「ある制度？」

相澤　「そうだ、その制度は【雄英特殊選抜制度】…簡単にいえば雄英が新しく入る入学者を他の試験とは別に入学させる制度だ…通称【特選】、まぁ要はスカウトだよ」

クラフト「スカウトですか？…推薦や一般入試ではなく雄英が事前に選んで入学させるって認識でいいですか？」

根津校長「その通りさ！あと特選に選ばれたら学費が免除されたり雄英にある学食の食券が毎月半

月分支給されたりするのさ！」
クラフト「至れり尽くせりですね」
相澤　「それだけ特別な制度なのさ、それにここ数年は特選による入学はない」
クラフト「その制度にもしかして俺が選ばれたとか？」
根津校長「その通りなのさ！」
　2人が来た理由は雄英にある制度、通称【特選】と呼ばれるものに俺が選ばれたからと
　言う。しかし今度はなぜ俺がと疑問が浮かぶ。
クラフト「なんで俺が選ばれたんですか？」
根津校長「それは君の活躍と個性が関係してるのさ！」
クラフト「俺の活躍と…個性？」
相澤　「そうだお前は2回 敵（ヴィラン）の事件に巻き込まれている、が1件目はヴィランを倒し2件目
　はヒーローが来るまで拘束し続けた。しかも詳細を見てみると2件とも個性が違うとあ
　る、まぁそこは今はいい、重要なのはお前の強さだ」
クラフト「俺の強さですか？」

根津校長「さうさ！中学生でありながら敵（ヴィラン）を2回も逮捕に導いた、普通はなかなか出来ないことさ！
それに個性も強いとみた」
クラフト「特選には個性の強さも入るんですか？」
相澤「まぁそうだな…個性の強さで判断するのかと言われそうだが、特選の基準に個性の強さは必要事項になる。あまり言いたくはないが、個性の強さというのは1つの判断基準になる。お前の個性はかなりの強個性と判断し特選に選ばれた。まぁその他諸々あるが説明が長くなるんでここは省くぞ」
俺が特選に選ばれた理由、それは俺がヴィランを逮捕に導いたことと個性の強さで選ばれたらしい。その他の理由にも納得し頷く。
クラフト「なるほど…」
根津校長「どうだい？我々としてもぜひ受けてほしいんだが…」
クラフト「…試験はどうなるんですか？」

相澤　「一応推薦と一般とは別に実技試験がある、筆記の方は免除だ、まぁ今のお前の成績見さ
　　せてもらったが問題はないだろう」
クラフト「……特選のお話受けさせてもらいます」
　　少し考えクラフトは特選の話を受けることにした。
根津校長「おぉっそれはありが「1つだけお願いいいですか?」ん?なんだい?」
クラフト「実技試験を一般で受けることはできますか?」
相澤　「実技を一般で受けたい?なんでそうしたい?」
クラフト「その方がお互いにとっていいかと思いまして…確か一般の実技試験は仮想敵(かそうヴィラン)に見立て
　　たロボットとの実技戦闘試験ですよね?」
根津校長「よく知っているね!…なるほど一般入試は多くの受験生がいるため機神くんの実力を測
　　定できると…そういう事かい?」
　　こちらの考えをすぐに読み取る根津校長。
クラフト「さすがですね校長先生」
相澤　「なるほど…色々合理的だ…しかし自ら一般試験を受けたいとはお前おもし

ろいな」ニヤ
　白い歯を見せながら口角を上げニヤける相澤。その顔はあまりヒーローっぽくないと思
うクラフト。
クラフト「そうすかね…まぁその方が自分にもいいかと思いまして」
根津校長「分かったのさ！試験の部分を一般試験して他はそのままに特選の内容にするのさ！」
クラフト「ありがとうございます」
根津校長「じゃぁ実技試験はそのようにして、特選を受けるでいいかい？」
クラフト「はいそれでお願いします」
　その後話は終わり根津校長と相澤先生は雄英に戻った。
根津校長「相澤くん彼をどう思った？」
相澤　「そうですね…まだ明確な判断はできませんね、でもあいつが試験でどういう結果を出す
のか楽しみですね」
根津校長「そうだね、それにまだ個性もどのようなものか分からないしね、でも強個性なのは間違

いないね。個性については彼が合格してからでも遅くない…」
相澤　「まぁ試験を待つとしましょう」
・
・
・
・
時間は少し遡り
――市立折寺中学校――
担任　「えー君たちも三年となったことだ!本格的に将来を考えなきゃいけない時期だ!!今から進路の用紙を配るが皆だいたいヒーロー科志望だよね～」バラッ!
クラス　「「「はーい!!」」」
担任　「うんうんみんないい個性だ!だけど校内での個性発動は原則禁止だからな!!」
生徒の個性発動に対し軽く注意するだけの担任教師。
????　「せんせぇー!「皆」とか一緒にすんなよ!!俺はこんな没個性共と仲良く底辺にな

んか行か
ねぇ」
クラス「そりゃぁないだろ爆豪!!」「ぶーぶー!」
クラスからのブーイングを受ける爆豪。
爆豪「モブがぎゃーぎゃーうるせぇー!!!」
担任「あーそういえば爆豪は雄英志望だったな…」ざわっざわっ…
クラス「国立の!?」「今年確か偏差値７９じゃなかったか!?」「倍率も毎回やばいんだろ!!」
雄英志望という言葉にクラスが騒がしくなる。
爆豪「その動揺がモブたる証拠だ！俺は模試じゃぁＡ判定！この学校唯一の雄英圏内だ!!そして
俺はあのオールマイトをも超えてトップヒーローと成り！必ずや高額納税者ランキング
に名を刻むんだ!!!」ぐあっ！
担任「あっそういえば緑谷も雄英志望だったな…」
緑谷「……」びくっ
クラス「「「「…」」」」」バッ！

クラス「「「「ぶふっーーー!!」」」」
クラス「はあぁ!?無理でしょ緑谷!!」「勉強と体鍛えるだけじゃヒーロー科は入れねぇだろ!!」
担任がこぼした言葉で緑谷に対し嘲笑の笑いが起きる。そんなクラスに対して緑谷は否定の言葉を発するが…
緑谷「そっそんなことないよ!、前例がないだけで…」
爆豪「おいデク!!」ボォンッ!!
爆豪が怒りの形相で緑谷の机を爆破してくる。
緑谷「うわっ!」
爆豪「なんで無個性のお前がぁなぁんで俺と同じ立場なんだぁ～～!!?」
緑谷「待って違うよかっちゃん!!別に同じ立場とかそういうんじゃ…ただ小さい頃からの夢
なんだそれにやってみないと分からないし…」
爆豪「なぁにがやってみないとだ!!記念受験か!!!てめぇが何をやれるんだ!?」クスクス
緑谷「……」

緑谷の個性はクラフトによって個性有なのだが、爆豪どころかクラスには言ってはいな
かった。言った所でまた面倒なことになるだろうと思ったからである。
～～放課後（お昼）～～
クラス「モックいかねぇ?」「カラオケどうよ?」「あ～終わったぁ～…」
緑谷（今朝の事件ネットニュースストップになってる!早く家に帰ってノートにまとめなきゃ）
爆豪「話はまだ終わってねぇぞデク」ヒョイ
緑谷が鞄にしまおうとしたノートを取り上げる爆豪。
緑谷「あっ!」
友達（他）「爆豪なにそれ?」「将来の為のヒーロー分析?は～マジか緑谷～～!?」
緑谷「いいだろ別に!返してよ!」
爆豪「…」ボンッ!!
緑谷が返すように言うが爆豪は何も言わずにそのままノートを小さく爆破する。
緑谷「あぁーーーーー!!???」
爆豪「ふん…」ぽいっ!!「…ひどい…」

爆豪はノートを教室の窓から投げ捨てる。

爆豪　「世間に名が轟いているトップヒーローは学生時から逸話を残している、俺はこの平凡な
　　市立中学から唯一の雄英進学者っつー経歴をまず残すんだ、ようするに完璧主義なわ
　　け」

友達①　（みみっちい…）

一見大層な事を言っているように見えるが言っていることはみみっちい内容だった。

爆豪　「つーわけで雄英受けるなよナードくん」ぽん

緑谷　「……」ビクッ

友達①　「いやいや流石に何か言い返せよ…」

爆豪　「言ってやんな、あーかわいそうに彼はまだ現実が見えていないのです。おいデク…そん
　　なにヒーローになりてぇんなら効率いい方法あるぜ!来世は個性が宿ると信じて屋上か
　　らのワンチャンダイブ!!」

緑谷　「!?」バッ!
爆豪　「何だよ?」ボボッボンッ!
緑谷　「……」
・
・
緑谷　「(バカヤロー本当に僕が飛び降りたら自殺教唆(じさつきょうさ)だぞ!考えてもの言え!)エサじゃないよ……バカヤロー…」
緑谷は投げ捨てられ鯉がいる大きな水槽に浮かんでいるノートを拾いながら爆豪が言ったことに怒りながら文句を垂れる。
・
・
・
・
・
――機神／帰り道――

クラフト「（特選なんてもの原作にはなかったな…俺が転生したことでこの世界は原作とは別の世
界になったのかな…まぁ別にいっかそれはそれで面白い）さて…入試までなにしようか
な…緑谷と一緒に入試のために色々鍛えようかな?…」
特選という制度は原作になかったことを面白いからいいと片付け、入試まで何をするか
考える。
クラフト「緑谷に一緒に特訓するか聞いてみるか……そういえばヘドロ事件も時期的に今ぐらい
か?だけどいつかなのか分かんねぇ…とりあえず緑谷に連絡してみよ」
ふとヘドロ事件のことを思い出す、だがそれがいつなのかわからないクラフトはとりあ
えず緑谷に連絡をする。
・　・　・

――緑谷／帰り道――

緑谷　「はぁ…（機神くんのおかげで個性を持てるようになったけどまだ自信は持てないな…それに僕が周りに言ってないせいで…だけど言ったら言ったで…）ええい！くよくよするな

前見て僕は進むんだ！」ズルル

ヘドロ敵（ヴィラン）「Mサイズの…隠れミノ…」

緑谷　「!?…うわぁっ!?」ズチャァッ!!

前向きに自分を鼓舞しているとマンホールからヘドロの敵（ヴィラン）が現れ捕まりそうになって

しまうが…

ヘドロ敵（ヴィラン）「ん?なんだ?…うおっ!?」ボオォッ!

緑谷　「はあっはあっ…危なかった…」

ヘドロ敵（ヴィラン）「ほぉ～火の個性か…ますます良い隠れミノだ…」

緑谷　（とっさに炎の出力上げて逃げ出すことができた…だけどこれからどうする、相手は液体

の個性だから火は相性的に不利だ…どうすれ…）

ヘドロ敵（ヴィラン）「さっさと俺に体を乗っ取らせろぉ!」グアッ!
緑谷　「しまっ「もう大丈夫だ少年!!」!?」ガコン!
もう１つのマンホールから突如オールマイトが現れる。
ヘドロ敵（ヴィラン）「!?」
（オ）マイト「私が来た!…ＴＥＸＡＳ…ＳＭＡＳＨ!!」ブオォッ!
ヘドロ「これ…は…ぅおぉぁあああぁ!!?……」
緑谷　「うわぁあ!?」ドタッ!
オールマイトのパンチの風圧によって吹き飛んでしまう緑谷とヘドロ敵（ヴィラン）
（オ）マイト「おっと!少年大丈夫かね!?」タッタッタッ…
緑谷　「いてて…あっ助けてくれてありがとおぉぉ!?…ォォオッオールマイトォ!?」
目の前にＮｏ１ヒーローがいることに驚愕する緑谷。
（オ）マイト「ハッハッハッ大丈夫そうだね!いや～すまない!ヴィラン退治に巻き込んでしまっ
て!!普段はこんなミスはしないんだがオフだったのと慣れない土地であったためか
敵（ヴィラン）を取り逃がしてしまってね!!」

緑谷　「すっすごい本物のオールマイトだ！生で見ると画風が全然違う！そっそうだサインくださ
い！僕ずっとあなたのファンで!!」あたふた
（オ）マイト「ハッハッハッありがとう少年！だがその前に、敵（ヴィラン）をこのペットボトルに詰めるの手
伝ってくれる？」
緑谷　「はっはい！わかりました！」
緑谷はオールマイトと一緒に周りに散ってしまったヘドロ敵（ヴィラン）を回収する。
・
・
・
（オ）マイト「いや～ありがとう少年！君のおかげで無事敵（ヴィラン）を捕えることができた!!」
緑谷　「いっいえ僕のほうこそオールマイトの手伝いを出来て…それにサインもありがとうござ
います!!」
感激のあまりテンションが爆上がりの緑谷。
（オ）マイト「ハーハッハッハッ！ありがとう少年！そう言ってもらえるとありがたい！
では私はコイ

ツを警察に届けないといけないので失礼するよ!!」
緑谷　「えっもう?……そんな…（僕まだ…あなたに聞きたいことが…）」
（オ）マイト「こう見えて色々と忙しくてね……それじゃぁ今後も…」グヴッ…
「応援よろしくぅぅぅーーーーーーーー!!!」ドヒュウウゥゥ
オールマイトは敵（ヴィラン）を警察に届けるため跳んで行ってしまうのだが…
（オ）マイト「ってコラコラーー!!少年!ファンであっても限度があるぞ!!放しなさい!」ジタバタッ!!
オールマイトのズボンに掴まっている緑谷。
緑谷　「いいっいま放したら…死んじゃ…死んじゃいます…」
（オ）マイト「むむっ確かに!!」
緑谷　「ぼぼぼっ僕!あああっあなたにに!ききっ聞きたいことが!」
（オ）マイト「オーケーオーケー分かったから目と口を閉じなさい!……ふむ…ゴホゴホッ
（ｓｈｉｔ!）」タラリ…
・　・　・

――某ビル屋上――

ヒュウウゥウ…ドオン！

オールマイトは近くのビルの屋上に着地する。

緑谷　「こここっ…怖かった……」（ガクガクガク）

（オ）マイト「まったく！ビルの人に言えば降ろしてくれるだろう、では私は時間がないから

これで失礼するよ!!」

緑谷　「あっ待って!!」

（オ）マイト「ＮＯ!!待てない!!」

緑谷　「個性のおかげで目覚めた個性でも、あなたのようなヒーローになれますか!?」

（オ）マイト「……個性のおかげで…《ドクン！》（しまった…時間が…ホーリーシット！…）」

緑谷の言った言葉が何か引っかかり立ち止まるオールマイトだが…

緑谷　「僕はもともとは無個性だったんですが…去年知り合った友達のおかげで個性が出たんで

す…だけど今まで無個性だったので自信とかあまり持てなくて、それに僕み

たいなビビりがヒーローを目指してもいいのかなと、その友達の為にも頑張らないといけないのに

…こんな僕でもあなたのような…」

シュウウウウウ…

緑谷が自身の事を話していると何なら蒸発するような音が聞こえてくる。

「ん?えっ?……えぇぇぁあおおっ!!?えっなっなんで!?細く…ニセモノ!?」

（オ）マイト「……私はオールマイトだ」ごふっ…

緑谷が顔を上げるとそこにはガリガリに痩せこけた男がいた。

緑谷　「どわあぁぁぁぁっ!?」

（オ）マイト「…少年、見られてしまったついでだ、間違えてもネットには書き込むなよ」

ひら…

緑谷　「ひっ!?」（ゾッ）

オールマイトがシャツをめくるとそこには生々しい傷跡があった。緑谷は思わず両手で

顔を隠す。

（オ）マイト「5年前…敵（ヴィラン）との戦闘で負った傷だ、呼吸器官半壊、胃袋全摘出…何度もの手
術と後遺症で体は弱ってしまってね、今の私のヒーローとしての活動時間は1日約
3時間になってしまった」
緑谷「5年前というと毒毒チェーンソー?」
（オ）マイト「詳しいね…でもあんな奴にはやられないさ…これは世間には公表されていない、
いや公表しないでくれと私が頼んだ、……人々を笑顔で救う平和の象徴は決し
て悪には屈してはいけないためにも」
緑谷「……」
（オ）マイト「そういえば君さっき個性で…」
ボォンッ!
緑谷「!…えっ!?」
（オ）マイト「煙に爆発!?…まさか…!」スカッ…
オールマイトは自身の体の傷について話していると近くで爆発音と煙が空

高く舞う。そ
してオールマイトのズボンにはヘドロ敵(ヴィラン)を詰めたはずのペットボトルがなかった。
（オ）マイト「（ない！落としたのか!?いつ…）あの時か!?」
緑谷　「煙が…もしかして敵(ヴィラン)？…オールマイトどうかしました？」
（オ）マイト「少年…先ほど捕らえた敵(ヴィラン)を詰めていたペットボトルがない…もしかすると今起き
ている爆発と煙は…」
緑谷　「まさか…さっきの敵(ヴィラン)が!?…」ダダダダッ…ガチャ…カンカンカン…
（オ）マイト「待ちなさい少年！まさかっ…ゴホゴホッ！」
緑谷は駆け出しドアを開けビルの階段を駆け下りていく。オールマイトは止めようとす
るができなかった。
・
・
・
――田等院商店街――

ドオォォォン!!!　バリィーン!!!　ドォンッ!!…ガシャァン!!!
通行人「うわぁぁぁあ!?」「きゃあぁぁあ!?」「敵(ヴィラン)だぁ!!」
多くの人によってに賑わっているはずの商店街が敵(ヴィラン)によって燃えていた。
そこに通報
を受けたヒーローが到着する
タッタッタッ…
ヘドロ敵(ヴィラン)「ぬ☒う〜ははは〜…」
他ヒーロー「子供が人質になって…!?」
デステゴロ「くっ!…なんて卑劣なぁぁっ!!」ダダダッ!!…ドゴォッ!!…
ヒーローのデステゴロは人質の子供を助けようとヘドロ敵(ヴィラン)に突撃し持ち前のパワーを
使ってパンチを繰り出す。しかし…
デステゴロ「ふんん!!《ズルル…》…なっなんだこれは!?掴めねぇ!?」
ヘドロ敵(ヴィラン)の体は流動体であるため掴めない。
ヘドロ敵(ヴィラン)「でやあぁっ!!」バシィッ!
デステゴロ「うぉっ!!」ズザザッ!ドゴンッ!
吹き飛ばされシャッターに背中から激突するデステゴロ。

他ヒーロー「デステゴロ!!」「うおっ!!」バゴォォン!!
　他のヒーローがデステゴロを呼びかけるがその瞬間また攻撃が繰り出される。
ヘドロ敵（ヴィラン）「へっ、ヒーローがざまぁねえな!」
????「んんんっ!んんんんあ☒ぁあ☒ぁあああ!!こんなドブ野郎に!俺が呑まれるかぁぁ!!」
　ボッボンッ!ボオォォンッ!!
　掴まっている人質が顔のヘドロを自力で剥がし逃れようと個性を発動させる。
デステゴロ「ぬぉ!」
ヘドロ敵（ヴィラン）（なんて力だ!こりゃぁ大当たりだ!!この個性があれば奴に報復できる!!）
野次馬「すげー何アイツ?ひょっとして大物敵（ヴィラン）?」「がんばれ～ヒーロー!!」
デステゴロ「くそっ!体が液体のせいで掴めねぇし、人質の個性が強力な上に抵抗してもがいてい
　るから近づけない!」
　下手に手が出せず立ち往生するヒーロー。そこに息を切らしながら走って

きた緑谷が到着する。

タッタッタッタッタッ…

緑谷　「はあっはぁっはぁっ…（ここだ…敵（ヴィラン）は……！…あの敵（ヴィラン）は！じゃあやっぱりあの時落とし

て…僕のせいで…）…ん？」ブゥーブゥー…

緑谷のスマホに一件の着信が入る。

緑谷　「（誰だろう？…機神くん!?）《ブゥーブゥー…ピッ》もしもし機神くん!?」

クラフト『おー緑谷！元気？』

緑谷　「うっうん僕は元気だよ、それより急にどうしたの？」

クラフト『いやー受験のことについてちょっと色々話そうかなと思ってね』

緑谷　「受験について…ごめん機神くん今ちょっとそれどころじゃ…」ボォン！

クラフト『…なんか爆発音みたいなの聞こえたけど？もしかして近くに敵（ヴィラン）でもいるの？』

緑谷　「うっうん、実はそうなんだ…あと『緑谷…』んっ？なに？」

クラフト『お前のいる場所の位置情報を送れ今すぐに』

緑谷　「えっなんでそんな『早くしろ』うっうん分かったよ！」

理由を聞こうとしたがクラフトにせかされ急いで位置情報を緑谷は送る。
緑谷　「(これでよし…それにしてもなんで位置情報なんか…《ボォォン!》)!!」
デステゴロ「くそっ!!」
野次馬　「あっ!新人ヒーローのMt.(マウント)レディ(ルーキー)「うえぇ!?私2車線以上じゃないと無理~!!」ズシン!ズシン!
シンリンカムイ「爆炎系は我の苦手とするところ今回は他に譲ってやろう」
バックドラフト「そりゃサンキュー今は消火で手いっぱいだよ!それより状況どーなってんの!?消防
車まだ!?」
????「うえ☒ぇ!!」ヒュッ…ドォンッ!!
他ヒーロー「うおっとぉっ!!」
デステゴロ「くそだめだっ!これを解決出来んのは今この場にいねぇぞ!!」
他ヒーロー「だれか有利な個性のやつを待つしかない!!」
バックドラフト「それまで被害を抑えるんだ!何、すぐに誰か来るさ!」
他ヒーロー「あの子には悪いがもう少し耐えてもらうしかない!!」
デステゴロ(くっそぉぉ…奴を吹き飛ばせる程のパワーがあれば!…)
タッ…タッ…タッ…

（オ）マイト「はぁっはぁっ…ぜぇっ……（やはりあの時…）」
ヒーロー達は有利な個性のヒーローを待つことにし人質に耐えてもらうという選択
をする。この時緑谷に遅れてトゥルーホーム姿のオールマイトが到着する。
オールマ
イトは商店街の中を確認するとあの時落としたのかと確信する。
・
・
～～数分前～～
クラフト「（緑谷に連絡したらまさか今日がヘドロ事件の日だったとは…さて位置情報は）おっ！きた…案外近いな、緑谷に話するため近くまで来といてよかった…（さてフワフワの能
力でいくか、よし！）」ふわっ…ヒュウゥー
クラフトは緑谷からの位置情報を確認するとフワフワの能力で飛び商店街に向かう。
・

・

～～そして現在～～

――田等院商店街――

（オ）マイト（やはりあの時落としていたのか…活動時間に気を取られてしまった…情けない…

ファンである少年に偉そうなことを言っておいてこのザマか…情けない）ぎゅ…

オールマイトは自身の情けなさを悔やむ。

緑谷　「（機神くんもしかしてここに来るのかな?）「緑谷!」えっ?うわっ!?」スタッ…

クラフト「よっ!緑谷!少し久しぶりだな!」

緑谷　「機神くん!?なんでここに!?それに来るの早すぎない!?」

クラフト「緑谷に話しあって近くまで来てたんだよ、まぁちょっと空飛んできたけど（笑）」

緑谷　「そうだったんだ…それにしても空って…」

予想を超えたやり方で来たことに驚く緑谷であった。

クラフト「でさこれ今どんな状況なの?」

緑谷　「えっぁぁ今 敵(ヴィラン)が暴れてて、それに人質もいるから何もできない状況で……」

クラフト「なるほど…（知ってはいたが緑谷がいつ飛び出すかはわからんな…）」

緑谷　（僕のせいで…ごめんなさい僕のせいで…）

野次馬「ヒーローなんで何もしないの?」「中学生が捕まってんだって」「てかあの敵(ヴィラン)さっき

オールマイトが追ってなかった?」「オールマイト!?来てんの!?」「少し前見たよ」

「マジで!?」

緑谷　（中学生!?僕と同じ!?あんな苦しそうなものに耐えているのか!?ごめんなさい、しかもア

イツの体は掴めない、有利な個性のヒーローを待つしかない…ごめんなさい、もう少し

耐えて、すぐに誰かが救けに…）

自分のせいだと思い心の中で謝り続ける緑谷であったがその時人質と目と目が合う。

????「う☒う…ぅ」

緑谷　「(((!!…)))」ダッ!!
クラフト「ん?緑ｙ、あれ?どこに…」
　ダダダッ!!
クラフト「!?（いつの間に!）」
オールマイト「!?」
他ヒーロー「!?」
デステゴロ「バカヤロー!!止まれぇ!!止まれぇぇーーーーー!!!」
　ヒーローが飛び出した緑谷に気づき呼び止めるが止まらない。
緑谷　（なんで出た!?…なんで!?体が勝手に!?）
ヘドロ敵（ヴィラン）「あのガキは…」
????（デク!?…）
ヘドロ敵（ヴィラン）「まぁいい…爆死だ!」グアッ!
緑谷　「ひっ!（どうしようどうすれば…こういうときは…２５ページ!）ブンッ!
ヘドロ敵（ヴィラン）「ぬぉっ!」バササッ
　緑谷はとっさに相手の顔にめがけて背負っていた鞄を投げ視界を一時的に奪う。
緑谷　「かっちゃん!!」

爆豪　「ぶはっ！…なんでてめぇが!?」
緑谷　「体がっ足が勝手に!!どうしてかわかんないけど…だけど…」バチャバチャ
「君が…救けを求める顔してた!!」ニカッ

（オ）マイト「!!??」ザワッ！
クラフト（!!…トランスフォーム！ＬＢＸナイトメア！）シュインシュイン（変身音）
爆豪　「やめ…ろ…」
ヘドロ敵（ヴィラン）「もう少しなんだ！邪魔すんじゃねぇ!!」グワッ！
他ヒーロー「無駄死にだ！自殺志願かよ!?」
ヒーローが緑谷を助け出そうと動き出したとき頭上を通過し前方を駆け抜けるロボット
が現れる。
シュバッ…ガシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャッ!!（走行音）
デステゴロ「!!…なんだ!?ロボッ…ト!?」
他ヒーロー「なんだあのロボットみたいな奴は!?」
ヘドロ敵（ヴィラン）「ぬおぉらぁっ!!」ブォッ！
緑谷　「!!（死…）」

ボオンッ!!
ヘドロ敵（ヴィラン）「ははははぁ!俺に歯向かうから……ん?」
ヘドロ敵（ヴィラン）は何かに気づく。
クラフト「緑谷…さっきのお前の行動はヒーローそのものだぜ」
緑谷「…えっ!?その声もしかして機神くん!!?でもその格好は……」
他ヒーロー「さっきのロボット!?まさか今の攻撃を防いだのか!?」
（オ）マイト（情けない!…）グググッ…シュウゥゥ
ヘドロ敵（ヴィラン）「なんだてめぇは!!」
クラフト「お前みたいなヘドロ野郎に名乗る必要はないね」
ヘドロ敵（ヴィラン）「なんだとぉっ!!」
クラフト「さて…後は頼みましたよオールマイト!」シュバッ
クラフトは後ろに跳んで下がる。
ヘドロ敵（ヴィラン）「!?!!」
緑谷「!?」
爆豪「!?」
（オ）マイト「あぁっ…まったく情けない…君にあれだけのことを言っておきながら!!」
ガシッ

「プロはいつだって命懸け!!!」
「ＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨ!!」
　オールマイトは緑谷と爆豪の腕を掴みスマッシュをヘドロ敵（ヴィラン）に向けて打ち放つ。
!!ブオオオオオオオオオオオオ!!
ヘドロ敵（ヴィラン）「ぬおあぁぁぁぁぁぁ!!」
クラフト（バリバリの能力!…すっげぇパワー…）
　クラフトはバリバリの能力でバリアを張って凄まじい風圧を防ぐ。
ヒーロー「うおっ!……ん?」
野次馬「うおぉぉ!…あれ?」「きゃぁ…あら何も…」
ヒーロー「ん?なんだこれは…壁?」「あのロボットの個性か?」
　ぽっ…ぽっ……サアァァァ……
野次馬「えっ…雨?」「おいおいおいおいおい…」「まさか今の風圧で上昇気流が!?」
「マジかよ!」「パンチ一発で天気変わっちまった!」「すげぇこれがオールマイト!?」
「!!わあああああああああああああ!!」
　たったパンチ1発で天候を変えたことに周りにいた人々はそれに驚愕し歓声

を上げる。
　その後、吹き飛んだヘドロはヒーロー達によって回収され無事、警察に引き渡され事件
は解決した。
～～事件後～～
他ヒーロー「すごいタフネスだそれにその個性!プロになったらぜひうちの事務所に来てほしい」
爆豪　「……」
デステゴロ「まったく!君が危険を冒す必要はなかったんだ!!」
緑谷　「すっすみません…」
　称賛される爆豪とお叱りを受ける緑谷。
他ヒーロー「そして君もだ!いくら強い個性とは言え資格未取得者が個性を使うことは法律で禁止
されている!」
クラフト「……」
他ヒーロー「どうした黙り込んで?」
クラフト「いや…なんで何もできなかったあんたらヒーローにそこまで言われなきゃ

ならないん
だ?」
緑谷「機神くん!?」
他ヒーロー「なっなんだと!?」
納得がいかないクラフトはヒーローに反論する。
クラフト「確かに個性の無断使用は違法だけだ…じゃあ俺はそれを守って見守ってりゃよかったの
か?俺が間に合っていなかったら緑谷は大怪我または最悪死んでいたかもしれない。人
質になっていた奴も持ち前のタフさで耐えていたが、あのままいつまでも耐えられるわ
けでもなかったわけだろ?」
他ヒーロー「そっそれは有利な個性の者がいなかったわけで……」
クラフト「確かに個性の相性はあるでしょう。でも他に方法はあったでしょ?小麦粉や片栗粉とか
の粉をかけて掴めるようにするとか、それに有利な個性持ちがいないから、有利な個性

持ちが来るまで人質に耐えてもらおう…もし人質に何かあったらどう責任取るんだ?」

他ヒーロー「なっなにを!」「おい君口が過ぎるぞ!」「我々はプロだ、何もしていなかったわけじゃない」

クラフト「実際何もできていなかったじゃねぇか、あんたらがそう言えるのは結果的に全員救かったからだ」

緑谷　「はっ機神くん…さすがに言いすぎじゃ…」

他ヒーロー「なっ!……」「なんだと!」

デステゴロ「……」

（シ）カムイ「……」

この時デステゴロやシンリンカムイは黙ったままクラフトの言い分を聞いていた。

クラフト「（これ以上は平行線だな…）緑谷帰ろうぜ」

緑谷　「えっ?…うっうん」

（オ）マイト「……」

オールマイトはインタビューを受けながらその様子を見ていた。そしてクラフトはは緑谷に声をかけその場を後にする。

・
・
・

～～帰り道～～

緑谷　（オールマイトに謝りたかったな…それに機神くんなんの話だったんだろ）

《緑谷、今日はいろいろあったから話はまた今度にするわ、じゃまた今度な！》

緑谷　「（帰ったらホームページからオールマイトにメッセしてみよう…「おいデクッ!!」）

かっちゃん！」

爆豪　「俺は…てめぇに救けを求めてなんかねえぞ…！救けられてもねぇ！あ⊠!?

俺はI人でやれたん

だ!!無個性のクソナードでびびりが見下すんじゃねぇ!!俺に恩を売ろうってか!?俺に!?…クソ

ナードが!!!」ギュルンッ！

言い訳のような文句を緑谷に言うとキレッキレのターンをしその場を後にする爆豪。

緑谷　（タフネス…でもかっちゃんの言うことも…僕は機神くんのおかげで個性が持てたけどま

だ自信とかも…それにビビりだし……）

（オ）マイト「私が来たー!!!」

緑谷　「うわっ!オールマイト!!えっなんでここに先ほどまで取材陣に…」

突所曲がり角から現れるオールマイト。

（オ）マイト「ハッハッハッ!あのくらい抜けるわけないさ!なぜなら私はオールマゲ

ホォッ!!」ボシュゥ

緑谷　「わあーーーー!?」

（オ）マイト「少年…礼と訂正、そして提案をしにきた。君の話を聞いていなければ口先だけの

ヒーローになっていた…ありがとう」

緑谷　「いえ…僕はなにも……自信もなくてビビりなのに仕事の邪魔をしてしまって…」

（オ）マイト「そう!!」

緑谷　「えっ？」
（オ）マイト「あの場で誰よりも小心者であり！誰よりもヒーローを目指そうとしている君だから
こそ私は動かされた!!」
緑谷　「（(!!)）」
（オ）マイト「トップヒーローは学生時から逸話を多く残している。そして彼らの多くがこう言っ
ている『考えるより先に体が動いていた』と!!」
オールマイトの言葉で感情と心臓の鼓動が段々と高ぶる緑谷。
緑谷　「!!…」ドクン…
（オ）マイト「君も！…そうだったんだろう!?」
緑谷　「…（(はい)）……」ドクン
（オ）マイト「君はヒーローになれる」
緑谷　「うぅぅ…うあぁぁあぁあああああ……!!」
ずっと言われたかったことを憧れのヒーローから言ってもらえた緑谷は膝

から崩れ胸を
抑えながら大粒の涙を流す。

第8話　治療とちょっと修行…そして入試！おや3人目？…

オールマイトにずっと言われたかったことを憧れの人から言ってもらえた緑谷。オール
マイトは泣いている緑谷を見ながら言葉を続ける。
（オ）マイト「君なら私の力を受け継ぐに値する!!」
緑谷　「……えっ？」
（オ）マイト「ハッハッハ！なんて顔をしているんだ!?提案だよ！本番はここからさ、いいかい少
年…私の力を受け取ってみないかという話さ!!」
緑谷　「ちからを……？オールマイトなにを…」
頭の理解が追いつかない緑谷。
（オ）マイト「私の個性の話をしよう少年…ネットや週刊誌には私の個性は【怪力】など【ブース
ト】だの書かれ、インタビューなどでは常に爆笑ジョークでお茶を濁して

きた…

《平和の象徴》オールマイトはナチュラルボーンヒーローでなければならないから

ね、私の個性は聖火の如く引き継がれてきたものなんだ!」

緑谷　「引きつがれ…て…きたもの!?……」

（オ）マイト「そう…そして次は君の番ということさ」

ブツ

ツ　えっ?ちょっと待ってください…確かにオールマイトの個性は世界七不思議として喧々囂々（けんけんごうごう）ブ

緑谷　ブ　と論議されてきました、それこそネットじゃ見ない日はないくらいに…でも…あの個性を　ツ

ツ　引き継ぐってそれはちょっと意味が分からないというか…そんな推測は今まで聞いたこと　ブ

ブ　がないし、議論のなかからも出てこなかったし有史以来確認されてないわけで…　ツ

ツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブ

ツブツブ

緑谷はブツブツ言いながらオールマイトの個性について話すが…

（オ）マイト「君はとりあえず否定から入るんだね…ナンセンス!!」

緑谷　「ナン…!」

（オ）マイト「私は隠し事は多いけど嘘はつかない!!私の個性は個性を譲渡する個性…冠された名

は…」

／／／「ワン・フォー・オール」／／／

緑谷　「ワン…フォー・オール……」

（オ）マイト「この個性（チカラ）は1人が力を培（つちか）いまた1人へと譲渡し…また1人へと培い救いの声に答える

ために繋いできた力の結晶!」

緑谷　「なんで…そんなすごい力を僕に…?」

（オ）マイト「もともと後継者は探していてね、そして君になら渡しても良いと思ったのさ!!他の

ヒーローが躊躇しているあの場で飛び出した君は誰よりもヒーローだった!!」

緑谷　「……」じわ…
（オ）マイト「まぁしかし君次第だが…どうする?」
緑谷　「…（憧れの人にここまで言ってもらえて断る理由なんてあるか!?…ないだろ!?）《ゴシゴシ
シ》…お願い…します!!」
（オ）マイト「即答…そう言ってくれると思ったぜ!…あぁそうだ少年、君に聞きたいことがある
んだ」
オールマイトの秘密を知り提案を受ける緑谷。そんな自身の提案を受けてくれた緑谷
にオールマイトは気になっていたことを聞き出す。
緑谷　「?…なんですかオールマイト?」
（オ）マイト「屋上で君が言った言葉…『個性のおかげで目覚めた個性』…あれはどういう意味だ
い?」
緑谷　「あっ!あれはですね…えっと（はっ!）…」

ここで緑谷はクラフトの言葉を思い出す。

《個性が出た場合この事は秘密にしてもらいたい。理由は目立ってしまうからだ、そんなことになったらクソ面倒くさいこと極まりない》

緑谷　「……オールマイトこれから話すことは誰にも話さないでもらえますか？」

（オ）マイト「えっ？あっあぁ分かった…（まさかオールフォーワンが関わっているんじゃ…）」

緑谷　「実は……」

緑谷は自身の個性の秘密をオールマイトに話した。

緑谷　「……ということです」

（オ）マイト「なるほど、そういうことか…（聞いた限りじゃオールフォーワンではない…一度会ってみたいな…）」

緑谷　「…どうしましたオールマイト？」

（オ）マイト「ん？あぁ少年そういえば名前はなんていうんだい？」

緑谷　「ぼっ僕は緑谷出久といいます」

（オ）マイト「ふむ、緑谷少年…もしその彼がよかったら一度私に会わせてくれないか?」
緑谷　「機神くんをですか?」
（オ）マイト「うむ、少しその機神少年と話をしたくてね」
緑谷　「分かりました、連絡をしておきます」
（オ）マイト「頼んだよ!（もしかしたら彼の個性なら私の傷も…）」
秘密を聞いたオールマイトはオールフォーワンではないことに安堵し、クラフトの事が
気になったため緑谷に会わせてもらえるようにお願いする。その後２人は後日また会う
ための予定を決め別れた。
・
・
・
――クラフト宅――
クラフト「あ☒ぁ～疲れたー、何もできなかったヒーローがなんであそこまで偉そうに言えるんだ?
あんな風にはなりたくねぇな～」

自宅のソファでくつろぎながらヘドロ事件のヒーローについて愚痴るクラフト。そこに

一件の通知が入る。

クラフト「さーて軽く飯でも《ブゥーブゥー》ん…なんだ？」ピッ

緑谷　『機神くんお昼は助けてくれてありがとう！あと君に話があるんだ…実は……』

クラフト「緑谷からか、えーと何々～……はいはいなるほど…了解っと、まさかあっちから会おうとは…世の中どうなるか分からんもんだな（笑）」

緑谷からのメッセージに返信しその内容にテンションを上げるクラフトであった。

・
・
・
・
・

～～4月某日／朝6時～～

――多古場海浜公園――

クラフトは朝早くから待ち合わせをしていた。

クラフト「う～４月と言っても朝はまだちょっと寒いな」ブルル

緑谷　「あっ機神くん!おはよう!!」タッタッタッ…

クラフト「お～ぅ緑谷～おはよう」

緑谷　「機神くんごめんねこんな朝早くに!」

クラフト「いやーいいってことよそれよりオールマイトは?」

緑谷　「あぁオールマイトもすぐに「ハ―ハッハッハッ!」あっ来た!」

（オ）マイト「私が普通に走りながら…来たっ!!」

緑谷　「オールマイト!」

クラフト「朝からすごい元気ですね…」

（オ）マイト「ハッハッハッ!おはよう緑谷少年!そして君が機神少年だね?…ん?もしかしてどこか

であったことある?」

クラフト「去年の夏に起きた銀行強盗…と言えば分かりますか?」

（オ）マイト「!…思い出したよ、そうか…あの時の少年か!」

緑谷　「えっと…お二人は面識があるんですか?」

（オ）マイト「あぁ、去年の夏に起きた銀行強盗事件の時にちょっとね！」
緑谷　「去年の夏…もしかして中学生が敵（ヴィラン）を倒したという…それって機神くんだったの!?」
クラフト「ああ、そうだぞ」
緑谷　「えええぇぇ!?すごいね機神くん！」
敵（ヴィラン）を倒した中学生が俺と知ると声を上げて驚く緑谷。
クラフト「緑谷、驚くのもいいが今はやることがあるぞ」
緑谷　「あっそうだったね機神くん！ごめんなさいオールマイト！」
（オ）マイト「ハッハッハッ！な～に緑谷少年が驚いてしまうのも仕方ないさ！」
クラフト「それでオールマイト…俺をここに呼んだ理由は聞いてますが、先に緑谷の方からやりま
しょう。俺の事は後でも問題ないでしょう?」
早朝の海浜公園で緑谷とオールマイトと合流し軽い自己紹介?とかをして3人は話を進
める。
（オ）マイト「うむ、そうだね！早速だが緑谷少年、服を脱いで体を見せてくれるかい?あぁ上だけ

でいいからね」
緑谷　「はっはい分かりました」ゴソゴソ
（オ）マイト「ふむ…（まだまだあれだが思っていたより鍛えられている）」
緑谷　「あのオールマイト…どうしました?」
（オ）マイト「ん?あぁいや君に力を継承するとは言ったが生半可な体では四肢が爆散してしま
うからね!」
緑谷　「四肢が!!」
オールマイトの爆散カミングアウトに驚愕する緑谷。
クラフト「あーということは緑谷の体を入試までに鍛えるわけですか?」
（オ）マイト「そういうことだ機神少年!…って待って待って違和感なく話してたけどもしかして
私の事情知ってる!?」
クラフト「はい…てか今気づいたんですか?」
（オ）マイト「緑谷少年どういうことだい（…^ □^）!?」ぐわっ!
クラフトが秘密を知っていることに慌てながら驚くオールマイト。そして即座に緑谷を

問い詰める。

緑谷　「えっとこれはその…」あたふたっ

クラフト「俺が無理やり喋らせました、だってオールマイト俺と緑谷の秘密知ってるんでしょ?

そっちだけ知って俺だけ知らないのはちょっと不公平じゃありません?」

(オ)マイト「うっうぅむ…確かにそうだが…機神少年くれぐれも私の秘密は洩らさないように

ね!」

クラフト「分かっています」

(オ)マイト「うんマジでよろしくね!…さて私の事を知っているなら話は早い、先ほど機神少年

が言ったように緑谷少年の体を私の力を譲渡できるように体を鍛えるんだ、入試まで

にね!そしてその方法はこの浜辺のゴミを片付けることだ!!」

緑谷　「このゴミを…」

クラフト「なるほどー(知っていたけどすげぇ量…)」

オールマイトはクラフトに秘密に関することに釘をさしながら緑谷を鍛え

る方法を話
す。
（オ）マイト「緑谷少年と機神少年は雄英志望であっているかな?」
クラフト「あってますよ」
緑谷　「はい!雄英はオールマイトの出身校なので…いくなら絶対雄英と!」
（オ）マイト「くーこの行動派オタクめ!!」
（オ）マイト「ネットで少し調べたんだけどこの海浜公園、一部の沿岸はもう何年もこのままのよ
うだね?」トン…メコッ!
緑谷　「ええ、何か海流が関係しているせいか漂着物が多くて、それに付け込んで不法投棄も
あって…」
クラフト（軽く叩くだけでへこむって…すげぇ力（笑））
緑谷　「もしかして体を鍛えるためにゴミ掃除を?」
（オ）マイト「ＹＥＳ!!だがそれだけじゃない…最近の若いヒーローってのは派手さばかり求め
るけど本来ヒーローってのは奉仕活動!地味だなんだと言われてもそこ

はブレては
いかんのさ!!そしてこの区画一帯の水平線を蘇らせる!!それが君のヒー
ローへの第
一歩だ!!」メコメコ…バゴンッ!!
緑谷の問いにアムズアップしながら答え、大型冷蔵庫を片手一本でペシャン
コにして
ヒーローの本質を語るオールマイト。
緑谷「このゴミを…全部!?」
(オ)マイト「そう!先ほども聞いたけど緑谷少年は雄英志望、だが雄英はヒーロー科最
難関…生
半可な鍛え方じゃいけない。そこでこれ!!私が考えた《目指せ合格アメリ
カンド
リームプラン!!》、ゴミ掃除を達成するためのトレーニングプラン!入試
までの生活
をこれに従ってもらうよ!!」
緑谷「寝る時間まで…」
クラフト「うはーこれはなかなか…」

（オ）マイト「ぶっちゃけねこれ超ベリーハードだから大丈夫?」ヒソ
緑谷　「そりゃぁもう僕は他の人の何倍も頑張らないといけませんから!」
（オ）マイト「その意気だ緑谷少年!!」
　オールマイトと緑谷の話が終わったようだ。俺と会って話をしたいと言っていたらしいがなんだろうな。そんなことを考えているとオールマイトがこちらに
　話しかけてきた。
（オ）マイト「さて待たせたね!機神少年!」
クラフト「そんなに待ってませんよオールマイト」
（オ）マイト「ハッハッハッありがとう機神少年!、さて緑谷少年にお願いしてまで君に来ても
　らったのはちょっと聞きたいことがあってね」
緑谷　（オールマイト…機神くんになにを?）
クラフト「何でしょうオールマイト?（俺に聞きたいこと?なんだ…?）」
（オ）マイト「君に聞きたいことは…君の個性のことだ…」
クラフト「俺の個性についてですか?…（ははぁ～なるほど…）」

クラフトに聞きたいこと…それは個性に関することだった。

緑谷　（機神くんの個性…そういえばどういう個性なのか全然知らないな…）

（オ）マイト「君の個性は一体どういうものなんだい?」

緑谷　「……」ドキドキ

クラフト「これから話すことは秘密にしてもらえるなら話してもいいですよ」

（オ）マイト「!!…それほどかね?」

クラフト「自分で言うのはあれですけど、俺の個性は強力ですからね」

（オ）マイト「なるほど…わかった約束しよう!緑谷少年もそのように!」

緑谷　「はっはい!」

クラフト「わかりました…では俺の個性について話しますね…」

クラフトは自身の個性についてオールマイトと緑谷に話す。2人はクラフトの個性の

事を聞くと驚愕の顔をしていた。ちなみに緑谷に個性を授けたことは秘密にしている。

（オ）マイト「……まさかそれほどの個性とは…君が敵(ヴィラン)じゃなくてよかったよ!ハ―ハッハッ

ハッ!」

緑谷　「すごい個性だ…まさかそんな個性が世の中にあるとは、だけどその分使い分けとかが…

ブツブツブツブツ…」

クラフト「おーい緑谷~?戻ってこーい」

緑谷　「えっ!?あぁごめん機神くん!」

クラフト「分析はいいけど、あんまり他で出さないようにな…それでオールマイト、俺の個性の事

を聞きに来た理由はそのお腹の傷ですか?」

（オ）マイト「!?…あぁその通りだよ、君の個性ならもしかするとって考えてね」

クラフト「なるほど…結論から言うとあなたの傷を治すことはできます。加えてすでに失った臓器

もね」

（オ）マイト「おぉっ!!それはなんと!!ではさっそく「だけど今すぐにはやらない」!!…

それはどう

してだい?」

緑谷　「機神くんどうして!?」

驚く緑谷とオールマイトだが…

クラフト「あぁすいません言葉が足りませんでした。いやオールマイトあなたの負った傷はちゃん
と治します。ですが今この場で治したら色々混乱とかあるでしょう?あなたの秘密を
知っている関係者や主治医とかが…」
(オ)マイト「あっ…」
緑谷「…確かにそうだね(苦笑)」
オールマイトはなんかどこか1つ抜けているのでは?と感じながら傷を治す約束をする
クラフトであった。
(オ)マイト「うっうん!確かに機神少年の言う通りだ!では関係者とかに事情を話して予定とか調
整をして、こちらから連絡してもいいかな?」
クラフト「俺はそれでいいですよ、でも話す人は出来る限り少ないようにお願いしますね」
(オ)マイト「うむ!わかっているさ!君の個性は超強いからね!」
緑谷「よかったですね!オールマイト!!」

（オ）マイト「ハッハッハッ!ありがとう緑谷少年!!でも君はこれから頑張らないといけないぞ!!」

緑谷　「はいっ!!!」

クラフト「オールマイト…傷を治したい気持ちが強すぎて関係者のこと忘れてたでしょう?（笑）」

（オ）マイト「そそそっそんなことないぞ!?ちゃんと考えていたさ!!」

クラフト「緑谷どう思う?めっちゃ動揺してるぞ（笑）」

緑谷　「すいませんオールマイト、これはフォローできません（苦笑）」

（オ）マイト「そんなっ!?」ガーン!!

最後はオールマイトをイジリながら終わりクラフトはオールマイトからの連絡を待っ

った。そしてあれから約1カ月たった5月上旬…オールマイトからの連絡がくる。

～～5月某日～～

クラフト「オールマイトから…えーっと日は△日で場所は…東京?あぁオールマイトの事務所か…

んで当日に送迎の為の車を向かわせるか…」

クラフトは日程を確認する。そしてオールマイトの傷を治療する日を迎える。

～～5月△日～～

クラフト「車の迎えが来るって書いてあったけど…お？」

ブウゥゥゥ…キィィ…

自宅のマンションの前で待っていると1台の黒い乗用車タイプの高級車が止まる。

クラフト「これ…か？」

????「お待たせしたね…あれ君は…」

クラフト「あれ…あなたは確か塚内警部」

塚内警部「まさか聞いた話の少年が君だったとはね！」

クラフト「こっちもまさか迎えに来る人があなたとは思いもしませんでした」

塚内警部「ははっ、とりあえず車に乗ってくれたまえ、簡単な話は移動中にするよ」

クラフト「分かりました今日はお願いします、にしても中々の高級車ですね…」

塚内警部「あぁオールマイトが用意したんだお礼なら彼に言ってくれたまえ」

クラフト「なるほど…流石Ｎｏ1といったところか（笑）」

その後、車に乗ってオールマイトの事務所がある東京に移動する。

あと俺は座席の座り心地が良いため途中から寝てしまう。
塚内警部「機神くん、機神くん、事務所に着いたよ起きて（笑）」ゆさゆさ
クラフト「んぁ…ぉ…ふあぁぁあ!……あっすいません塚内さん、座り心地が良くてつい…」
塚内警部「ははっ（笑）気持ちはわかるよ、さぁ早く降りて案内するよ」
クラフト「はい!」
車から降りてオールマイトの事務所に入る。まず思ったのはデカい…事務所っていうか
ビルじゃん!あっ…ビル全部が事務所じゃなくて一部のオフィスが事務所なのかな…
そんなことを考えていたらオールマイトが待っている部屋に到着する。
塚内警部「着いたよ機神くん」
クラフト「あっこの部屋に…」
塚内警部「オールマイト、彼を連れてきたよ」
（オ）マイト「おぉっ入ってくれたまえ!」
クラフトと塚内警部はオールマイトがいる部屋に入室する。
（オ）マイト「おぉっ機神少年よく来てくれた!塚内くんも迎えありがとう!」

塚内警部「事が事だからね、これくらいどうってことないよ」
クラフト「オールマイト、だいたい1カ月ぶりですね」
(オ)マイト「ありがとう塚内くん、すまない機神少年！日程の調整に手間取ってしまってね」
????「あんたが機神って子かい？」
オールマイトに軽く挨拶していると後ろから声をかけられ、振り返るとそこには注射器
の杖をもった初老の女性がいた。他にも以前お会いした根津校長もいた。
クラフト「あなたは…リカバリーガールですね」
(リ)ガール「おや私を知ってるのかい？」
クラフト「あなたの個性は数少ない治癒系の個性ですからね、それに自分は雄英受けるんで」
(リ)ガール「あぁなるほどそれなら私を知っていてもおかしくないね」
リカバリーガールと話しているとそこに以前お話したことがある人物が来る。
根津校長「やあ少し久しぶりだね機神くん！」
クラフト「あのお話以来ですね校長先生」

（リ）ガール「おや根津、あんた知り合いかい?」
根津校長「あぁ、彼はここ数年いなかった特選に選ばれた子だよ、先月、彼が通っている中学校に
　話をしに行ったのさ」
（リ）ガール「ほぉーこの子があの特選の…それなら納得だね」
クラフト「?…それは一体どういう…」
　リカバリーガールの言葉にクラフトは質問する。
（リ）ガール「ん?あぁ、私は今回の話はあんまり信じていなかったのさ。まぁ今も半信半疑だが
　ね」
クラフト「まぁ普通はそうですよ」
根津校長「君の個性に関しては入試が終わった後にでも聞こうと思っていたが、オールマイトから
　話を聞いたときは驚いたよ」
クラフト「校長先生ご存じかと思いますがこのことは一応秘密の方でお願いします」
根津校長「分かってるのさ!君の個性は強力だからね。だけど雄英に入ったらメディアとかに映る

ことも多々ある。それはどうするんだい?」
クラフト「その時は上手く誤魔化したりしますよ。メディアにあまり出ないヒーローもいますし。
それにオールマイトも出来ているでしょう?」
(オ)マイト「ハ―ハッハッハッ!機神少年も言ってくれるじゃないか!!大丈夫!君なら何とかできるさ!!」
(リ)ガール「さて…そろそろ本題に入ろうかね?」
リカバリーガールがオールマイトの治療の話に切り替える。
クラフト「あぁすいませんリカバリーガール、えーと治療はどこで?」
(リ)ガール「治療はこの部屋と繋がっている別室でやるよ、こっちだよ」
オールマイト「よろしく頼むよ、機神少年!」
クラフト「期待に応えられるよう頑張ります」
治療を行うため別室に移動しオールマイトの傷の治療を始める。
塚内警部「治りますかね?…」
根津校長「今は彼の力を信じるしかないさ」
――別室――

ピッ…ピッ…ピッ…ピッ…（心電音）
（リ）ガール「さて治療を始めようかね…といっても今回私は治療中の体のバイタルを注意したりするだけだがね」
クラフト「よろしくお願いします」
（リ）ガール「はいよろしくさね、じゃああんたのタイミングで始めておくれ」
クラフト「分かりました、オールマイト体はマッスルフォームのままでお願いしますね」
オールマイト「あぁ、了解した」
クラフト「今回の治療ですが、すでに失っている臓器も復活させるので時間をかけてゆっくり治療
します。時間をかけずにやることもできますが体への負担を考慮してゆっくりと治療し
ます」
（リ）ガール「わかった」
（オ）マイト「よろしく頼む、機神少年」
クラフト「スゥ―…ハァア…では始めます!」

クラフトは仰向けに寝転がっているオールマイトの左脇腹に両手を当てる。
そして目を
閉じて集中し治療を開始する。
・
・
・
～～約2時間後～～
塚内警部「もう2時間になるな…」
根津校長「傷を治すだけならそんなに時間は掛からないだろう…しかし既に失っている臓器を新た
に再生させるとなると違ってくるのだろう…私たちがいま出来るのは彼を
信じて待つ
ことさ！」
2人がそう話していると別室のドアが《噂をすればなんとやら》と言うよう
にタイミン
グよく開いた。
ガチャ…

塚内警部「!!」
根津校長「!!」
（オ）マイト「……」
（リ）ガール「……」
塚内警部「オールマイト…治療はどうなったんだい?…あと彼は?」
（リ）ガール「あの子なら今寝てるよ、これだけのことをしたんだ無理はないさね」
根津校長「ということは治療は無事、成功したんだね?」
（オ）マイト「えぇ…機神少年には一生かけても返せないと言ってもいい程の恩が出来ました」
（リ）ガール「あの子の力はすごいもんだね、今まであんな個性は見たことはないよ」
根津校長「僕もそうさ…まぁ今はそれよりもオールマイトの傷が治ったことを喜ぼうじゃないか。
　彼へのお礼は目覚めた後でも遅くないさ!今はゆっくり休ませてあげよう」
（オ）マイト「ええ、彼が起きたら力いっぱい抱きしめてあげます!」
塚内警部「君が力いっぱいやったら彼の骨が折れてしまうよ（笑）」
根津校長「確かにそれはやめた方がいいかもね!」
（オ）マイト「そっそんな!!」

（リ）ガール「バカなこと言ってないで!、ほらオールマイトあの子が寝ている間に体の検査しとく
よ!」バシッ!
（オ）マイト「あいたっ!」
オールマイトの傷の治療が無事終わったあとクラフトは疲れで約3時間ほど寝てしまう。
～～約3時間後～～
クラフト「……《ぱち…》っ…んん…っとここは…あぁそうか確かオールマイトの治療にきて……」
ガチャ…
（リ）ガール「おや起きたかい?」
クラフト「……リカバリーガール、自分どのくらい寝てました?」ゴキキッボキッ（骨を鳴らす音）
（リ）ガール「だいたい3時間ほどだね、よく寝てたよ」
クラフト「けっこう寝てましたね…オールマイトは?」
（リ）ガール「外で待ってるよ、あとあんたが寝ている間に検査をしたが体に異常はなし、

再生した

臓器も正常に機能してる。後遺症のほうもきれいに治っているよ」

クラフト「そうっすか…まぁ上手くいってよかったっす…」ふぅ

（リ）ガール「そうかい…あぁちょっとごめんよ」

リカバリーガールは俺の体を軽く診察する。

（リ）ガール「…うん、なんともないね、若いから回復も早いね」

クラフト「ありがとうございます」

（リ）ガール「立てるかい?外でオールマイト達が待ってるよ」

クラフト「はい、大丈夫です」

クラフトはゆっくりと立ち別室を出る。

（オ）マイト「おおっ!機神少年目覚めたかい!!」

クラフト「オールマイト、調子よさそうですね?」

（オ）マイト「ハ―ハッハッハッ!わかるかい?君のおかげで全盛期までとはいかないが、体に力が

みなぎっているのだよ!!」

クラフト「これでメシが食えますね（笑）」

（オ）マイト「おっそこに気づくかね!そうなんだよ今まで流動食だったからね!それに

！これで時
間を気にせずヒーロー活動が出来る!!」
クラフト「……オールマイト、これは素人の考えなんですが…」
クラフトはこの機会に自身の考えをオールマイトに話してみることにする。
（オ）マイト「ん？なんだい機神少年？」
クラフト「今の社会はあなたにの存在が大きくでている。だがあなたも人だ、いつかは引退がく
る。そうなった時、次のＮｏ１はエンデヴァーになるでしょう。あくまで予想ですが。」
（オ）マイト「……」
クラフト「現在活躍しているヒーローにあまりこういう事は言いたくはないですが、あなたとエン
デヴァーとでは差がありすぎる。実力とかではなくいわゆるカリスマ性。あなたが今ま
で抑えていたものが溢れてしまい世の中に混乱がくるでしょう。ヒーローをするのは
いいですが…その後の事をそろそろ考えておいた方がいいと思います」

（オ）マイト「機神少年…」
（リ）ガール「……」
　オールマイトに自分の考えを話しているとそこに塚内警部と根津校長が部屋に入ってきた。
　ガチャ…
塚内警部「彼が目を覚ましたって?…」
根津校長「?…どうしたんだい?」
クラフト「いえ…まぁオールマイト今話したのは素人の考えですが一応参考程度に（笑）」
（オ）マイト「あぁ…」
クラフト「塚内さん帰りはまたあの車ですか?」
塚内警部「そうだよ、もういいのかい?」
クラフト「ええ、お願いします」
塚内警部「分かったよ、じゃあ彼を送ってくるよオールマイト」
（オ）マイト「あぁよろしく頼むよ!」
　オールマイト達に帰りの挨拶をし塚内警部に送ってもらい帰路についた。

ちなみに帰りの車の中で塚内警部が今回の治療に対する報酬が自分の口座に振り込まれると伝えられた。後日いくらなのか確認したら通帳に8桁の額が振り込まれており驚愕した。一応お金には困ってはいなかったがさらに余裕ができた。やったね!!

～～クラフトが帰ったその後～～

根津校長「なるほど…彼がそんなことを」

(リ)ガール「だけどあの子が言ったことは間違っちゃあないね」

(オ)マイト「まさかあのような事を言われるとは」

根津校長「まぁ彼の言うことは考える価値はある。少しずつ考えていこうではないか」

オールマイト「そうですね…我々は今できることをやりましょう!」

クラフトが言った考えに静かに驚きながら気持ちを新たにするヒーロー達であった。

・　・

・
・
・
オールマイトの傷を治してから約５カ月が経過した。その間も緑谷の入試修業は順調に
進む。入試まであと４か月。
・
・
・
・
それからあっという間に４か月!!（修行シーン?カットします!ごめんなさい）
雄英高校入試試験２日前。
〜〜朝６時〜〜
――多古場海浜公園――
（オ）マイト「ふぅ…」バタン…
オールマイトは乗ってきたトラックから降り緑谷が掃除をしている浜辺に

向かおうと
　すると声が聞こえてくる。ちなみに体はもちろんマッスルフォーム。
緑谷　「うおおおあああぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああっ!!!」
　オールマイトが駆け寄るとそこには綺麗さっぱりになった浜辺があった。
（オ）マイト「おいおいおい…指定した区画以外まで綺麗さっぱりじゃあないか！マジかよ！…しか
も2日も早く予想以上に！仕上げちゃったよ!!…」
　「オーマイ…オーマイ…グッネス!!」
　オールマイトが緑谷が予想以上に仕上げたことに感動する。すると積み上げたごみの山
の上に立っていた緑谷が落下する…がオールマイトは持ち前のスピードで落ち切る前に
受け止める。
（オ）マイト「おつかれ!!」
緑谷　「オールマイト…僕…やれました…できました」
（オ）マイト「ああっ！驚かされた十代って素晴らしい!!素晴らしすぎるよ!!、ほら見なよこれ」

緑谷　「えっこれは?…」
（オ）マイト「掃除を始める前の君さ、この時よりさらに君は成長した!!よく頑張ったよ本っ当
に!!」
緑谷　「なんか…ズルだな僕は…機神くんのおかげで個性を持てて…オールマイトにここまでし
てもらえるなんて恵まれすぎてる…」うるうる…
（オ）マイト（何を今更…君の頑張りだろーに）
　オールマイトがそう思っていると突然声が聞こえる。
????「おーすげぇめっちゃ綺麗になってる!」
（オ）マイト「むっ!この声はもしや…やはり機神少年か!!」
クラフト「おはようございますオールマイト、おはよう緑谷」
緑谷　「機神くん…おはよう…あとなんでここに?」
クラフト「いや入試まであと2日だから一応様子を見に来たんだわ。だけど見た感じ終わったみた
いだね」
緑谷　「ははっ…なんとかね…」

（オ）マイト「さて！授与式だ緑谷出久!!」
緑谷　「はい！」
（オ）マイト「これは受け売りなんだが、最初から授かっているものと、認められ譲渡されたもの
ではその本質は違ってくる！肝に銘じておくんだ！この力は君が勝ち取ったんだ
と!!」プツン
緑谷　「…はい!!」
（オ）マイト「よし…では…」
「食　え」
オールマイトはちぎった自分の髪の毛を差し出す。クラフトは何の説明もなしに言う
オールマイトを見て顔を上に向け天を仰ぐ。
緑谷　「へぁ…」
クラフト「オールマイト…いきなり食えって言われても混乱するだけです…」
（オ）マイト「すっすまない！…ウォッホン！私の個性を受け継ぐにはＤＮＡを取り込む必要があるん

だ!さぁっグイっと!」

緑谷　「思ってたのと違いすぎる!…」

思っていたのと違いすぎたが緑谷は髪の毛を水で流し込み飲んだ。そして

次の日オール

マイトがＯＦＡの扱いを指南するが感覚で説明するためクラフトが代わる。

ちなみにオー

ルマイトは説明が下手なことに落ち込んでいた。そして…

～～入試当日～～

クラフト「…緊張するなぁ～」

耳郎　「そんな風には見えないけどね」

クラフト「えーそうかな?そういう響香は?」

耳郎　「ちょっと…ね」

クラフト「ほんとは?」

耳郎　「めっちゃしてる…」

クラフト「手でもつなぐ?（笑）」

耳郎　「～～／／…こんなところで何言ってんの／／」バシバシッ

耳郎が恥ずかしさのあまりクラフトの背中を叩く。その光景を他の受験生

は嫉妬の混

じった目で見ていた。主に男子が。その時1人の女子が声をかける。

????「あっもしかして機神ー?」タッタッタッ…

クラフト「ん?おー拳藤か?久しぶりだな!」

拳藤「あんたも雄英受けるんだね!」

クラフト「あぁ、今日はお互い頑張ろう」

拳藤「そうだね!!…耳郎も久しぶり…」

耳郎「うん、久しぶりだね拳藤…」ぎゅ…

互いに挨拶をすると耳郎は俺の腕に自信の腕を巻き付ける。その行動に拳藤はあまり顔

に出さないようにしながら驚く。

クラフト「ん?急にどうした響香?」

拳藤「きょっ…機神と耳郎はその…そういう仲…なの?」

クラフト「えっ…あぁ拳藤と知り合ったその後にね」

拳藤「へっへぇ〜…そうなんだ…」チラッ

耳郎「!……」ドヤッ

拳藤「!!…(やられた!)」ギリリ…

耳郎　（ウチが何もやらないと思ったら大間違いだよ!･拳藤!）
　クラフトの知らないところで女同士の見えない戦いが繰り広げられる。その戦いに一時
　的に停戦させるかのようにクラフトが声を出す。
クラフト「まぁ話は試験が終わってからでも出来るし早く行こうぜ」
耳郎　「そうだね!」
拳藤　「うん!」
　バチバチバチ…
　見えない黒い火花を散らしながら試験会場に向かう２人であった。ちなみに緑谷は倒れ
　そうになったところを指に肉球っぽいものがある女子に助けられていた。
　――実技試験説明会場――
（プ）マイク『今日は俺のライヴにようこそー!!エヴィバディセイヘイ!!
　（ＹｏＫｏＳｏ(ヨーコソ)ー!!…）』シーーン…
　ボイスヒーロープレゼントマイクが挨拶をするが誰も返事を返さない。その後自分で自
　分の挨拶を返したあと実技試験の説明が始まる。試験内容は１０分間の《模

擬市街地演習》であり、演習場にはそれぞれポイントが違う3種類の仮想敵（かそうヴィラン）を行動不能にしポイントを稼ぐことが目的と説明される。もちろん他人への攻撃、アンチヒーローな行為は禁止である。そこまで説明されると1人の受験生が挙手をする。

????「質問よろしいでしょうか!?プリントには4種の敵（ヴィラン）が記載されています!この4種目は誤載でありましょうか!?もしそうであるならば最高峰である雄英において恥ずべき痴態!!説明をお願いします。それからそこの縮れ毛の君!」

緑谷「!?」ビクッ

????「先ほどからボソボソと気が散る!物見雄山のつもりなら即刻この場から去りたまえ!」ギロッ

緑谷「すみま「お前にそこまで言う権利はないだろ」!?」

????「なっなに!?」

緑谷（この声…機神くん!?）

爆豪　（あいつは!?）

クラフトの声だと緑谷と爆豪が気づく。

クラフト「そこまで言う権利はないと言ったんだ、確かに気は散るかもしれないが我慢くらいでき

るだろ?その程度で気が散っていたらプロになんかなれないね。それにそんなに強く注

意したら彼が委縮してしまうじゃないか?まぁ彼も少し周りのことを考える必要はあっ

たけどね」

????「確かに…すまない!!試験だったので気がたってしまっていた!!」

緑谷「ぼっ僕の方こそごめんなさい!」

(プ)マイク『オーケーオーケーもう大丈夫かな?あとナイスなお便りサンキューな受験番号７１１１

君!４種目の敵(ヴィラン)は０Ｐそいつはいわゆるお邪魔虫よ!レトロゲームのマリオブラザーズっ

てやったことある?それに出てくるドッスンさ!各試験会場に１体ずつ配置されている

いわばギミックよ！リスナーたちには避けることをおすすめずるぜ！』
他受験生「なりほど避ける障害物みたいなもんか？」「まんまゲームみてぇだな」
????「ありがとうございます！失礼いたしました！」

ひと悶着あったがプレゼントマイクが４種目について説明し終わると最後に受験生に向
けてある言葉を贈る。
（プ）マイク『俺からは以上だ!!最後にリスナーへ我が校の校訓をプレゼントしよう!!かの英雄ナポ
レオン＝ボナパルトは言った!!【真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者】だ
と!!』
『更に向こうへ!! Ｐｌｕｓ（プルス） Ｕｌｔｒａ（ウルトラ）!! 』
（プ）マイク『されでは皆、良い受難を！』
クラフト（やばっ鳥肌たった）ざわわ
耳郎「クラフトあんた会場どこ？」

クラフト「俺はCだな、響香は?」
耳郎　「うちはD、会場違うけど頑張ろうね!」
クラフト「おう!」
その後バスに乗って各々の試験会場に向かう。
――試験会場C――
他受験生「街じゃん…」「さすが雄英だな…」
クラフト「でか…さて（変身しとくか…LBX、ジャンヌD!）」シュインシュイン（変身音）
他受験生「なんだ変身した!?」「ロボットの個性?」「ちょっと女性っぽいね」
他の受験生がクラフトの個性を見て驚いていると…
（プ）マイク『はいスタートォ!!』
唐突に試験開始の合図がされるが、ほとんどの受験生たちはいきなりの開始に動けない
でいた。
ガシャシャシャシャシャシャシャシャシャ!!…（走行音）
クラフト（わかってても動くっていうのは遅れるもんだな…さてロボットは…）
（プ）マイク『どうしたぁー!?実戦にカウントなんてないんだよ!!賽は投

げられてんぞ!!すでに何人かは走ってるぞぉ!!』

プレゼントマイクに言われて他の受験生たちもようやく走り出す。

ダダダダダダダダダッ!!…

他受験生「くそまじかよ!」「あいつもうあんなところに!」「出遅れたぁ!!」

クラフト「さてロボットはどこに…《ドゴォンッ!》うおっ!!」

仮想敵(かそうヴィラン)☒ターゲット補足!・☒☒ブッ殺ス!・☒☒ヤッチマエ!!☒

ロボットを探そうとした矢先向こうから登場してきた。物騒な言葉を言いながらこちらに突撃してくる。しかも１０体まとめて…

クラフト「全部１Ｐか…まぁいい…いくぜ必殺ファンクション!!」

!!アタックファンクション!!

【 サイドワインダー８(エイト) 】

クラフトは腕を胸の前で交差させたあと、回転しながら上に跳び上がり上空で体の回転を止め、両腕に装備してある合計８本のミサイルを仮想敵(かそうヴィラン)に向け一気に発射する。

８本のミサイルは勢いよく１０体の仮想敵（かそうヴィラン）に向かっていきバラバラに破壊する。

ドシュドシュドシュドシュッ!!…シュワアアアア……ドオオオオン!!

他受験生「なっ一気にあんなに!!」「なんだあいつ!!」「強すぎだろ!!」

クラフト「ふぅ…さてこの調子でどんどん狩りましょうかね!!」ガシャシャシャ…

その後も順調にポイントを稼ぎつつ乱戦になってきたので機体を変えて仮想敵（かそうヴィラン）を探しては倒した。ちなみに機体はジャッジである。

バゴンッ!!

クラフト「ふぅ…これで何体目かな?結構倒したけど途中から数えてないせいで分からん…」

（プ）マイク『あと5分だぜぇー!!』

残り時間があと５分となったところで試験をカメラ越しに見ている雄英教師陣がいる

モニター室では…

――試験モニター室――

雄英教師「この入試は仮想敵（かそうヴィラン）の配置も数も伝えられていない」
雄英教師「限られた時間と広大な敷地、そこからあぶりだされるのさ」
雄英教師「情報力・機動力・判断力・そして戦闘力…市井の平和を守る為の基礎能力がP数という
形でね」
雄英教師「あの特選の子すごいな、圧倒的じゃないか?」
雄英教師「ロボットの個性かと思ったが明らかに別の個性と思われる場面もあったぞ?」
（オ）マイト（機神少年…きみ凄すぎ（汗）…緑谷少年は…なかなか頑張ってるね2つの個性を上手く
使っている!それも機神少年のおかげだな）
雄英教師「今年はなかなか豊作じゃないか?」
雄英教師「いやーまだわからん、真価が問われるのはこれからさ」ポチッ
教師の1人が【ＹＡＲＵＫＩ　ＳＷＩＴＣＨ】と書かれたボタンを押す。すると各試験会場に爆
発が起きると同時にギミックが現れる。
!!ボオオオオオオオオオオン!!

ゴゴゴゴゴゴゴ……

他受験生「もしかしてあれギミック!!?」「はあっ嘘だろ!?」「あんなん逃げるしかねぇじゃん!!」

クラフト「うはーでっけぇー（笑）…よ～しあのデカ物にどこまで通じるか試してみるか!!」

他の受験生が逃げ出している中１人巨大仮想敵（かそうヴィラン）に挑むクラフト。巨大仮想敵（かそうヴィラン）に攻撃を

与えるため近くまでくると、１人の女子が足を引きずりながら逃げていた。

クラフト「あら?おいあんた大丈夫か（ん?ピンク色の肌に髪?）」ガシャッガシャッガシャッ…

????「えっ?なにロボット!?」

クラフト「ノンノン!ちゃんと人間だし!同じ受験生だよ!それより足引きずってるけど?もしかして

怪我してる?」

????「そうなの、さっきの爆発で落ちてきた瓦礫に当たっちゃって…たはは…」

クラフト「自力で逃げるのは無理そうだな（治してる暇もないな…仕方ない、変身ア

キレスディー
ド！）」シュインシュイン（変身音）
????「えっなになに!?」
クラフト「よしじゃあ「うはーなになに!?別のに変身したぁ!!」うん驚くのは後でね…では恥ずか
しいと思うけど失礼」ひょい
????「えっ?…うわっ!ちょっ／／／」
クラフトは足を怪我している女子をお姫様抱っこし安全な場所まで空を飛んで運ぶ。
????「えーすごい!?空飛んでる!」
クラフト「降りるぞ」
足を怪我している女子を降ろし俺は再び巨大仮想敵（かそうヴィラン）の元へ向かおうとする。
クラフト「ここなら安全だ、じゃ俺は戻るからな」
????「えっまさかあれ倒すつもり!?無理だよ!?下手したら大怪我しちゃうよ!」
クラフト「無理かどうかはやってみないとわからんこともある…それにあんなデカいのは倒しがい

がある!」ニヤ…
????
「!?……／／」ゾワッ!
興奮せいかクラフトの口がまるで三日月のように笑う。それを見た女子は鳥肌が立つと
同時に興奮をすこし覚える。そしてクラフトは空を飛んで巨大仮想敵(かそうヴィラン)の所へ向かい目
の前に立つ。
クラフト「さ～てブッ倒してやる!いくぞ必殺ファンクション!!」
クラフトはジャッジのクレイモアを取り出しかまえる。
!!アタックファンクション!!
【　パワースラッシュ　】
クラフトはクレイモアを居合切りの様に構え、刀身にエネルギーを溜める。
そしてその
エネルギーを切り裂くように下から上へ振り上げ解き放つ。
ギュウゥゥゥン……ズバアアアアアアッ!!
エネルギーの刃は近づくごとに大きくなり、巨大仮想敵(かそうヴィラン)に一直線に向かう。

そして…

!!!ズッッガアァァン!!!

凄まじい轟音とともに巨大仮想敵（かそうヴィラン）が縦に真っ二つに切れる。

他受験生「「「「えええええええええええええええええ!!!」」」」

（プ）マイク『終っ～～了～～!!』

巨大仮想敵（かそうヴィラン）を真っ二つに切ったあと試験終了の合図が響き渡る。

クラフト「終わったー!…あ～疲れた」

他受験生「あいつ規格外すぎるだろ…」「ちっ運よく強個性なだけだろ……」「あれを切るってすげぇな」

巨大仮想敵（かそうヴィラン）を切ったクラフトに驚愕する受験生もいれば嫉妬の声を出す受験生もい

た。そんな声を気にせずクラフトは先ほど助けた女子の元へ向かった。

クラフト「へい先ほどぶり」

????「……」

クラフト「?…おーい」

????「えっ!?あぁごめん!さっきのすごいね!私びっくりしちゃったよ!!」

クラフト「あーまぁ俺もあそこまで出来るとは思わなかったわ」

「えーそれ嫌味にしか聞こえないよ（笑）」
クラフト「んーホントの事なんだけどな…まぁいいやそれより足大丈夫?」
????「あぁ足ならもう…っ!…あははやっぱだめみたい」
クラフト「あーじゃあ足だして、治すから」
????「えっ?治すって君の個性ってロボットの個性じゃないの?」
クラフト「あーなんて言ったらいいのかな、まぁいいや裾めくるぞ」
????「あっちょ／／……」
　負傷している足のズボンの裾をめくると足首の辺りが腫れておりクラフトは個性を使って腫れを治す。
クラフト「これでよし…どうだ痛みとかまだあるか?」
????「うっうんもう大丈夫／／ありがと…／／／」
クラフト「ならよかったんじゃ俺はこれで」
????「あっねぇねぇ!」
クラフト「なに?」
芦戸　「名前聞いていい?わたし芦戸三奈!よろしく!」
クラフト「俺は機神クラフトよろしく」

芦戸　「ねぇねぇよかったら連絡先交換しない？」
クラフト「まぁいいけどとりあえず戻ろうぜ」
芦戸　「あっそれもそうだねー（笑）」
　試験が終わったためあとは帰るだけなので2人は更衣室に戻る。
　・
　・
　・
クラフト「ふー…さて響香はどこかな？」
芦戸　「あっ機神ー！」タッタッタッ…
クラフト「おー芦戸」
芦戸　「もー連絡先交換しようって言ったじゃん！」
クラフト「ははは～すまんすまん、試験終わったからボーっとしてしまって（笑）」
芦戸　「もーほら携帯出せー（笑）」
　芦戸と楽しく話しているとそこに耳郎がやってくる。
耳郎　「あっいた…おーいクラフ…ト…」
クラフト「ん？…おー響香！試験お疲れさま、どうだった？……響香？」
耳郎　「クラフト…その子はだれ？」

クラフト「えっ?あーすまん紹介するよ、試験会場が一緒でまぁ色々あって知り合ったんだ」
芦戸　「初めまして、わたし芦戸三奈!よろしくね!」
クラフト「芦戸紹介するよ、彼女は俺の恋人の耳郎響香だ」
耳郎　「初めましてウチは耳郎響香よろしく…（こここっ恋人って言った／／／）」
芦戸　「!…へぇー機神って彼女いたんだ」
クラフト「まぁな、てか芦戸は彼氏とかいないのか?可愛いんだし普通にいそうなんだけど?」
芦戸　「かっかわっ／／…へへっありがと!でもまだいないんだよね!」
　3人で話をしているとそこに拳藤がこちらを見つけやってくる。
拳藤　「おっ機神ー!」
クラフト「おー拳藤、試験おつかれ~」
拳藤　「機神も試験お疲れ!…えっとそっちの人はどちら様?」
クラフト「あぁ彼女は「わたしは芦戸三奈!よろしくね!機神とは同じ会場だったんだ!（また別の女
　子が!機神ってモテるのかな?）というわけだ」
拳藤　「へー…私拳藤一佳よろしく!（まさかこの子、機神に気があるんじゃ…）」

耳郎　（やばい…なんか増えてる気が…クラフトの我儘は受け入れるけど今は独り占め
したいな…）
耳郎は恋敵が増えるのではないかと不安になる。その後、駅まで4人で一緒に行き芦戸
と拳藤を見送る。
芦戸　「じゃあ次会うときは合格してたら雄英だね！」
クラフト「おう、全員合格してるといいな！」
拳藤　「……またね機神、それに耳郎…」コッコッコッ…
耳郎　「またね芦戸に拳藤…」
芦戸　「うんまたねー機神に耳郎！じゃあね！」タッタッタッ…
クラフト「んじゃ俺らも帰るか…響香？」
響香　「……」ぎゅっ…
帰ろうとすると耳郎が腕の裾を掴む。
クラフト「……何か食べていく？」
耳郎　「○×カフェの限定パフェで許す……」
クラフト「近くにある美味しいって評判のカフェだね、いいよ行こっか」スッ…

耳郎　「うん／／…」
猫が拗ねたような耳郎の手を握りカフェに向かう。
――○×カフェ――
店員　「お待たせしました季節限定パフェとメロンソーダでございます!」カチャ、カタ…
クラフト「ありがとうございます」
耳郎　「どうも…」
店員　「それではごゆっくりどうぞ、失礼します!」コッコッコッ…
クラフト「さっ響香、食べなよ」
耳郎　「うん…いただきます…」カチャ…ぱく…モグモグ…
クラフト「おいしい?」
耳郎　「うん…」
クラフト「おーそれはよかった♪」
そうしていると耳郎があることを聞いてくる。
耳郎　「……ねぇウチってさ…」
クラフト「ん?」
耳郎　「その…面倒くさい女…かな?」

クラフト「……なんで？」
耳郎　「いやクラフトがさ…他の女子と一緒にいるのを見てさこんな…」
クラフト「ん～…別に普通なんじゃない？」
耳郎　「えっ？…」
クラフト「要するにさ…俺が他の女子といたことに響香がヤキモチとかを抱いたってことで
しょ？」
耳郎　「うっ…うん／／」カァァ
クラフト「それって裏を返せば俺の事をすごく想ってくれているってことになるよね（笑）まぁ流石
に他の女性とまったく関わるなって言われたら俺も困るけど（笑）」
耳郎　「想って!?…～～～／／／／」カァァァァァ
クラフト「それに俺も我儘言ってるし響香のヤキモチは可愛いもんだと思うよ」
耳郎　「かっ可愛い…～～／／／」
クラフト「それにさ…」
耳郎　「それに？／／」
クラフト「今は2人だけじゃん、いろんな意味で（笑）」

耳郎　「!?!!～～～／／／／／…それはズルい／／／」ゴニョゴニョ
クラフト「まぁヤキモチをやいていた響香も猫みたいで可愛かったけど（笑）」
耳郎　「んなっ!猫みたいって／／／クラフトのバカー!／／」ヒュンヒュンッ!
クラフト「わっごめんて!（笑）」
　ヤキモチをやいた耳郎であったがクラフトと一緒にいる時間を楽しみ心を満たすので
　あった。
　・
　・　・
　・　・　・
　・
　――拳藤宅――
拳藤　「やられた…耳郎を甘くみていた……」ボフン…
　ベッドに倒れこみながら己の甘さを呪う拳藤。
拳藤　「いやまだだ…別に彼女が２人いちゃいけないなんて決まりはない!まずは機神に私の想い

を伝えなきゃ…伝えてＯＫだったら私は機神の…／／／うおあぁぁ～想像したら恥ずかし

さが！／／／」ジタバタッ！

・

・

・

――芦戸宅――

芦戸　「ふへぇ～疲れたぁ……」すりすり…

試験で怪我を負ってクラフトが治したくれたところをなんとなく撫でる芦戸。

芦戸　「助けてくれる優しい男子かと思ったら戦闘狂っぽい一面もあって…容赦なく裾まくって…／／ぬあぁぁ～！なんか扉が！開いちゃう！ってかよくよく思い出したら私お姫様抱っこ

されてんじゃん／／／!!…《カアァァア》しかも可愛いって言われたし／／／……ふお

あぁぁぁぁ～／／／／!!」ジタバタッ！

１人の女子は自分の想いを伝えようと決心するが勝手に自爆もし、もう１人はまだ好意かどうか微妙だがモヤモヤし、なにかの扉が開きかけるのであった。

第9話　体力テストだ！…ついに拳藤が!?

――雄英高校　会議室――

雄英教師「入試実技総合成績でました」

雄英教師「救助（レスキュー）ポイント0で3位とはなぁ…」

雄英教師「後半になるとほとんどの受験生が鈍っていく中で派手な個性で引き寄せ迎撃し続けた、

タフネスの賜物だ」

雄英教師「逆に敵（ヴィラン）ポイントは25ポイントとこの中では一番低いが、救助（レスキュー）ポイントのおかげでで2

位…火の個性かと思ったがあの巨大ロボットを一撃でぶっ飛すパワーも持っている…複

合型か?」

雄英教師「だけどその衝撃で腕がボロボロになっていたわ…まだ力に体が追いついてないのかしら?」

雄英教師「まぁだけどやっぱりすごいのは彼だね」
雄英教師「過去にアレに立ち向かったのは何人かはいたけど、真っ二つに切ったのはいなかった
な!」
雄英教師「思わずＹＥＡＨって言っちゃったぜ!」
雄英教師「敵（ヴィラン）ポイント８５ポイント、救助（レスキュー）４０ポイントで合計１２５ポイント。過去の成績と比べても
トップクラスだね」
雄英教師「彼は特選だけど実技の試験を一般で受けたいと申し出たらしいね、最初はどんな自信家
かと思ったが文句なしだね。いくら特選といっても実技がダメだったら不合格だし…」
雄英教師「しかし一体どういう個性だ?ロボットの個性かと思ったがビームみたいなものを出した
り、煙のようにもなってたぞ?」
雄英教師「細けぇことはいいんだよ!俺はあいつ気に入ったぜ!!」
雄英教師「ＹＥＡＨっていっちゃたしなー」

雄英教師（ったくわいわいと…しかし映像見ただけでもアイツの個性はすごいな…本人に話す気が
あるなら聞いてみないとな…）
雄英教師「さぁ話もいいけどこれから成績や各々の性格等を考慮して色々決めないと！」
合格者に通知を送るため奔走する雄英教師達であった。
・
・
・
・
・
・
～～入試試験終わりから約一週間後～～
――クラフト宅――
クラフト「そろそろ合否の通知がくるかな～」
クラフトはポストに通知が来ているか確認しに行くと…

パカッ…

クラフト「おっ?これは…雄英からの通知じゃん」

通知が来ているのを確認しさっそく自室で封筒の中に入っていた丸い装置の付け方をい

じっていると…

クラフト「さて中身は原作だと機械だったけど…《ビリリ…》えーとどうやってつけるんだ?」カチャカチャ

ポチッ…ブゥン!

クラフト「うおっまぶしっ!目がっ目がぁ!」ガタタッ!

装置のスイッチを押したことにより映像が投影されるが投影されるレンズの部分を

ちょうど目で見ていたため眩しさでやられてしまう。

(オ)マイト『私が投影された!』

クラフト「今それ所じゃないよオールマイト…」

机に伏せながら目を回復させるクラフト。

(オ)マイト『なぜ私が映し出されたかというとこの度雄英に教師として勤めることになってね!』

クラフト「知ってる…やっと目が回復してきた…」
（オ）マイト『さて機神少年！まずは合否だが…文句なしの合格だ!!敵（ヴィラン）ポイント８５ポイント、
さらに我々が見ていたもう１つの審査項目救助（レスキュー）ポイント！しかも審査制!!
機神クラフト救助（レスキュー）ポイント４０ポイントで合計１２５ポイント。あと君は特選だが試
験は一般で受けたため成績トップとして扱うよ！』
クラフト「なるほど…」
（オ）マイト『来いよ機神少年！ここが君のヒーローアカデミアだ!!』
クラフト「いよいよか…」ドッ…ドッ…ドッ…
いよいよ雄英でヒーローを目指すことに気分が高揚し心臓の鼓動が大きくなる。その
後、耳郎や緑谷達から合格したと聞き互いに喜んだ。
・
・
・

雄英に合格したその数日後、耳郎が俺の家に遊びに来た。
――クラフト宅――
ピンポーン…
クラフト「はいはーい…」ガチャ…
耳郎「きたよ」
クラフト「おーいらっしゃい!さぁ入って入って」
耳郎「おっお邪魔します…／／（きっ緊張してきた）」
クラフト「それにしても急に俺ん家行っていい?なんてどしたの?」
耳郎「えっ!?／／あっいやそのクラフトの部屋どんな感じかな～って気になってね!」
クラフト「あ～なるほど…つっても特にそこまでこだわりはないから普通だと思うぞ?あぁ適当に
座っててくれ飲み物出してくるから」
耳郎「うん分かった…ん?ねぇクラフトあの部屋もしかしてあんたの自室?」
クラフト「うん?ああそうだけど?」
耳郎「見ていい?」ワクワク
クラフト「ああ別にいいぞ、棚とかの物にはあんまり触れないでほしい」

耳郎　「わかったよ…（では）」ガチャ…
　クラフトの自室に少しワクワクしながら入る耳郎。
耳郎　（…漫画やフィギュア?…あとゲームもある…いわゆるオタク趣味っていうやつかな?
　あーでも漫画以外の本も結構あるなぁ、個性関連にここら辺はミリタリー関連かな?いろいろあるな…あと意外と部屋きれい…）
　クラフトの部屋に感心しているとその部屋の持ち主から声がかけられる。
クラフト「おーい響香、飲み物用意したよ」
耳郎　「あっうんありがと!」
クラフト「俺の部屋どうだった?そんなに面白くなかったろ?」
耳郎　「えーそうでもないよクラフトの趣味とか分かったし割と面白かったよ!」
クラフト「でも俺の趣味とかって女性からするとあんまり受けはよくないでしょ?」
耳郎　「んーウチの部屋も趣味の塊だからどうなのかな（笑）」
クラフト「ははっ（笑）まぁ座りなよ」
　2人はリビングのソファに座りくつろぐ。
クラフト「で…響香は今日はなにをしにきたの?2人きりでこうするのも俺は嬉しい

からいいけ
ど…何か目的があって来たんじゃないのかな～って俺は思ったんだけど?
…」
耳郎「!?《ギクッ!》…いっいや2人でこうしたいな～って…／／（なんか今日のクラフト鋭い…）」
クラフト「ふ～ん…まぁいいけど（笑）」
そのまま2人はテレビを見ながらくつろぎ続ける。
耳郎（あっっぶなー!…ウチが今日クラフトに会いに来た目的がファーストキスすることって
バレるところだった…）
耳郎はクラフトに2人目や3人目の彼女が出来ることは受け入れるがやはりなにかと
リードしておきたいという気持ちからこのような行動に出たのであった。
耳郎「（とは言ってもいきなりキスっていうのもあれだし…何かきっかけがとりあえず…）あっ
ねぇクラフトうちコスチュームのやつまだ考えてるんだけど一緒に考えてくんない?」

クラフト「おっいいよ俺でよければ！」
耳郎　「ありがと！（よし…ここからなんとかそういう雰囲気に…）」
・
・
・
クラフト「ブーツに指向性スピーカーを付けるのはいいね、あとブーツの先端を安全靴みたいに金
　　属いれて丈夫にしておいたほうがいい。防護性能は高い方がいい」
耳郎　「そっかそれもそうだね！ありがと！（やっぱそう簡単にはいかないか…）…ふぅ…」
クラフト「疲れた？」
耳郎　「ちょっとね…」
クラフト「……（あっそうだ）…響香、響香」ぽんぽん
　　あぐらをしている自分の足を軽く叩きながら耳郎を呼ぶ。
耳郎　「んっなに？」
クラフト「ここ座って（ ω、）」
耳郎　「えっそこって…（ククックラフトの足のなか／／／！）」

クラフト「1回やってみたかったんだ!」キラッキラッ
耳郎　「うっうん／／／（なんか目キラキラしてる）」トッ…トッ…
　ゆっくりとクラフトの足の中に座る耳郎
　ぽすん…
クラフト「おー／／…誘っておいてなんだけどちょっと照れるな／／」
耳郎　「～～／／／／（うぅ～～ウチはもっと恥ずいわ／／／／）」カアァァ
クラフト「…よっと」のし…ぎゅ
耳郎　「ちょっクラフト／／／／」ドキッ!
　クラフトは耳郎に軽くのしかかる様に抱きつく。
クラフト「なに?」
耳郎　「いや／／／いきなり…／／（あれ…これはある意味チャンスなんじゃ…よーし…）」
クラフト「響香?」
耳郎　「…うりゃっ!」グイッ
クラフト「おっ?」ぐらっ…
　耳郎は体をクラフトの方へ向け、両手で肩を押し床へ押し倒す。わかりやすく言えば床

ドンに近い体制である。

ばたんっ…

クラフト「えーと響香?」

耳郎「いつもウチがやられてばっかだからね…／／」

クラフト「俺何かしたっけ?」

耳郎「いつも可愛いとかを言いすぎなの!」

クラフト「えー事実じゃん（笑）」

耳郎「!?〜〜／／／そういうとこ!!」バシバシッ!

クラフトの胸を叩く耳郎。そして真剣な顔つきになる。

クラフト「いたいいたい（笑）」

耳郎「……ねぇクラフト…あんたの我儘を受け入れるって言ったけど…あんたを独り占めって

いうのかな?まぁそういう気持ちはウチにも全然あるんだよ…」

クラフト「……」

耳郎「なんかあんた少し鈍そうだから教えてあげる…あんたに好意を持ってる女子って意外に

いるんだよ」

クラフト「!!……」
耳郎　「その顔はマジでって顔だね?」
クラフト「よくお分かりで（笑）」
耳郎　「…やっぱさ…初めてって大事だと思うんだよね……／／」
クラフト「?……響香?」
　耳郎はそういうとクラフトの頬に両手を添え顔を近づける。そして顔が鼻先が触れる距
　離まで近づくと2人の唇がついに重なる。上手いも下手もない唇をつけただけのキスだ
　がこれが2人のファーストキスになった。
クラフト「……（えっいま…キスした?）……～／／／／／」カアァァァ…
耳郎　「～～～～／／／／／（キキッキスッししっしちゃった!!／／／／）」カアァァァ…ちらっ…
クラフト「……これは…耐えられねぇよ…～～／／／／」
耳郎　「（あれ?クラフトがここまで照れるの初めてかも／／／）…クラフト～?」
クラフト「……なに／／?」
　クラフトは自分の顔を両手で覆っていた。耳郎はそれを上から覗き込む。

耳郎　「…しちゃったね…キス／／」
クラフト「これは予想外だよ／／／…まさか響香からくるとは思ってもいなかった…／／」
耳郎　「いつも恥ずかしいのに可愛いって言ってくるお返しだよ／／」
クラフト「…ふぅー……なぁ響香…」
耳郎　「ん？なにクラフト？」
クラフト「お互い初めてキスしたわけじゃん？でもまだ初めてだから練習って必要しゃない？」
耳郎　「えっそれってどういう……」
クラフト「よっ…と」グイッ…
　クラフトは起き上がり耳郎の腰に左腕を回し体を引き寄せ密着させる。
　耳郎は今クラフトの腰の後ろに足が回っている。いわゆる抱っこに近い体制である。
耳郎　「ちょっ！クラフト／／／」
クラフト「なに？」ススッ…クィ
耳郎　「（あっヤバいかも…／／／）その…恥ずかしいというか…／／」
　空いている右手で耳郎のあご下をワイングラスを持つように添え、首にして

いるチョー
　カーに指を1本掛けて簡単に逃げられないようにする。
クラフト「じゃあ慣れておかないと」
耳郎　「～～／／／その…お手柔らかにしｔ…ん…／／／」クイ…
　その後、約5分もの間キスの練習という名目で仕返しをする。
・
・
・
耳郎　「……んっ…はぁ…やっと終わり?／／（ヤバい…頭クラクラする／／）」
クラフト「……自分で言うのもなんだけど俺って舌めっちゃ長いんだよね…爬虫類みたいに…」
耳郎　「へっ?……まってまってまさか…／／／」
クラフト「そのまさかです」
耳郎　「ちょまっｔ…んん!!…／／／／／／」
　その後また約5分間、別のキスを蹂躙するかのように練習（仕返し）をした。
・
・
・
クラフト「（やっべぇやりすぎたかも…）響香…大丈…夫?」

耳郎　「だっ…だいじょ…う…ぶに…見える?」（プルプル）
クラフト「あー……そのゴメン」
耳郎　「まさかキスしてる時に耳もいじってくるなんて……変態」
クラフト「ゴメンて、それより立てる?」
耳郎　「無理…足に力はいらない…体もあんまり…」
クラフト「そっか、んじゃ…よっと!」ヒョイ…ボフン!
耳郎　「ひゃっ／／」
　クラフトはキスをした時の体制のまま耳郎を抱えてソファに座りなおす。
クラフト「…ひゃっ?」
耳郎　「〜〜〜／／／…忘れろ今のは!!／／てか急に持ち上げるな!!」
クラフト「ほいほい、まぁ体が楽になるまでしばらくこのままでいようや」
耳郎　「このままって!／／うぅ…今度またなにか奢ってよね…」
クラフト「お安いごようで…くあぁああ〜……なんか眠くなってきたな…響香ごめんけどこのまま
　転がって少し寝るね」
耳郎　「えっまってそれじゃウチも…わっ!／／」ゴロン
　クラフトはそのまま寝転がり、耳郎もその横に一緒に寝転んでしまう。

クラフト「えーと毛布は…あった…」ばさっ
耳郎　「ちょクラフト!／／（これって…添い寝じゃん!／／）」
クラフト「ごめん響香…眠気には……ｚｚｚ…ｚｚｚ…（☒ω☒）スヤァ」
耳郎　「はやっ!…～～／／／（…勝手なんだから／／……）…ｚｚｚ…ｚｚｚ…」
文句を言いつつ思わぬ形で添い寝が出来たことに若干嬉しくも思いつつ、そのまま一緒に昼寝をする2人であった。そんなこんながありつつ、日は過ぎていきついに雄英に入学する日がやってきた。

・
・
・
・
・

――雄英高等学校・通称【雄英高校】――
～～入学初日～～

クラフト「改めてみると校舎デカいよなー、そういえばクラスどうなるんだろ?」

耳郎　「クラスか…一緒だといいね」

耳郎と一緒に登校し雄英に着くと玄関近くの掲示板に貼ってあるクラス表を確認する。

クラフト「え～と…あった俺はA組だ！」

耳郎　「ウチは…ウチもA組！やった一緒だねクラフト！」ニコッ！

クラフト「おっおう！（笑顔ヤベぇ…）

互いのクラスが一緒のことを喜んだあとA組の教室に移動する。

クラフト「マジでデケぇ…」

耳郎　「体が大きい人とかの為かな？」

クラフト「あーバリアフリーってやつか？まぁ入るか」

耳郎　「うん、どんな人がいるんだろーね（笑）」

ドアが大きいことに驚きながら教室に入る。

ガララ…

ドアを開けると視線がこちらに向けられる。そこにメガネをかけた男子が来る。

クラフト（まだそこまで来てないな）

????「おはよう！」カッカッカッ

クラフト「ん?」
????「俺は市立聡明中学出身の…おや君はもしや試験の時の!」
クラフト「おはよう…とりあえず自己紹介するよ俺は機神クラフトよろしく」
耳郎　「ウチは耳郎響香、よろしく」
飯田　「俺は飯田天哉だよろしく!席は教卓の上にあるプリントに書いてあるぞ!」
クラフト「おっサンキュー飯田」
　席を確認すると俺の席は廊下側とは逆の一番左側の前から3番目だった。
　教卓
葉隠　障子　尾白　青山
爆豪　耳郎　上鳴　芦戸
機神　瀬呂　切島　蛙吹
緑谷　常闇　口田　飯田
峰田　轟　砂藤　麗日
八百万
クラフト「この席か…」ガタッ
耳郎　「席近くていいね♪」

クラフト「おうそうだな（笑）」
　席が近いことに喜ぶ耳郎。すると前の席の透明な女子とガタイが良い男子が話しかけてくる。
障子　「俺は障子目蔵だ、よろしく」
葉隠　「私は葉隠透、よろしくね！」
クラフト「俺は機神クラフト、よろしく」
耳郎　「ウチは耳郎響香、よろしくね」
葉隠　「ねーねー機神くんって試験に出てきたあのデカいロボット真っ二つに切った人だよね!?」
クラフト「えっ？あぁそうだよ、もしかして葉隠って一緒の会場だった？」
葉隠　「そうだよー！あれビックリしちゃったよ!!」
耳郎　「えっクラフトあれ倒したの!?」
障子　「なに!?アレをか!?」
　クラフトが巨大ロボットを倒したことに驚く耳郎と障子。そこにこの話が聞こえたのか

何人かがこちらによって来た。
飯田　「機神くん!君もあれを倒したのか!?」
切島　「おめーあれ倒したのか!?あっ俺は切島鋭児郎よろしくだぜ!!」
尾白　「アレを倒すってすごいな!あっ俺は尾白猿夫!よろしくな!!」
クラフト「俺は機神クラフトよろしくな。ところで飯田、君もってことは誰か俺以外に倒したのか?（おそらく緑谷だろうな…）」
飯田　「あぁ俺が試験が説明されているとき注意した彼がロボットを吹っ飛ばしたんだ!だがその反動なのか腕がボロボロになっていたが…」
クラフト「あーなるほど（１００%出しちゃったのか（汗））
みんなと楽しく話していると爆豪が教室にやってくる。
ガララ…
クラフト（おっ爆豪だ）
爆豪　「……!…てめぇは!!なんでここにいやがる!?」
クラフト「いや～お久しぶり（笑）なんでいるて合格したからだよ～」
爆豪　「あぁ!?なんだと!!」

飯田　「機神くん知り合いかね？」
クラフト「だいぶ前にちょっとね、あー爆豪お前の席俺の前だぞ」
爆豪　「あ☒ぁ!!なんでてめぇが後ろなんだよ!!」
クラフト「俺に言われてもそう決まっているんだし」
爆豪　「ディッ!!」コッコッコッ…ガタッドガッ!!
　爆豪は不満たらたらに席に着き足を机に乗せる。
飯田　「君!!机に足をかけるな!雄英の諸先輩方や机の製作者方に失礼とは思わないのか!?」
爆豪　「あ☒ぁなんだてめぇはいきなり!!思わねぇよ!!どこ中だよ端役が!!」
飯田　「ぼっ…俺は市立聡明中学出身、飯田天哉だ!」
爆豪　「聡明～～!?クソエリートじゃねぇか!ぶっ殺し甲斐があるな!!」
飯田　「ぶっ殺!?君酷いな本当にヒーロー志望なのか!?」
クラフト「顔はもろ敵（ヴィラン）だけどな～（笑）」
爆豪　「あ☒ぁあ☒!?なんだとテメェもういっぺん言ってみろ!!」ボボッボンッ!!
飯田　「機神くん人をあまりおちょっくてはいけない!それから爆豪くん校内での個性使用は原
　則禁止である!」

このように騒いでいると緑谷が教室の入口に来ていた。
飯田　「おや彼は…」コッコッコッ…
クラフト（あっ緑谷だ）
爆豪　（デク…）
飯田　「おはよう!俺は市立聡明中学の…」
緑谷　「聞いてたよ!僕は緑谷出久…よろしくね飯田くん」あたふた
飯田　「緑谷くん…君はあの試験の構造に気づいていたのか?…俺は気づけなかった!君を見誤っていたよ悔しいが君の方が一枚上手だったようだ…」ギリッ
緑谷　（いや気づいていなかったよ…）
緑谷と飯田が入口で話していると…
????「あーそのもさもさ頭は!!地味目の!」
緑谷　（いい人だ!!制服姿やっべぇぇーー!!）
????「プレゼントマイクの言ってた通り受かっていたんだね!そりゃそうだパンチ凄かったもん!!」粉砕!粉砕!
緑谷　「いやっあの…あなたの直談判のおかげで…／／／」

????「えっなんで知ってるん?」
緑谷「いやその…」
爆豪は緑谷を見て合格した後のことを思い出す。
《うちの学校から2人も雄英進学者がでるとはねぇ!》
《無個性のテメェがどんな手ぇ使いやがった!!》
《おかげで俺の将来設計がズタボロだよ…他行けっていったろーが!》
《言ってもらえたんだ君はヒーローになれるって!君は勝ち取ったんだって!》
《だから僕は行くんだ!!》
爆豪「……(デクのくせに反抗なんかしやがって…ぜってー何か裏があるはずだ…)」
????「今日って入学式とかガイダンスだけかな?先生ってどんな人だろうね?」
????「お友達ごっこがしたいなら他へ行け…ここはヒーロー科だぞ」ぢゅっ!
寝袋に入った男が急に現れ栄養補給のゼリーを一気に吸い上げる。
クラス「「「「(なんかいる!!)」」」」
相澤「はいみんなが静かになるまで7秒掛かりました、時間は有限…君たちは合理性に欠く

ね…担任の相澤消太だよろしくね」

クラス　「「「「(先生で担任だった!!?)」」」」

緑谷　「てことはこの人もヒーロー…（でも見たことないぞこんなにくたびれている人）」

相澤　「さっそくだけど体操服着てグラウンドに出ろ」

相澤が体操風を寝袋から取り出しグラウンドに出るように指示をするがそこに隣

のB組の担任がやってくる。

????　「そうはさせんぞイレイザー!」

相澤　「ちっ…」

(ブ)キング「失礼したA組の諸君!俺はB組の担任のブラドキングだ!イレイザーお前また生徒を入学

式に出さずに体力テストするつもりだったろ!?」

相澤　「そうだが何が悪い?後でB組にも言うつもりだ」

(ブ)キング「それは入学式の後でも出来るだろ?今年から座学以外は大体合同で授業をやること

になったんだ!足並みをそろえなければいけない…それに校長からも言わ

れてあるし
な!!」
相澤　「余計なことを…」
（ブ）キング「さっA組の諸君もこの後入学式があるから移動したまえ!」
ブラドキングのおかげでA組は入学式を欠席することはなくなり無事に入学式をするこ
とができた。そして入学式が終わった後、A組B組の個性把握テストが始まる。
――グラウンド――
A組B組　「「「個性把握テストォ!?」」」
相澤　「君らも中学のときやってるだろ?個性禁止の体力テストを。国は未だに画一的な記録を
取って平均を作り出している実に合理的じゃない。まぁ文部科学省の怠慢だよ」
（ブ）キング「諸君にこれからやってもらうのは個性有りの体力テストである」
相澤　「んじゃ入試の実技トップは…機神だったな、お前中学のときのソフトボール投げ何m

だった?」
クラフト「え～と確か７０ｍです」
相澤　「じゃ個性使ってこれ投げろ、円から出なければ何してもいいから」ポイッ
　そう言うと機械でできているボールを渡してくる。あとクラフトが実技トップと言われ
　た瞬間何人かは鋭い目でこちらを見てきた。爆豪は驚愕の顔から殺気を放つかのように
　睨んでくる。
爆豪　「(はっ?…俺じゃなくてあんな奴が俺より上だと!?…)クソが…」
クラフト「分かりました(う～んどうやって飛ばそうかな…能力系で何かいいやつ…あっブキブキ
　の能力ちょうどいいな!よしブキブキの能力!)」
　クラフトはブキブキの能力で片方の足をバズーカ砲にし、球をセットすると上段蹴りの
　ようにバズーカを空に向けて構える。
Ａ組Ｂ組　「なにあれ?大砲?」「武器の個性か?」「なかなか強力な個性だね!」
クラフト「じゃっいきまーす…発射!!」

ドオンッ!!…ヒュウゥゥウウゥゥゥ……ポトン
勢いよく発射されたボールは空の彼方へ飛んでいき肉眼では確認出来ない距離まで飛ぶ。
ピピッ!
相澤「まずは己の最大限を知る…それがヒーローの素地を形成する合理的手段」
スッ…
相澤が手に持っていた端末を見せるとそこには１１７３ｍと画面に出ていた。
Ａ組Ｂ組「はぁ1キロとマジかよ!?」「個性使えるんだ!面白そう「すげー流石ヒーロー科!!」
相澤「面白そうか…ヒーローになる為の３年間そんな腹づもりで過ごす気か?」
(ブ)キング「はぁ…(またか…)」
相澤「よし…トータル成績最下位の奴は見込みなしと判断し除籍処分としよう」
Ａ組Ｂ組「「「「はあああああああああ!!!」」」」
Ａ組Ｂ組「成績最下位除籍って!?まだ入学初日ですよ!?」「いや初日じゃなくても理不尽すぎ

る!」

（ブ）キング「イレイザーお前はまた…」

相澤　「生徒の如何は教師の自由…それに自然災害、大事故、身勝手な敵（ヴィラン）ｅｔｃ．…いつどこから
やってくるか分からない厄災…日本は理不尽だらけだ。そういうピンチを覆していくの
がヒーローだ…放課後おしゃれなカフェで談笑したいなら諦めろ、雄英はこれから３年
間君たちに全力で苦難を与える。Ｐｌｕｓ（プルス）　Ｕｌｔｒａ（ウルトラ）さ…全力で乗り越えてこい」

飯田　（洗礼と言うには重すぎる…これが最高峰というやつか…）

相澤　「さてデモンストレーションは終わりだ、ここからが本番だ」
いきなりの除籍宣告に動揺するＡ組Ｂ組の面々、だがそれでも最下位は除籍という体力
テストは始まる。

――第１種目５０ｍ走――

測定ロボ☒位置ニツイテ…ヨーイ…☒パァンッ!

飯田　「ふうぅぅんんんん!!!」シュイイィィィィン！
測定ロボ☒３秒０４！☒
飯田　（５０ｍだと３速までか…）
　飯田天哉…個性【エンジン】
　その名の通り足のふくらはぎにエンジンがあるぞ！足が速い！
　燃料はオレンジジュース！
相澤　（まっ水を得た魚、他がどうするか見物だな…次はあいつか…）
クラフト「さてと…おっ隣は爆豪か！」
爆豪　「てめぇか…ぶっ殺す！」
クラフト「ははは！やってみろ（笑）」
爆豪　「《イラ☒ァ》てめぇ…」
測定ロボ☒位置ニツイテ…ヨーイ…☒パァンッ！
爆豪　「爆速!!」ボンッボンッボンッ
クラフト（ピカピカ！）シュッ…
測定ロボ☒１秒２３！☒……☒４秒１３！☒
Ａ組Ｂ組　「はぁ！１秒って!?」「武器の個性じゃないのか!?」「瞬間移動!?」
　１秒というタイムに驚愕するクラス一同。

爆豪　「……」ギリリッ…
相澤　「ほう…（武器のような個性かと思いきや今度は瞬間的に移動する個性…マジでどういう
　　個性だ?）」
緑谷　「機神くんすごいね!」
クラフト「サンキュー緑谷!てか次は緑谷だろ?」
緑谷　「うんそうなんだけどちょっと聞きたいことがあって…実は…」
クラフト「あーなるほど確かに…だったら…を……こうしたらどうだ?」
緑谷　「そうかなるほど!ありがとう機神くん!」
クラフト「お安いごようよ!」
　　クラフトからのアドバイスのおかげで緑谷は意気揚々と測定に挑む。
飯田　「おや?緑谷君は靴を脱いでるぞ?」
????「ほんとだなんでだろ?」
切島　「おーほんとだ、だけど男らしいぜ!」
爆豪　「はっ!どうせ何もできやしねぇよ!あいつは無個性だぞ!」
飯田　「無個性?彼が入試で何をしたのか知らないのか!?」
爆豪　「あぁ!?」

クラフト「走るぞ」
測定ロボ☒位置ニツイテ…☒
緑谷　「絞るように…一点に集中…ブツブツブツ」
測定ロボ☒ヨーイ…☒パァンッ！
緑谷　「火足噴式（かそくふんしき）！」ボッ！シュウゥッン!!
【火足噴式（かそくふんしき）】
緑谷出久の技の1つ火足の機動力を高めたもの。火足はもともと足の裏から火を噴射さ
せ空を飛ぶ技であったが、噴射させているだけなのでそこまでスピードが出ない。それ
をジェット機の様に噴射する部分を絞り込み高い速度を確保したのが火足噴式（かそくふんしき）であ
る。ただし速度が速いかわりに小回りなどの旋回能力は落ちているぞ！
測定ロボ☒2秒85！☒
A組B組「おおすげぇ！」「ジェットみてぇ！」
飯田　「試験の時にみた個性とはまた違うな？複合型だろうか？」
????「すごいね！めっちゃ早かったよ！」

爆豪　「!?!!……（ありえねぇ!?なんでデクに個性が!?個性の発現は４歳までのはずだ!?）」

緑谷の記録うんぬんより個性があることに驚きが隠せない爆豪。

緑谷　「ふぅ…」

クラフト「緑谷―なかなかよかったじゃん！」

緑谷　「ありがとう機神くん！うまくいってよかったよ」

爆豪　「どーいうことだデク!!なんでテメェが!!」ボォン！

相澤　（ちっ……！）

爆豪が緑谷に突っかかって行くのを止めようと相澤が動こうとするが途中でやめる。

緑谷　「ひっ！」

クラフト「（イトイト！…はぁまったく…）お前は気に入らないことがあったら何でもかんでもそう

うするのか?」シュバッ！

爆豪　「《ガクン！》んなっ！体が!?…これはあん時の!?」

相澤　（動きを止めた…だがなにも見えない…見えない何かで止めているのか?）

クラフト「それは今は別にいい、なんで突っかかってきた?」

爆豪　「あ☒ぁ!?なんでデクに個性があるんだよ!?そいつは無個性だったはずだ!個性が出るのは
　　4歳までのずだ!!」
クラフト「なんで個性があるってそりゃ発現したからだろ?それに4歳までにしか発現しないのは間
　　違いだ。それはあくまで目安みたいなもんだ」
????「その通りデース、アメェリカでも無個性ダッタ人が実ハ個性をモッテいたという話は意
　　外によくアリマース!」
クラフト「…えーとあなたは?」
角取　「Oh!モウシワケございまセーン!ワタァシはB組の角取ポニーとイイマス!ヨロシクデ
　　ス!」
クラフト「A組の機神クラフトだ、よろしくな」
相澤　「まぁそういう事だ…爆豪…暴れるなら成績関係なく除籍処分にするぞ」
爆豪　「!?…ヂッ!」
相澤　「機神もういいぞ、時間がもったいない」

クラフト「あっはい…緑谷大丈夫か?」
緑谷　「うっうんありがと機神くん（；´Д`）」
爆豪　（……ついこの間まで道端の石っころだったろうが…石っころだったろうが!!）
相澤が爆豪に暴れたら除籍という釘を刺したことにより事態は収束し測定は続く。
――第２種目握力測定――
Ａ組Ｂ組「すげぇ５４０キロってあんたゴリラ!?いやタコか!!」「タコってエロいよね…」
クラフト「（ＬＢＸ…ハカイオー絶斗）《シュインシュイン》（変身音）…ふっ!」
記録：９８０キロ
Ａ組Ｂ組「変身した!?」「またすげぇ記録だな」
――第３種目立ち幅跳び――
クラフト「（バネバネ!）うらっ!」タタタタタッ…バヨォ～～ン（バネの音）
記録：２２ｍ
Ａ組Ｂ組「今度は足がバネみたいになったぞ」「もはや何でもありなんじゃね?」
――第４種目反復横跳び――

????「ひゅうううう」ぽよぽよぽよぽよっ
頭が葡萄みたいな頭の男子がものすごい速さで動く。これは特に思いつかなかってので
普通にした。
A組B組「普通だ」「うん普通だね」
クラフト（俺をなんだと思ってるんだ…（；^ω^））
記録５０回
――第５種目ソフトボール投げ――
????「せいっ！」ふわ～～～～……
指に肉球らしきものがある女子が投げるとボールは遥か彼方へ飛んでいくというより浮
いていった…
ピピッ…
相澤「……」スッ…
相澤が端末を見せるとそこには∞（むげん）の文字が。
A組B組「すげぇ無限でたぞ！」「マジかよ!!」
その後、順調にクラス全員が全種目をやり終え成績が発表される。

相澤　「んじゃパパっと結果発表するぞ」
Ａ組Ｂ組　「「「「(最下位が除籍処分…)」」」」
相澤　「ちなみに除籍は嘘な」ピッ…ブゥン…
Ａ組Ｂ組　「「「「えっ…」」」」
相澤　「君たちの最大限を引き出すための合理的虚偽!」ニカッ
Ａ組Ｂ組　「「「「はあああああああああああああああああああああっ!!!!!!」」」」
????「あんなの嘘に決まってるじゃない、ちょっと考えればわかりますわ」
(ブ)キング「はぁ…」
相澤　「そーゆーこと、これにて体力テストは終わり。教室にカリキュラムの書類等あるから
　　目ぇ通しとけよ」
クラフト「いやーなかなかハラハラドキドキだったなー(笑)」
耳郎　「あんたはなんで笑ってられるのよ…」
クラフト「おう響香おつかれさま!」
耳郎　「おつかれ、アンタ1位だったね」
クラフト「いやー頑張ったかいがあった…おっ障子おつかれ」
障子　「機神か、おつかれ。お前の個性凄いな一体どんな個性なんだ?」

A組B組　「「「「!!」」」」ざわっ…

障子がクラフトの個性について質問するとA組B組の全員が注目する。

クラフト「あーすまん障子、個性の事に関してはあんまり話したくはないんだ。ごめんな」

障子　「むっそうなのか、いや話したくないのならそれでいいぞ」

クラフト「すまんね」

A組B組　「「「「(めっちゃ気になる)」」」」

耳郎　「……」

ハラハラドキドキの体力テストを無事に終え、クラフトの個性がめちゃくちゃきになる

A組B組であった。

――体育館脇の通路――

(オ)マイト「相澤君の嘘つき!」

相澤　「オールマイトさん見ていたんですか?暇なんですか?」

(オ)マイト「合理的虚偽って!エイプリルフールは1週間前に終わってるぜ!それに君は去年の1

年生1クラスを全員除籍処分にしている。見込みゼロと判断すれば容

赦なく切り捨
てる…そんな君がどういう風の吹き回しだい?」
相澤　「別に…ただゼロではなかっただけです。見込みがなければ容赦なく切り捨てます。半端
に夢はおわせません」コッコッコッ…
（オ）マイト「……（君なりの優しさってやつかい）…でも…やっぱ合わないんだよね」
・　・　・
～～下校時間～～
耳郎　「クラフトー帰ろー」
クラフト「おーう…まだ昼だしどっかよるか?」
耳郎　「そうだねお昼をどこかで食べる?」
クラフト「あーそれいいな!俺はガッツリ食いたいけど響香は?」
耳郎　「ウチも動いたから少しだけどガッツリ系かな」
クラフト「そうだなー…モック（ファストフードチェーン）にでも行くか?安いし」
耳郎　「いいねそうしよっか、クラフトなにか奢ってくれる（笑）?」

2人でモックに行こうと話していると葉隠が話しかけてきた。
葉隠「ねぇねぇ今モックに行くって言った?」
クラフト「ん?そうだけど…もしかして行きたい?」
葉隠「いいの!?私いまお腹めっちゃ減ってるんだよね!」
クラフト「俺はいいけど響香は?」
耳郎「ウチもいいよ、いろいろ話したいし」
葉隠「わぁーありがとー♪そうだ尾白くんもいかない?」
尾白「えっ俺?いいの?」
クラフト「尾白もどうだ?飯は大勢で食べた方がうまいって言うしな」
尾白「じゃあお言葉に甘えて（笑）」
こうして4人でモックに行くことになり玄関を出て校門にさしかかった所にこちらに
向かって走ってくる女子がいた。
拳藤「機神ーーー!」ダダダダッ!
クラフト「?…おー拳藤か」クルッ
耳郎（拳藤!?）
拳藤「教室行ったのにいなかったからさー慌てて探したよー!」

クラフト「俺に何か用があったのか?」
拳藤　「いや一緒に帰ろうかなーって思ってさ!…でもその様子だとどっか行くの?」
クラフト「あぁこれからモックに行こうと思ってな、あぁ葉隠に尾白、紹介するよ。B組の拳藤だ」
拳藤　「初めましてB組の拳藤一佳です!よろしくね!」
葉隠　「わたし葉隠透!よろしくー!」
尾白　「俺は尾白猿尾、よろしく」
クラフト「拳藤も一緒にモック行くか?」
拳藤　「いいの!?(機神と一緒に…／／)」
クラフト「あぁいいぞ、みんなもいいか?」
耳郎　「うんいいよ」
葉隠　「いーよいーよB組のこと気になる!」
尾白　「俺もいいよ」
拳藤　「ありがとー!」
その後拳藤を含めた5人でモックでお昼を食べに行った。

――モック店内――

店員「いらっしゃいませご注文をどうぞ！」

葉隠「え～と…キロバーガー1つにキャラメルシェイクのMサイズを1つで！」

尾白「メガ照り焼きチキンバーガー1つにコーラのMサイズ1つを」

耳郎「キロチーズバーガー1つにストロベリーシェイクのMサイズ1つ」

拳藤「キロダブルフィシュバーガー1つにコーヒーMサイズ1つで！」

クラフト「ギガ合い挽きチーズバーガー1つにメガポテト1つにメロンソーダLサイズ1つを」

店員「かしこまりました！商品が出来るまで少々お待ちください！」

注文したものを受け取ると席に座り、楽しく話しながら昼食をはじめる。

尾白「機神ポテトも頼んだけど結構食べる方なのか？」

クラフト「あぁ普段もよく食うけどこれはみんなで一緒に食おうと思ってな」

葉隠「えっいいの？わーいありがとー♪」

耳郎「んじゃウチも」

拳藤「ゴチになるよ（笑）」

尾白「それじゃいただくよ」

ワイワイモグモグ

みんなで楽しく食べていると…
葉隠「ねーねーそういえば気になっていたんだけど…」
尾白「どうしたの葉隠さん?」
拳藤「?」
クラフト「ん?」
耳郎「なに?」
葉隠「機神くんと耳郎ちゃんってお互い名前で呼んでるけどもしかして…付き合ってるの!?」
耳郎「ぶふっ!?」ゴホゴホッ!
拳藤「ごふっ!?」げほげほっ!
クラフト「ド直球できたね」
尾白「葉隠さんそういうのは聞くとしてもやんわりと…（：^ ―^）」
葉隠「えーそうかなー?まぁそれはともかくどうなの?」ワクワク!
耳郎「そそっそれはその／／えっと「答えはＹＥＳだ」ちょー／／／!!」
葉隠「わぁー♪やっぱりー／／!」
拳藤「ぐふっ（?、）」心に９９９９のダメージ
尾白「だっ大丈夫…拳藤さん?」

拳藤「うっうん何でもない…大丈夫」
葉隠「ねぇねぇ！どっちが先に告ったの!?」ウキウキ！
耳郎「うぇぇ！そこもいうの!? 恥ずいよ！／／／」
クラフト「あーそれは何て言えば「だぁー言わなくていい！／／／」だそうだ葉隠」
葉隠「えーめっちゃ気になるよー！」
クラフト「っとスマンちょっとトイレに行ってくるわ」
尾白「あっ俺も行くよ」
クラフトと耳郎の恋愛について盛り上がって? いる途中、クラフトと尾白はトイレに行
くため席を一旦離れる。
葉隠「ねぇねぇ耳郎ちゃんは機神くんのどこが好きになったの?」
耳郎「ちょっまだ続けるの／／!?」
葉隠「やっぱ気になっちゃうよ♪」
耳郎「ええ恥ずかしいよ／／／」
葉隠「それに拳藤ちゃんも！」
拳藤「えっわたし!?」
葉隠「さっきから様子見てたんだけどもしかして…／／」

拳藤　「なななななっ何を言って／／／!!」ガタタッ!
葉隠　「(すごい慌ててる) ふ～ん／／２人とも頑張ってね!」ニヨニヨ
拳藤　「なっなにを!／／「おまたせ～」ほあぁっ!／／」
クラフト「?…なんかあったの?」
拳藤　「なっなんでもない／／!」
耳郎　「うんなんでもない!／／」
尾白　「?…」

葉隠に振り回される２人であったが楽しくモックで昼食を食べ終え、そしてそのまま最寄りの駅まで一緒に行くことに。

尾白　「授業ってどんな感じなんだろうね」
クラフト「そうだなー意外に座学は普通なんじゃね?」
耳郎　「ウチはヒーロー基礎学がきになるよ」
葉隠　「あー私も!」
拳藤　「今年から合同でやるって言ってたけどどういう事だろうね?」
耳郎　「確かにそんなこと《ブゥーブゥー》ん?誰だろ…」ごそごそ…ピッ…

話しながら駅に向かていると耳郎にメールの着信が入る。
耳郎「……ごめんみんなウチ先に行くね！」
葉隠「どうしたの耳郎ちゃん？」
耳郎「親からなんかやりたいらしいから早く帰ってきてだって、じゃあお先に！また明日ばい
ばい！」タッタッタッタッタ…
葉隠「なにだろうねやりたいことって？」
クラフト「案外入学祝いだったりしてな（笑）」
尾白「あーありえそうだね（笑）」
耳郎の用事の内容を予想しながら歩いていると駅に到着する。
――最寄り駅――
尾白「じゃあまた明日な！」
葉隠「ばいばーい！拳藤ちゃんがんばって!!」
拳藤「んなっ！もー葉隠！」
クラフト「おーうまた明日な～」
ちょうど乗る電車がすぐ来るため先に改札を通った尾白と葉隠と別れ俺と拳藤も帰ろ

うとすると…

クラフト「じゃあ拳藤また明日からよろしくな!」

拳藤　「うん…（折角２人になれたのに何もせずに……いられるわけないでしょ!）」ガシッ!

クラフト「!……《クルッ…》拳藤?」

拳藤　「あっ…のさ…今からさ…機神のうっ家に…お邪魔してもいいかな／／?」

クラフト「俺ん家に?別にいいけど…また急だね?」

拳藤　「うん…別に大した理由はないんだけどね…行きたいなーって／／／」

クラフト「まぁ特に用事ないしいいよ、なら早く行こっか?電車がちょうどくるし」

拳藤　「うんわかった／／」

急すぎて断られるかと思ったがクラフトの家に無事行くことに成功する拳藤であった。

ガタンコトン…ガタンゴトン…

――クラフト宅――

ガチャガチャン…キィ…

クラフト「ただいま～そしていらっしゃい、まぁ適当に座ってくれお茶入れるから」

拳藤　「うんお邪魔しま～す／／（ここが機神の部屋…）」

初めてクラフトの部屋に気分が高揚する拳藤。

クラフト「え～と…飲み物なにがあったかな…」ガチャ…ガサ…

拳藤　「……」トッ…トッ…トッ…トッ……がば…ぎゅぅ…

クラフト「!?…えっ…と…急にどうした拳藤…?」

お茶の準備をしていると、拳藤が後ろからクラフトのお腹に腕を巻くように抱きついて

きた。

拳藤　「私さ…機神にずっと言いたいことあったんだよね…／／」ドッ…ドッ…ドッ…（心音）

クラフト「俺に?……（これってまさか…前に響香が言っていた…《あんたに好意持ってる女子って

意外にいるんだよ…》…いや焦ってはダメだ…まずは聞かないと…）」ドキドキッ…

抱きついて抱きつかれて心臓の鼓動が大きくなる2人…そして何かを察するクラフト、

はたして拳藤は自分の想いを伝えることが出来るのだろうか…

第１０話　やったな拳藤!!そして戦闘訓練だ!

――クラフト宅――

拳藤　「……」ドッ…ドッ…ドッ…（心音）…ぎゅう…

クラフト「えっ…と…俺に言いたいことって…なに?」ドッ…ドッ…ドッ…（心音）

拳藤　「…その前に…機神はさ…その…女の恋人が２人できることは…どう思う…／／?」

クラフト「…個人的には別に複数の女の人と付き合うのはいいと思う…ちゃんと平等に接したり
　愛したりすればだけど…その逆もな。それに最近は国が少子化対策で一夫多妻制度の
　法案も検討しはじめた…まぁ制限や審査とかあるだろうけど。逆に１人の異性に複数の
　異性が付き合っているっていうのは普通になったりするかもな（笑）」

拳藤　「……そっか…なんか機神っぽいね……私さ好きな人いるんだよね。私が敵（ヴィラン）に襲われそ

うになったとき救けてくれた人。でもその人にはもう可愛い彼女がいてね…諦めようか
　なって思ったけどやっぱ無理だった。」
クラフト「……」
拳藤　「さっき機神言ったよね?ちゃんと平等に接したり愛したりすれば複数の女の人と付き合
　ってもいいって?」
クラフト「おう…」
拳藤　「それって機神も?」
クラフト「……なぁ拳藤…俺に彼女がいることは知ってるよな?」
拳藤　「…うっうん…(やっぱり……)」
クラフト「俺さその彼女に1つだけ我儘を聞いてもらったんだよ」
拳藤　「わがまま…?」
　クラフトは耳郎に言った我儘を話しそれを聞いた拳藤は静かに驚く。
拳藤　「それっ…て…」
クラフト「…そういえばまだ拳藤の気持ち聞いてないな~(棒読み)」
拳藤　「~~///ここまでくればわかるでしょ!!///」ぎゅうぅぅぅ!!

拳藤は腕に力を込めてお腹を締め付ける。
クラフト「いだだだ!意外に強い!」
拳藤　「《ぎゅうぅぅ…》……すき…」
クラフト「……これからよろしくな拳藤…いや一佳のほうがいいか?」クルッ
体を拳藤のほうへ向け正面から向かい合い名前をどう呼ぶか聞く。正確にはクラフトの
背が高いため拳藤が少し見上げた状態であるが。
拳藤　「～～～／／／しばらくは…拳藤でおねがい／／／」カアァァ…
クラフト「了解（笑）」
拳藤　「……ねぇ機神…」
クラフト「ん?なに?」
拳藤　「…耳郎とはどこまでしたの?」
クラフト「えっ!?そっそれはどういう…（；ﾟ Γﾟ）?」ドキッ
拳藤　「ちょっとこっちきて…」グイッ…ドフンッ
拳藤はそう言うと手を引っ張りソファにクラフトを押し倒す。そしてクラフトの上にの
しかかる。

クラフト「けっ拳藤…？」汗ダラダラ
拳藤　「耳郎とはどこまでしたの？もしかしてもう一線超えたの？」ギラギラ
クラフト「きゅっ急にどうした拳藤？なんか目ヤバいぞ（なんか目の光も消えてない!?）」
拳藤　「…どうなの？」
クラフト「一応言っておくが一線は超えてないからな…」
拳藤　「じゃあどこまで？」
クラフト「一応その…口付けまで「キスだね？」…はいそうです」
拳藤　「そう…」
クラフト「なぁ拳藤なんでこんなこと聞く「じゃあ今度は私の番だね♡《ジュルッ…ハァハァ》」…うん？」
　舌なめずりをしながら興奮する拳藤、その姿に動揺を隠せないクラフト。
クラフト「けっ拳藤しゃん（；ω；）？」
拳藤　「耳郎とはそこまでしたんでしょ？だったら今度は私も同じとこまでしてよ。平等にして
　くれるんでしょ？」ハァハァ

クラフト「(あっあぁ～なるほどそういうことね…突然すぎてわからんかった)…言いたいことは分
かったけど…最初がこんな感じでいいのか?」
拳藤　「?…どういうこと?」
クラフト「ほら…雰囲気とか大事じゃん…?」
拳藤　「…確かにそれも大事かもね…でも今はそんなことどうでもいい。てかもう限界なんだよ
ね」ハァハァ♡
クラフト「げっ限界…?」汗ダラダラ
拳藤　「あんたのこと想うとさ体が熱くなってさ…その度に自分で慰めたけどそれももう限界寸
前なんだよね」ハァハァ
クラフト「……」
拳藤　「だから…ね?…こんな感じでも「拳藤…」…なに?」
クラフト「一線はまだ超えないからな?」グイッ…スッ
拳藤　「～～／／／…うん／／」
クラフトは体を起こし右手を拳藤の頬に添える。そして2人の唇が重なる

とその瞬間…

拳藤の中にある何かが崩れる。

拳藤　「……ん／／……もっと…」

クラフト「…拳藤？」

拳藤　「もっと…／／／」ハァ

クラフト「もしかして何かしらのスイッチ入っちゃった？」

拳藤　「わかんないけど…たぶんそう／／／…ねぇ耳郎とはどんなキスしたの？」

クラフト「えっ…教えなきゃダメか？」

拳藤　「…」コクリ…

クラフト「えーっとだな…さっきした普通？のやつと映画とかであるやつ…」

拳藤　「じゃあ…今からするキスはすべて映画のやつね／／」ハァ

クラフト「ゑっ…？」

その後、拳藤が満足するまで濃厚なキスを１０分間もした。キスをしたあとの拳藤はツヤツヤしていた。まぁ俺も気持ちよかったけど…でも胸やお尻を触ってほしいって言ってきた時はびっくりした…もっもちろん触ってないよ！キスをしたことに

より抑えてい
たものが溢れだしてしまったのだろうか?…
クラフト「満足したか?」
拳藤　「うっうん／／…ありがと／／／…あのゴメンね私…その暴走しちゃって／／／」カアァァ…ツヤツヤ
クラフト「あー…まぁ気にすんなよ…それにしてる時の拳藤の顔すげぇ可愛かったぞ。なんていう
か…こう溶けているような表情で、特に目が!」
拳藤　「かわっ!とけてっ!!／／…～／／／うぅ～恥ずかしい／／／」ボフンッ!
ソファーのクッションに恥ずかしさのあまり暑くなった顔を埋める。
クラフト「それより拳藤、まだ昼だけどそろそろ家に帰った方がいいんじゃないか?」
拳藤　「?…あっそうだねそろそろ帰らないと!」
クラフト「じゃあ駅まで送るよ」
拳藤　「ありがと!」
いろいろ暴走した拳藤を駅まで送り見送ったあと、自宅に帰る前にコンビニに寄ろうと

したとき後ろから声をかけられる。

耳郎　「クラフト」

クラフト「?…あれ響香なんでここに?」

耳郎　「親の用事が終わったからちょっと用があって来たんだ」

クラフト「そういや用事って何だったんだ?」

耳郎　「入学祝いをやろうって話だったよ…まぁ夜にやることにしたけど（笑）」

クラフト「おー予想は合っていたな（笑）」

耳郎　「…ねぇさっき駅で拳藤と一緒にいたの見たけど…もしかしてあの我儘だったりする?」

クラフト「……あぁあの我儘だ…」

耳郎　「やっぱそうだったんだ…まぁ今回は知ってたけどね」

クラフト「知ってたって…もしかして分かっていたりした?」

耳郎　「まぁね…実はウチらが付き合うときから知ってたんだ。あとちょっと張り合っていた

というかなんというか…」

クラフト「もしかして響香が言っていたのって拳藤のことなのか?」

耳郎　「そうだよやっぱクラフトって少し鈍いね（笑）」

クラフト「あーあんまり好意とかそういうのは分かんねぇかな」
耳郎　「ふふっクラフトらしいね♪」
クラフト「そういや響香、用があるって言ってたけど何なんだ?」
耳郎　「あっそうだった!入学祝いを一緒にしないか誘いに来たんだ!」
クラフト「俺も?」
耳郎　「うん、母さんがアンタもどうかって…ほらクラフトっていま1人暮らしじゃん…」
クラフト「あーなるほど…けどいいのか俺も一緒で?」
耳郎　「大丈夫大丈夫!おっさんの方は気にしなくていいから（笑）」
クラフト「そこまで言うならお邪魔させてもらうよ」
耳郎　「ＯＫ!なら母さんに連絡しておくよ」
　その後、耳郎の家で入学祝いをしてもらい楽しい時間を過ごした。また、耳郎の父親に
　『娘とはどこまで進んd!』と聞かれそうになったがその瞬間、爆音をプレゼントされて
　いた。
・

・

・

〜〜　次の日　〜〜

――雄英高校――

午前は必修科目の国語や数学、英語などの普通の授業である。

(プ)マイク『えーじゃあ次の英文のうち間違っているのは?…おらエヴィバディヘンズアップ盛り

上がれー!!』

A組　　(((普通だ…)))

クラフト「HEY!マイクティーチャー!!関係詞の場所が違うから答えは4番では!?」

(プ)マイク『正解だぜ機神!あと乗ってくれてサンキューだぜぇ!!』

そしてお昼はクックヒーローランチラッシュも作る大食堂で一流の料理を安価で頂ける

ことができる。そしていよいよ午後の授業、ヒーロー基礎学。

――A・B組ヒーロー基礎学合同教室――

「わーたーしーがー!!」

緑谷　「来っ!!」
（オ）マイト「普通にドアから来たぁ!!」ガラッ!
ＡＢ組　「すげぇ!ほんとにオールマイトだ!」「マジで先生やってんだな!」「あれ銀時代（シルバーエイジ）のコス
チュームデース!」「画風違いすぎて鳥肌が!」
（オ）マイト「さてヒーロー基礎学!それはヒーローの素地をつくる為に様々な訓練を行う授業だ!!
単位数も一番多いぞ!!」
オールマイトが基礎学について話すと飯田が挙手する。
飯田　「先生!」ビシッ
（オ）マイト「むっ!なんだね飯田少年!?」
飯田　「今年から座学以外はＡ組Ｂ組で合同授業になると聞いているのですがそれは一体どういうことでしょうか?」
Ａ組Ｂ組　「確かにそんなこと言っていたな」「今年からってことは去年まではなかったってこ

と?」

(オ)マイト「なるほど!あまり詳しくは言えないが簡単に言えば授業方針が少し変わりこういう
形になったんだ!今まではA組B組で別々にしていたんだが、ちょっとある指摘を受
けて検討した結果がこれさ!」チラッ…
オールマイトがクラフトのほうを少しチラ見する。
クラフト(!…もしかして俺の言ったことか?)
飯田「なるほどありがとうございます!」
(オ)マイト「うむ!さて本日の授業内容はさっそくだがこれだ!戦闘訓練!」バッ!
オールマイトがBATTLEと書かれたカードを皆に見せる。
爆豪「戦闘!」
緑谷「訓練!」
(オ)マイト「そしてそいつに伴ってこちら!!」ピ…
A組B組「「「「!?」」」」
オールマイトがスイッチを押すと教室の側面の壁が動き、中に番号が振ってあるケース

が収納されている棚が出てくる。
ガゴッ!…ゴゴゴゴゴゴ…
（オ）マイト「入学前に送ってもらった個性届と要望にそってあつらえた戦闘服(コスチューム)!!」
A組B組「「「「おおおっ!!」」」」
（オ）マイト「着替えたら順次グラウンドβに集合だ!」
A組B組「「「「はーい!!!」」」」
――男子更衣室――
クラフト（おー要望どおりだ…すげぇ）ばさっ!
クラフトのコスチュームは太ももの部分が少しダボっとした、黒色でタクティカルパンツを参考にしたミリタリー系のズボン。靴は通気性や伸縮性など機能性を高めたコンバットブーツで、色は少し暗めのワインレッド。上はダークグリーン色の耐火・防刃性など丈夫さを高めた7分丈のシャツ。あとはコートと帽子に腕に装着する籠手やベルト型で足や腰に装着できるポーチ等である。コートと帽子は某海賊漫画の

海軍のやつを
参考にし…というかぶっちゃけそのまんまである。コートの背面には《正義》の文字、
帽子にはＭＡＲＩＮＥではなくＨＥＲＯの文字が入っている。ちなみにコートの袖と帽子
に入っているラインの色は緑色である。これはクラフトの好きな色で特に意味はない。
――グラウンドβ――
（オ）マイト「恰好から入るのも大事なんだぜ少年少女達！自覚するんだ今日から自分はヒーロー
なんだと!!」
コスチュームに着替えたＡ組Ｂ組の生徒が徐々に集まる。
コツコツコツ…
クラフト「着心地も良い感じだな」
耳郎「あっクラフｔ…（やばっ！コスチューム姿カッコいい／／）」
クラフト「おー響香そのコスチューム似合ってんじゃん。ロックって感じでいいね」
耳郎「あっありがと／／（似合って…／／／）」

クラフト「他の皆のコスチュームも…ん?」クイクイ…くるっ
拳藤　「その…どうかなコスチューム／／」
クラフト「おっ拳藤…コスチュームはチャイナ服をベースに?」
拳藤　「うん、動きやすさや格闘っぽさをね／／」
クラフト「可愛さもあってよく似合ってるぞ」
拳藤　「可愛っ!／／へへっありがとう／／」
耳郎　「よく似合ってるよ拳藤」
拳藤　「そういう耳郎こそ」
　3人で話しているとそこに葉隠が話しかけてきた。ちなみに耳郎と拳藤はちゃんとクラ
フトとの関係を把握し、お互いのことも認めている。というかむしろ仲が良くなってい
る。
葉隠　「わー!機神くんのコスチュームカッコいいね!」
クラフト「おう葉がくr…えっと葉隠…コスチュームはもしかしてそれだけか?」
葉隠　「そうだよ!私の個性は【透明】だからね。手袋と靴だけだよ!」
耳郎　「えっ…じゃあもしかして今の状態って…」

クラフト「全裸?」ド直球!

葉隠「もー機神くん!そういうのは思っても言わないもんだよ!／／」

拳藤「葉隠…寒くないの?」

葉隠「ちょっと寒いけど大丈夫!」

4人で話しているとオールマイトが口を開く。なおクラフトが3人の女子と話している様子を頭に紫色のボールのようなものが生えている男子がものすごい形相で見つめていた。

(オ)マイト「カッコいいじゃないか皆!!さぁ始めようか有精卵共!!!戦闘訓練の時間だ!!」

飯田「先生!ここは入試の時の演習場ですがまた市街地演習を行うのでしょうか?」

(オ)マイト「いいやもう二歩先に進む!!屋内での対人戦闘訓練さ!!敵(ヴィラン)退治は主に屋外で見られる

と思うが、全体的な統計では屋内の方が凶悪敵(ヴィラン)発生率は高いんだ!。監禁・誘拐・

裏商売など…このヒーロー飽和社会、本当に厄介な敵（ヴィラン）というのは我々の見えない所に潜むものだ。諸君にはこれから《ヒーロー》と《敵（ヴィラン）》に分かれてもらい４対４の屋内戦闘をやってもらう!!」

「基礎訓練もなしに?」

（オ）????マイト「その基礎を知るためさ!ただし今度はただ壊せばいいだけじゃないぞ!!」

Ａ組Ｂ組「勝敗のシステムはどうなります?」「ぶっ飛ばしていいんすか」「また相澤先生みたいに除籍処分とかあるんですか?」「分かれるとはどのように分かれるのですか?」

「このマントヤバくなーい?」

（オ）マイト「んんん～～聖徳太子いぃ～!!」

その後オールマイトがカンペを見ながら状況設定とヒーローと敵（ヴィラン）の勝利条件を説明

しクジによるチーム決めが始まろうとしたとき…

八百万「先生、このクラスはＡ組Ｂ組合わせて４１名ですが、どこかのチームは５人

チームになるの
でしょうか?」
(オ)マイト「おっといけない忘れるところだった!ありがとう八百万少女!」
八百万「いえ、それよりチームはどうなるのでしょうか?」
(オ)マイト「うむ!そのまま決めると誰か1人余ってしまうのだが…今回は最後の訓練に1対4また
は1対3の訓練をしてもらうことにした。そしてその1人役は君だ機神少年!!」
クラフト「えっ俺すか?」
突然の指名にA組B組の生徒がざわつく。
緑谷「えっ機神くん!?」
耳郎「クラフトが!?」
A組B組「1人で複数人て大丈夫なのか?」「ルールとか変えるのかな?」
飯田「先生!なぜ機神くんが1人役なんでしょうか?」
(オ)マイト「いい質問だ飯田少年!理由としてはまぁぶっちゃけて言うと強いからね機神少年は!
それに敵(ヴィラン)の中には1人なのにめっちゃ強い奴もいるからね!あとルール

は少し変え
てやるし、1対多数の戦闘経験も大事だよ!!」
オールマイトの《強いからね機神少年は!》の言葉を聞いてクラスの何人かがクラフト
に鋭い視線を送る。
（オ）マイト「どうかな機神少年?やってくれるかい?」
クラフト「まぁそういう事でしたらいいですよ…それに面白そうですし（笑）」
拳藤　「機神あんた大丈夫なの?」
クラフト「まぁ気持ちは負けるつもりはないし、勝っても負けてもいい経験になるし」
切島　「うおお!機神おまえ漢らしいぜ!!」
（オ）マイト「ありがとう機神少年!!では早くチームを決めるよ!!」
《屋内対人戦闘訓練ルール》
・状況設定・
敵（ヴィラン）が自分たちの拠点に核兵器を所持し隠しているため、ヒーローは核兵器を処理しよ
うとしている。
・勝利条件・

ヒーロー側…制限時間内に核兵器を回収または敵(ヴィラン)を捕まえる。
敵(ヴィラン)　側…制限時間内まで核兵器を守るまたはヒーローを捕まえる。

チーム編成

Aチーム…緑谷・麗日・鎌切・回原
Bチーム…轟・障子・柳・凡戸
Cチーム…八百万・峰田・小大・角取
Dチーム…爆豪・飯田・物間・円場
Eチーム…青山・芦戸・吹出・塩崎
Fチーム…口田・砂藤・鉄哲・泡瀬
Gチーム…耳郎・上鳴・骨抜・拳藤
Hチーム…蛙吹・常闇・黒色・小森
Iチーム…尾白・葉隠・取蔭・麟
Jチーム…切島・瀬呂・宍田・庄田
Kチーム…機神クラフト

チーム決めが終わり早速訓練に入ろうとする。

（オ）マイト「よし！では最初の対戦相手は～こいつらだ!!Aコンビがヒーロー！Dコンビが敵(ヴィラン)だ！」

緑谷　「!」
爆豪　「!」
（オ）マイト「敵（ヴィラン）チームは先にビルに入って準備を!５分後にヒーローチーム潜入で訓練スタート
だ。飯田少年、爆豪少年、物間少年、円場少年は敵（ヴィラン）の思考をよく学ぶように!これ
はほぼ実戦ケガを恐れず思いっきりね!だけど度が過ぎたら中断するからね!他の皆
はモニター室で観察するぞ!」
Ａ組Ｂ組　「「「はーーい!!」」」
緑谷　「……」
爆豪　「……」
いよいよ対人戦闘訓練が始まろうとする。そして最初は緑谷と爆豪のチーム…爆豪に対
して緑谷は上手く立ち回れるのか?あとクラフトは１人で大丈夫なのだろうか?

第11話　A対D！　ちゃんと前を見ようね!!

――グラウンドβ――
――ビル5階――

飯田　「これを守ればいいのか？《ゴンゴン…》張りぼてか…訓練とは言え敵（ヴィラン）になるのは心苦しいな。さてまずは自己紹介をしよう、俺はA組の飯田天哉だよろしく頼む！個性はエンジンで足が速くなる！」

円場　「俺はB組の円場硬成だよろしく。個性は空気凝固で空中に空気を固めたバリア的なものを出すこと出来る」

物間　「僕は物間寧人、よろしくA組。個性はコピーで触れた相手の個性を5分間コピーすることができる」

爆豪　「……」

飯田　「爆豪くん！君も自己紹介をしたまえ！これから一緒に訓練をするのだからお互いの意思疎通は円滑にしなければならない!!」
爆豪　「あぁっ!?うっせぇなくそメガネ!!んなもんテメェらで勝手にしとけや!!」
飯田　「爆豪くんそのような態度はやめたまえ！それに俺はクソメガネではなく飯田天哉だ！すまない円場くんに物間くん気分を害したなら謝罪する！」
　飯田はそう言いながら頭を下げて謝る。
円場　「おっおう…まぁあんまり気にするなよ飯田」
物間　「まったく仮にもヒーロー志望だろ?あまりそのような態度は頂けないね？」
爆豪　「あ☒ぁ!?なんだとこのモノマネ野郎!?」
物間　「なんだい？事実を言ったまでだろう?」
爆豪　「あ☒ぁ！てめぇもう一回言ってみろ！ぶっ殺してやる!!」
飯田　「やめないか爆豪くん!!」
泡瀬　「やめろ爆豪！物間も煽るな！」
　一触即発寸前になりながらもなんとか事態を収める。

爆豪　「ディッ!!おいメガネ、デクには個性があるんだな?」
飯田　「飯田天哉だ!体力テストの時に見ただろう?なかなかの強個性だ、それにテストの結果も
上位に入っていた。ただ入試の時に腕を大怪我していたのをみると、何かしらのリミッ
ターがあるのかもしれない。まぁそれを除いても十分強いが…」
爆豪　「(この俺を騙してたのか…!?)…クソナードが!!」

――ビル屋外――

緑谷　「えっとじゃあまずはお互い挨拶をしようか?僕は緑谷出久よろしくね!個性は火と超パ
ワーの複合型だよ」
麗日　「麗日お茶子です!個性はセログラビティ!触れた物ものを浮かすことができます!」
鎌切　「鎌切尖(とがる)だ…よろしくだぜぇ!個性は刃鋭だ、体のいたるところから刃物を出すことがで
きるぜぇ」

回原　「回原旋だよろしく、個性は旋回だ。体のいろんな部分をドリルのように高速回転できる」

緑谷　「みんなよろしくね、それじゃどう動くか決める?」

鎌切　「いいぜ、だが核がどこにあるか分からないから、探しながら動くしかないぜ」

緑谷　「そうだね、その場の状況に合わせて動くって感じでいいかな?」

回原　「そうだな…訓練自体が初めてなんだ、最初はそんな感じでいいと思う」

麗日　「建物の見取り図とかも覚えておかないといけないね。でも安心したよー相澤先生みたいに罰とかないみたいだし!」

回原　「いや緑谷が若干震えてるぞ」

鎌切　「緑谷大丈夫か?」

緑谷　「あぁっごめんね!その…相手にかっちゃんがいることに身構えちゃってね」

麗日　「爆豪くんてデクくんを馬鹿にしてくる人だよね?」

緑谷　「嫌な奴だけど凄いんだ僕なんかより…」

回原「でも緑谷体力テスト3位じゃなかったか？」
緑谷「うん…でも……それは僕の個性と相性が良かったから…かっちゃんは昔から何でも出来
て僕なんかよりも何倍も凄いんだ…でもだからこそ今は負けたくないな…って」
麗日「男のインネンってやつだね！」
鎌切「いいぜぇそういうの…」
緑谷「ああっごめんね！3人には関係ないのに！」
回原「関係あるかは分からんが今はチームだ頑張ろうぜ」
緑谷「!!――」
両方のチームの準備が終わるとオールマイトが無線越しに訓練開始の合図を入る。
（オ）マイト『両チームとも時間だ！これより屋内対人戦闘訓練を開始する!!』
いよいよ戦闘訓練の火蓋が切られる。
――地下モニター室――
（オ）マイト「さあっ！君たちもよく考えながら見るんだぞ！（緑谷少年…ここではあくまで一生徒…

成績はひいき目なしで厳しくいくぞ！）」

クラフト（緑谷～がんばれよー）

――ビル１階――

緑谷「侵入成功…死角が多いから気を付けて」

麗日「うんわかった」

緑谷「鎌切くん、回原くん聞こえる？」

鎌切『おうバッチリだ』

回原『聞こえるぞ、緑谷、俺らはこのまま外階段を使って３階から探すぞ？』

緑谷「うん僕らもこのまま１階と２階を探して後で合流するから」

鎌切『わかったまた後でな』

緑谷達は訓練が始まる直前に２手に分かれる事を思いつき実行したのであった。

緑谷（ＯＦＡはいまはだいたい上限８％くらいだ…上手くすればかっちゃんにも通じるかもしれない。火の力はまだ調整が微妙だから発動させて防御に使おう。物理的な攻撃は無効にできるからありがたい。フルで考えろ…狭い場所での戦いの記録を…）

――ビル2階――
1階を探し終わると2階に上がり通路を進んでいると曲がり角から爆豪が強襲する。
間
一髪のところで緑谷は麗日を庇いながら避けることに成功する。
フッ…バッ!!
緑谷「!!」バッ!
麗日「うわっ!」
ボオォン!!
緑谷「かすった!…大丈夫麗日さん!?」
麗日「うんありがと…さっそく来たね…」
爆豪「おいデクぅ…避けてんじゃねぇよ…」
緑谷「かっちゃんが敵ならまず僕を殴りに来ると…思ったよ…」
爆豪「はっ…想定済みってかぁ!?」
――地下モニター室――
峰田「いきなり奇襲!」
切島「爆豪ずっけぇ!!奇襲なんて漢らしくねぇ!!」
芦戸「緑くんよく避けれたなぁ!!」

（オ）マイト「奇襲も戦略の1つ！彼らはいま実戦の最中なんだぜ!!」

――ビル2階――

爆豪　「まぁいい…てめぇを中断されない程度にぶっ飛ばしたらあぁぁ!!」グァッ！

爆豪はそう言うと右手を大きく振りかぶって攻撃するが、その右腕を振り下ろしきる前

に緑谷が受け止める。

ガシィッ!!

麗日　「おおっすごい！達人みたい!!」

爆豪　（なんだコイツ!?急に動きが!?読まれた!?）

緑谷　「ううっ!!…ああっ!!」グイィッ！

爆豪の右手の大振りを受け止めた緑谷はそのまま腕を掴み、柔道の背負い投げの様に爆

豪を床に叩きつける。

ダァンッ!!

爆豪　「がっ…は…!!」

緑谷　「はぁ…はぁ…かっちゃんは大抵最初は右の大振りなんだ…どれだけ見てき

たと思ってる
んだ…凄いと思ったヒーローは分析して全部ノートにまとめているんだ！
君が爆破して
捨てたノートにも…いつまでも雑魚で出来損ないのデクじゃないぞかっちゃん…僕は」
／／／「《頑張れ!!》って感じのデクだぁ!!」／／／
麗日　「！――――」
麗日は緑谷の言った言葉に自分の言った言葉を思い出す。
《でもデクってなんか…頑張れって感じでなんか好きだ私！》
爆豪　「ビビりながらよぉ…そういうとこが…」
／／／「ムカツクなぁ!!!」／／／
その時お互いの声が廊下に響き渡ると両方の無線に通信が入る。
回原　『《ザザッ…》おい緑谷！大丈夫か!?なんか爆発音したけど!!』
飯田　『《ザ…ザッ…》おい爆豪くん！そちらの状況はどうなっているんだ!?教えたまえ!!』
緑谷　「回原くん!?こっちは大丈夫だよ！麗日さん！このまま行って回原くん達と合流して敵の場

所を探して!!ここは僕が止めるから!」
爆豪「黙って守備してろ…俺ぁ今ムカついてんだ…」
飯田『気分を聞いているんじゃない!!お…《ブツンッ!》』
――ビル５階――
飯田「なっ切れてしまった!?何なんだ彼は!!」
円場「まぁ行ってしまったもんは仕方ない、俺らはここで守りに徹しよう」
物間「まぁそれが現時点で一番かな…」
――地下モニター室――
切島「アイツらなに話してんだ?定点カメラだから分かんねぇな」
(オ)マイト「小型無線で味方と話してるのさ。両チームの持ち物は建物の地図とこの確保テー
プ!これを巻かれた者は捕らえられた証明になる!」
芦戸「制限時間は１５分で核の場所はヒーロー側は知らないんですよね?」
(オ)マイト「ＹＥＳ!」
芦戸「ヒーロー側が圧倒的に不利ですねこれ…」
(オ)マイト「ヒーローというのはいつも不利なものさ…だがそれを覆すのがヒーローだ!相澤く

んにも言われたでしょ?あれだよ…せーの!」

A組B組　「「「「Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ!!」」」」

青山　「ムッシュ!爆豪が!」

（オ）マイト「!」

雄英の校訓を皆で言った瞬間状況が動く。

――ビル2階――

ボォンッ!

緑谷　「麗日さん行って!!」

麗日　「うっうん!!」ダッ!

爆豪　「余所見とは余裕だな!!」ドガッ!

爆豪は爆破で空中に飛び、左足で緑谷の頭の右側面に蹴りを入れる。緑谷はそれを防御

し確保テープを爆豪の足に巻きつけようとする。その間に麗日は回原と鎌切に合流する

ため3階へ移動する。

緑谷　「ぐっ!」シュルッ!

爆豪　「!?（確保証明の!!）」

緑谷　（相澤先生の技を生で見れてよかった!次はなんだ!?かっちゃんならまた焦ってまた…右の
大振り!）バッ!
自分の知識をフルに使い爆豪の攻撃を回避する。
ボオォンッ!!
爆豪　「なっ!?また…」
――地下モニター室――
砂藤　「すげぇなアイツ!」
瀬呂　「個性使わずに渡り合ってるぞ!!」
クラフト（うおーがんばれ緑谷～!）
（オ）マイト（元々とっさの判断には優れてはいた…そして少年が何年にも渡って書き留め頭にし
みこませたオタク知識が…背中を押されたことによって今!報われているんだ!）
上鳴　「なんか爆豪すっげーいらついてない?」こわッ
（オ）マイト（爆豪少年は緑谷少年から聞いた感じだと自尊心の塊だろうか?…肥大化しすぎてる

ぞ…ムムム!!）

――ビル2階――

緑谷　（当たり！けど流石に一筋縄じゃいけないよね…体勢を直さなきゃ）ダッ！

爆豪　「あっ！待てやオイコラデクゥ!!なぁデクゥ！俺を騙してたのかぁ!?楽しかったかぁ!?あ⊠ぁ!?随分派手な個性じゃねぇかよ!!使って来いよ!!俺の方が上だからよぉ!!」ボボッボォン！

一旦その場所から離れる緑谷と激昂する爆豪。

――ビル3階――

麗日　「あっ！鎌切くん！回原くん！」タッタッタッ…

鎌切　「！…麗日か！緑谷はどうした?」

麗日　「2階で爆豪くんと戦ってる！2人と合流して敵の場所を探してって！」

回原　「マジか！けどそれが最善か…相手もたぶんだけど3人で守っているはずだ」

鎌切　「このフロアはもう探し終わっている。ということは相手は4階か5階に陣取っているな」

麗日　「よし！爆豪くんはデクくんに任せて私たちは核を探そう！」

回原「そうだな！」
鎌切「おう！」
緑谷を信じ3人は進む。
――ビル2階――
緑谷「はぁ…はぁ…（僕だけを狙いに…ということは作戦とかじゃなくてこれはかっちゃんの暴走か。これでいい近接戦闘向きの個性の回原くんと鎌切くんがいれば勝機はある！僕も何とかしてかっちゃんを倒していけば勝率は上がる…時間切れには気を付けないと…）」
カツン…カツン…カツン…カツン…カツン……
爆豪「……（石っころが！）」ゴオォォォォ…
爆豪勝己は幼少の頃から何でも出来た子供だった。周りから褒め続けられた彼は自分がすごいのだと思うようになる。そして個性が発現してからさらにそれが加速する。

だがそんな彼を周りとは違い緑谷は普通に接する。爆豪はその行動が気に入らず緑谷に
対し、嫌悪や憎悪の感情を持つのと同時に焦躁感も持つようになった。
爆豪　(俺の方が上だ!!)
――ビル5階――
麗日　「ここやね」コソコソ
回原　「ああ…中に3人いるな」コソコソ
鎌切　「なら早く核を回収しちまおうぜぇ」コソコソ
回原　「焦るな鎌切、そういうのが失敗の元だぞ」コソコソ
麗日　「?…何か話してるね」コソコソ
鎌切　「なに話してんだ?」コソコソ
5階フロアにある核がおかれている部屋の入口の前で様子を伺う3人。
飯田　「爆豪くんには悪いが今回の訓練において彼の行動や言動は一応沿ったものだ」
円場　「まぁ敵(ヴィラン)っぽいな」
物間　「てゆーかまんま敵(ヴィラン)だけどね何も知らずに見たら」
飯田　「なら俺たちも敵(ヴィラン)に徹しなければいけないのではないか?」

円場「?…どんな風に?」
物間「卑怯な戦法でも取るかい?」
飯田「そうだな…まずは言葉遣いを変えてみるのはどうだろうか?」
物間「じゃあお手本みせてよ?」
飯田「よし!……俺はぁ…至極悪いぞぉぉ」
麗日「(真面目や!!)ブフゥッ!!」
飯田の敵(ヴィラン)?の真似に思わず笑ってしまい気づかれてしまう。
回原「ちょっ!」
鎌切「麗日!」
飯田「!?…来たか麗日くん…それにB組の2人!」
円場「回原に鎌切だ!こっちと同じ人数かよ!」
物間「ようやくかい?待ちくたびれたよ(笑)」
飯田「回原くんに鎌切くんの個性はまだよくわからないが麗日くん、君の個性は触れた対象を
浮かせる個性だ。…なので君たちが来る前にこのフロアは綺麗に片付けさせてもらった
よ!!これで小細工は出来まいヒーロー!?ぬかったな!!フハハハハハハハ

!!」

麗日「様になってる…」

鎌切「けっ！それがどうした！核にさえ触れればこっちの勝ちだ！」

回原「よし！俺と鎌切が3人を引き付ける！その間に麗日は核を頼む！」

麗日「りょーかい！」

物間「…それはどうかな？」ボソッ…

小さく言いながら不敵に笑う物間。

――ビル2階――

緑谷（さっきの蹴りは読まれることを避ける為の攻撃だ…警戒されたんだもう簡単には間合いには入れないぞ…どうする…）

爆豪に対する策を考える緑谷、そこにチームからの通信が入る。

麗日『《ザザッ…》デクくん！』

緑谷「麗日さん!?今どこに!?」

麗日『5階の真ん中の部屋！今2人が相手の引き付けて私が核を回収しようとしてる最中だよ！だけど苦戦中！』

緑谷　「（ほぼ真上か！）そろそろ時間もヤバい！タイムアップは相手の勝利だ（ここだけは負けたくない！）」
爆豪　「…溜まった……」シュウン…ガコン…
緑谷　「!?」
爆豪　「なんで個性使ってこねぇ?舐めてんのかデク?」
緑谷　「かっちゃん…もう君を恐がるもんか」
爆豪　「!…てめぇの事だから知ってんだろうがよぉ…俺の爆破は掌の汗腺からニトロのようなもんを出して爆発させている…」
緑谷　「?……」
爆豪　「要望通りの設計なら…この籠手はそいつを内部に溜めて…」ガコ（オ）マイト『（まさかそれって!?）ストップだ爆豪少年!!殺す気か!!?』
爆豪　「当たんなきゃ死なねぇよ!!」グッ…キンッ！
オールマイトが止めるが時すでに遅し。爆豪は手榴弾型の籠手に内蔵してある遠距離で
爆破攻撃できる装置を起爆させ、緑谷に大規模な爆破攻撃を喰らわせる。

緑谷　（!?）
ドッッボオォゴオオオオオオオオン!!!!!
――地下モニター室――
A組B組　「うわっ!?」「きゃあっ!!」
切島　「授業だぞこれ!?」
（オ）マイト「少年!!緑谷少年!!無事か!?」
オールマイトが無線で緑谷の安否を確認する。
――ビル5階――
ビリリリ……グラグラグラ……
爆豪の大規模攻撃によってビルの窓ガラスは割れたり震えたりなど、建物自体をも揺らす。
飯田　「なっなんだ!?」
麗日　「うわっ!!」
鎌切　「地震か!?」
物間　「まさかあいつの仕業じゃないだろうね?」
麗日　（チャンス!!）ダダッ！

飯田「行かせんぞ！」ダッ！
麗日「うりゃ！」ダダッ…ピョーン
飯田「何!?自身も浮かせられるのか!?だが！」
鎌切「おっとそうはさせないぜぇ！」シュバッ！
飯田「くっ！…」
麗日「負担の大きい超必です！」
回原「よしそのままタッチすれば俺らの勝ちだ!!物間も俺が抑えている！円場がいるが如何に張りぼてと言ってもすぐには移動できない！」
物間「それはどうかな?…円場!!」
ビルが揺れている隙に自身を浮かして核を回収しようとする麗日。だが現実はそうは問屋が卸さない。
円場「おうよ!!…すうぅ…ふうううぅぅ!!」
麗日「えっなに!?うぎゃ!?」ガンッ!!…ドタッ！
円場「へへっ！空気のバリアだ…この隙に核を移動っと…」グイッ…タッタッタッ…

麗日が核に触れるのを阻止するべく円場が麗日の目の前に、空気のバリアを張り麗日の動きを阻害する。

飯田「ナイスだ円場くん！」

鎌切「チッ！大丈夫か麗日！」

麗日「あいたた…うっうん平気だよ！」

物間「はっはっは！惜しかったね！このまま時間切れまで逃げさせてもらうよ」

回原「くそっ！」

5階で接戦が繰り広げられているなか爆発が起きた2階では…

――ビル2階――

パラ…パラ……ガタン…ゴシャアン……

爆豪「ははっ！すげぇ！なぁデクどうしたぁ!?まだ戦えんだろ!!」

緑谷「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…危ないじゃないか…かっちゃん…下手をすれば死人が出ちゃうじゃないか（噴出する爆破…遠距離に対応できるようにしたのか）」

爆豪「あぁ?何言って…!!?」

緑谷「僕じゃなかったら死んでいたよ」ボッ…ボボッ…

煙幕が晴れるとビルの壁に大きな穴が開いており、通路や壁の表面ががえぐれていたり
亀裂が入っていた。そして緑谷が腕を交差させ防御の姿勢を取りながら立っているよう
だが、煙幕が晴れるとその姿は少し違った。
――地下モニター室――
A組B組　「えっ?…」「まって…あれ緑谷?」「体が…ない?」
クラフト（上手く使ってるな緑谷…）
（オ）マイト「緑谷少年!まずい早く彼を…」
クラフト「オールマイト…大丈夫ですよ」
（オ）マイト「!?…機神少年それはいったいどういう…!?」
峰田　「何が大丈夫だよ機神!あの状態が大丈夫に見えるのかよ!?」
八百万　「そうですわ!緑谷さんの上半身の半分が!!」
クラフト「よく見ろ」
八百万　「えっ?」
煙幕が晴れるとそこには右上半身がない緑谷が立っていた。その姿にモニター室で見て

いたオールマイトやＡ組Ｂ組の生徒は動揺する。しかしその動揺もすぐになくなる。

ボッ…ボボッ…ボオォゥ…

緑谷の体が炎と共に徐々に再生する。その姿に５階にいる６人を除き全員が驚愕する。

Ａ組Ｂ組　「「「「ええええええええええええええええええええええええええええ!!!???」」」」

（オ）マイト「なんと…緑谷少年！大丈夫かね!?」

――ビル２階――

緑谷　「はぁ…はぁ…（すごい本当になんともない…右の上半身がないのにちゃんと治っていく。でもあくまで発動しておくのが前提だ、これからもすぐに発動できるようにしないと！）」

（オ）マイト『《ザザッ…》緑谷少年大丈夫かね!?』

緑谷　「オールマイト!?えっ…あっはい大丈夫です」

（オ）マイト『そうか無事でよかった…』

――同ビル・地下モニター室――

切島　「先生これ止めた方がいいって！爆豪あいつ相当クレイジーだぜ！」
（オ）マイト「いや…（妙な部分で冷静ではある、何というかみっちいというか…とにかく）」
切島が止めた方がいいと意見するが…
――ビル２階――
（オ）マイト『爆豪少年！次それを撃ったら強制終了で君らの負けとする！』
爆豪　「あぁ!?」
（オ）マイト『屋内戦闘において大規模攻撃は守るべき牙城の損壊を招く。その行為はヒーローとしてはもちろん敵（ヴィラン）としても愚策だ！大幅減点だからな！（教師としてはここは止めるべきだろう…しかし…）』
爆豪　「～～～…あ゛あ゛☒ーーくそっ!!じゃあ殴り合いだ!!」ボォン！
緑谷　（来た！大丈夫僕には物理的な攻撃は効かない！落ち着いて反撃を！）
緑谷と爆豪の肉弾戦が始まる。
――ビル５階――
鎌切　「ちっ！もう少しだったんだけどな…」
回原　「そう言っても仕方ない、次の手を打つまでだ」

鎌切「何かあるのか？」
回原「……ない…」ぼそっ
麗日「いや！ないんかい!!」
飯田「ふはははは！どうしたヒーロー！手も足も出まい？」
物間「はっはっはっ！来ないならこちらから行かせてもらうよ！」ドルンッ!!
物間はそう言うと飯田の個性をコピーし麗日達の周りを素早く駆け回る。
ドドドドドドドドドドドドドッ!!
物間「はっはっはっ！どうだいこの速さ追いつけまい！」
鎌切「くそちょこまかと！」
物間「あーはっはっはっ！手も足も出ないとはこのことだね！余裕すぎてジャンプをする余裕まであるよ！」シュバッ！
麗日「あっ…」
飯田「!!…いかん物間くんそこでジャンプしては!!」
物間「えっ？どうしてだi《ガァアン!!》…がっ…は…」ドサ…
物間は少し前に円場が出した麗日を阻害したバリアに頭を直撃してしまい気絶してしま

う。

円場「……」

飯田「……」

鎌切「……」

回原「……」

麗日「……あっ…」トットットッ…シュルルル…ぎゅっ！

（オ）マイト『物間少年確保ー！』

飯田「はっ！しまったぁぁぁぁ!!」

回原「ナイスだ麗日！」

鎌切「これで３対２で有利になった！」

円場「物間すまーん!!俺のせいで！」

飯田「円場くんのせいではない！あまり言いたくはないが…彼の前方不注意が招いた結果だ！」

あっけなく確保されてしまった物間であった。

――ビル２階――

爆豪「くらえやぁ！」グアッ…ボォン！

緑谷「ぐっ！（やっぱ動きが早い！だけどこの隙にＯＦＡ…８％！）」ギュイィィ

ン

爆豪　「ちっ！（攻撃が通じてねぇ？）」

緑谷　「そこっ…だぁ！」ブオンッ！

爆豪　「ぐっ！」ドガッ！

爆豪は空中に飛び緑谷に右の大振りの爆破を当てる、が緑谷にダメージはない。その隙

に緑谷はＯＦＡを発動させ右手でパンチを爆豪に一撃を与える。爆豪は防御はしたものの

後ろに少し下がってしまう。

――地下モニター室――

Ａ組Ｂ組　「「「「おおっ!!」」」」

切島　「おおっ緑谷一発入れたぞ！」

鉄哲　「やるじゃねぇの!!」

（オ）マイト（機神少年のおかげで上手くＯＦＡも使えているが…だがまだ体術など課題がたくさん

あるぞ！）

クラフト（個性は使えてるけど戦闘センスはやっぱ爆豪の方が上か…一発当てたけど

有効打になっ
てない…）
――ビル２階――
爆豪「ならこうするまでだ！」ボォン！
緑谷（来る！…ここで迎撃！…!?）ボンッ！…スカッ！
爆豪「おせぇ!!」ガシッ！ボボボボッ！グイィ!!
緑谷「うわっ！…ガハッ!!」ダァン!!
爆豪は再び緑谷に突っ込む。緑谷は迎え撃つため前方に腕を振るが、爆豪はその前に目
の前で小さい爆破をし緑谷の後ろに回り込む。そして腕を掴み爆破の勢いを利用して緑
谷を床に叩きつける。
爆豪「てめぇの個性は一見攻撃が効かねぇように見えるが万能じゃねぇ…あくまで直接物理的
な攻撃を無効に出来るまでだ！今みたいに床に叩きつけてダメージを間接的に与える事
は例外だ。」

緑谷　「ぐっ…」

――地下モニター室――

轟　「目眩ましを兼ねた爆破で軌道変更、そして爆破の勢いを利用して叩きつける…あんま考えるタイプには見えねぇが意外に繊細だな」

八百万　「爆破の勢いを利用するには相応のコントロール力が要りますわ。強すぎても弱すぎても

バランスが崩れてしまいます。」

上鳴　「才能マンだ才能マン…やだやだ…」

――ビル2階――

爆豪　「オラ立てやー……!?」ドカッ!

緑谷　「ぐあっ!」

爆豪　「……（まさか…）」コッコッコツ…グイッ

緑谷の腹を蹴り上げる爆豪はその時ふとあることに気づく。そして緑谷の胸ぐらを掴み

体を持ち上げる。

爆豪　「その攻撃の無効化…常時発動じゃねーみてぇだな?」

緑谷「!?…」
爆豪「どうやらその顔は図星みてぇだ…なっ!!」ニヤ…ドゴッ！
爆豪は緑谷の弱点の1つを当てるとそのまま腹に膝蹴りを喰らわせる。
緑谷「ぐほっ！…」
爆豪「おらどうしたぁ！ほら行くぞてめぇの大好きな右の大振りぃ!!」ブォン！
…ドゴッ！
緑谷「ア☒ァ…」ドサッ…
――地下モニター室――
拳藤「ちょっ！これどうなの!?」
芦戸「リンチだよこれ！テープを巻きつければ捕らえたことになるのに!!」
常闇「ヒーローの所業に非ず…」
上鳴「緑谷もすげぇって思ったけどよ…戦闘能力において爆豪は間違いなくセンスの塊だぜ…」
クラフト「……（事故でもなんでも一撃入れられたら…）」
芦戸「あっ逃げてる！」
切島「男のすることじゃねぇ…まぁ仕方ないか」

（オ）マイト（ここは止めるべきなんだろう…だが止めてあげたくない!!…）

葛藤するオールマイト。

――ビル2階――

緑谷　「くっ…（何とかしないと…）」ドタドタドタ…

爆豪　「個性使ってかかってこいや俺を舐めてんのか!!ガキの頃からずっとそうやって!!……」

「俺を舐めてたんか!?てめぇはぁ!!?」

緑谷　「違うよ…」

――ビル5階――

飯田　「はあ!!」ドガッ！

鎌切　「ぐっ！」ズザザアッ！

回原　「くそっ意外に粘りやがる！」

円場　「すまねぇ飯田！」

飯田　「大丈夫だ円場くん！君はそのまま防御に専念してくれ！」

麗日　「うぅ…どうすれば…そいえばデクくんどうなったんやろ」

2対3になったにも関わらず敵（ヴィラン）チームは意外にも粘っていた。そして麗日は思い出した

ように緑谷に無線を繋げる。
――ビル２階――
緑谷「《ザザッ…デクくん！》麗日さん!?……うん後はそっちに任せるよ！」
爆豪「はっ！やっぱ舐めてんじゃねぇか!?」
緑谷「違うよ…君がすごい人だから勝ちたいんじゃないか！」
――ビル５階――
麗日「鎌切くん！回原くん！……だからこっちに！」
鎌切「おう分かった！」
回原「わかったが大丈夫なのかよそれ!?」
飯田「なんだ?」
円場「一体なにを?」
麗日達は一体何をしようというのか?
――ビル２階――
緑谷「君に勝って超えたいんじゃないかバカヤロー!!!」
爆豪「その面やめろや!!クソナード!!!」
緑谷「ＤＥＴＲＯＩＴ……!!」ダダッ！
爆豪「あああああ……!!」ダダッ！

互いの感情がぶつかり合い正面から同時に攻撃に入る緑谷と爆豪。
――地下モニター室――
（オ）マイト（「ヒーローになる」以外で初めて見せる激情！）
Ａ組Ｂ組　「なんか爆豪余裕なくね？」
オールマイト（きっと君の見据える未来にこれは必要な事なんだろう！）
Ａ組Ｂ組　「てかこれヤバくない!?」
切島　「先生！これヤバいって!!」
（オ）マイト「双方！…中ｓ！」
オールマイトが訓練を止めようとしたその時！
――ビル２階――
緑谷　「いくぞ！３人とも!!」
爆豪　「あ☒あ☒あ☒あ☒!!」
――ビル５階――
麗日　「うん！」ピタッ
鎌切・回原「「おうっ！」」ザッ！
飯田　「？」
円場　「？」

――ビル２階――

緑谷　「ＳＭＡＳＨ!!!」ボォン！…ブオォッ!!

爆豪　「なっ!!?」

緑谷は天井に向かってＯＦＡ１００％を打ち放つ。そしてそれは天井をどんどん破壊していき屋上まで突き抜けてしまう。

ブオオオォォ!!!バゴンッバゴッバゴゴゴゴッ!!!!

――ビル５階――

バゴオォンッ!!!

円場　「うおああっ!?」

飯田　「なっなんだこれは!?むっ!?」

麗日　「ゴメンね飯田くん即興必殺！彗星ホームラン!!」ガキガキガキガキン!!

突然床が壊れたことに驚く飯田達。それに対し麗日は個性で浮かしたビルの柱をバットの様に振り、壊れた床の破片を飯田達に向かって容赦なく打つ。

飯田　「ホームランではなくないかーーー!!」

円場　「どわーーー!!」

鎌切　「麗日乗れ！」
麗日　「うん！超必！」タッ…スト…
鎌切　「飛ばすぞぉ！うおりゃぁ!!」ブォン！
　鎌切は面積が大きい刃物を出し、その側面に麗日を乗せて力一杯核に向かって投げ飛ばす。
麗日　「うおぉ…りゃ！回収!!」ピョォーン…ガシッ！
飯田　「あっ！ああーー!!核ぅーーーー!!」核ぅーーーー核ぅーーーー
　――ビル2階――
爆豪　「……!!…てめぇ…ハナツから…やっぱ舐めてんじゃねぇか!!」
緑谷　「ハァハァ……使うつもりはなかったんだ…全力で使うとまだ…ハァ…体が耐えられ…な
　いから…ハァハァ…」ガクッ…
爆豪　「!?……」
　緑谷は自身の個性で負傷した右腕を抱えながらその場に膝をつく。そしてオールマイト
　がヒーローチームの勝利宣言をする。

（オ）マイト『ヒーローチーム…』
『ＷＩＩＩＩＩＩＩＩＩＩＮ!!』
爆豪　「（右…デクは読んでいた…読んだ上で訓練に勝つ算段を…しかも物理的攻撃効かねえの
に…俺は直接…そりゃつまり…ガチでやり合っても俺は…デクに…!?）はっ!…はあっ!…
はあっ!」
息が荒れる爆豪。そこにビル内部にやってきたオールマイトが声をかける。
（オ）マイト「戻るぞ爆豪少年、戻って講評をするよ。結果はどうであれ振り返ってこそ経験は活
きるんだぜ。緑谷少年!意識はあるかい?」
緑谷　「は…はい」
（オ）マイト「よし!と言ってもその腕じゃ授業を受けるのは無理だから、搬送ロボに乗ってリカ
バリーガールの治療をうけよう!」
緑谷　「分かりました…っ痛つ…」
緑谷が搬送ロボでリカバリーガールの元へ送られた後、講評の時間が始ま

る。ちなみに

物間は床が壊れた衝撃で目を覚ましている。

――地下モニター室――

（オ）マイト「まぁとは言っても今戦のベストは鎌切少年、回原少年と飯田少年、円場少年だけど

ね！」

飯田　「なな！」

円場　「なんで俺らが？」

蛙吹　「勝ったお茶子ちゃん達じゃなくて？」

（オ）マイト「なんでだろうな～？わかる人!!」

オールマイトが自身の腕を上げながらA組B組の皆に聞くと…

八百万「はい！オールマイト先生！それはその4人が一番状況設定に順応していたからです。爆豪

さんの行動は戦闘を見るからに私怨丸出しの独断行動、そして先ほど先生が仰って屋内

での大規模攻撃は愚策。緑谷さんも同様の理由ですわ。物間さんは訓練中なのに調子に

のって自爆、味方が不利になるという状況を作りだしてしまいました。麗日さんは中盤
からの気の緩み、最後の攻撃が乱暴すぎること。張りぼてを核として扱っていたらあん
な危険な行為できませんわ。相手への対策をこなし且つ核の争奪をきちんと想定してい
たからこそ、飯田さんと円場さんは最後の対応に遅れた。鎌切さんと回原さんも設定に
順応していましたが、最後の勝ち方は訓練という甘えから生じた反則のようなものです
わ！」ぺらぺら～
シ～～～ン…
（オ）マイト「（思ってたより言われた!!）まぁその通りだ！正解だよ!!くぅ!!」
八百万「常に下学上達！一意専心に励まねばトップヒーローになどなれませんので!!」
爆豪「……」
オールマイト「そっそうだ！機神少年！君は何かあるかい？」

クラフト「えっ俺すか!?」

オールマイトは急にクラフトを指名する。

クラフト「え～でもまぁ大体は八百万の言った通りだと思います。まぁフォローするなら即興で技を作ったのはよかったんじゃないすか?プロになったら状況に素早く対応しなきゃいけないと思うんで!」

(オ)マイト「なるほど!ありがとう機神少年!とまぁあまり落ち込まずに今回の経験を次に生かすようにね!!じゃあ場所を変えて第2戦目をやろう!!」

A組B組「「「「はいっ!!」」」」

1戦目からなかなかの訓練だった為、みんなの士気も上がりながら第2戦目に移ろうとする。

第１２話　Ｂ対Ｉ　油断は禁物だよ轟くん!!

１戦目が終わり訓練によって損傷したビルを変えて第２戦目が行われる。

第２戦目はヒー

ローチームがＢチーム、敵（ヴィラン）チームがＩチームになった。

――グラウンドβ――

――ビル１階――

障子「…４階の北側の部屋にまとまっているな」ギュルッ…ピクピク…

障子は複製腕の先端を耳に複製しビル内部の状況を把握しチームに伝える。

凡戸「なるほどー」

轟「危ないから外出てろ、向こうは防衛線のつもりらしいが…」ヒュォォ…

パキパキッパキィンッ!!!

轟はチームの３人に外に出ろというと瞬時にビル全体を凍らせる。ビルを凍らせたこと

に轟以外の全員が驚く。

障子「なっ…」

凡戸　「わぁーすごーい」
柳　「やばっ…」
――地下モニター室――
（オ）マイト「仲間も巻き込まず且つ核兵器にもダメージを与えずさらに敵も弱体化！」（（ぶるぶる））
切島　「最強じゃねぇか!!」（（ガクガク））
A組B組　「すげぇけど寒い!!」「冷えるー!」
氷の冷気によって寒くなるモニター室。
蛙吹　「けろぉ…」うつらうつら…
クラフト「ん?…大丈夫か蛙吹?」
蛙吹　「けろっ…梅雨ちゃんと呼んで、私個性の関係で寒さに弱いの…」
クラフト「そうなのか…梅雨ちゃんこれ着とけよ」ばさっ
クラフトは自身のコートを差し出す。
蛙吹　「ケロッそれだと機神ちゃんが寒いわよ?」（（ぶるぶる））
クラフト「俺は大丈夫だ（ネツネツの能力）」シュウゥゥ
クラフトは個性を発動させ自身の体温を上げる。それと同時に周囲の温度も上がり暖か

くなる。

蛙吹　「すごいわね…ありがとうとても暖かいわ」にこっ

クラフト「それはよかった（笑）」

耳郎　（クラフトのコート！羨ましい／／!!）

瀬呂　「おほーあったけぇ～機神マジサンキューだぜ！」

クラフトの周囲が暖かくなったためその周りに段々集まり、特に女子は寒さに弱いため

か全員集まる。その光景を見て峰田がクラフトに迫る。

峰田　「機神～…てめぇなに羨ましいことしてんだよ（怒）」

クラフト「いやそう言われてもな…」

峰田　「ああ!?てめぇどうせ女子に囲まれて興奮してｎ《ベチンッ!!》」

蛙吹　「うるさいわよ峰田ちゃん」

蛙吹の舌による制裁をくらう峰田であった。その頃敵（ヴィラン）チームはというと

…

――ビル４階――

尾白　「なっこれは!?」

葉隠　「氷!?靴脱いでなくてよかった～」ほっ…

取蔭「なっ？履いといてよかったろ？」
鱗「3人とも動くな俺のウロコで壊すから！」ドシュドシュッ！
葉隠は最初から靴を脱ごうとしていたが、取蔭が助言しておいたおかげで素足のまま凍らずにすむ。そして鱗が個性で自身と3人の足の水を割っていく。
鱗（りん）　飛竜【個性：鱗（うろこ）】
自身の体に竜の様な黄緑色の鱗（うろこ）を鎧のように生やすことができる。飛ばすのはサポート
アイテムを使って撃ちだしている。防御にも使え、逆向きに生やして当たった相手を削るようなことも出来るぞ！
葉隠「わぁーありがとう鱗くん!!」
尾白「助かった！」
取蔭「いや～鱗がいて助かったよ～」
鱗「全身凍ってたらどうしようもなかったけどな（笑）」
取蔭「さて相手はたぶんこっちが動けないと思ってるだろうから驚かせてやろうぜ！」

葉隠「そうだね！私本気出すよ！うおー！」ぬぎぬぎ
鱗「……（アイヤー…）」
尾白「……（葉隠さん透明人間としては正解だけど…女の子的にはモロＯＵＴだな…）」
敵（ヴィラン）チームが相手を待ち構えているときヒーローチームはすぐ近くまで来ていた。
――ビル４階――
轟（あとは核を回収するだけ…）
このとき轟は相手はどうせ動けない状態であろうと決めつけており油断していた。そして轟が核のある部屋に入る。
轟「さて…なっ!?」ギィィ…
取蔭「おやおや～どうしたのかな驚いた顔して？（笑）」ケラケラｗ
鱗「なんで俺らがどうして動けるのかだろ？」
轟「ふん…ならまた動けなくするまでだ…！」パキパキパキッ！
尾白「おっと！」バッ！
鱗「余裕ぶっこいて４人も相手できるのかよ！」ドシュシュシュシュッ！

轟が再び凍らせて動きを封じようとするが避けられてしまう。そして鱗がウロコを飛ばして攻撃するが、氷の壁を作り出し防御する。

轟　「っ!?…《キィンッ!ドガガガッ!》(んだこれ…ウロコ!?そうかこれで氷を割ったのか!!)」

取蔭　「あっはは!お仲間呼んだ方がいいんじゃないの(笑)?そうそう轟…後ろには気を付けなよ?」

轟　「あっ?何を言ってやが…!!」バッ!

取蔭に言われたことに疑問を持つがその直後、背後に気配を感じて横に素早く回避する。

葉隠　「とりゃー!!」ぐわっ!

轟　「っぶねぇな!」スザザッ!

葉隠　「ぬあー避けられた!」

尾白　「葉隠さん捕まえる時は静かに捕まえないと…」

葉隠が確保テープを後ろから巻きつけようとするがあと一歩のところで避

けられてしまう。そのとき外で待っていたヒーローチームの３人が、流石に遅いと気づき轟の無線に連絡しようとしていた。

――ビル屋外――

障子「いくなんでも遅くないか?」

凡戸「そうだねー」

柳「無線に連絡してみたら?」

障子「そうだな…」

障子が轟の小型無線に呼びかける。

――ビル４階――

轟「(流石に４人はキツイな…)…《ザザッ…轟、核は回収できたのか?》障子か…いや核は回収できてねぇ…それどころか交戦中だ!」

障子『なにっ!?よし分かった俺らもすぐに向かう!場所はどこだ?』

轟「４階の北側の部屋だ!」

障子『分かった、俺らが行くまでもう少し耐えてくれ!』

――ビル屋外――
障子「どうやら相手と交戦中らしい」
凡戸「ええーマジでー?」
柳「じゃ早く行かないと」
障子「よし行こう!」
タッタッタッタッタッ…
――ビル4階――
取蔭「お仲間との話はすんだかい?」
轟「ああ…でもその前に済ませたいな!」パキパキパキッ!
葉隠「うわわっと!」
取蔭「しまっ!」
轟「油断したな…」
取蔭「にっひっひ～(笑)そう思うじゃん」フワッ
轟「なにっ!?」
取蔭の足が凍らせたと思ったら足を残して体が浮く。正確には切り離したというべきだろうか?

取蔭（とかげ）　切奈（せつな）【個性：トカゲのしっぽ切り】
体を分割して自在に操作できる。空中に浮くことも出来るぞ！本体から離れた部位は一定時間で動かなくなり、その後本体で再生する。

轟「ちっ…厄介な個性だな…」
鱗「早く他の３人が来る前に確保しよう！」
尾白「とは言っても下手に近づいたら凍らされちまうぞ？」
鱗「俺と尾白が牽制するから葉隠か取蔭が隙をついてテープを巻いてくれ！」
葉隠「わかったよ！」
取蔭「りょーかい！」
轟「くっ…（ウロコを飛ばしてくる奴がなにげに厄介だな。尾白はそこまで脅威じゃねぇ問題は女子２人だ…透明に体を切り離せる個性、常に周りに気を張っておかねえとテープを巻かれちまう）」

――地下モニター室――

Ａ組Ｂ組「轟の個性で圧勝かと思ったな」「それでも脅威だけどなー」

上鳴　「うへーマジやべぇじゃん轟の個性」
八百万　「今回は鱗さんがいたおかげで何とかなりましたが、いなかったらそのまま負けていまし
たわ」
クラフト「なにか破壊できる個性じゃないとあの氷は厄介だね」
飯田　「うむ回原くんの個性とかなら対抗できるな！」
回原　「でも壊す速度より速くされたら無理かな」
上鳴　「何にせよ強いことには変わりないぜ」
モニター室では様々な感想がでる。そして轟が奮戦しているとそこにチームの3人がよ
うやく到着する。
障子　「轟！」
轟　「障子か!?」
凡戸　「大丈夫?―」
柳　「まだ生きてる?」
鱗　「アイヤー…来ちゃったよ」
尾白　「あれ?そういえば葉隠さんはどこに?さっきまで近くに?」

ヒーローチームが到着するがその直後、確保のアナウンスが流れる。

（オ）マイト『凡戸少年！確保ーー!!』

凡戸「えっ？」

轟「はっ？」

障子「なんだと!?」

柳「凡戸！足みて！」

凡戸「わあーほんとだ――！巻かれてるー！」

葉隠「へっへっへ～隙ありだよ！」

取蔭「葉隠ナイス!!」

ヒーローチームが到着したあとすぐに入口付近にコッソリ移動していた葉隠。そして隙をついて相手の1人に確保テープを巻いたのであった。

障子「そこにいるのか！…っ！移動したか…」ブォンッ…スカッ

葉隠「いつまでも同じ場所にはいないよ障子くん！」

柳「まじウラメシじゃん」

障子が凡戸の横にいるであろう葉隠を捕まえようとするが失敗に終わる。

鱗「こっちがガラ空きだぞ！」ドシュシュシュシュ！

柳　「しまっ！」
障子　「柳！」ガバッ
　鱗が柳に向けてウロコを撃ちだし虚をつかれた柳は対応に遅れる。がそこを障子が持ち
　前の巨躯で柳の前に出て庇う。
柳　「障子!?」
障子　「ぐっ！大丈夫だ…大したダメージはない。それよりケガはないか?」
柳　「うっうん／／大丈夫…／／／」
障子　「ならよかった」
轟　「ちっ！」パキパキパキ！
鱗　「おっと！」シュバッ
轟　「障子大丈夫か!?」
障子　「問題ない」
轟　「そうか…なら早いとこ核回収しねぇとな時間がきちまう」
障子　「そうしたいがいささかこちらが不利な状況だ」
柳　「なにかいい方法が…（ん?…これは）…ねぇ2人ともちょっといい?」
障子　「なんだ柳?」

轟「どうした?」
柳「私がコレを使って気を引くから2人はその間に…」
障子「それは…分かったやってみよう」
轟「しかたねぇか…」
障子「俺が先に行こう、轟は俺の後ろで柳はサポートを頼む」
轟「おう」
柳「分かった」

ヒーローチームは部屋に落ちていたあるものを使って行動を起こす。
取蔭「何やら企んでるね～（笑）」
鱗「油断するなよ!」
葉隠「大丈夫!私がまた捕まえて見せるから!」ウォー!
尾白「さっき見たいに上手くいけばいいけど…」
鱗「来るぞ!……って正面突破かよ!!」
障子を先頭にその後ろを轟が後に続き、柳は動かずに個性を使って2人のサポートをする。

取蔭「ちょっと舐めすぎじゃない！鱗！」ヒュウンヒュン！
鱗「分かってる！」ドシュシュシュシュ！
取蔭は自身の体を分割させて障子にぶつけ、鱗もウロコを飛ばして動きを止めようとするが…
障子「ぐっ！」ドカドカドカッ!!
取蔭「ちっまるで戦車みた…ん？なんｄ…いたたたた!?」バシバシバシッ!!
葉隠「取蔭ちゃｎいたたたた!!」バシバシバシッ!!
轟「そこか」パキィン！
葉隠「ぬわーー!!」
ウロコが当たっていることにより場所がバレてしまい動きを封じられる葉隠。
鱗「取蔭!?葉隠!?あれは…俺のウロコ!?」
柳「そうあんたのウロコだよ…床に一杯落ちていたから使わせてもたったよ」
柳　レイ子【個性…ポルターガイスト】
身近にあるものを操ることができる。ただしヒト一人分程の重量まで。人も動かすこと

も可能。
鱗　「アイヤー！マジか！」
障子　「余所見は危ないぞ」ガシッ
鱗　「うおっ！はっ離せ！」ジタバタッ！
障子　「悪いな」シュル…ギュ…
目を離したすきに障子に捕まってしまい確保テープを巻かれてしまう。
（オ）マイト『鱗少年確保ーーー!!そして取蔭少女も確保―!!』
尾白　「えっマジかよ!?」
柳は確保テープも一緒に飛ばしてウロコに気を取られている間に取蔭の体にテープを巻
いたのであった。
轟　「後はお前だけだぞ」
尾白　「くっ……!……わかった降参（苦笑）」
（オ）マイト『尾白少年、今回の訓練には降伏宣言は入っていない。理由を聞いていいかい？』
尾白　「はい、理由はこのまま戦っても俺に勝ち目がないこと、それに早くしないと葉隠さんが

凍傷とかになるんじゃ…」

――地下モニター室――

A組B組　「「「「あっ……」」」」

(オ)マイト「あっ……うっうん！なるほど分かった！尾白少年の降伏宣言を認め、ヒーローチーム

のWIIIIIIN!!」

こうして第2戦目のBチーム対Iチームの対戦はIチームが最後に降伏するという形で終わった。その後、モニター室で講評し次の対戦に移る。

第１３話　Ｃ対Ｅ　峰田ほどほどにしとけよ！

――グラウンドβ――

――地下モニター室――

（オ）マイト「よしでは次の組を発表するぞ！次はの組はぁ～こいつらだ!!Ｃチームが敵（ヴィラン）！Ｅチームが

ヒーローだ!!」バッ！

――ビル５階――

峰田　（うっひょおおぉぉ!!マジかよおいらのチーム、おいら以外全員女子じゃねーかよ!!最

高じゃねか…へへへ、これで心置きなく女子の体を訓練という名目で見れるぜ！）

八百万「峰田さん！ちゃんと聞いておられますの!?」

峰田　「えっ!?おっおう！聞いてるぜ！」

八百万「まったく何を考えていますの？もしかして何かいかがわしい事でも考えているのでは？」

小大「ん」
峰田「いやいやいや！おいらはそんなこと全然！」
角取「怪しいデース…」
峰田「ほっほら早く作戦考えないといけないんじゃないのか!?」
八百万「…そうですわね、今は訓練に集中しませんと」
小大「ん！」
角取「Ｏｈ！その通りデース！どんな風にシマショウ！」
八百万「では……」
峰田（あぶねぇあぶねぇ……危うくおいらの企みがバレちまうとこだったぜ）
女子の体が訓練よりも気になる峰田であった。そして峰田がそんなことを考えているうちに訓練が始まる。
――ビル1階――
芦戸「よーし！ちゃちゃっと核を見つけて勝っちゃおう!!」
吹出「そうだね！こう…ズバーッて見つけて相手も捕まえよう！」
青山「僕がいるから大丈夫！」
塩崎「ああ…このチームは大丈夫なのでしょうか？これも神がお与えになった試

練なのでしょ
うか？」
芦戸　「もー塩崎ちゃんは心配しすぎだよー（笑）」
自分のチームに不安を抱いてしまう塩崎。
芦戸　「まぁそれよりこれからどうするの？核は上にあるんでしょ？みんなだいだいそうしてる
し？」
吹出　「いやいや芦戸、これ一応訓練だからね？」
塩崎　「そうですこれは訓練であり、屋内での立ち回りや戦闘の際の立ち回りなど知るための訓
練。遊び感覚でやっていいものではないのですよ？」
芦戸　「あははー（笑）そうだったごめんごめん（笑）」
塩崎　「死角や罠に気を付けながら各フロアを探すしかありませんね。私のツルを使って索敵に
近いこともできますが、相手に見つかってしまいますので地道に行くことを提案しま
す」

吹出　「まぁそれしかないかな?」
芦戸　「よーし!それじゃあさっそく行ってみよう!」
芦戸が自分の個性【酸】を使い滑りながら通路を進む。その際にジャンプしたことに
より、酸が飛び散ってしまい青山のマントの一部に穴が開いてしまう。
一方その頃 敵(ヴィラン) チームは八百万が個性【創造】で核を置いている部屋の防御を固めた
り、部屋近くの通路に罠を仕掛け相手が来るのを待っていた。ちなみに八百万や他の女
子がバリケードを組み立てているとき峰田は、その3人のお尻を観察しておりそれに気
づいた八百万から睨まれてしまった。そしてヒーローチームは核があるフロアまで特に
何もなく、目的のフロアに到着する。
芦戸　三奈【個性：酸】
身体中から溶解液（酸）を出すことができる。いろいろな物を溶かせるぞ!溶解度に加え

粘度も調節可能。溶解度を調整することによって様々な使いかたもできなかなか高い汎
用性がある。
塩崎　茨【個性：ツル】
頭の髪がツルになっている。ツルの髪は伸縮自在で切り離すことも可能。切り離しても
コントロール出来る。水と日光をしっかり摂っていればすぐに生えてくる。つまりハゲ
ない。
――ビル５階――
芦戸「４階まで何もなかったね～」
吹出「ということはこのフロアに核があるってことだね」
青山「僕が輝く時間がついにくる！」
塩崎「ここから先はより一層気を付けていかねばなりません」
芦戸「分かった！じゃさっそく行こう！」ダダダッ
塩崎「ああっ焦ってはいけません！」
芦戸「大丈夫大丈ｂ《グッ…ピンッ！》…うん？」

バァンッ!!

芦戸が何も警戒せずに通路を進むとピアノ線のようなものを足で引っ掛けてしまう。そ

の瞬間、芦戸に大量のＢＢ弾が襲う。

芦戸「イタタタタッ!!!」《ビシビシビシッ!!》

吹出「芦戸！」

塩崎「大丈夫ですか!?」

青山「ナニッ!?」

３人が芦戸の元へ駆け寄る。そして芦戸のすぐ近くには少し湾曲した弁当箱のようなも

のが転がっていた。

――モニター室――

葉隠「なにあれー!?なんか弾けたよ!?」

切島「なんかちっちゃい玉が転がってねぇか?」

蛙吹「敵（ヴィラン）チームが仕掛けたトラップかしら?」

取蔭「なんかめっちゃ痛そうだったけど」

クラフト「あれは…」

耳郎　「？…クラフトあれが何か知ってるの？」
クラフト「あれはたぶんクレイモアだろう」
耳郎　「クレイモア？」
障子　「機神、そのクレイモアというのはどういうものなんだ？」
クラフト「クレイモアは簡単に言うと地雷だよ」
上鳴　「地雷!?」
　地雷という言葉に反応する上鳴。
クラフト「指向性対人地雷Ｍ１８クレイモア…あの少し湾曲した弁当箱みたいな箱に７００個のパチン
　コ玉ぐらいの鉄球が入っている。使われている爆薬はプラスチック爆薬、ドラマや映画
　で聞いたことない？」
葉隠　「あーなんかアクション系の洋画とかで聞いたことあるかもー！」
クラフト「そーそー、軍や警察なんかでも幅広く使われているものでね、それであの箱の中に爆薬
　が入ってて次に約７００個の鉄球の球が入ってるの。まあこれは訓練だし流石に本物は

使っちゃいけないから、バネ仕掛けの物を用意したんだろう。球もたぶんB弾とか
じゃない？」
障子　「なるほど、芦戸はそれに引っかかってしまったというわけか」
クラフト「まぁこれが訓練であれが偽物でなければ芦戸は即死だったけどね…」
拳藤　「即死って…マジ？」
クラフト「マジだよ、至近距離での爆発、その爆発の威力によって７００個の鉄球が自身にめがけて
向かってくる、避けるのは不可能だな」
耳郎　「そっその場で治療すれば…」
クラフト「鉄球によって体に無数の傷や穴が出来て大量の出血による出血死あるいはショック死、
奇跡的に助かったとしても後遺症とかが残るだろうな…」
クラフトの説明を聞き背筋が少し寒くなるクラスメイト達。
上鳴　「うへぇー…そうはなりたくはないな…」
（オ）マイト「先ほど機神少年が言った通り、芦戸少女はこれが実戦であれば死んでいたというこ

とになる。敵（ヴィラン）の中にはあのトラップのように一撃で死に至らしめるトラップを仕
掛けてくる奴もいる。相手がどんな奴であれ油断はしてはいけないよ諸君!!」
Ａ組Ｂ組　「「「「《ｂ》はい!!」」」」
――ビル５階――
八百万　「先ほど私が仕掛けた罠が発動したようですね」
小大　「ん」
角取　「そのようデース、痛がっているような声が聞こえマーシタ！」
峰田　（中々３人とも発育が進んでいる…ほんとにこの前まで中学生だったのか？こりゃあますますすこの後どう成長するのか楽しみだぜぇ！）
八百万　「…峰田さん？ちゃんと聞いていまして？」ジロッ…
峰田　「えっ…おっおう！もちろんだぜ!!敵が近くまで来てるんだろ！」
角取　「Ｏｈ…峰田さんはまたイヤラシイこと考えていましたネー！」
小大　「ん…」こくり…
峰田　「ななっ何を言って!?そんなこと考えてないぜ！」

八百万「まぁそのことについての真偽は後にしましょう。今は訓練に集中しましょう！」

八百万がそう締めくくると自分たちの部屋の扉がゆっくりと開く。

吹出「みんなたぶんここだよ！だけどバリケードか何かで入り口は塞がれている!!」

青山「僕のレーザーで開けてあげる！」

塩崎「いけません青山さん！バリケードを貫いて核に当たってしまう可能性があります。ここ」

は芦戸さんの個性をお願いします」

芦戸「ふふーんＯＫ!!それじゃあ…とりゃあぁぁ!!」ビシャッ！…ジュウウゥゥ…

吹出「開いた！」

ついに両チームの戦いが始まる。

芦戸「へっへっへ～観念しろぉ～！」

角取「そうはいきまセーン!!」

小大「ん！」

八百万「なにやら1人はとても痛そうな跡が体にありますが道中何かありましたか

塩崎「もしかしてあの罠を仕掛けたのはあなたですか？」
峰田（ほう…あの女子もなかなか…）
八百万「ええその通りですわ、ちゃんと引っかかってくれて仕掛けた甲斐がありましたわ」
芦戸「もおー！あれめっちゃ痛かったんだからね!!」
吹出「ドキッ！ってビックリしちゃったよ!!」
青山「僕も☆」
塩崎「みなさんお喋りはこのくらいにして核を回収しましょう」
角取「そうさせると思いマスカ？」
小大「ん」
芦戸「なら先手必勝!!」スイィーッ!!
芦戸が自分の酸を利用してスケートの様に滑り小大に迫る。
小大「ん!?」
角取「そうはさせまセーン!!」ヒュウンッ！
芦戸「捕まえｔ《ドガッ！》うぎゃっ！」ドタッ！
塩崎「芦戸さん!?」

芦戸が小大を捕まえようとした瞬間、何かが芦戸の前に現れ突き飛ばす。
芦戸「いててて…私なにに飛ばされて……つの?」
角取「そうデース!それは私の角デース!!」
角取　ポニー【個性：角砲（ホーンホウ）】
頭にある2本の角を飛ばし操ることが出来る。飛ばしてもすぐ生えてくる。
角1本で人間1人を持ち上げるパワーがあり、自身も角の上に乗って空中を移動するよ
うな使い方もできる。しかし個性の性質故か角質のケアが欠かせない。
吹出「うーん厄介な…（ん?）」
ここで吹出はあることに気づきこっそりと行動する。
塩崎「出来ればこれは使いたくはなかったのですが勝つためには仕方ありませんか…」
芦戸「なに?何かあるの!?」
塩崎「使えばこの訓練には勝てると思います…ですがその行動は本当にいいのか迷っていま
す。この訓練は協力して勝つことも大事なことだと思いますので…」
芦戸「もー塩崎ちゃんはまじめすぎるよー!勝てると思うならチームの為にも使

うのがいん
じゃない？」
青山　「ぼくもそう思う☆彡」キラン
塩崎　「……そうですね、芦戸さんの言う通りですね。負けてしまっては意味がありません！」
八百万　「お話はすみましたか？」
角取　「何やら企んでいマース！」
小大　「ん」
再び戦闘が始まろうとしたときオールマイトの確保宣言の声が無線に響く。
（オ）マイト『峰田少年!!確保ーーー!!!!』
八百万　「えっ!!?」
角取　「Ｏｈ!?いうのマニ!!?」
小大　「ん!!?」
突然のチームの確保宣言に驚く敵（ヴィラン）チーム。
芦戸　「なんで私何もしてないよ!?」
塩崎　「一体だれが!?…そういえば吹出さんは!?」
青山　「見て☆」

吹出「へへっみんな黙って行動してごめんよ」
峰田「うう～やっちまった～」
吹出の元には確保テープを巻かれた峰田が半泣きの状態で捕まっていた。
芦戸「すごーい！ねぇどうやって捕まえたの!?」
吹出「いやーなんかふと峰田を見たらさなんか…他の事に気を取られている感じでさ、コソコソっと行って後ろからガバッて捕まえたんだ!!」
芦戸「すごーい!!」
八百万「やっぱり峰田さん他のこと考えていましたね！」
角取「きっとイヤラシイことデース！」
小大「ん」
塩崎「そのことは後でご本人に聞いてください。そろそろ時間もないので決着を付けさせてい
ただきます！」
八百万「皆さん何か来ます！気を付けて！」
シュルルッ!!ズアアッ!!
塩崎は部屋が埋まるくらいにツルを大量に伸ばして部屋を囲む。そしてそ

のまま八百
　万・角取・小大を大量のツルで動けないように顔以外をツルで巻き付ける。
八百万「くっ！この量はさすがに…」
角取「引きハガそうにもトゲが食い込みますから痛いデース!!」
小大「ん!!」
塩崎「私が相手を押さえておきますのでその間に核の回収をお願いします！」
芦戸「オッケー!!」タッタッタッ
　芦戸が返事をすると素早く核のところまで行きタッチすると訓練の勝敗が決まる。
（オ）マイト『ヒーローチーム！ＷＩＩＩＩＩＩＩＩＮ!!!!』
　こうしてＣチーム対Ｅチームの戦闘訓練は終了したのだが講評の時間は少し荒れた。
　――地下モニター室――
（オ）マイト「それじゃあ講評の時間だ！今回は誰が良かったか分かる人！」
骨抜「はい」
（オ）マイト「はい！骨抜少年！」
骨抜「まず塩崎と吹出、それに八百万と角取と小大の５人だと思います」

（オ）マイト「うむその通り！この５人は状況に合わせた行動をよく取れていた。そして他の３人だ
がまず芦戸少女だが、八百万少女が仕掛けた罠に引っかかってしまってしまって
いる。これは実戦ならすでに死んでしまっていてもおかしくない！芦戸少女は今回
の経験を次に生かせるといいだろう！」
芦戸「うぅわかりました…」チラッ
芦戸がクラフトの方を横目で見る。その目はなにかファローしてほしいような目であった。
クラフト「（えっなんか芦戸がこっち見てるような…もしかして俺に何かしらのフォロー求めてる!?）…えーと、はい」
（オ）マイト「はい機神少年！」
クラフト「まあ今回の芦戸は警戒も全然しておらずむしろ相手の罠にかかってしまったり減点が多

いですが、映像を見る限りはその場の雰囲気や緊張を和らげているように見えましたので、その辺は将来プロになって必要な場合ってあると思いますので良いと思いました」

芦戸　「！」パアァ！

フォローを入れたことで顔が明るくなる芦戸。

（オ）マイト「うむ！その場の緊張などを和らげることは時として必要になってくる！機神少年なかなかいいところに気が付いたね!!（ナイスフォローだよ機神少年！ありがと！）」

心の中で感謝するオールマイトであった。

そして青山の講評をすると最後は峰田の講評なのだが…

（オ）マイト「さて最後は峰田少年だが！」

八百万　「はい！オールマイト先生！」

（オ）マイト「ん、どうしたのかね八百万少女？」

八百万　「峰田さんですが訓練中にもかかわらず心ここにあらずといった感じでした。それに何や

ら私たちの体を凝視しているように見えました」
角取「ソレハ私も思ーいマシタ！」
小大「ん！」
葉隠「あーそれ私も思ったよ！」
耳郎「ウチもなんか変だなって思った」
拳藤「ねぇあんた何見てたの？」
峰田「おおおいらは何もしてねぇ！」
取蔭「その動揺は逆に怪しいね（笑）」
蛙吹「峰田ちゃんここは正直に話した方がいいわよ」
女子からの問い詰めに動揺しまくる峰田…そしてそんな峰田と目が合ってしまうクラフト。その目は（別の意味で）助けを求めるものだった。しかしクラフトはその場で静かに
両手を合わせて合掌する。
クラフト「南無阿弥陀仏……（ ☒ ω☒人）」
峰田「てめえええぇぇ!!」
上鳴「峰田……骨は拾ってやるから安心しろ…たぶん」

峰田「いまたぶんって言ったよな!?」
切島「峰田！漢なら正直に言った方がいいぜ！」
鉄哲「おうその通りだ峰田！」
瀬呂「安心しろ俺も合掌してやる（　⊠　ω⊠人）」
峰田「そういうことじゃねぇぇ!!!」
飯田「峰田くん！やましいことをしたのならちゃんと謝罪したまえ!!」
八百万「さあ！どうなんですか!?」
峰田「ぐっ…べっ…弁護士をよべぇー!!」
耳郎「あんたにそんなものはないんだよ！」
葉隠「さあ吐け！峰田くん」
ワーワー!!ぎゃぎゃ―!!
女子と峰田が騒いでいるとそこに治療を終えた緑谷が戻ってくる。
緑谷「ただいま戻りましたオールマ…イト…なにこれ…」
戻ってきたらよく分からない状況であるため困惑する緑谷であった。

第14話　F対J　漢らしいのはいいよね!!

――グラウンドβ――
――地下モニター室――

（オ）マイト「さて！峰田少年の事も一応解決し、緑谷少年も戻ってきたので次の組を発表しよう！」

峰田は女子からの問い詰めに最後まで抵抗したが、女子の多数決によって有罪になって

しまい今は瀬呂のテープでミイラみたいに巻かれ天井に吊られている。

（オ）マイト「さ～て次の対戦は～…こいつらだ！Fチームがヒーロー！Jチームが敵（ヴィラン）だ!!」

――ビル5階――

宍田「我々は敵（ヴィラン）でありますか！相手がどう来るのかワクワクしますな！」

瀬呂「へっへ～案外すんなり勝っちゃたりしてな！」

庄田「油断しては足元をすくわれてしまう」

切島「俺は正々堂々と正面からいくぜ！」

瀬呂　「まてまて、俺たちは敵（ヴィラン）側だぞ。そんな正面から行かずにここで待っていればいだろ?」
切島　「だが漢らしくねぇ!」
宍田　「まあまあ切島氏、正々堂々したいという気持ちも理解できますがこれは戦闘訓練です
ぞ。相手がどう来るのか考えなければなりませんぞ」
切島　「ぐっ確かにそうだな!だがやっぱり俺は正々堂々と闘いてぇ!」いよぉ～…ぽんっ!!（効果音）
庄田　「ならこうはどうだろう?切島くん1人は下の階に降りて相手の1人か2人を相手してもら
い、僕らがその残りを相手にするというのは?」
瀬呂　「上手くいけば数的有利ができるな、俺はその案でもいいぜ!」
宍田　「ふむ…その案ならば切島氏の希望も叶えられ、なおかつ上手くいけばこちらが有利にな
りますな!我もその案に賛成ですぞ!」
切島　「みんなすまねぇ!みんなの期待に応えられるように俺全力で頑張るぜ!!」
宍田　「期待してますぞぉ!!」

切島　「おうよ!!」

敵（ヴィラン）チームの作戦が大方決まったその頃、ヒーローチームも同じように作戦が決まっていた。

――ビル屋外――

鉄哲　「おっし!それじゃあ2組に分かれて別々のルートから探すって感じでいいのか?」

砂藤　「そうだな、もし相手が降りてきて迎撃しに来たら2人で倒せばこっちが有利になるしな」

口田　「……」コクコク!

泡瀬　「じゃあパワータイプの鉄哲と砂藤は別れた方がいいな。その方がバランスがとれる。俺と砂藤、鉄哲と口田で別れて行こう」

鉄哲　「わかったぜ!!よろしくな口田!!」

口田　「!!……」コクコクッ!

砂藤　「俺が前に行くから泡瀬はそのサポートを頼めるか?」

泡瀬　「わかった」

両チームの作戦が決まり訓練開始の合図が知らされる。
（オ）マイト『両チーム準備はいいかな?それでは屋内対人戦闘訓練開始!』
――ビル５階――
宍田「始まりましたなぁ!!」
切島「よし!俺はさっそく行ってくるぜ!!」
瀬呂「おう!気を付けろよ!」
庄田「危ない時は無理をしないようにね」
宍田「戦果を期待してますぞぉ!!」
切島「おっしゃあ!行くぜぇ!!」ダダダダッ!!
切島は意気揚々と下の階に向かう。
――ビル３階――
２手に分かれたヒーローチームは少しづつだが着々と進んでいた。
ガチャッ!
鉄哲「う～んねえなぁ…口田そっちはどうだ?」
口田「……（こっちもないよ）!」ブンブン
鉄哲「というこたぁ上にあるってことか…」
３階フロアを探し終えた鉄哲たちは核が上のフロアにあると結論付けたと

き同チームか
ら連絡が入る。
泡瀬　『ザザッ…こちら泡瀬、状況は?』
鉄哲　「おう泡瀬か!こっちはいま3階探し終えたところだが、何もなかったぜ!」
泡瀬　『ということは上か?』
鉄哲　「たぶんそうだろうな1階はどうだったんだ?」
泡瀬　『何もなかった、今2階に上がったところだ砂藤が確認しているがおそらく何もないだろう』
鉄哲　「ということは上だな…ん?」
泡瀬　『どうした?』
鉄哲　「いやなんか音が…」…ダダダダッ!
切島　「敵はどこだぁ〜…あっ…」
鉄哲　「あっ…」
鉄哲と切島が階段付近で出会ってしまう。
切島　「鉄哲ここであったが100年目!倒させてもらうぜ!!」ガキィン!
鉄哲　「へっ!その言葉そっくりそのまま返すぜ!!」ガキィン!

お互いが個性を発動し両方の拳を強く当て、甲高い音が通路に響く。
『おい鉄哲！誰かいるのか!?鉄哲!?』
泡瀬「ああ…切島が１人で来たぜぇ俺はこれからコイツと戦うから核はそっちで頼んだぜ」
泡瀬『分かった、早く終わらせろよ』
鉄哲「そのつもりだ！」ガキィン！
切島「話は終わったか？」
鉄哲「おう待ってくれてありがとよ」
切島「んじゃ…行くぜぇ鉄哲うぅ!!!」ダダッ！
鉄哲「来いやあぁぁぁ!!!」ダダッ！
切島「オラァッ!!」ブォン！
鉄哲「オラァッ!!」ブォン！
ガギイィィン!!!
熱き２人の漢の拳と拳が激しく衝突する。
そしてそれについていけず蚊帳の外となる口田。
――ビル４階――
素早く２階のフロアを探し終え外階段を使い４階のフロアに移動し核を探

すヒーロー

チーム。

泡瀬「どうだ砂藤!?」

砂藤「いやこのフロアに核はない！」

泡瀬「ということは5階か…」

砂藤「場合によっちゃあ2人で3人を相手にしなくちゃいけないか…」

泡瀬「厳しいな、口田はどうしてるんだ?」

砂藤「上に行こうとしたが切島が奮戦しているせいか上がれないらしい」

泡瀬「仕方ない俺たち2人で行くしかないか」

砂藤「大丈夫か?」

泡瀬「砂藤が最初宍田の相手をしてくれ、その隙に宍田の足を俺の個性で動けなくする。そう

すれば2対2に持ち込める。」

砂藤「それなら勝ち目ありそうだな！分かった任せてくれ！」

泡瀬「任せたぜ！」

一方その頃3階では…

ガアンッ!…ガギィンッ!!…ギギィン！

硬いものがぶつかり合う音が鳴り響いていた。
切島「オラァッ!」ドゴォッ!
鉄哲「ぐうっ!…お返しだぁ!!」バギィ!
切島「ぐあっ!…やるな鉄哲!」
鉄哲「お前もな切島!」
切島「だがそろそろ決着つけねぇとな…」
鉄哲「そうだな…たぶん次でつくだろうな…」
切島「へっ…行くぜ鉄哲ぅ!!ウオオオオッ!!」ダダダッ!
鉄哲「おうよぉっ!!ダアアアッ!!」ダダダッ!
熱き漢の闘いに決着がつこうとする。
切島「うおりゃあっ!!」ブォン!
鉄哲「だりゃあ!!」ブォン!
ガァギィィンッ!!!
切島「かっ……」
鉄哲「がっ……」
バタン……
互いの右ストレートが互いのアゴに入り同時に倒れる2人。両者ともに気

絶。

口田　「……（　；；・ω・、）《オロオロ》…！」タッタッタッ…シュル…ぎゅ

2人が同時に倒れたことにより少し動揺した口田だったが、確保テープの事を思い出し

倒れている切島に巻き付ける。

（オ）マイト『切島少年確保―!!鉄哲少年は戦闘により気絶!だが意識が回復すれば復帰可能だから

ね!!』

――ビル5階――

宍田　「なんと!切島氏が捕まってしまいましたと!?」

瀬呂　「だが鉄哲が気絶してるから人数は同じだ」

庄田　「彼が目を覚ます前に終わらせねばなくなった」

3人がそう話していると部屋の扉が開く。

砂藤　「ここに…あった!泡瀬あったぞ!」

泡瀬　「わかった!」

瀬呂　「ようやくおいでなすったか!」

宍田　「さあかかってきなさいヒーロー共!」

庄田「簡単には攻略させないよ」
泡瀬「いずれ口田と鉄哲がくる」
砂藤「俺たちはその間に核を確保するか人数を減らすだけだ！」
宍田「ふはははははっ！なら我の攻撃を防いでみよ!!」グアッ！
砂藤「ガリッゴリッ！…ふんっ！うおりゃあ!!」ガシィッ!!
砂藤は１０ｇの角砂糖を食べる。すると筋肉が膨張しパワーアップし宍田の攻撃を受け止める。
宍田　獣郎太【個性：ビースト】
獣化する。体格・筋力・聴力・嗅覚・視力が大幅アップする。テンションがハイにもなる。
砂藤　力道（りきどう）【個性：シュガードープ】
糖分１０ｇの摂取につき、３分間だけ通常時の５倍の身体能力を発揮する。しかし糖分をエネルギーに使ってしまうためか使いすぎると脳機能が低下してしまい、凄まじい眠気

や倦怠感に陥ってしまう。

宍田　「なんと我の攻撃を受け止めたですと!?」

泡瀬　「ナイスだ砂藤！少しの間そのまま宍田を抑えといてくれ！」

泡瀬は素早く砂藤の後ろに回り砂藤の脚の間に体を入れ、宍田の足に触ると個性を発動

する。

泡瀬　「溶接！」ピキピキピキッ！

宍田　「むっ!?これは!?足が動きませんぞ!?」

瀬呂　「宍田!?」

泡瀬　「へへっ…大人しくしといた方がいいぜ！」

泡瀬　洋雪【個性：溶接】

別々のものを分子レベルで結合できる。物質の制約はないが結合したいモノとモノに触

れていないと発動できない。解除も可能。

泡瀬　「ついでに確保！」シュルル…

（オ）マイト『宍田少年確保―!!』

宍田　「なんとおおおおお!!」

瀬呂　「ちょぉ～と雲行きが怪しくね？（苦笑）」
庄田　「まだ大丈夫」
瀬呂　「そうだ…なっ！」シャッ！
瀬呂が肘からテープのようなものを射出する。
瀬呂　範太【個性：テープ】
両肘からセロハンテープのようなものを射出できる。テープは手で引っ張らなくても
ノーモーションで射出・巻き取りが可能。見た目とは違ってかなりの強度があり、汎
用性が高い個性である。
砂藤　「うおっ!?」ビタッ！
庄田　「よし！そのまま抑えてください！」ダダッ！
瀬呂が砂藤の腕にテープをくっつけ動きを制限する。その隙をついて庄田が砂藤に攻撃
を仕掛ける。
泡瀬　「そうさせるか！」バッ！
庄田　「どいてください！」ドガッ！

泡瀬　「ぐっ！」
庄田　「ツインインパクト解放（ファイア）」
泡瀬　「《ドゴッ！》ぐほっ!?」ドッ！…ゴロゴロ…
砂藤　「泡瀬!?」
庄田　二連撃【個性：ツインインパクト】
打撃を与えた箇所に任意のタイミングでもう一度打撃を発生させる。二度目の打撃は数
倍の威力となる。二度目の打撃はもう一度加える必要はなく、本人の意思で発動させる
ことが出来る。
庄田　「余所見は禁物ですよ?」
砂藤　「しまっ!?《ドッ！》…ぐっ！」
庄田　「解放（ファイア）」
砂藤　「《ドグッ！》…ぐうぅ!?」ガクッ…
砂藤は鳩尾に撃ち込まれてしまったためその場にうずくまってしまう。
庄田　「よしこれで確保と、瀬呂君そちらは?」
瀬呂　「こっちも確保したぜ！」

その後、気絶から目覚めた鉄哲と口田が核を確保しようとするが、気絶から目覚めたば
かりの鉄哲はまともに戦えず口田も前衛タイプではないためあっさりと確保されてしま
い敵（ヴィラン）チームの勝利となった。
講評が終わった後切島と鉄哲はお互いに熱く褒めたたえていた。

第15話　G対H　適材適所は大事！

――地下モニター室――

（オ）マイト「よし！それでは機神少年の戦闘訓練を除けば4対4の訓練は最後になる！最後はGチーム がヒーロー！Hチームが敵（ヴィラン）だ！」

――グラウンドβ――

（オ）マイト『それでは屋内対人戦闘訓練スタート!!』

――ビル5階――

常闇　「黒影（ダークシャドウ）！」ズアッ！

（ダ）シャドウ『アイヨ！』

黒色　「ひひ…深淵を覗いているときが相手の隙…」

常闇　「ほほう…深き闇の中から審判を下すのか？」ソワ…

黒色　「審判…！」ソワ…

蛙吹　「盛り上がってるわね常闇ちゃんと黒色ちゃん」

小森　「2人とも楽しそうなんだノコ！」

同じ者同士で静かに盛り上がる男２人を見守る女子２人であった。
――ビル１階――
拳藤「どう耳郎?」
耳郎「５階の西側、４人一緒にいるみたい」
耳郎がイヤホンジャックを壁に差し込み索敵をし情報を集める。
上鳴「んじゃーパパっと５階に上がって核ゲットしようぜー!」
骨抜「いやここは慎重に周りを警戒しながら進んだ方がいい」
上鳴「えーなんでだよ?」
耳郎「あんたねぇ相手の個性もよくわかんないんだよ?なのに警戒もせずに進むなんて相手に
何してもいいですよーって宣言してるようなもんだよ?」
上鳴「むぅ…それもそうだな!さっすが耳郎ー!」
耳郎「あんたねぇ…」
拳藤「話はそこまでにして早く進もう。もたもたしてると時間切れになっちゃうよ」
耳郎「ごめん拳藤!もー上鳴がアホなこと言うから」
上鳴「俺のせいかよ!」

骨抜「まぁまぁ」

ヒーローチームは耳郎の索敵で早い段階で核と敵の居場所を知ることができたが、それ

でも死角からの奇襲や個性による攻撃を警戒しながら5階に向かう。

――ビル3階――

拳藤「耳郎、このフロアは誰かいる?」

耳郎「ちょっとまって…」

耳郎はイヤホンジャックを床に刺し込んで索敵をする。

耳郎「……いやこのフロアにもウチら以外は誰もいな…!……上鳴足元!!」

上鳴「うぇっ!!?」

耳郎が拳藤の方に振り返ったとき上鳴の影に何かがいることに気づく。突然のことに驚く上鳴だが、その際に足を咄嗟に上げたことにより回避する事が出来た。

黒色「ちっ……」トプン…

相手チームの黒色が顔を半分だすとすぐに影に潜る。

骨抜「今のは黒色か!?」

拳藤「あいつの個性!?まさか影に!?」

耳郎「もしそれだったら超厄介だよ…うちでも流石に音が拾えないよ…」
上鳴「うえぇマジかよ!?どうすんだよ!そんな相手じゃどうしようもなくね!?」
骨抜「まぁ落ち着け上鳴、まだ相手が影に潜める個性なのか決定したわけじゃない」
拳藤「骨抜の言う通りだ、さっきは偶然とはいえ耳郎のおかげで確保されずにすんだ。逆にこちらが警戒することで相手は慎重にならざるをえなくなった訳だ」
耳郎「まったく男のくせにウダウダと…もっとしっかりしてよ男でしょ?」
上鳴「なんか俺に厳しくね!?」
予想もしない奇襲を回避できたとはいえ奇襲を受けたことは事実であり、さらに周りへの警戒を強め進むことになったヒーローチームであった。
――ビル５階――
黒色「みんな…」
常闇「黒色か」
小森「のこ!」
蛙吹「黒色ちゃん奇襲は上手くいったの?」

黒色「いや…上鳴の足元にテープを巻こうとしたが…」
常闇「気づかれてしまったか」
黒色「ああ…あと少しだったんだが…」
蛙吹「気にすることないわ」
小森「そうノコ！」
常闇「だがもう奇襲は難しいな、相手もより警戒するだろうからここで迎え撃った方がいいだろう」
黒色「そうだな…次はやって見せよう」
常闇「ふっ…頼もしいな」
敵（ヴィラン）チームは奇襲が失敗したことを鑑みて下手に奇襲せず、あとはここで核がある自分たちがいる部屋で迎え撃つことにした。
――地下モニター室――
瀬呂「黒色さっき影から出てきたよな？」
葉隠「影に潜れる個性？」
クラフト「影だけじゃなく暗い所に潜れるとか？」

飯田　「なるほどその可能性もあるな。俺たちが見たのは影に潜るところを見たから影に限定し
てしまい他の可能性を捨ててしまっていたな」
モニター室で黒色の個性について考察していると…
緑谷　「影に潜れる個性…いや機神くんが言ったように暗い所ならどこでも潜れる個性なのかもしれない…もしそ
うなら通気口などを利用すればかなり便利な個性だ。オールマイトが敵（ヴィラン）による事件は屋内の方が多いと
言っていたから立て籠りなんかじゃ相手に気づかれずに……」ブツブツブツブツ……
ブツブツと小さく喋りながら緑谷が分析モードに入っていた。
クラフト「おーい緑谷～…緑谷」トントン
緑谷の肩を軽く叩いて呼びかける。
緑谷　「……ブツブツ……えっ?あっ!ごめん機神くん!僕またしてた?」
クラフト「分析はいいけどそのブツブツ言うのは直さないとな（笑）」
緑谷　「ははっ…気を付けてはいるんだけどね（苦笑）」
飯田　「緑谷君は分析するのが得意なのか?」

緑谷　「う～ん…ヒーローが好きだから個性についても色々考えるようになっちゃって…はは

はっ…あんまり役には立たないかもね」

飯田　「何を言う！相手の分析が出来るということは様々な状況に対応できるじゃないか！プロになれば必要になってくることだ！恥じることはない!!」

緑谷　「!!…ありがとう飯田くん」

飯田に自分の事を褒められ嬉しく思う緑谷であった。黒色に奇襲されたヒーローチーム

は警戒を強めながら進むが相手は奇襲をやめたので当然奇襲はなくヒーローチームは何

事もなく5階フロアに到着する。

――ビル5階――

拳藤　「何もなかったわね…」

耳郎　「1回失敗したからやめたとか？」

骨抜　「ありえるな…奇襲はバレずに成功することに意味がある。最初でバレたら

意味がないし
　逆に警戒されるから相手が動いてこなかったのは説明がつくね」
上鳴「なんだよーじゃあ相手は核の部屋で待ってるってことか?」
骨抜「恐らくそうだろうけどただ待ってるだけじゃないだろうね」
拳藤「ああ…確実に待ち伏せや罠を張ってるだろうね」
耳郎「みんなこの先の廊下をまっすぐ行って左の部屋に相手がいるよ。動きは…少ないな」
拳藤「あんまり動かずにいるって感じかね～…」
上鳴「じゃあちゃちゃっと核回収しようぜー!骨抜の個性使えば一発っしょ?」
骨抜「確かに使えば核と相手を捕まえることはできると思うけど、下手に使えばビルの安全性
　に問題が生じるかもしれないから…できればあまり使わずにすめばいいんだが…」
耳郎「ちょっとは自分で何とかしようと思わないのアンタは?」
拳藤「そうだよなんか他人任せな感じするけど?」
上鳴「なんか俺に厳しくね!?」
骨抜「まぁまぁ」

女子にまたもやダメ出しをくらう上鳴であった。
タッタッタッタッタッ…
耳郎「ちょっとまって…」スゥウ…カチッ！
核がある部屋の前に着くと耳郎が壁にイヤホンジャックを刺し込み、部屋の中の状況を探る。
耳郎「心音が3つ…たぶんさっきの影の奴はどこかに隠れていると思う…」
骨抜「伏兵として隠れているんだろう…」
ヒーローチームが部屋の内部を探っているのと同時に…
蛙吹「けろっ…来たわね…」
常闇「ああ…」
小森「緊張するノコ！」
黒色「ひひ…はたして俺たちに勝てるかな？」
敵（ヴィラン）が待ち構えていると扉がゆっくりと開く。
キイィィ……
拳藤「いたわね…大人しく核を渡してくれるかしら？」
常闇「素直に渡すとでも？」
耳郎「まぁそりゃそうだよね」

骨抜「１人いないようだけど…」
蛙吹「さぁ何の事かしら?」
上鳴「へっへ～そんなに余裕こいててていいのかな?」
小森「のこ?どういう事ノコ?」
上鳴「どういう事って?そりゃあ俺の放電で君ら一網打尽に…」
蛙吹「あら?そんなことしていいのかしら?」
上鳴「えっ?」
蛙吹「この核は本物として扱うように言われているわ。ならそんなことしたら核がどうなるか
　分かってるのかしら?」
上鳴「あっ……」
常闇「そういう事だ、さらにそんなことしたら仲間も傷つくぞ」
上鳴「みんなごめん!俺使えないわ!!」
耳郎「なに堂々と言ってんだよ!!」
常闇「さて来ないなら…こちらから行くぞ!!ダークシャドウ!!」ズアッ!
（ダ）シャドウ『アイヨ!!』
　コントのようなやり取りをしていたら黒い影のモンスターが攻撃してきた。

拳藤「ちっ！」ズムッ！ドガッ!!
常闇「むっ受け止めたか…だがどこまで耐えられるかな？」
拳藤「あいつは私が相手するからアンタらは今のうちに核を!!」
耳郎「分かった！」
骨抜「無理はするなよ？」
上鳴「気を付けろよ！」
拳藤「ああ！そっちもね!!」

拳藤が常闇と戦っている間に3人は核を回収しようと動くが相手はそうはさせてくれない。

蛙吹「あら？ここは通さないわよ。大人しく捕まってくれるかしら？」
耳郎「分かりましたって言うと思う？」
小森「思わないノコ!!」
蛙吹「されより足元は注意しとくべきと思わない？」
上鳴「へっ？まぁそりゃあ…」
骨抜「……!?…」バッ!!

骨抜がすぐさま自身の足元を見る。

黒色　「ひひ…まずはひとｒ…」
骨抜　「上鳴危ない!!」どんっ!!
骨抜が上鳴の背中を勢いよく前に押す。
上鳴　「うぇっ!?…《グラッ…ドシンッ!》ぐえっ!」バチチッ!
黒色　「えっ?」パッ…
上鳴が前に倒れた拍子で個性が少し発動し電気が少し放電される。その放電で影が照ら
され無くなってしまい黒色の体が本人の意思に関係なく出てしまう。
黒色　支配【個性：黒（ブラック）】
名前の通り〝黒〟に溶け込むことができ、かなり早い速度で移動できる。ただし黒い場所
がなくなると強制的にその場に出てしまう。
蛙吹　梅雨【個性：蛙】
蛙っぽいことができる。舌は２０ｍくらい伸びる。壁に引っ付くこともできるぞ!。
黒色　「……あれ?」
耳郎　「えっ?」

蛙吹「黒色ちゃん!?」ビッ！
唖然としている黒色を助けようと舌を伸ばすが…
骨抜「はい確保」
オールマイト『黒色少年確保ーーー!!』
常闇「なにっ!?」
拳藤「やった!!」
骨抜が蛙吹の舌が届く前に確保テープを黒色に巻き付ける。
蛙吹「ケロッ…遅かったわ…」
小森「黒色――!ごめんのこー!」
耳郎「今のうちに…」
蛙吹「そうはさせないわ耳郎ちゃん!」ばっ！
耳郎「やっぱ簡単にはいかないか」
そう耳郎が言葉を発したとき…
ぽこっ…
骨抜「ん?…きのこ?…」
ぽこっ…ぽこぽこ…
耳郎「ちょっ!?どんどん生えてくるんだけど!!?」

骨抜と耳郎の体のあちこちから突然キノコが生えまくる。
小森　希乃子（きのこ）【個性：きのこ】
キノコの胞子を放出できる。湿った範囲であればその分キノコをいくらでも生やせるこ
とができ種類もいろいろある。生やしたきのこは２～３時間で消えるためブッパ癖がつ
いてしまっている。
小森「のこのこのこ（笑）」
骨抜「なるほど彼女の個性か。実に厄介だね」
耳郎「あんたはいつまで寝てんだ!!」ドスッ！
上鳴「ぐえっ!?」
床に転がっている上鳴の背中を踏みつける耳郎だがあることに気づく。
耳郎「……ってなんであんたキノコ生えてないの？」
上鳴「えっきのこ？ってうわっ!?２人ともなにそれキモっ!!」
耳郎「あ□ぁ□!?」
上鳴「あっいえ！何でもないです!!大変だ―なんとかしないとー」
耳郎「…まあいいや、それよりなんであんたキノコ生えてないの？」

上鳴　「えっいやそう言われても俺にもよくわからん」
耳郎　「なんでだよ!!」
　　耳郎が切れのいいツッコミを入れる。その時、骨抜が推測を立てる。
骨抜　「……たぶん上鳴の個性だと思う」
耳郎　「えっ?骨抜どういうこと?」
骨抜　「上鳴の体にある電気でたぶん胞子が焼けてしまっているんだ。だからキノコが生えてこ
　　ないんだと思う」
耳郎　「なるほど…じゃあ上鳴あんた2人の相手よろしくね」
上鳴　「うえぇっ俺1人で2人も!?しかも相手女の子じゃん!!やりずれぇー…」
耳郎　「現状アンタしか動けないでしょーが!!ウダウダ言ってないでやる!うちもサポートするから!」
小森　「のこ～私の胞子が～」
上鳴　「女の子相手にあんまり暴力的なのはやりたくはないけどやるしかないか…」
蛙吹　「こっちも手加減はしないわよ上鳴ちゃん」
上鳴　「俺に触ったら痛いじゃすまないぜ」Ｂｚｚ!!

上鳴が個性を発動させ体にそって電気が少し走り明るく周りを照らす。その頃、拳藤と
常闇はというと…
ドカッ！　ガッ！　ズドドッ！
拳藤「くっ！…なかなか痛いわね！」
常闇「それはこちらも同じだダークシャドウと渡り合うとはな」
拳藤「それは誉め言葉として受け取っていいのかな?」
常闇「誇っていいだろう…だがそろそろ終わらせてもらうぞ！」
拳藤「ちっ！（まずいな…このままじゃ）」
常闇が決着を付けようと動いたその時、常闇の後方が明るく光る。
常闇「なっなんだ!?」
（ダ）シャドウ『ヒャッ!?ナンダヨ!?』
常闇の体から出ているダークシャドウがなぜか怯んでしまう。
常闇　踏陰（ふみかげ）【個性：ダークシャドウ】
様々な個性があるがその中でも珍しい個性。伸縮自在の鳥っぽい形の影のようなモンス
ターをその身に宿している。闇が深ければ深いほど凶暴になり強力になる

が制御が困難
になる。昼間などの日光下では攻撃力が中の下となるほど弱体化するが制御しやすくなる。日光以外にも電光や爆破による閃光などの強い光も弱点であり、黒影の体力（蓄えられた闇）が無くなれば、無力化される。やや癖が強い個性。

拳藤　「!!（この隙に!）…隙ありだよ!!」ダダッ!

常闇　「しまっ!?…」

ダークシャドウが怯んだ隙に本体の常闇に素早く近づき自身の個性で体を拘束する。

拳藤　一佳（いっか）【個性：大拳】

自身の両手を巨大化させることができる個性。最大で人間1人をすっぽり覆えるくらいまで大きくなり、大きさに比例してパワーが上がりそのパワーはかなりのもの。

拳藤　「…私の勝ちだね」

拳藤の大拳に捕まれてしまって動けない常闇。

常闇　「油断した…」
オールマイト『常闇少年!!確保ーーーー!!!』
蛙吹　「けろっ!?常闇ちゃん!?」
小森　「捕まっちゃったの!?」
常闇　「すまない…」
上鳴　「これでそっちは後2人だぜ～!降参した方がいいんじゃね～の?」
　上鳴が数的有利になったことで調子に乗る。しかし常闇との戦闘が激しかったせいか拳藤
　が…
拳藤　「ごめん…私あんまりこの後は活躍できそうにないわ…」
耳郎　「どうかしたの拳藤…!?」
　キノコまみれの耳郎が拳藤のほうに振り向くとそこには掌や腕が傷だらけになっている
　拳藤がいた。
耳郎　「大丈夫なの拳藤!?」タタタッ!
　耳郎が拳藤の元に駆け寄り傷だらけになっている掌をやさしく持ち上げる。
拳藤　「っ!…」

耳郎「ごっごめん！痛かった!?」
拳藤「大丈夫ちょっと痛むだけだから…」
耳郎「…わかった拳藤は後ろで控えてて」
拳藤「ありがたいけどいいの？」
耳郎「人数的にもこっちが有利だし無理な時は無理しちゃだめでしょ？」
拳藤「…わかったじゃあお言葉に甘えて後ろで控えておくよ。もしっていう時は出るから」
耳郎「分かった！」
拳藤「…だけどそんなにキノコだらけじゃあんまり締まらないね（笑）」
耳郎「そっそれはあんまり言わないで／／」
拳藤との話が終わると再び前に出る耳郎。
蛙吹「お話が終わったなら仕掛けさせてもらうわよ！」
耳郎「上鳴っ！出番だよ！」
上鳴「俺かよっ!?」
骨抜「俺と耳郎の個性じゃ周りへの被害が大きいからこの場で闘えるのはお前だけだからな。
心配するなちゃんとサポートする」

上鳴「うへぇー!俺のポジションしんどい!」
耳郎「男なら少しは体張りな!」
上鳴「なんか俺に厳しくない!?」
骨抜「来るぞ!」
骨抜が２人に叫ぶ。
蛙吹「ケロォッ!!」ビョンッビョンッ!!
蛙吹が天井や壁に張り付きながら素早く移動する。
耳郎「くっ!意外に速くて攻撃ができない!」
上鳴「これじゃどうしようも…ぐえっ!?」ベシッ!
骨抜「上鳴!?」
蛙吹の長く伸びる舌に背中を叩かれ再び前に転倒してしまう上鳴。
ドタッ!…
その倒れた所には倒れた上鳴に確保テープを巻こうと構えていた小森がいた。
耳郎「まずい!」
骨抜「いや大丈夫だ耳郎」
耳郎「えっそれはどういう…」

耳郎が骨抜に聞き返そうとしたその時

小森「ノコオオオオオオ!!?」バリリリリッ!!

蛙吹「小森ちゃん!?」

個性を発動していた上鳴に触ってしまったため触った瞬間感電してしまう

小森。

拳藤「仲間を心配するのはいいけど動きを止めたら命とりだよ?」

蛙吹「しまっ!…もごごっ!!」

動きを止めた蛙吹を後ろで控えていた拳藤がその隙を見逃さず大拳を使って蛙吹を確保

する。そして敵(ヴィラン)チームは全員テープを巻かれてしまったため訓練終了となった。

(オ)マイト『ヒーローチーム…WIIIIIIIIIIN!!!』

――地下モニター室――

(オ)マイト「お疲れっ!!8人ともよく動けていたと思う!しかし上鳴少年はもう少し相手の行動を

読んだりする力を付けた方がいいだろう!!」

上鳴「うぇー俺っすか!?結構頑張ったと思うんすけどー!」

（オ）マイト「最後の辺りは前に出たりしてたけど漁夫の利で勝利した感じがあるから近接におけ
る体術などを今後考えてみるといい!!」
上鳴　「了解っす」
（オ）マイト「骨抜少年は個性も使っていないからあんまり評価はよくないと思っているかもしれ
ないけど、実は君の動きは結構よかったよ!」
骨抜　「マジっすか?」
葉隠　「えーなんでー?」
芦戸　「あんまり活躍できてなかったけど?」
個性を使ってもおらずあまり活躍できていなさそうな骨抜の評価が良いことに不思議に
思うクラスメイトたち。
（オ）マイト「確かにあまり活躍出てきてないと思う!訓練中の骨抜少年はサポートに徹してい
た。だけどこれって中々できる事じゃないんだぜ皆!プロになってくると現場で自

分が何が出来て出来ないか見極める必要がある！しかしこれが意外にも難しいんだ！

適材適所！これはプロになってから必ず必要になるよ！その点において今回の骨抜少年はそれが出来ていたということさ！皆もよく覚えておくように!!」

A組B組「「「はいっ!!」」」

オールマイトによる講評が終わり次はいよいよ最後の訓練である。その前にクラフトは

拳藤の元に行く。

クラフト「拳藤」

拳藤「あっ機神！どうだった私？よくできていたでしょ？」

クラフト「ああっ初めての訓練であれだけ動けるのはすごいと思うぞ」

拳藤「へへっ／／…ありがと…／／」

クラフト「あとその手…見せてみろ」

拳藤「えっ？」

クラフト「どうした？」

拳藤「いや…傷だらけだし…その汚いし…」

クラフト「いいから」グイッ…
拳藤　「あっちょっ…痛っ!」
クラフト「結構傷があるな、1つ1つは小さくても蓄積すればダメージを負う」
拳藤　「ははっ…ちょっと無理しちゃったかな?」
クラフト「拳藤の個性は手なんだから大事にしないといけないぞ?サポートアイテムで伸縮する手
　袋とかを考えてみたらどうだ?あと女だから手は大事にしないとな（笑）」
拳藤　「うっうん／／ありがとう／／／（ちゃんと女って見てくれてんだ）」
クラフト「じゃ…治癒」フオォォ…
　治癒の個性を使って拳藤の傷を治す。
拳藤　「えっ傷が治った…?」
クラフト「あんまり周りには言うなよ?」
拳藤　「…分かっただけどちゃんといつかは理由を話してよね（笑）」
クラフト「そのつもりだ（笑）」
拳藤　「最後の訓練頑張れよ!」
クラフト「おう!サンキュー!」
　最後の訓練が行われるためオールマイトの元に行く。ちなみにキノコが生

えてしまって
いる耳郎と骨抜にはメラメラの能力で胞子を焼き処理した。

第１６話　やっと出番だよ！

――地下モニター室――

（オ）マイト「それでは最後に機神少年対複数人の戦闘訓練を始めようと思う!!それで機神少年の相
手なんだが誰か立候補する人はいるかな？」
オールマイトがクラフトの対戦相手をクラフト以外の皆に聞く。すると…
爆豪「俺にやらせろ！オールマイト!!」
轟「俺もやりてぇ…」
八百万「私もよろしいでしょうか？」
取蔭「私もやりたいなー（笑）」
４人の生徒が立候補する。
（オ）マイト「うむ！君たち４人か！他にはいないかな？」
Ａ組Ｂ組「「「「……」」」」
立候補した４人以外誰も手を上げない。
（オ）マイト「いないようだね！では機神少年の相手はこの４人とする！次にルールだが

機神少年！何か
　　ルールに関する要望はあるかい？」
クラフト「そうっすね……じゃあ核を無しにしてもらえますか？」
（オ）マイト「……それだけ？」
　　オールマイトはクラフトの要望が少ないことに少し驚く。
クラフト「あと役は敵（ヴィラン）でお願いします。」
（オ）マイト「なるほど…それだけでいいのかい？」
クラフト「要望はそれだけですね。なので勝利条件がヒーロー側が俺を確保すること、こっちは
　　相手を確保か時間切れでお願いします」
（オ）マイト「分かった！君たち４人もいいかね？」
　　オールマイトが立候補した４人に問いかける。
爆豪　「ねぇよ！さっさとやろうぜ！俺がぶっ殺してやる!!」
轟　「ああ…」
八百万　「異論はありませんわ！」
取蔭　「ないよ！」
（オ）マイト「よし！では本日最後の訓練をはじめるよ!!５人は準備をするように!!」

いよいよクラフト対複数人の訓練が始まる。
――ビル５階――
クラフト「あ～ドキドキするなあ～（笑）…ではまずは各階にコイツらを配置するか…ＬＢＸ召喚！デクー！」
シュイイィィン……ウイィンウィン…グポォォン…
クラフトはまずＬＢＸのデクーを１００体ほど召喚する。大きな赤いモノアイを怪しく光らせながらデクーは起動する。
クラフト「よしデクーよこのビルの至るところに配置せよ！配置したら命令があるまで待機！」
デクー　⊠⊠⊠⊠⊠リョウカイ⊠⊠⊠⊠⊠
ウィンウィンカシャンカシャン！
無数のデクーはジャンプしながら部屋を出ていく。
クラフト「さて後は状況に合わせて動けばいいかな～」
クラフトが準備し終わると合図が入る。
（オ）マイト『両チーム準備はいいかな？…それでは屋内対人戦闘訓練開始!!』

いよいよ訓練が始まった。
――ビル1階――
爆豪「どこだハゲ野郎!!」
走り出そうとする爆豪を八百万が止める。
八百万「爆豪さんお待ちください！」
爆豪「あ☒あ☒？なんだよポニーテール！」
八百万「私は八百万です！それより勝手な行動は控えてください！」
爆豪「ああ!?なんで俺がテメェらに合わせなきゃいけないんだ!?」
取蔭「だってチームじゃん（笑）」
爆豪「んなもんテメェらで勝手にやっとけ!!俺が野郎をぶっ飛ばすんだ!!」
轟「やめろ爆豪…今はそんなこと言ってる場合じゃねぇだろ」
爆豪「黙ってろ半分野郎!!」
クラフト『な～にをしているんだ君たちは』
ヒーローチームがビルの1階で止まっているとクラフトの声が響く。
爆豪「この声は！」
轟「どこからだ…」
八百万「まさかこの1階に!?」

取蔭　「……！…あれ見て！」
　取蔭が指す方向に手のひらに乗りそうなサイズの何かがいた。
八百万　「あれは…一体何でしょうか？」
取蔭　「なんか小さいロボットっぽいけど…」
轟　「あいつの個性か？」
爆豪　「はっ！んなことはどうでもいいんだよ!!何してこようが片っぱしからぶっ壊しゃあいいんだよ!!」ダダダッ!!
八百万　「!!…いけません爆豪さん！」
　八百万が爆豪を止めるがもう遅い。
クラフト『フハハハハ!!来いヒーロー返り討ちにしてくれる!!1階フロアのデクーよ！攻撃を開始せよ!!』
デクー　☒リョウカイ！　コウゲキヲ　カイシシマス☒ウィィン…ガシャ…ウィンウィンウィン！…カシャンカシャンカシャン！
轟　「なんだこいつら!?」
八百万　「恐らく機神さんの個性でしょう!!」

取蔭「んなこたぁ分かってるよ！けど何だこの数！どんだけいるんだよ!!」
爆豪「はんっ！どんだけいようと俺には関係…ねぇ！」ボオンッ!!
爆豪はデクーに爆破攻撃を繰り出す。
デクー「⊠ウテ！ウチマクレ!!⊠⊠コウゲキセヨ!!⊠
パパパパパパパパパパパパパパパパパパッ!!!!
デクーが４人に対して装備しているマシンガンで攻撃する。ちなみに銃弾はちゃんとゴム弾である。
取蔭「ちょっー!!いたたたたっ!!!」
八百万「くっ！相手が小さいから攻撃が当たりにくい!!」ブオンブオンッ！
八百万は創造で鉄パイプを作りデクーに攻撃するが当たらない。
轟「ちいっ！」パキパキパキッ！
デクー「⊠!?⊠⊠コウゲ…キィ…ィウゥ…⊠⊠……⊠
轟が３人が凍らないように調節しながらデクーを氷漬けにする。
取蔭「轟ナイスゥ～」
八百万「助かりましたわ轟さん！」
爆豪「……ケッ！」

轟　「ああ…」
八百万　「轟さん申し訳ありませんが先頭に立って先ほどのロボットの対応をお願いできます
か？」
轟　「わかった…」
ヒーローチームが対応を考えていると再びクラフトの声が響く。
クラフト『いや～おめでとう！なんとか対応できたみたいだね！』
八百万　「また声が！どこですの!?」
爆豪　「！…そこかぁ!!」ボオンッ！
爆豪が階段の所にいたデクーを捕まえる。
クラフト『うわー捕まっちゃった～～（笑）』
爆豪　「覚悟してまっとけハゲ野郎！この俺がぶっ殺してやる!!」
クラフト『ハ～ハハハ～……やってみろヒー《ボォン！》…』
爆豪は爆破でＬＢＸを破壊する。
――ビル５階――
クラフト「あの程度じゃあんまり足止めにはならないか……後の事を考えて１人ぐらいは減らしと

いた方がいいな…ドアドア」ギィィ…バタン
クラフトは4人に奇襲をするためドアドアの能力で異空間に入る。
――地下モニター室――
芦戸「あれ!?機神消えたよ!?」
飯田「小さいロボットのようなものを出したと思えば今度はどこかに消えたぞ!一体どういう
個性なんだ!?」
(オ)マイト「(改めて機神少年の個性は規格外だ…だがそのおかげで私は時間を気にすることなく活
動できるようになった!…私にできる事は彼にヒーローとは何たるかを教えること!)
…機神少年の個性については彼が話したいと思った時に聞いてほしい…皆」
葉隠「えっ!?オールマイトは機神くんの個性知っているんですか!?」
上鳴「どんな個性なんすか!?」
蛙吹「今オールマイトが話せないって言ったわ上鳴ちゃん」
上鳴「ええー!でもすげぇ気になるじゃん!!」

（オ）マイト「蛙吹少女が言ったように私の口からは言えない。機神少年の個性については一部の関
係者しか知らない」
飯田　「それほど強いというわけですか!?」
骨抜　「なるほど…それだけ強いなら簡単に言えない理由も納得ですね」
上鳴　「?…どゆこと…」
耳郎　「あんたねぇ…それくらい考えられないの?それだけ強い個性ということは敵（ヴィラン）にもし知ら
れてしまったら今の生活に危険が増えるってことだよ?ウチらはまだ学生なんだから」
上鳴　「なるほど!でも大丈夫っしょー!それだけ強いなら逆に敵（ヴィラン）が返り討ちにされるんじゃ
ね（笑）?」
耳郎　「あんたの理解力に期待したウチが馬鹿だった…」
上鳴　「うぇい!?」
葉隠　「上鳴くんはまず頭を鍛えないといけないね!」
上鳴　「うえぇい!?」

飯田「上鳴くん！勉強するなら付き合うぞ！」
上鳴「なんで俺こんなに言われるの!?」
理不尽と思う上鳴であった。
――ビル３階――
各階に配置されているデクーに対処しながらヒーローチームは着実に足を進めていた。
ボオォンッ!!…
爆豪「ちっ！…どんだけいんよコイツらは!!」
轟「攻撃は大したことねぇけが確かに鬱陶しいな…」
取蔭「地味に痛いしね～」
八百万「ですが相手の動きを鈍くする・遅くするという観点では理にかなった戦法ですわ…」
爆豪「んなこたぁどうでもいいんだよっ!!!いくらで出てこようが全部ぶっ飛ばしゃあいんだからよ!!問題はまだあのハゲ野郎が出てきてない事だ…こっちが体力諸々消費してるのに
対しあっちは対した消費がねぇ…」

八百万「確かにここまで体力はそこまで消費していませんが精神的な面での消費が激しいですわ
ね。各階ごとの対処に集中力の消費が激しいですわ…」
取蔭「おまけに相手が小さいせいで攻撃は当てにくいから余計に疲れるよ～」
轟「ああ確かに…!?…取蔭避けろ!!」
取蔭「へっ?…」
４人が話し合いをしていると轟が叫ぶ。取蔭は咄嗟の事のため反応できない。
ギイィイィ……
クラフト「こんにちはぁっ!!!」グワッ！
取蔭「ぎゃあああぁぁぁっ!!!」
何もないところから急に現れたため驚愕する取蔭。そしてそのまま口を押えられ体を引き込まれてしまう。
八百万「取蔭さんっ!?」
爆豪「待てやっハゲ野郎っ!!!!」ボォンッ!!
爆豪は爆破で加速しクラフトを捕まえようとするが…

クラフト「ばいば〜〜い（笑）」
ギイィィィ…バタンッ！
ブオンッ…スカッ！
爆豪「!?…クソッ!!あのハゲ野郎ぉ!!!!」
――ドアドア異空間内――
クラフト「はい確保っと」
取蔭「くっそー!!後ろから急に現れるなんてズルいぞ!!」
クラフト「いやーそう言われても今の俺は敵（ヴィラン）なわけだし…まあいいやこのまま5階に移動する
ね！」ガシッ！
取蔭「はっ?いやなんで手を握ってちょっ／／引っ張るな！／／自分で歩けるから!!／／」
異空間内を移動し5階に移動する2人。
――ビル5階――
ギイィィ…
クラフト「着いたよ」
取蔭「うっうん／／あのさ…いつまで手握ってるわけ／／?」

クラフト「えっ？ああごめんごめん（笑）」ぱっ！
　取蔭に言われようやく手を放すクラフト。ちなみに取蔭の確保宣言はもうされている。
クラフト「え～と立ったままじゃしんどいから…（キュブキュブ！）」
　クラフトはキュブキュブの能力で床の一部をキューブにして操り、キューブ同士を繋ぎ
　合わせ椅子を作る。
クラフト「さっ！どうぞ座って！」
取蔭　「あっありがとう…」ぽすっ…
クラフト「あ～3人が来るまでまだ時間あるな…お茶でも飲もうか」
　クラフトはそう言うとアイテムボックスからお茶が入った水筒と紙コップを取り出し取
　蔭に渡す。そして訓練中にもかかわらずお茶会が始めるのであった。
取蔭　「ありがと…あっ美味しい！」
　――地下モニター室――
瀬呂　「なんかお茶飲み始めたぞ…」
芦戸　「これ訓練中だよね？」

峰田「あいつなに楽しくお茶なんか飲んでんだよお…」

血涙を流す峰田

耳郎（手つないでた…）ゴゴゴゴゴ…

拳藤（後で理由聞かなきゃ…）ゴゴゴゴゴ…

そしてこちらもまるで噴火前の火山のようになっていた。

――ビル5階――

取蔭と優雅にお茶を楽しむこと約5分。

クラフト「なかなか来ませんね～（某特命係の警部風）」ズズ…

取蔭「なにその喋り方ｗ」

クラフト「暇ですからね～」

取蔭「あっはっはっはっｗｗ」

取蔭と楽しく話していると物音が聞こえてくる。

ボォン！…死ねぇこのカスどもっ!!

タッタッタッタッ……バアンッ!!!

クラフトがいる部屋のドアが乱暴に開けられる。

爆豪「!?…見つけたぞハゲ野郎っ!!」

クラフト「それもしかして俺のこと?」

爆豪　「てめえ以外に誰がいるんだっ!!!それに分裂女!!なんで呑気に茶なんか飲んでんだっ!!!」

爆豪が色々突っ込んでいると轟と八百万も到着する

轟　「見つけたぞ機神」

八百万　「道中の借り返させてもらいます!!」

クラフト「…取蔭ちゃんお茶のおかわりいる?」

取蔭　「いや何か言って返してあげたら?」

爆豪　「《イラァッ!!》…随分と余裕だなあっ!!」ボォン！

爆豪は爆破で加速しクラフトに突っ込み攻撃を仕掛ける。

クラフト「(ノロノロの能力!)…ノロノロビーム!!」フォンフォンフォン！

爆豪　「!?…んだこっれぇぇぇはぁぁ～(んだこれ動きが!?)」

クラフトは指で狐の形を作り指先からノロノロビームを放射する。ノロノロビームを浴びた爆豪は空中で動きがスローモーションのようになる。

轟　「爆豪!?」

八百万　「爆豪さん!?」

クラフト「では……鳩尾にいっぱーーつ!!」ボズンッ!!

爆豪　「てぇぇんんｎめぇぇぇ～なぁぁにいいしいいいい……」
クラフト「取蔭ちゃんこの間にあっちに移動しよう」
取蔭　「えっ?…あっうんわかった…ねえこれどうなるの?」
クラフト「ああ３０秒経てばいろいろ戻るよ。さっ移動移動!」
取蔭の肩を押しながら部屋の奥に移動するクラフト。
――地下モニター室――
切島　「爆豪なんで動き止まってんだ!?」
宍田　「なにやらピンク色の光を浴びたらあのようになってしまいましたぞ!」
芦戸　「何あれすごーい!!」
峰田　「ピンク色の光……Ｅｒ《ベチンッ!》…」
何かを言い切る前に蛙吹の舌によるビンタで遮られてしまう峰田であった。
――ビル５階――
クラフト「そろそろ３０秒かな～」
爆豪　「……やっｔ《ドムッ!!》…ぐっ!」フオッ…ドシャッ!
クラフトが爆豪の鳩尾に一撃を入れたため後ろに吹っ飛んでしまう。
轟　「爆豪大丈夫か!?」
八百万　「爆豪さん!!」

吹っ飛んだ爆豪に駆け寄る轟と八百万
爆豪「ゴホッゴホッ!!…クソッ！なんで俺がっ!?」
八百万「……まさか!?…」
クラフト「おっ？気づいたかな？」
轟「八百万…どうかしたのか？」
八百万「なぜ爆豪が吹っ飛んだのか…それは時間差によるものですね機神さん！」
パチパチパチパチパチッ！
部屋に拍手の音が響く。
クラフト「いや～ご名答～！その通りでございますよ～（笑）」
轟「時間差って…どういうことだ？」
八百万「先ほどのビームは動きを遅くするだけでなくあらゆるものを遅くするビーム…それは打
撃によるダメージも…」
轟「そういうことか…お前一体どういう個性だよ？」
クラフト「いや～それについてはノーコメントでお願いしますわ（笑）」
轟「そうかなら力ずくでいくぞ！」パキパキパキッ!!
轟が氷で攻撃を仕掛けてくる。

クラフト「おおっ!?」パキパキィンッ!
取蔭　「あぶなっ!?」
轟　「早く溶かさねぇと足が壊死しちまうぞ…降参しろ」
クラフト「ハ～ハハハ～（笑）この程度どうとでもないわ!（スナスナ!）」シュウゥゥ～
轟　「なにっ!?」
　クラフトはスナスナの能力で凍らされいる下半身の氷に触り、氷の水分を吸い取り氷自
　体をなくしてしまう
クラフト「あー冷たかった」
轟　「何でもありかよ…」
クラフト「もう終わり?」
八百万　「今度は私の番ですわ!はあああ!!」ダダダッ!
　八百万は個性の創造で長めの鉄パイプを作りクラフトに攻撃を仕掛ける。
クラフト「取蔭ちゃんここは危ないからあっちの隅にいてくれる?」
取蔭　「りょーかーいw」
八百万　「はあああ!!」ブオンッ!

八百万は野球のスイングのように鉄パイプを振る。鉄パイプがクラフトに迫るがクラフトは防御をする素振りを見せない。そしてその鉄パイプはクラフトの上半身を切り離す。

八百万「えっ？……体が…ああっ機神さん！大丈夫ですか!?」
クラフト「大丈夫大丈ー夫！心配しなくても大丈夫よ個性だから（笑）」
八百万「そっそうでしたか……個性!?」
クラフト「遅いわ!!バラバラフェスティバル!!」パカラララ～ン!!
クラフトは体を分割させ空中に浮遊する。バラバラになったことに取蔭が突っ込む。
取蔭「おいー！私と個性被ってんじゃねーか!!」
クラフト「世の中というのは理不尽がいっぱいじゃきぃ…」
取蔭「意味わからんわ!!」
クラフト「文句は後で聞きますので…ご覚悟！バラバラアタック!!」ヒュッヒュッヒュッ!!
クラフトは分割した体を操り八百万に攻撃する。

ドガガガガガガッ!!!
八百万「くっ!がっ!!あああああっ!!」ガクッ…
八百万は激しい攻撃のあまりその場に膝をついてしまう。
クラフト「ではテープを…「やらせるかっ!」!?っとお!!」
八百万「轟さん…はぁはぁ…」
轟「立てるか八百万?」
八百万に確保テープを巻こうとした瞬間轟が拳で攻撃し巻き損ねるクラフト。
八百万「すみません…ダメージが思ったよりあって…爆豪さんは?」
轟「爆豪ならもうすぐ回復する」
クラフト「あらら…こりゃふざけてはいられないね…」
轟「今まで本気じゃなかったのかよ…」
クラフト「半分は真面目にやってたよ…」
爆豪「ますますムカつく野郎だなテメェは…」
八百万「爆豪さん!」
轟「爆豪立てるか?」
爆豪「誰に言ってやがる半分野郎!そいつをぶっ飛ばすのはこの俺だ!!」

爆豪は若干フラつきながらも身体を起こす。
クラフト「お～流石タフネス！さぁどうしたヒーロー共！相手はたった１人だぞ!!」
轟「この野郎…」
爆豪「その減らず口すぐに黙らしてやらぁ!!」ボォン！
爆豪は再び爆破で加速しクラフトに攻撃を仕掛ける
八百万「いけません爆豪さん！また先ほどの光を!!」
クラフト「フハハハハッ!!その通りだノロノロビィーーム!!」フォンフォンフォン！
爆豪「２度もくらうかよ!!」ボッボンッ！
爆豪は爆破で軌道変更しノロノロビームを回避する
クラフト「Ｏｈ…マジかよ…流石才能マンだな！」
爆豪「うるせえ死んどけえ!!」
ボオオォンッ!!
ノロノロビームを回避した爆豪はクラフトに爆破攻撃を容赦なく浴びせる。
轟「っ！……威力強すぎやしねえか？」
八百万「確かに強すぎると思いますが…」
爆豪「はんっ！ハゲ野郎にはこのぐらいでいんだよ!!」
クラフト「もう少し優しめでもいいんじゃないかな～？」

煙が晴れるとそこには体にいくつかの穴が開いたクラフトが立っていた。
八百万「なっ!?」
轟「体に穴開いちまってるけど大丈夫なんだろうな?」
爆豪「良く似合ってるぜハゲ野郎!」
クラフト「そのハゲ野郎って言うのやめてくれないかな～」シュウゥゥ…
クラフトはそう言いながら体の穴をふさいでいく
爆豪「やっぱノーダメか…」
クラフト「そっちの攻撃は終わりかな?なら今度は…俺のタァァァン!!」
轟「来るぞっ!」
爆豪「させるかよっ!!テメェのターンはねえんだよ!!」ダッ!
八百万「爆豪さん迂闊に近づいてはっ!!」
爆豪「あ☒あ☒っ!?」
クラフト「その通りだ…言っただろうこちらのターンだと…」バチバチバチッ…
クラフトの体に雷光のように光り電気が体に走る。
爆豪「(なんだ体が光って!?)…だが関係ねえ!何かする前にぶっ殺しゃあいんだっ!!」
クラフト「出力制限…雷銃(ライガン)!!」バリリリッ!!!

爆豪　「あっ？……ガあっ!!?」ＢＺＺＺＺＺＺ!!!

クラフトはゴロゴロの能力を発動させ爆豪に雷撃を食らわせる。

【雷銃（ライガン）】

ゴロゴロの能力で使う技の１つであり出力を制限し相手を気絶させる技。

ようはスタン

ガンみたいな技である。

轟　「爆豪っ!!?」

八百万　「爆豪さんっ!!?」

ドサッ……

クラフト「ほい確保っと！…あと２人だけど実質１人か」

（オ）マイト『爆豪少年確保ーーー!!!』

八百万　「その言い方は少し心外ですわね…」

クラフト「客観的事実を述べただけ…だっ!!（ヤミヤミの能力）闇水（くろうず）!!」ズオオオオッ!!

轟　「なっなんだ体がっ!!?」

八百万　「轟さんっ!?」

クラフトはヤミヤミの能力を発動させ轟の体を引き寄せて轟の首を掴む。

ガシッ!!

クラフト「ゼハハハハっ!!油断したな轟!」

轟　「それはどっちだ?俺の攻撃見てなかったわけじゃねえだろ……!?(出ねぇ!?どういう…)…」

クラフト「なんで個性が出せないか…わかるか轟?」

轟　「……テメェの仕業か…」

クラフト「闇とは引力!全てを引きずり込む力でありそれは光も逃さない!この闇は個性に対し無効

化の力がある!まあ全てじゃないけどな(笑)」

轟　「そうかよ…わざわざ解説ありがとう…なっ!」フッ!

轟はクラフトの顔にパンチを繰り出すが…

ボフォンッ!

轟　「なっ!?けむr…ぐふっ!!?」ズドムッ!!

クラフト「(モクモク発動しといてよかった~)…備えあれば何とやら~ってね(笑)あと確保~」

轟がクラフトの顔が煙の様に霧散したことに驚いた隙をついて確保するクラフト。

（オ）マイト『轟少年確保ーーー!!!』
クラフト「あとは八百万だけになったね…どうする?」
八百万「意地の悪い質問ですわね…いまの私を見てそのような事を聞くなんて」
クラフト「では確保しますか…」
自身の攻撃のダメージで動けなくなった八百万に近づく…
ガシャンッ!!
八百万「油断対敵ですわ機神さん!!」
クラフト「おおっ手錠だとっ!?」
八百万「このまま確保させていただきますわ!!」
八百万に確保テープを巻こうと近づくと逆に創造で作った手錠をかけられてしまうクラフト。
クラフト「それはお断りするは…（イトイト…）」シュッ!
八百万「《グンッ…》…かっ体が!?」
クラフト「いや〜惜しかったね〜…はい確保っと!」
イトイトの能力で八百万の体を動けなくし確保テープを巻くと訓練が終了する。

（オ）マイト『敵（ヴィラン）チーム…ＷＩＩＩＩＩＩＩＩＩＮ』
クラフト「おっしゃぁー！勝った終わったー!!…取蔭ちゃん終わったよー」
取蔭　「はいお疲れ～…ねえなんでちゃん付けなの？」
クラフト「あ～……なんとなくノリ的な？感じかな」
取蔭　「ふーん…（ノリ…ねぇ）」
クラフト「もしかして嫌だった？」
取蔭　「いんや～今後もそう呼んでくれんのかな～って」
クラフト「そっちがいいならそう呼ぶけど？」
取蔭　「じゃあ今後もそれでお願いねｗ」
クラフト「わかったよ取蔭ちゃん！」
取蔭　「ありがと～／／」
　少し顔を赤くしながらお礼を言う取蔭であった。
　――グラウンドβ出入口――
　地下モニター室で講評をした後グラウンドβの出入り口でオールマイトが締めの言葉を
　言う。
（オ）マイト「みんなお疲れ様!!大きな怪我もあったが皆最後まで真摯に取り組んだ初め

ての訓練に
しちゃ上出来だぜ!!」
Ａ組Ｂ組　「相澤先生の後だから…なんか真っ当すぎて拍子抜けというか…」「確かに…」
（オ）マイト「真っ当な授業をするのも私たちの自由さ…では私は戻るので君たちも着替えて教室
に…」
「お戻りー!!!」
バヒューーン!!!
（オ）マイト（爆豪少年…自尊心の塊…膨れ切った心ほど脆いもの…先生としてしっかりとカウン
セリングしないと!!）
オールマイトが去ったあと生徒たちも着替えるために動き出す。
クラフト「さ～て早く着替えるか「クラフト…」…ん?」
耳郎　「……」
拳藤　「……」

クラフト「おー響香に拳藤！訓練お疲れ様！」
耳郎　「おつかれ…ねぇ訓練のとき取蔭となんで手つないでたの？」ゴゴゴゴ…
クラフト「……えっ？」
拳藤　「手を繋ぐ必要あったのかな～って思ったんだよね～」ゴゴゴゴ…
　2人とも目が笑っておらず身の危険を感じるクラフト。
クラフト「（なんかやばい…）えっえ～と…別に深い意味はなくてですね！取蔭ちゃんの…」
耳郎　「取蔭ちゃん？」
クラフト「……（　⊠ω⊠　）」
拳藤　「なんでちゃん付けしてるの？」
　耳郎と拳藤に問い詰めれている所に取蔭がやってくる。
取蔭　「機神おつかれ～！…ありゃお取込み中だった？」
拳藤　「取蔭ちょうどよかった…なんでアンタ名前にちゃん付けで呼ばれているの？」
取蔭　「えっ？ああそれは…！…」
　理由を答えようとするが途中で何かを思いつく取蔭。
耳郎　「それは？」

取蔭　「そりゃあ…あんなことがあれば呼び方だって／／…」くねっくねっ
クラフト「ふっ!?」
　体をくねらせながら答える取蔭にフリーズするクラフト。
耳郎　「ちょっとどういう事かな?」
クラフト「取蔭さん何を言って…（；ﾟ ω ﾟ）」
拳藤　「機神…おこらないから正直に話してみ…ほら」
クラフト「……三十六計逃げるに如かず…御免!!」ダダダダッ!!
耳郎　「あっ待てクラフト!!」ダダダダッ!!
拳藤　「待て機神!!」ダダダダッ!!
取蔭　（にっひっひ～ガンバレ機神～（笑））
　どんなに強い個性を持っていようともこれには対処できないクラフトであった。
（オ）マイト「はっ!?もう時間は気にしなくていいんだった!!私したことが忘れていた!!
ハ～ハッ
　ハッハッ!!」

第17話　委員長のイメージはやっぱりメガネ？

初の戦闘訓練を終えたその翌日、クラフトは疲れた様子で学校の机に突っ伏していた。

クラフト「昨日は訓練よりその後のことが一番疲れた…」

葉隠　「お疲れだったね機神くん！あっ良かったらキャラメル食べる？」スッ…

クラフト「ありがとう葉隠…机に置いといてくれ…」

瀬呂　「いや～でも中々おもしろかったぜ！あんなに強い機神が自分の彼女にタジタジになって
いた光景はｗ」

クラフト「まあ…あれは誤解を招くような行動をした俺も悪かったし…でもまさか取蔭ちゃんがあ
んな事するとは予想外だった…」

芦戸　「許してもらえてよかったね～」

クラフト「今日のお昼デザート付きと今度のデートでなにか奢ることで何とか許してもらえまし

た…」
障子「しかしまさか２人が機神の彼女とは少し驚いたがな」
クラフト「うんまあ…そういう事なんでいろいろよろしく…」
峰田「彼女２人とか舐めてんのかこの野郎!!!（怒）」
激しく血涙を目から流しながら怒りに満ちている峰田。
クラフト「とりあえず謝っとくわ…スマンな」
峰田「くそったれえええ!!」
切島「峰田！嫉妬なんて漢らしくないぜっ!!」
峰田「うるせー！これが嫉妬せずにいられるか!!」
瀬呂「まー気持ちは理解できなくもないが…」
芦戸「その機神の彼女の耳郎に聞きたいことがあります！」
耳郎「きゅ…急になに芦戸？」
クラフトがクラスの皆と話している様子を静かに見ていた耳郎に芦戸が問いかける。
芦戸「ぶっちゃけどこまでしたの？キスまで？」
耳郎「ぶふっ!!?／／」
葉隠「わあー!!それめっちゃ気になる!!ねぇねぇどこまでしたの／／!?」ワクワ

ク！

耳郎　「いっいきなり何を聞くかと思えば!!そんなの答えられるわけないじゃん／／!!」

芦戸　「えー！いいじゃん気になるしキュンキュンしたいよ!!」

葉隠　「じゃあ機神くんに聞こう!!機神くんどこまでしたの!?」

耳郎　「ちょっ!?」

クラフト「プライベートなのでノーコメントで」

耳郎　（よし！）

葉隠　「えー！…あっほらキャラメルもう1個あげるから！」

クラフト「……」

耳郎　「なにキャラメル2個で悩んでんのよ!!」ヒュッ！

ドスッ!!ドックン!!

クラフト「ぐフっ!?」

強烈な耳郎のドックンを貰ってしまうクラフトであった。そして予鈴が鳴り朝のHR（ホームルーム）が始まる。

相澤　「おはよう…昨日の訓練の映像と成績見させてもらった…爆豪お前能力ある

んだ、あんな
　　子供みたいなまねもうするなよ?」
爆豪　「分かってるよ……」
相澤　「緑谷は調整ミスって腕を大怪我…プロになって調整ミスって動けませんじゃ通じないか
　　らな?」
緑谷　「はい!」
相澤　「それから轟と機神。強い個性なのは結構だがそれに余裕かいていたら足元を掬われるか
　　ら気を付けるように」
轟　「はい…」
クラフト「了解です」
相澤　「じゃあここからがHR（ホームルーム）の本題だ…これから君たちには…」
クラス　（なんだ?）（まさか小テストか!?）（テストだけは勘弁…）
　　何がくるのか身構えるクラス全員だが…
相澤　「学級委員を決めてもらう!」
クラス　「「「「学校ぽいのきたーーーー!!!」」」」

切島「委員長やりたいです俺!!」
峰田「オイラのマニフェストは女子全員膝上３０㎝!!!」
青山「ボクの為にあるやつ！」
耳郎「ウチもやりたいっす」
芦戸「リーダーやるやるー!!」
爆豪「俺にやらせろっ!!」
ヒーローという観点から見ると多を導くという素地が鍛えられるので人気のある役なのである。
飯田「静粛にしたまえ!!」
クラス「「「「ん?」」」」
飯田「多をけん引する重大な仕事だぞ！『やりたい者』がやれるものではないだろう!!周囲からの信頼あってこその役職！ここは民主主義に則りここは投票で決めるべきではないだろうか!?」ビッシィイ!!
クラフト「だったらその模範的ともいえる挙手はどう説明するんだ（笑）！」

飯田　「こっこれはその…恥ずかしいが委員長という聖務をやりたいという欲に抗えずに上げてしまった!」

クラフト「なるほど…飯田は真面目だしなー手が上がっていしまうのは仕方ことだな!」

飯田　「機神くん理解してくれて感謝する!」

蛙吹　「だけどまだ日が浅いのに信頼もクソもないわよ飯田ちゃん?」

切島　「確かにみんな自分に入れるだろ?」

飯田　「だからこそここでもっとも票を獲得した者がふさわしい人間ということにならないか?」

クラフト「はーい!オレ提案あるんだけど?」

委員長決めをクラフト投票の多数決案にクラフトが自身の考えを提案する。

瀬呂　「提案ってなんだよ機神?」

クラフト「投票なんだけど自分に投票するのは無しというのはどう?」

クラス　「「「「?!!」」」」

上鳴　「うえぇ!?何だよそれ!?」

峰田　「それじゃ自分に票が入らないじゃんかよ!?」
クラフト「いいか?これはいわゆる選挙みたいなもんだ。選挙で自分に自分で票を入れるそんな
　カッコ悪い候補者なんて頼もしいと思うか?」
上鳴　「うっ…それは～……」
瀬呂　「確かにカッコ悪いっちゃカッコ悪いな」
切島　「うおお!確かにそんなの漢らしくねえ!!機神オレはお前の案に賛成だ!!」
常闇　「確かに…ヒーローを目指す者としてあまり良い行いとは言えないな」
葉隠　「あ～それは言えてるかも!」
　クラス全体がクラフトの案に賛成のほうに傾く。
クラフト「あっちなみに俺は立候補はしないんでそこんとこよろしく!」
瀬呂　「えっ!?お前ここまで言っといて棄権すんの!?」
耳郎　「クラフトなんで棄権すんの?」
クラフト「別にそこまで興味ないしこういう役はヤル気があるやつがした方がいいだろ?」
飯田　「ということは機神くんには投票する権利だけが残るというわけか?」
クラフト「そういう事になるな」

クラス　「「「「　!!!　」」」」
　クラフトがそう肯定するとクラスメイトの目つきが少し変わる。
　バアンッ!!
爆豪　「おいハゲ野郎…俺に投票(入れ)しろ」
　爆豪がクラフトの方に振り返り机を強めに叩きながら要求する。
クラフト「お前に入れるなら峰田に入れた方がマシだなｗ」
爆豪　「あ☒あ☒っ!?何だとこのハゲ野郎!!」
峰田　「じゃあオイラはもう1票獲ｔ…」
クラフト「まあ入れないけど」
峰田　「てめえええええっ!!!」
相澤　「お前ら…委員長決めるのにいつまでかかってるんだ…」
クラフト「相澤先生!今日中には決めますので!!」
相澤　「……今日中だぞ」
クラフト「ありがとうございまぁす!」シュバッ!!
　綺麗なお辞儀をするクラフト。
クラフト「とまあ相澤先生に早く決めるように釘を刺されてしまったので皆だれに投票するか早く

決めるように!!」

上鳴　「かー!・マジかよー!」

クラフト「まあ委員長になりたいなら休憩時間や昼休みとかにアピールや根回しとかをするんだな…」ボソッ…

クラス　（（（（はっ!?!!））））

クラフトの何気に言った言葉によりA組内の委員長選挙（なんでも有り）が始まってしまう。ちなみに何名かは考えを改め棄権表明している。

――授業小休憩時間――

峰田　「オイラにどうか清き1票をー!」

瀬呂　「いや～清き1票と言われてもねぇ～（笑）」

上鳴　「峰田なんかより俺に入れた方がいいと思うぜ!」

峰田　「何だと上鳴!オイラのマニフェストは女子のスカート丈膝上30㎝にすることだぞ!お前これに勝る考えがあるのか!」

上鳴　「なっ膝上30㎝だと!?……峰田…」

峰田　「何だよ?」
上鳴　「お前のマニフェスト(望)に俺も協力してもいいか?」ドドンッ!
峰田　「上鳴…お前分かってくれたのか!サンキューだぜ!!」ドドンッ!
　　ここに峰田と上鳴の協力体制が築かれるのであるが…
耳郎　「峰田と上鳴は選挙から除外に賛成の人ー?」
A組女子　「「はーい!!」」
峰田　「何だと!…へっだけどそんなことしたって何の意味もないぜ!いくら女子全員が賛成しよ
　　うともオイラが当選すれば…「除外を認めます!」…なっ機神!?」
クラフト「女子全員と男子５人の賛成により峰田と上鳴の除外を認めます!」
峰田　「なんでお前がそんなこと決めんだよ!?」
上鳴　「そーだぜ!何の権限があって決めてんだよ!それに男子５人て誰だよ!」
　　クラフトはそう言われると懐から１つの紙を取り出し２人に見せる。
　　クラフト「この委員長選挙の臨時選挙管理委員を俺が務めることになったからだ(笑)
　　相澤先生の許
　　可及びサインも貰っている!」ババーン!
峰田　「なっ何だとぉぉー!?!!」

上鳴　「機神お前いつのまに!!?」
クラフト「男子の賛成者は俺に尾白、障子、常闇、瀬呂だ。女子６人に男子５人計１１人…クラス過半数の賛成だぞ?」
峰田　「てめえらぁーーー!!!」
上鳴　「てか瀬呂お前裏切ったのか!?」クワッ!
瀬呂　「いや裏切ったも何もねえだろ?それに俺協力するなんて言ってないし。あっ機神、食券サンキューな!」
クラフト「いいってことよ（笑）」
峰田　「おい瀬呂…食券ってなんだよそれ?…まさか!?」バッ!
何かに気づいた峰田は尾白、障子、常闇の方を見ると３人は顔を別の方向に向ける。
峰田　「まさか機神てめぇ…４人を食券で丸め込んだのかぁ…」ゴゴゴゴ…
クラフト「はて何のことやら?そう思うんなら４人に聞いてみたらどうだ?」
峰田　「おいどうなんだよぉ…」
尾白　「いっいや…何の事かな～…」

障子「うむ何のことだ?」
常闇「黙秘する…」
瀬呂「これは機神のご厚意でもらったもんだからな～ｗ」
　峰田の質問にしらを切る４人。
峰田「機神てめぇよくも……!……おい切島お前こんなことしてるやつ見過ごしていいのかよ!?
　漢らしくねぇんじゃないのか!?」
切島「お…おおっ言われてみればそうだな!機神お前のその行為は…」
クラフト「切島ちょっとこっちに…」クイクイ
切島「えっ…おっおう…」
クラフト「実はな……」
切島「えっマジで!?いやしかし……」
瀬呂「なに話してんだ?」
　切島を自身の方に呼んで肩に腕を回し小声で何かを話す。
　そして話が終わり戻ってくる２人。
上鳴「あっ戻ってきた」
切島「峰田……」

峰田　「なっ何だよ…」
切島　「女子が嫌がるようなことはやっちゃいけないよな?」
峰田　「機神てめぇぇぇ!!!」
上鳴　「ちきしょおおおおお!!」
こうして峰田と上鳴の委員長選挙からの除外が決定したのであった。
・
・
・
――お昼休み――
キーンコーンカーンコーン……
瀬呂　「それじゃ機神さっそく使わせてもらうぜ～!」
クラフト「おー存分に味わってくれ（笑）」
耳郎　「クラフト…」
クラフト「ん?」
耳郎　「約束覚えてるよね?」
クラフト「ちゃんと覚えてますよー」
耳郎　「なら良し（笑）」

拳藤も一緒にお昼ご飯を食べるので呼びに行こうと教室を出るとタイミングよく入口近くに拳藤がいた。

拳藤「あっ機神!」

クラフト「おっ拳藤ナイスタイミング!一緒にお昼ご飯食べに行こうぜ!」

拳藤「うん!その前に障子っていう男子まだ教室にいる?」

クラフト「障子?まだいると思うけど?」

耳郎「何か用でもあるの?」

拳藤「私じゃなくてレイ子がね…」

クラフト「レイ子?」

柳「初めまして…柳レイ子です」

拳藤の後ろから柳が出てきて挨拶をする。

クラフト「初めまして俺は機神クラフトよろしく!」

耳郎「ウチは耳郎響香よろしくね」

柳「よろしく…あのそれで障子いる?」

クラフト「障子なら…」

障子「俺がどうかしたのか?」

耳郎「あっ障子ちょうどよかった。あんたに用がある子がいるんだけど」
障子「俺に？」
柳「あっあの…昨日の訓練…おつかれ」
障子「お前は昨日の訓練のとき同じチームだった…確か柳だったか？」
柳「！…うん合ってる…そのもし良かったら一緒にお昼どうかなって……」
障子「俺と一緒にお昼を？」
クラフト（なるほど…いやまだ分からんな）
拳藤（頑張れレイ子！）
柳「ダメかな？」
障子「いや別にダメではないが…」
返答に少し困っている障子にクラフトが助け船を出す。
クラフト「せっかくお誘いを受けてんだし一緒に食べればいいんじゃないの？」
障子「うっうむ確かにそうなんだが…」
クラフト「もしかしてあんまりこういうのには慣れていないとか？」
障子「！…ああ恥ずかしい話だが今までこの見た目のせいで女子と接する機会は少なかったから、こういうのにどう答えればいいか正直よく分からなくてな」

クラフト「ならこれを機に今後慣れておく為に柳と一緒にお昼ご飯食べたら?」
障子　「そうだな…柳、俺でよければ…」
柳　「うっうん／／じゃあ行こっか／／?」
障子　「あっあぁ／／」
拳藤　「機神ナイス!!」ひそひそ
耳郎　「何とかうまくやったね」ひそひそ
クラフト「うまくいってよかった…それじゃあ俺らも行こうぜ」
拳藤　「お昼ゴチになりま～す♪」
耳郎　「どれにしよっかな～」
障子と柳を一緒に食事させることに成功し3人も食堂に向かうのであった。
――雄英学生食堂――
クラフト「いや～しかし世の中どう動くか分からねえもんだな」モグモグ
耳郎　「もしかして柳のこと?」
クラフト「そーそー!訓練のときの同じチームだっただけでこうなるとは考えにくいから訓練中の
時に何かあったと推測するが…」
拳藤　「レイ子はあんまり詳しくは教えてはくれなかったけど…たぶんそうだろう

ね」モグ

3人で色々話しているとそこに緑谷、麗日、飯田の3人組が来る。

飯田「機神くん！」

クラフト「ん？おー飯田じゃんどうした？」

飯田「もしよかったら同席してもいいだろうか？」

クラフト「俺はいいよ、2人は？」

耳郎「ウチもいいよ」

拳藤「私も！」

飯田「感謝する！」

緑谷「お邪魔するね」

麗日「ありがとー！」

飯田「ところで機神くん君に聞きたいことがあるのだが」

クラフト「聞きたいこと？」

飯田「ああ、なぜ俺に投票してくれたんだ？」

クラフト「そのことか…まあ特に大した理由はないんだけどそういうの得意そうだからかな～。あ

とメガネだからかな」

麗日　「メガネッｗ!!」ブハッ!!
飯田　「メガネだからというのはよく分からないが…僕が委員長の仕事に向いていると思ってくれたのはとても嬉しい。ありがとう」
クラフト「大したことはしてないんだけどな（笑）」
ここで飯田とクラフト以外があることに気付く。
麗日　「ぼく…?」
飯田　「……あっ」
麗日　「もしかして飯田くんて…坊ちゃん!?」
飯田　「坊っ!?…そう言われるのが嫌で一人称を変えていたんだが…そうだ俺の家は代々ヒーロー一家で俺は次男なんだ」
麗日　「えぇーー凄い!!」
緑谷　「すごいじゃないか飯田くん!!」
拳藤　「へー飯田の家ってヒーローやってんだ」
耳郎　「どんなヒーローなの?」
飯田　「ターボヒーロー『インゲニウム』は知ってるかい?」

緑谷　「もちろんだよ!!東京の事務所に６５人もの相棒（サイドキック）を雇っている大人気ヒーローじゃない
か!!」ペラペラ
飯田　「詳しい…」
緑谷　「まさか…」
飯田　「それが俺の兄さ!!」クイッ
飯田は立ち上がりメガネをクイッと上げながら自慢するように言う。
麗日　「あからさま!!」
緑谷　「すごいや!!」
飯田　「規律を重んじ人を導く愛すべきヒーロー、俺はそんな兄の姿に憧れヒーローを志したん
だ。人を導くのはまだ俺には早いと思ったんだが、機神くんのおかげで自信が少し持て
たため委員長に選ばれたら全力でやるつもりだ!」ビシッ!
拳藤　「あれ?A組ってまだ委員長決まってないの?」
クラフト「あ～実はカクカクシカジカコレコレなわけでして（笑）」
拳藤　「ふ～ん…そんなことになってんだ」

麗日　「誰になるんやろうねー!」
麗日が楽し気にそう言った瞬間、雄英校舎に聞いた者に不安を与える音が鳴り響く。
ウウーー!ウウーー!ウウーー!
飯田　「なっ何事だっ!?」
緑谷　「警報!?」
クラフト「むむっ!この揚げ物定食のエビフライなんて美味っ!!」サクサクプリップリ!
拳藤　「あんたはなに呑気に食べてんだ!」ベシン!
クラフト「ごふっ!?」
校内放送『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外に避難してください』
飯田　「セキュリティ3って何ですか!?」
雄英生徒「校内に誰かが侵入してきたってことだよ!こんなの3年間で初めてだよ!君らも早く!!」
飯田　「という事だ!俺たちも早く避難しよう!」
クラフト「俺はこのままここにいた方がいいと思うけどなー」モグモグ

飯田　「機神くん！呑気に食事をしている場合ではないぞ!!」シュババ！
耳郎　「待って飯田、ねぇクラフトなんでここにいた方がいいの？」
クラフト「理由その1、この場にいた生徒が一気に出入り口に向かったから危険なため。理由その2、侵入者は校門前にいたマスコミ連中のため危険はないと判断」
実際食堂の出入り口に大勢の生徒が押し掛けたことにより混乱が起きていた。
雄英生徒「いてえいてえっ！」「ちょっ押すなって！」「倒れちゃう！」「押すなーーって!!」
「いたたたっ！」「待って人倒れた！」「あいたっ！」
緑谷　「ほんとだ…」
麗日　「あれじゃ逆に動けん…」
拳藤　「ちょっと待って…いま侵入者はマスコミって言った？」
クラフト「外見てみなよ」
そう言われ拳藤は壁ガラスに近づいて外を見る。
拳藤　「……本当にマスコミだ」
飯田　「なら早く皆に伝えなければ！」

麗日　「でもあの状態じゃ思うようには…」
飯田　「くっどうすれば…」
クラフト「ふぅごちそーさん!…飯田ここはお前に任せてもいいか?」
飯田　「むっ?機神くんそれはどういう…」
クラフト「俺はちょっと外のマスコミ対処してくるわ…（キュブキュブの能力）」
　クラフトはそう言うと壁ガラスに手を当て個性を発動させる。するとガラスは正方形の
　形に分割され下に落ちる。
　ピシピシピシ…バラララ……
クラフト「それじゃ飯田ここは任せたぞ?」
飯田　「!…ああ分かった!」
　タッタッタッタッ…
クラフト（原作じゃこの時にカリキュラムを盗んだという考察だったはず…職員室にアキレス
　ディードを飛ばしておくか…）
　通常サイズのＬＢＸを召喚し職員室にアキレスディードを向かわせて、自身は校舎玄関に

向かって走っていく。
――雄英校舎正面玄関――
マスコミ「オールマイト出してくださいよ！いるんでしょ!?」「一言でいいので!!」
（プ）マイク『いないっつーの！非番だって！』
相澤　「一言もらったら二言欲しがるのがアンタらだ」
（プ）マイク『不法侵入だこりゃもう敵（ヴィラン）だぜ？ぶっ飛ばしていいか？』
相澤　「やめろマイク！あることないこと書かれるぞ！警察の到着を待とう」
マスコミ「あっ雄英の生徒！」「えっどこどこ!?」「取材取材!!」「カメラ回して！」「そこの君ちょっとインタビューに答えてくれない!?」「一言お願い！」
相澤　（なに生徒だと!?）
マスコミは雄英の生徒を見つけ取材しようと動き出すが…
クラフト「（召喚！デクーカスタム！）…《シュインシュインシュイン…》…行けデクーカスタム！盾を前面
に出しマスコミを包囲！」
デクー（カ）▨▨▨▨▨リョウカイ▨▨▨▨▨
全長約１７０㎝のデクーカスタム（５０体）がマスコミに向かって動き出す。
ドガシャシャシャッ!!!

マスコミ「ちょっ!?なにこのロボット!?」「なんだよこれ!?」「えっ囲まれた!?」
雄英の敷地内に侵入したマスコミは盾を持ったデクーカスタムに包囲される
クラフト「えーマスコミの皆さまー警察が来るまでそこで大人しくしていてくださーい!」
マスコミ「はあっ!?何の権限があってこんなことしてんだよ!!」「ちょっと早くこのロボットどけてよ!!」「我々には報道の自由があってだなー…」「そーだそーだ!!」
クラフト「不法侵入に退去勧告に従わず退去せずに不退去、その他にも校門前の道に陣取ったりなど…取材の為なら法を犯していいと?」
マスコミ「うっ…」「そっそれは…」「ガキが生意気言ってんじゃねえ!こっちは仕事なんだよ!!」
「おい何言ってんだあんた!?」「そうだ!こっちはもう2日も張ってんだぞー!」
「ちょっ!?」
クラフト「ふーん……じゃあこうするわ」
マスコミ「はっ?」「なにを?」

クラフトはそう言うとズボンのポケットからスマホを取り出し写真を撮り始める。

カシャカシャカシャカシャ!!

マスコミ「おっおい何写真撮ってんだよ!?」「勝手に撮ってんじゃねえよ!!」「そうよ!プライバシーの侵害よ!」

クラフト「『雄英の敷地内にマスコミが不法侵入して警報作動!マジ迷惑』っと…書き込み終わり〜」

マスコミ「おっおい…」「まさかネットに書き込んだのか!?」「ちょっ!これ見て!!」「なっ!?」

ネット『マスコミ終わったなｗｗ』『迷惑しか作れんのか?』『これマジなの?』『現雄英生だけどマジだよ』『よかったな特ダネだぞ!』『拡散拡散ｗ』

ネットではマスコミに対する非難のコメントが嵐のようになっていた。

相澤「機神…」

クラフト「相澤先生」

相澤「いろいろ助かったがこういう事はあまりするな。恨みを買うぞ」

クラフト「ういっす…」

（プ）マイク『そうだぜぇー俺たちはお前たち生徒を守らなきゃいけないからな!』
クラフト「以後気を付けます…山田先生!」
（プ）マイク『ＮＯー!プレゼントマイクって呼んで!山田はダメ!』
注意を受けプレゼントマイクをからかっていると職員室に飛ばしたアキレスディードが
帰ってきた。
相澤「?…機神それはどこに飛ばしていた?」
クラフト「えっ?…ああ、なんとなく嫌な感じがしたんで学校内に飛ばしていたんです」
相澤「…そのロボットは画像か映像が記録できるのか?」
クラフト「ええ出来ますよ……（あ～やっぱり…）相澤先生これ見てください」スッ…
相澤「ああ?……これは!?」
アキレスディードが記録した映像データを端末で確認する。するとそこには職員室に頭
が黒いモヤの男がおり何やら物色している姿が映っていた。
（プ）マイク『おいおいこれはぁ…』

相澤　「機神この映像データ貰うぞ」
クラフト「あっはい了解っす」
その後通報を受けた警察が到着しマスコミは撤退したが、クラフトがネットに投稿した
内容が瞬く間に全国に広まりマスコミは国民から大バッシングを受けたのであった。
ちなみに食堂の混乱は飯田が原作通りに非常口になって治めていた。
――A組教室――
クラフト「では昼休憩にあんなことがありましたが委員長選挙の結果を発表したいと思います！」
芦戸　「イエーーイ!!」
葉隠　「委員長は誰だー！（笑）」
クラフト「よーーし！じゃあ早速発表するぞ！でも最初は副委員長からな！」
葉隠　「おお！ドキドキだあ！」
クラフト「では……結果発表ーー!!（某芸人風）」
瀬呂　「その言い方ズルすぎだろｗ」
切島　「あっはっはっはっはっｗ!!」

クラフト「……八百万（やおよろず）　百（もも）ーーーー!!」
クラス　「「「「おおーーー!!」」」」
八百万　「ちょっと悔しいですわ」
クラフト「いや～票の差は結構僅差だったよ!」
葉隠　「おおー!そうなんだ!」
爆豪　「おいハゲ野郎…俺は何票だ…?」
爆豪が敵（ヴィラン）顔負けの形相でクラフトに問いかける。
クラフト「０票だ…よし委員長を発表するぞー!」
爆豪　「あ☒あ☒ん!?なんだと!?」
クラフト「栄えあるＡ組のクラス委員長は…ドゥルルルルルルルルルル…」
爆豪　「無視かコラァッ!?」
瀬呂　「セルフドラムやめろやｗ!!」
上鳴　「あっはははははっ!!」
クラフト「……」
クラス　「「「「……」」」」ドキドキ
クラフト「……飯田（いいだ）　天哉（てんや）ーーー!!」
飯田　「うおーーーー!!」ガタンッ…シュバッ!

クラス　「「「おおおーーー!!!」」」

飯田が嬉しさのあまり勢いよく立ち両腕を上げる。

飯田　「投票してくれた人ありがとうーーー!!!この飯田天哉!選ばれたからには全力でやらせて

もらう!!」

切島　「うおお!漢らしくて良いぜ飯田!」

瀬呂　「ようやく決まったか（笑）」

峰田　「くそおおお…機神さえいなければ今頃オイラが…」

クラフト「それはないだろｗ」

障子　「うむ…俺もそう思う」

常闇　「同じく…」

瀬呂　「峰田はないだろｗ」

峰田　「うるせえええ!!」

緑谷　「あはは…（苦笑）」

こうしてＡ組の委員長は飯田。副委員長は八百万に決まったのであった。

そして途方も

ない悪意は静かに足音を立てずに近づいていた。

第１８話　レスキューだ!ＵＳＪだ!…なに!?敵だと!?

――マスコミ侵入事件翌日――
――早朝・某市内――
ヒーロー飽和社会であっても犯罪というものは場所と時間を選ばずに発生する。
（僧）ヘッドギア「追いかけてきたらこの裕福そうな家族をぶっ壊すからな!いいか!俺を追うんじゃ
ねえぞ!!」
（マ）レディ「くっ!…連続強盗殺人犯『僧坊ヘッドギア』!!」
（シ）カムイ「強い上に姑息!」
人質　「助けてぇヒーロー!!せめて娘だけでもぉ!!」
他ヒーロー「くそっ!図体デカいくせに素早く動きやがる!!」
（僧）ヘッドギア「このまま逃げさせてもらうぜ!!」へいへいへい
　このまま逃げられるかと思ったがヘッドギアの後方から凄まじいスピードで接近する人

影が現れる。

（オ）マイト「もう大丈夫だファミリー!!
「ＭＩＳＳＯＵＲＩ（ミズーリ）　ＳＭＡＳＨ（スマッシュ）!!」カンッ!!

（僧）ヘッドギア「カッ…ハ…!?」ドサッ…

（オ）マイト「なぜって?…私が通勤がてら来た!!」
強烈なスマッシュによって一撃で気絶させ事件を解決するオールマイト。

野次馬「「わああ!オールマイトだ!!」「すげー!秒で解決だ!!」

（マ）レディ「ありがたいけど…」

（シ）カムイ「我ら廃業してしまう…」

警察「助かりました!我々も手が出せずにいたものですから…」

（オ）マイト「協力できてなにより!では遅刻するとヤバいんでそれじゃ!」

通行人「きゃあああ!ひき逃げ―!!」

（オ）マイト「《ピク…》…んん～遅刻するとヤバいん…だけどなーーー!!」ドヒュー―ン!!

そう理解しながらも現場に向かうオールマイト。

（オ）マイト「（……機神少年のおかげで私のヒーロー活動に支障はない…むしろ今までより良いくら

いだ。しかし緑谷少年に個性を譲渡したため少しずつ力が弱まってきている…それに
　爆豪少年に個性の事を話したことには驚いた。一応戯言だと爆豪少年は受け取ったよ
うだし緑谷少年には釘を刺しておいたが…考えてみればまだ１５歳の少年だ、私がしっ
かりせねば!緑谷少年を立派に見届けるまでは…）頑張らないとな!」ドンッ!
　オールマイトは緑谷の事を思案しながら片手でひき逃げ犯の車を止める。
通行人「隣町で立て籠り事件が起きたってよ!」
（オ）マイト「ムムッ!!?（汗）」
　遅刻しそうだが事件が発生したため現場に向かってしまうオールマイトであった。
　――雄英高校・Ａ組教室――
相澤「今日のヒーロー基礎学は俺とオールマイトともう１人の３人体制で見ることになった。あ
と今回はＡ組のみだ」

緑谷　（なった？特例なのかな…？）
クラフト（３人体制ということは今日だな…個性をフルに使えば捕まえることはできるとは思うが……ＡＦＯ（大ボス）がそれを察知して登場なんてことも予想できるし…状況に合わせて動くのがいいのかな）
瀬呂「はーい何やるんですかー？」
相澤「災害水難なんでもござれ…人命救助（レスキュー）訓練だ」
上鳴「レスキュー…今回も大変そうだなー」
芦戸「確かにねー！」
切島「バッカお前これぞヒーローの本文だぜ！腕が鳴るぜ！」
蛙吹「水難なら私の独壇場だわケロケロ！」
相澤「おい…まだ途中……」ギロ…
クラス「「「!!」」」ビシッ！
　睨まれたことにより静かになるクラス。
相澤「今回コスチュームの着用は各自の判断に任せる。コスチュームによっては活動の際に動

きが限定される物があるからな。今回の訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗っていく。以上早くしろよ」

飯田「先生!準備する前に質問よろしいでしょうか!?」

相澤「なんだ早く言え…」

飯田「なぜ今回Ｂ組とは一緒に訓練しないのでしょうか!?」

相澤「ああ…それはこっちのカリキュラムの調整ミスだ。今年からＡ組とＢ組のヒーロー基礎は初期から合同でやることになったが、今までは別々でしていたからカリキュラムを調整したんだ。だがそれにミスがあったからその帳尻合わせで今回はＡ組だけだ」

飯田「なるほど!ありがとうございます!!」

相澤「いいから早く準備しろよ」

クラス「「「はい!」」」

・
・

・

――バス停前――

麗日　「あれデクくん体操服？コスチュームどしたん？」

緑谷　「前回の戦闘訓練でボロボロになっちゃったからサポート会社に出して今は修復待ちなんだ」

麗日　「確かに右袖なんかなくなってたもんね！どんな風に直ってくるんだろうね！カッコよくなって返ってくるのかな？」

緑谷　「どっどうなんだろうね／／!?（ちっ近い／／）」

飯田　「さあ皆！スムーズに座れるように番号順に並ぼう!!」ピッピッピッ！

緑谷　「飯田くん…フルスロットル…（汗）」

クラフト「笛はどこから持ってきたんだ？」

飯田の全力進行でバスに乗り込むA組。しかし飯田の全力進行は…

――バス車内――

飯田　「こういうタイプだった！くそう!!」

芦戸　「意味なかったなー」

全力で空振りしたのであった。
蛙吹「わたし思ったことは何でも言っちゃうの…緑谷ちゃん」
緑谷「はっはい!?なに蛙吹さん!?」
蛙吹「梅雨ちゃんと呼んで?…あなたの個性オールマイトと似てる」
緑谷「えっ!?そそそうかな!?でも僕の個性はそのっえーと…」
自分の秘密の核心を突く指摘に動揺しまくる緑谷。
切島「待てよ梅雨ちゃん、オールマイトは怪我しないぜ?似て非なるあれだぜ?だけど増強型の
個性は派手で出来る事が多いからいいな!俺の個性は対人じゃ強いけど地味目だから
なー」
緑谷「そんなことないよ、僕はプロでも十分に通用する個性だと思うよ?」
切島「プロなー!だけどヒーローも人気商売なとこもあるぜ!?」
青山「僕のネビルレーザーは派手さも強さもあってプロ並み☆」
芦戸「でもお腹壊しちゃうのはヨクナイね!」
青山「……☆」
痛いところを言われてしまう青山。

切島「でも派手で強えと言ったらやっぱ轟とか爆豪だよな！」
上鳴「だけど断トツなのは機神だよなー！なあなあお前の個性って何なの？」
耳郎（確かに…付き合っているのにクラフトの個性のこと全然知らない……気になる…）
クラフト「……秘密で」
葉隠「えー気になるー！」
クラフト「まあいずれ話すよ…いずれね？」
葉隠「あっ言ったね？絶対だよ!?」
クラフトが自身の個性について話す日はいつになるのか？それは意外に早く来るのかも
しれない。
蛙吹「機神ちゃんの個性の事はまた今度として…さっきの話だけど爆豪ちゃんは切れてばっか
で人気でなさそうだわ」
爆豪「ああッ!?何だと蛙女!?出すわコラ!!」
蛙吹「ほら」
上鳴「この付き合いの浅さでクソを下水で煮込んだような性格って認識されてん

なんてすげえ
よ?おわかり?」
爆豪　「テメエのボキャブラリーなんだ!?ぶち殺すぞ!!」
クラフト「爆豪」
爆豪　「ああ、何だよ?」
クラフト「カルシウム足りてるか?今度ヨーグ○ット買って来てやろうか?」
火が燃えている所に油を追加するクラフト。
爆豪　「テメエ喧嘩売ってんのか!?んなもん要らんわ!!」
上鳴　「ぶふっｗ爆豪貰っとけよｗ」
瀬呂　「あっはっはっはっはっｗ」
クラフト「はっ!爆豪お前もしかして…」
爆豪　「っんだよ!?」
クラフト「レモン味の方がよかったか?」（真顔）
油を追加するどころか火薬を追加するクラフト。
耳郎　「ぶふっーーーｗ!!」
瀬呂　「あひゃひゃひゃひゃっｗ!」
上鳴　「あっはっはっはっはっｗ!機神お前レモン味ってｗ!」

爆豪「ぶっっ殺す!!」
蛙吹「レモン味美味しいわよ？爆豪ちゃん」
爆豪「そういう問題じゃねえんだよ!!」
緑谷（かっちゃんがいじられている!?信じられない光景だ！さすが雄英…）
相澤「もう着くぞ！いい加減にしとけ!!」
クラス「「「はいっ!!」」」
緩んでいた雰囲気が引き締められバスはＵＳＪに到着する。
――ＵＳＪ出入り口付近――
１３号「皆さんようこそ！水難事故・土砂災害・地震・火事…ｅｔｃ．……ここはあらゆる事故や災害を想定して僕が作った演習場…その名も嘘の災害や事故ルーム！ＵＳＪです！」
クラス（（（（意味は違うけどＵＳＪだった））））
クラス「だけどやっぱでっけえー！」「ワクワクする――！」
緑谷「スペースヒーロー１３号だ！災害救助で活躍している紳士的なヒーロー！」
麗日「わあー！私１３号すきなのー！」

某テーマパークのような施設に興奮するＡ組面々。そして相澤はオールマイトがいない事を１３号に問いかける。

相澤「?……おい１３号、オールマイトはどうした?ここで待ち合わせのはずだが?」

１３号「いやそれが…どうやら救助活動や敵(ヴィラン)が発生しては駆けつけているうちにどうやら埼玉県まで行ってしまったらしくて……」

相澤「……はっ?…ということは今は埼玉県にいるのか?」

１３号「現在こちらに向かっているそうです…３０分くらいで着くと先ほど連絡がありました」

相澤「ヒーローとしては大変立派だが教師としては落第点だな…（まあ念のための警戒態勢…）…仕方ない始めるか」

１３号「えー演習を始める前に小言を１つ２つ…３つ…」

クラス（（（（増える…））））

１３号が個性についての話をする。それは個性の危険性、自身が持っている

力、そ

してその個性をどのように人命に使うかを学んでほしいというものだった。

飯田　「ブラーボ――！」

クラス　「さすが１３号！」「めっちゃ心にきた――！」

相澤　「それじゃまずは……（なんだ？）」

授業を始めようとしたら広場に黒い渦のようなものが現れる。

ズ…ズズ…ズズズズ……

相澤　「一塊になって動くな!!」

クラス　「えっ？」「なに？」「先生？」

相澤　「１３号生徒を守れ！」

クラフト（来たか…）

切島　「なんだありゃ？また入試ん時みたいに始まってるパターンか？」

相澤　「動くな！あれは敵（ヴィラン）だ!!」

????　「イレイザーヘッドに１３号ですか…先日頂いたカリキュラムにはオールマイトもいるは

ず…何か変更でもあったのでしょうか？」

????　「どこだよ…せっかくこんなに連れてきたのに…平和の象徴オールマイト……子供

を殺せ

ばくるのかなぁ…?」

敵（ヴィラン）の突然の襲撃に驚くＡ組。

上鳴「はあっ敵（ヴィラン）ん!?アホだろ!?ここヒーローの学校だぞ!!?」

八百万「先生!侵入者用のセンサーは!?」

１３号「もちろんありますが…」

轟「ここだけなのか学校の別の場所もなのか…どっちにしろセンサーが反応しねえってこと

は、敵にそういうことが出来る個性持ちがいるってことだ。しかもここは校舎から離れ

ていて向こうはこっちの行動の情報を手に入れての襲撃。バカだがアホじゃねえ…少な

くとも何らかの目的があって用意周到に画策された奇襲だ」

相澤「とにかく１３号避難開始しろ!学校にも連絡を試せ!侵入者用のセンサーが反応しないとい

うことは妨害系の個性が相手にいる可能性がある!上鳴!お前の個性でも試せ!」

上鳴　「っス！」
緑谷　「先生はどうするんですか!?まさか1人であの数を相手にするんですか!?イレイザーヘッドの戦法は個性を消してからの捕縛のはず！正面戦闘は…！」
相澤　「緑谷…一芸だけじゃヒーローは務まらん」
相澤が広場に飛び出そうとしたらそこにクラフトが階段前に歩いてき立ち止まる。
緑谷　「あれ機神くん…？」
相澤　「機神何してる？お前も早く避難しｒ…」
クラフト「氷河（アイス）…時代（エイジ）……」
パキパキ…バキイインッ!!!
相澤　「なっ!?」
クラフト「一先ず動きを封じる…えーとこの後はどうすれば…」
切島　「やっぱすげえなアイツ…」
瀬呂　「寒みぃ～」
轟　「……」
ヒエヒエの能力を発動させ一部を除きＵＳＪの地面全体を凍らせ侵入して

きた敵（ヴィラン）の動き

を封じるクラフト。

敵（ヴィラン）「なんだよこれ!?」「いっ!?痛えっ!!」「あっ足が!?」

死柄木「おい黒霧!なんだよこれはっ!?」

黒霧「死柄木弔!私にも何が起きたか…!?」

死柄木「クソ…メンドくさいな…」パキパキ…

死柄木はそう言いながら自身の個性を使ってうまく氷の拘束から抜ける。

クラフト「先生、今のうちに避難を……先生?」

相澤「…!…ああそうだな１３号、避難を始めろ!」

１３号「はい!皆さん早くこちらへ!」

クラス「「「はっはい!!」」」

全員が出入り口に向かって小走りで移動を始める。がその途中で黒い霧が現れる。

黒霧「させませんよ!初めまして我々は敵（ヴィラン）連合…せんえつながらこの度雄英高校に入らせて頂

いたのは…オールマイトに息絶えて頂こうかと思いまして…しかし…まさか侵入した瞬

間に氷漬けにされるとは思いもしませんでした…」

緑谷　（はっ!?）

クラス　「「「「!?」」」」

敵（ヴィラン）が発した言葉に動揺が走る。だがクラフトがその空気を緩和するように話し出す。

クラフト「こっちも敵（ヴィラン）が侵入してくるなんて思わなかったよ」

黒霧　「……もしや先ほどの氷は貴方の仕業ですか?」

クラフト「そうだと言ったら?」

黒霧　「そうですか……いやはや驚きました最近の子供はこんなにも強いものなんですか?」

クラス　（（（（いやコイツは別です…））））

クラフト「いや～それほどでは～／／」

峰田　「なんでお前は照れてんだよ!!怒ってるんだよ!!（怒）」

クラフト「そうなのか!それは気付かなかった!!」すっ呆け

峰田　「テメェこんな状況でよくふざけてられるな!!」

クラフト「こんな状況だからこそだよ峰田」

峰田　「どういうことだよ!?（怒）」

クラフト「そのほうが冷静でいられるから」
峰田　「!?…」
黒霧　「お話は終わりましたか?終わりましたのなら…」
クラフト「終わったけど避難させてもらうぞ!（ピカピカの能力）」ピシュン!
ドゴオォォン!!!
ピカピカの能力のビームで出入り口を破壊するクラフト。
黒霧　「強力な攻撃だ…まさか２つの個性を持っているのですか?…しかし一体どこを攻撃していらるのですか?」
クラフト「これでいいんだよ…Ｒｏｏｍ!《ブウゥゥン!》…シャンブルズ!」シュンッ!
クラス　「えっここは…?」「バスがあるから…」「バスから降りた場所…?」
相澤　「……全員いるか!?」
耳郎　「（さっきの青いサークル…前に見たことある…あれ?）…クラフトは!?」
クラス　「えっ?」「機神なら…」「機神なら峰田の横に…あれ?」「機神いなくね?」
相澤　「…まさか!?」ダッ!
クラス　「!?…」「相澤先生!?」「どこに行くんですか!?」

相澤　「お前らはそこにいろ！13号は学校に連絡！俺はバカを連れてくるため戻る!!」ダダダッ！

クラフトはバス乗り場にあるバス停ポールと自分以外のクラスメイトと教師2人の場所

を入れ替える。そして相澤はバカを助けるため急いでUSJ内に戻る

黒霧　「なっ!?…」

クラフト「そんなにビックリしてどうした?」

黒霧　「……これも貴方の仕業ですか?氷にレーザーに物体と物体の位置を入れ替える個性です

か?まさか個性を3つ持っているとは……1つ聞いていいですか?」

クラフト「なんだよ?」

黒霧　「なぜあなたは残ったのですか?」

クラフト「誰かが残らなきゃ足止め出来ないだろ?」

黒霧　「あなた1人で事足りると?」

クラフト「まあ自信はあるね」

黒霧　「だそうですよ?死柄木弔…」ユラ…

クラフト「おっ?」クルッ

後ろを振り向くと死柄木と他の敵（ヴィラン）達が氷の拘束から抜け出し広場から階段を上ってきていた。ちなみにいつまにか黒霧は死柄木の隣に移動していた。

死柄木「いきなり足を凍らせやがって…おいお前ら出番だぞ」

敵（ヴィラン）「クソガキが!ぶっ殺してやる!!」「さっきの借りは１００倍に返させてやるぜ!!」

「ちょっと強いからって舐めやがって!!」

敵（ヴィラン）達がクラフトを取り囲む。

死柄木「ハハハ…いくら個性が強いからってこの数は無理なんじゃないか?」

クラフト「兵力差でも勝ってるさ（シロシロの能力＆ＬＢＸ）」

ガシャシャン…

敵（ヴィラン）「なんだ?」「コイツの体なんか変だぞ!?」

ポポポポポポン!…ヒュウウウウウ…ビュウンッ!!

敵（ヴィラン）「うえ!?」「なっ!?」「急にでかく!?」

ドゴオオォン!

敵（ヴィラン）「「「ぐあああああああああああ!!?」」」

クラフトはシロシロの能力を発動させ、次にＬＢＸの個性を使って内部にデ

クーを作り出す。そして取り囲んでいる敵（ヴィラン）に向かって大砲を使って砲撃をする。囲んでいた敵（ヴィラン）は全員その砲撃が直撃し倒れてしまう。

死柄木「チートかよ…イラつくなあ……」

黒霧「死柄木弔…」

死柄木「おい黒霧…なんなんだよコイツ…こんな奴がいるなんて聞いてないぞ？しかもコイツ以外逃げられたからプロもじきに来る…こんなに早くゲームオーバーになるなんてどういうことだよ…」イライラ…

黒霧「落ち着いてください死柄木弔」

死柄木「クソ…脳無をつかう」

黒霧「よろしいので？」

死柄木「いい、あのガキはムカつく！アイツは殺さないと気が収まらない!!」

黒霧「分かりました」

死柄木「いけ…脳無」

脳無　「……」ズシン…
体躯がオールマイト並の黒い体で、鳥の様に鋭く嘴まれたら大怪我しそうな口と歯。そして何より特徴的なのは脳がむき出しになっている頭。その姿は人の形をしているが
１０人中１０人が化け物と答えるだろう。そしてその化け物がクラフトに狙いを定め攻撃
を仕掛ける。
脳無　「クアアアアアッ!!」ドドドドドッ!
クラフト「うおっ!?子供にあんなの使ってくるかよ!?（まあ精神的年齢は一応２０代だけど（笑）スナ
スナの能力!）」
脳無　「……」ズンッ!ブオォッ!!
ドゴオオオン!
脳無はすさまじい速さでクラフトの目の前まで走ってき、地面に亀裂が入るまで足を踏
み込み右拳を振り下ろす。その拳は地面に直撃し亀裂も先ほどより大きく

入る。

死柄木「ハハハ！…さすがにこれは死んだんじゃないか？」

相澤「機神ー!!」

死柄木「おっ？ちょっと遅かったなイレイザー（笑）お前の大事な生徒はたったいま死んだぜ！」

相澤「てめぇ…!?」ギリッ…

だが脳無の攻撃が当たる前にスナスナの能力を発動していたためクラフトは…

クラフト「（オペオペ＆ブキブキの能力）相手が悪かったな！Ｒｏｏｍ!!」ブウゥゥゥン！

死柄木「なっ!?」

当然生きている。

クラフト「ラジオナイフ!!」ズバババババッ!!

オペオペの能力とブキブキの能力で脳無の頭、胴体、腕、脚を切り離し行動不能にする

るクラフト。

相澤　「おい機神!」
クラフト「相澤先生!」タッタッタ…
　出入り口にクラフトを助ける為に駆け付けた相澤の元に駆け寄るクラフト。
相澤　「ケガはないか!?」
クラフト「ハッハッハッ!この通り五体満足の無傷でございます!」ブンブンッ!
　腕を振り回しながら無事であることをアピールする。
相澤　「そうか…とりあえず事が終わったら反省文書いてもらうからな」
クラフト「そっそんな!?」ガーン!
相澤　「当たり前だ」
クラフト「いっ…1枚すか?」
相澤　「２０枚だ」
クラフト「おっふ…」ズ―ン…
　中々の枚数に気が滅入ってしまうクラフトであった。
相澤　「ところで機神…あの黒い奴は生きているのか?」
クラフト「え?…あぁはい、生きてますよ俺の個性で切って戦闘不能にしました」
相澤　「なるほど…ならお前は下がってクラスと合流しろ。すぐに他のヒーローも来る」

クラフト「わかりました…っとその前にアイツを回収っと！」
クラフトはそう言うとイトイトの能力でバラバラにした脳無を自分の元に引き寄せ、ド
アドアの能力で大気にドアを作りその内部（亜空間）に収納する。
黒霧「なっ!?貴様!!」
死柄木「おいおい何なんだよあのガキは…対オールマイト用に作った脳無が全く歯が立たないじゃないか……黒霧、連れてきた奴らをここに集めろ」
黒霧「死柄木弔…ここは引いた方が…」
死柄木「はやくしろ！…」
黒霧「分かりました…」ズオオオ…
黒霧がワープゲートを広げるとＵＳＪ内にいた敵（ヴィラン）続々と集結する。
相澤「ちっ…よくもこんなに集めたもんだな…」
死柄木「行けお前ら…」
敵（ヴィラン）「この数はしのげねえだろ!!」「おい！外に女がいるぞ！」「おいおい結構可愛いじゃん！」
「死んどけやヒーロー！」「正義気取り野郎が覚悟しろやあ!!」「可愛い女は可愛

がってや
るぜ!」
大量の敵(ヴィラン)が一斉に相澤とクラフトに攻撃しようとしたそのとき、後方から爆発音が
徐々に近づき大きくなる。
爆豪「このクソ敵(ヴィラン)どもがあああああ!!!」
ボオオオオン!!!
敵(ヴィラン)「「ぎゃあああああああ!!!?」」「なんだこの爆発は!?」
クラフト「爆豪!?」
相澤「バカ野郎!なんで来た!?」
爆豪「あ☒あ☒!?俺はNo.1ヒーローになる男だ!この程度の敵(ヴィラン)にビビッてちゃ意味ねえんだよ!そ
れにハゲ野郎に借りは作りたくねえしな!!」
クラフト「ハゲ野郎じゃないぞボムヘッド。あと先生!下がるのは無理そうです!」
爆豪「誰がボムヘッドだゴラァ!?」
相澤「ちっ…後で絶対反省文だからな!」
敵(ヴィラン)「この程度だとぉ!?舐めやがってクソガキがあ!!」ダダダッ!

「命乞いするなら今のうちだぞ!!」ダダダッ!

爆豪　「複数で仕掛けている時点で弱いと言ってるようなもんだろうがああ!!!」ボオオオン!!

敵(ヴィラン)　「「ぐあああああああっ!!」」

爆豪が加わったことによりＵＳＪ出入り口に付近は乱戦になる。だが乱戦になったことに

より隙が生まれ、相澤・クラフト・爆豪の防衛ラインを敵(ヴィラン)がすり抜けＡ組の方へ向かっ

てしまう。

相澤　「しまった!」

敵(ヴィラン)　「よそ見は禁物だぜぇヒーロー!!」

クラフト「お前がな!!」バキィッ!

敵(ヴィラン)　「ハボォ!?」ズザアア!

相澤　「機神助かった!だが何人か抜けたぞ!」

クラフト「俺が行きｍ…」

クラフトが通り抜けた敵(ヴィラン)を倒しに行こうとしたが…

切島　「心配はないぜ機神!!オラァ!!」ドゴォ!!

耳郎　「それより目の前に集中しな!」キイイィィィィィン!!
緑谷　「デラウエア…スマッーシュ!!」ブオオオオ!!
常闇　「黒影(ダークシャドウ)!」
(ダ)シャドウ「アイヨ!」
上鳴　「ウエ～～イ!」Ｂｚｚ!!
轟　「……」パキパキパキィン!
峰田　「うあああああ!?こっち来るんじゃねえええ!!」ポポポポーイ!
バス停ポール付近に避難していたＡ組が自分たちに向かって来ていた敵(ヴィラン)を迎撃しており、敵(ヴィラン)達は次々と倒されていた。
敵(ヴィラン)「ぐおぉ!?」「「ぐあああああ!?耳がぁぁ!?」」「「アッチィィィ!!」」
「何だコイツｈ…ぐあ!!」「ひいぃ!?」「アバびびびびｂ!?」「冷てえぇ…」
「あっ足が…」「何だこれ!?取れねえ!?」「おいくっ付くなよ!?」「だああ!動けねえ!!」
蛙吹　「こっちは心配ないわ機神ちゃん!あと数分もしないうちに他の先生達が到着するわ!」
クラフト「了解梅雨ちゃん!…だそうです先生!」

相澤　「分かった！もう少しの辛抱だ…気張れよ」
爆豪　「その前に全員ぶっ飛ばしてやらあ!!」
クラフト「ハッハッハッ！俺にかかれ「もう大丈夫だみんな!!」…かぶった…」ズ―ン…

クラフトが言葉を発しているとそれを遮るように大きな声が響く。
クラス「この声は！」「「オールマイト!!」」
ヒュウウウウ…ズウン!!
オールマイトがA組と敵（ヴィラン）の間に勢いよく飛び降りる。
（オ）マイト「なぜって？…私が来た!!」
クラス「「「「オールマイトォオオ!!」」」」
（オ）マイト「みんな怪我はないかい!?」
飯田　「我々は大丈夫です！ですがUSJ内部で相澤先生、機神くん、爆豪くんがこ
こより多くの
敵（ヴィラン）と戦っています！」
（オ）マイト「なんと！私が遅れてしまったばかりに!!…」
敵（ヴィラン）「背中がガラ空きだぜ！」「ここでくたばれやあ!!」「死ねやああ!!」
オールマイトの後方にいた敵（ヴィラン）が攻撃を仕掛けるが…

（オ）マイト「ＴＥＸＡＳ（テキサス）　ＳＭＡＳＨ（スマッシュ）!!!」カカカカン!!
敵（ヴィラン）「がっ!?」「ぐほっ!?」「ぐぅ!?」「へぼっ!?」バタバタバタバタ…
クラス「すげぇ…」「圧倒的だな…」「早すぎてみえねぇ…」
轟　（これがプロか…）
　オールマイトはそのままＵＳＪ内部に入る。
（オ）マイト「３人とも!!」
爆豪「オールマイト!」
相澤「遅刻ですよオールマイト」
クラフト「どこで油を売っていたんですか?」
（オ）マイト「ハッハッハッ!すまない３人とも!だが無事で安心したよ!!」
　安堵するオールマイト。
死柄木「でたなオールマイト…平和の象徴……社会のゴミがぁ…!」
（オ）マイト「!…君が主犯かな?なぜこのような事をしたんだ?」
死柄木「うるさいよ社会のゴミが…俺はな怒ってるんだオールマイト…そこのチートが…他の奴
　を守る為に俺たちに攻撃をしてきた…他が他を守る為に振るう暴力は美談になる。そう

だろヒーロー？同じ暴力でも今の世の中は、ヒーローと敵（ヴィラン）でカテゴライズされて善し悪しが決まる…お前は平和の象徴と呼ばれている、だが所詮は抑圧の為の暴
力装置だ。暴力は暴力しか生まない、お前を殺すことで世に知らしめそうとしたんだ」
（オ）マイト「むちゃくちゃだな…そういう思想犯の眼は静かに燃ゆるものだ。自分が楽しみたいだ
けなんじゃないか？」
死柄木「バレるのはや……まあそれもそこのガキのせいで全てグチャグチャになったけどな…」
黒霧「悔しいですが我々はここで引かせてもらいます」
（オ）マイト「そうはさせない！ここで君らを捕まえる！」ザッ…
オールマイトが体勢を構えたその時…

死柄木「あー…これはまずいな黒霧はや《ズドッ！》…痛っ!?」
黒霧「死柄木弔!?」
クラフト「この攻撃は…」

（オ）マイト「どうやら到着したみたいだね」
　死柄木の肩に銃弾が撃ち込まれる。外には連絡を受けた雄英教師が到着しており、先ほどの攻撃はスナイプによるものだった。
　バァン!バァン!バァン!バァン!
死柄木「ぐっ!?」
黒霧「死柄木弔!」バッ!
　黒霧が黒いモヤを広げ銃弾を防ぎつつワープゲートを広げる。
死柄木「今度は殺すぞ!平和の象徴オールマイト!!」ズズズ…
（オ）マイト「まて…ＳＨＩＴ!」
　オールマイトが死柄木を捕まえようとするが、まだ多く残っていた敵（ヴィラン）に阻まれ取り逃がしてしまう。その後、残っていた敵（ヴィラン）は全員捕まえられ警察に連行された。
　襲撃を受けたＡ組はクラフトが素早く避難させたため全員大した怪我もなく無事に終わる。
・

・
・
・

――とあるＢＡＲ――

ズズズズズ…

死柄木　「っ痛ぇ…両腕両足撃たれた…完敗だ…。なんなんだあのガキは！あんなガキがいるなん
て聞いてない！…話が違うぞ先生！」

死柄木が設置してあるモニターに話しかけると声が返ってくる。

先生　『違わないよ…と言いたいがどういう事が話してくれるかい？』

黒霧　「複数の個性を持つ子供がいまして…その子供に狂わされました」

先生　『へぇ…まあだけど見通しが甘すぎたかもね』

????『うむ…舐めすぎたな、敵（ヴィラン）連合なんちうチープな名前でよかったわい。ところでワシと
先生の共作脳無は回収してないのか？』

黒霧　「申し訳ありません…回収の方はできず…」

????『なにっ!?』

黒霧　「その子供に捕らえられてしまいまして」

????『せっかくオールマイト並のパワーにしたのに…』
先生　『まあ仕方ないか…残念…』
死柄木「全部あのガキのせいだ!くそ!…くそ!…」
先生　『悔やんでも仕方ない…今回だって決して無駄ではなかったはずだ。精鋭を集めよう、
　ゆっくり時間をかけて!我々は自由に動けない!だから君のような人シンボルが必要なん
　だ。死柄木弔!次こそ君という恐怖を世に知らしめろ!!』
　巨大な悪はさらなる行動を起こさんと力を蓄え始めようとする。

――襲撃その後――

塚内警部「１８…１９…２０…２１…全員無事…とりあえず君たち生徒は教室に戻ってもらうよ、すぐ事
　情聴取というわけにもいかないからね」
スナイプ「全くなんてことだ…」
（ミ）ナイト「これだけ派手に侵入されて逃げられちゃうなんて」
根津校長「完全に虚をつかれたね。セキュリティの大幅強化が必要だね!」

（ミ）ナイト「ワープなんて個性ただでさえものすごく希少なのによりにもよって敵（ヴィラン）側にいるなんて…」

塚内警部「校長先生、念のため校内を隅まで見たいのですが」

根津校長「ああもちろん！一部じゃとやかく言われているが権限は警察の方が上さ！捜査は君たちの分野！よろしく頼むよ！」

塚内警部「ありがとうございます」

塚内警部が校内を捜査しようと動こうとしているとクラフトが呼び止める。

クラフト「塚内警部！」

塚内警部「おや機神くん、何か用かな？」

クラフト「はい、今回の襲撃の一応証拠でいいのかな？渡しておこうと思いまして」

塚内警部「証拠？」

クラフトはそう言うとドアドアの能力を発動させ脳無を取り出す。ちなみに体はちゃんとくっつけた状態である。

塚内警部「これは!?」

クラフト「襲撃犯の主犯は脳無と言っていました」
塚内警部「脳無…わかった、ありがとう機神くん。おい」
警官　「「はっ!」」
　クラフトが捕まえた脳無は警官に引き渡され連行されていった。
クラフト「じゃあ俺はこれで!」
塚内警部「ああ、事情聴取のときはよろしくね」
クラフト「わかりました」
相澤　「よし…じゃあこの後は反省文を書いてもらうぞ」シュルッギチッ!
クラフト「あわわわわわ…相澤先生」
相澤　「安心しろ校舎まで俺が連れてってやる。疲れているだろうから」
クラフト「先生大丈夫です!全然元気です!なので…」
相澤　「そうか…それだけ元気なら書けそうだな」ズルズル…
塚内警部「ははは（頑張れよ機神くん）…（苦笑）」
　そう言いながら捕縛布を巻き付けたクラフトを引きずりながら歩い始める相澤。
クラフト「先生!２０枚はさすがに多いです!減刑を!」ジタバタ!
相澤　「そうだな……一応お前のおかげで全員大した怪我もなく済んだしな…」

クラフト「じゃあ…」
相澤　「１０枚にしてやろう」
クラフト「……」チーン…
　真っ白になったクラフトを見た切島、瀬呂、上鳴は爆笑しており、他の皆は頑張れとしか言えなかった。だが少しかわいそうと思ったのか耳郎はクラフトに近づきしゃがむ。
耳郎　「クラフト…」スッ…
クラフト「うぇい…」
耳郎　「アンタが危ない事したことにウチも怒ってるんだよ…」
クラフト「返す言葉もありません…」
耳郎　「だけどアンタのおかげで皆一応ケガもなくいられた…ありがとね…」
クラフト「おう…」
耳郎　「あと反省文早く書き終わったら頭撫でであげる…かも／／…」
クラフト「さあ先生！早く校舎に行きましょう!!」シュバッ!!
相澤　「こいつ…」
　その後、凄まじい速さで反省文１０枚を書き上げたクラフト。なおこの記録

（反省文を書き上げた時間）はのちに多くの雄英の教師や生徒達に語り継がれる。だが記録が記録だけに雄英都市伝説の1つとなってしまうのは少し未来のお話。

クラフト「あれ?ナデナデは?」

第19話　体育祭だ!!①

敵（ヴィラン）の襲撃があったため翌日は臨時休校になる。だが皆の気が休まったかと言えば五分

五分といった所である。そして…

飯田「みんなーー!!もうすぐＨＲが始まる！急いで席に着くんだーー!!」

瀬呂「ついてるよ、ついてねーのおめーだけだ」

飯田「くっ！俺としたことが!!」ガタッ

麗日「どんまい！」

ガラ…

相澤「おはよう…」

クラス「「「「おはようございます!!」」」」

相澤「さて…敵（ヴィラン）による襲撃があったがまだ戦いは終わっていない」

爆豪「戦い？」

緑谷「まさか…」

峰田「また敵（ヴィラン）がー!?」

相澤　「雄英体育祭が迫っている」
クラス　「「「「くそ学校っぽいのきたあぁぁ!!!」」」」
　学校の一大イベントにテンションが上がるA組クラス。
上鳴　「うおぉ体育祭か！学校っぽいイベントキきたーー！」
切島　「待て待て上鳴！先生あんな事あったばっかなのにいいんすか!?」
耳郎　「確かに…敵（ヴィラン）に襲撃されたばっかなのにいいんですか？」
相澤　「逆に開催することで雄英（うち）の危機管理体制が盤石だと示す…って考えらしい。会場の警備も例年の五倍に強化するそうだ。何より雄英の体育祭は最大のチャンスの場だ。敵（ヴィラン）ごときで中止していい催しじゃねえ」
峰田　「いやそこは安全をとって中止しよう？体育の祭りだよ？」
緑谷　「峰田くん雄英の体育祭見たことないの!?」
峰田　「見たことあるよ…でもそういう事じゃなくてよー」
相澤　「雄英の体育祭は日本のビッグイベントの１つ！かつてはオリンピックがスポーツの祭典と呼ばれ全国が熱狂したが、今は人口も規模も縮小し形骸化した。そして今の

日本におい
てかつてのオリンピックに代わるのが雄英体育祭だ!!」
八百万「当然、全国のトップヒーローも自分たちの元にスカウトしようと観ますわ」
上鳴「資格とって卒業した後はプロの事務所にサイドキック入りがセオリーだもんな」
耳郎「でもそっから独立しそびれて万年サイドキックってのも多いんだよね。上鳴アンタそう
なりそう、アホだし」
上鳴「んなっ…!」
クラフト「もし将来そうなっていたら俺が事務所立てたときに雇ってやるから安心しろ」
上鳴「結局サイドキックじゃねぇか!」
相澤「おしゃべりは後にしろ…当然名のある事務所に入った方が経験値や話題性も高くなる。
時間は有限、プロに見込まれれば将来の道が開けるわけだ。年に1回…計3回のだけの
チャンスだ。ヒーロー志すなら絶対に外せないイベントだ!チャンス逃さ

ないためにも
　気抜くんじゃねぇぞお前ら！」
クラス　「「「「はいっ!!!」」」」
　チャンスをつかむために気を引き締めるＡ組。
・
・
・
　――昼休み――
切島　「あんなこと（襲撃）あったけどなんだかんだテンション上がるなオイ!!」
瀬呂　「活躍して目出ちゃプロへのデカい道が踏み出せるからなー」
緑谷　「みんなすごいノリノリだ…」
飯田　「君は違うのかい？ヒーローになる為在籍しているため燃えるのは当然だろう！」グッ！
　飯田がとったポーズはなかなか独特である。そして蛙吹はそれに突っ込みを入れる。
緑谷　「僕もそりゃそうだよ。でも何か…」
麗日　「デクくん、飯田くん……頑張ろうね体育祭」

緑谷「顔があれだよ麗日さん!?」
芦戸「どうしたー全然うららかじゃないよ麗日」
峰田「……生ｒー《スパァン!!》」
峰田が何か言いかけたが蛙吹の舌ビンタによって黙らされてしまう。
麗日「皆！私頑張るぅー!!」
切島「おぉー…どうしたキャラがフワフワしてんぞ（汗）？」
クラフト「まあ飯食べに行こうや麗日殿」
麗日「どの!?」
そう言い緑谷達3人と食堂に向かう。
緑谷「機神くん今日は耳郎さんと拳藤さんと一緒に食べないの？」
クラフト「ああ、今日は女子たちと一緒に食べるって言ってたのよ」
緑谷「そうだったんだ…ねえ麗日さん」
麗日「なにデクくん？」
緑谷「麗日さんはなんでヒーローになろうとしたの？」
麗日「うえっ!?そっそれはその……おっ…」
緑谷「おっ？」
飯田「おっ？」

麗日　「おっ…おか……」
クラフト「金か!」
麗日　「ぶふっー!?」
緑谷　「ちょっ機神くん!?」
麗日　「うんまあそうなんだよね」
緑谷　「お金欲しいからヒーローに?」
麗日　「究極的に言えばね、何かごめんね不純で!飯田くんとか立派な動機なのに私恥ずかしいよ／／」
飯田　「何を言う!生活のために目標を掲げる事の何が立派じゃないんだ!?」
シュバッ!
緑谷　「うん、でもなんか意外だね」
意外な理由に少し驚きながらも麗日が自身の動機についての理由を話す。
麗日　「実はうちの実家建設会社してるんだけど…全然仕事なくてスカンピンなんよ。こういうのあんま人に言わんほうがいいんだけど」
飯田　「建設…」

緑谷　「麗日さんの個性なら許可とればコストかかんないね」
麗日　「でしょー！昔それ父に言ったんだよ！でも…」
　　麗日は父親に言われたことを話す。そして…
麗日　「だから私は絶対ヒーローになってお金稼いで！父ちゃん母ちゃんに楽させたげるんだ!!」
緑谷　（憧れだけじゃなくて現実を加味した上で…）
飯田　「ブラーボ――！麗日くん！ブラーボ――!!」パチパチパチ！
　　麗日の話に飯田が感動しているとオールマイトがやって来た。
（オ）マイト「おお！緑谷少年！それに丁度よく機神少年がぁーいたあ!!」
緑谷　「オールマイト」
クラフト「どうしたんですか？」
（オ）マイト「ご飯…一緒に食べよ？」
麗日　「乙女や!!」ブファ!!
緑谷　「（何だろう？）…ぜひ」
クラフト「わかりました」
　　緑谷とクラフトは飯田と麗日と別れオールマイトに同行する。
　　――雄英食堂――

麗日　「デクくんと機神くん何だろうね?」
飯田　「うーむ…もしかすると緑谷くんと機神くんはオールマイトと個人的な関係があるのかもしれないな。もしそうだとすると凄いことだ!それに緑谷くんの個性はオールマイトと似ているから気に入られているのかもしれないな!」
麗日　「なるほどー!」
轟　「……」
飯田と麗日の会話を轟は偶然聞き何か思うのであった。
――仮眠室――
（オ）マイト「急にすまないね」
緑谷　「いえ…」
クラフト「それで何か用ですか?」
（オ）マイト「実は体育祭のことで少し話しがあってね…機神少年のおかげでＯＦＡの扱いは少しずつだがものになってきている。その調子でいけば体育祭でいい成績も残せるだろう…

私が緑谷少年に個性を授けたのは私を継いでほしいからだ！この体育祭は全国が注目
しているビッグイベントだ！今こうして話しているのは他でもない、次世代のオー
ルマイト…象徴の卵!!君が来たってことを世の中に知らしめてほしい!!」
緑谷「僕が来た…」
クラフト「なるほど…だけどただ体育祭をするだけじゃ意味がないんでしょう？」
（オ）マイト「その通りだ機神少年、体育祭のシステムは知っているね？」
緑谷「はい！もちろん!!サポート科・経営科・普通科・ヒーロー科がごった煮になって、各種競
技予選を行いその予選を勝ち抜いた生徒が本選で競う…いわゆる学年別総当たり」
（オ）マイト「その通り…つまり全力で自己アピールをするんだ!!」
緑谷「はぁ…」
（オ）マイト「ハアてっ!?」
緑谷「いえ確かに仰ることはわかるんですが、襲撃事件があった直後だからあまり乗り切れな

いというか…そもそも現在オールマイトに見て貰えているわけですし……
ブツブツブツ」
（オ）マイト「ナンセンス界じゃ他の追随許さないな君は!!」
緑谷　「ナンセンス界…!」
（オ）マイト「常にトップを狙う者とそうでない者の気持ちの差…それは社会に出てから大きく響く
ぞ…君の気持ちはわかる、それに私の都合だ強制はしない。ただ…海浜公園でのあの
気持ちを忘れないでくれよな」
クラフト「緑谷、上を目指す気持ちは大事だぞ。まぁ焦っても仕方ねえからよく考えたらいいと思うぜ」
緑谷　「機神くん…うんそうだねありがとう!!」
クラフト「まあ俺はその時の気分で決めるわ！（笑）」
緑谷　「さっきと言ってることが真逆すぎる!!」
クラフトに少し振り回された緑谷であったが、助言のおかげで気持ちがちょっとだけ楽
になったのであった。

――放課後――

学校の授業が終わり多くの生徒達が下校しようとする中、A組の教室の前に他クラスの生徒が集まり大きな人だかりが出来ていた。

ザワザワ……ザワザワ……

麗日「うおおぉぉ……何事だぁ!?」

峰田「何だよこれ出れねーじゃん!」

爆豪「敵情視察だろザコ…敵(ヴィラン)襲撃を耐え抜いた連中だもんな。体育祭の前に見に来たんだろ…まあほとんどが興味本位だろうがな」

峰田「緑谷ぁ…アイツ何なんだよぉ…」プルプル…

緑谷「かっちゃんはあれがニュートラルなんだ」

爆豪「見に来ても意味ねぇからどけモブ共」

飯田「知らない人の事モブというのやめないか!!」

????「どんなもんかと見に来たが随分と偉そうだなぁ…ヒーロー科に在籍する奴は皆こんなのかい?」

爆豪　「あ☒あ!?」
　生徒の人込みの中から高身長で髪の色が紫色の生徒が爆豪の前に出てくる。
????「こういうの見ちゃうと幻滅しちゃなぁ…普通科とか他の科の奴ってヒーロー科落ちたか
　ら入ったって奴けっこういるんだよ知ってた?」
爆豪　「?」
????「体育祭の成績によっちゃヒーロー科編入も検討もしてくれるんだって…その逆もまた然
　りらしいよ。敵情視察?少なくとも俺は調子乗ってっと足元ゴッソリ掬っちゃうぞっ
　つー宣戦布告しに来たんだよね」
爆豪　「……」グイッ…
　大胆不敵な宣言を聞きながらも爆豪は人込みをどけて帰ろうとする。
切島　「まて爆豪!お前のせいでヘイト集まりまくってんじゃねぇか!!」
爆豪　「関係ねぇよ……」
切島　「はっ!?」
爆豪　「上にあがりゃ関係ねぇ…」

切島「くっ！…シンプルで漢らしいじゃねぇかよ!!」
常闇「上か…一理ある」
砂藤「言うなぁ」
上鳴「いやいやいや騙されんな！無駄に敵増やしただけだからな!!」
クラフト「まあ落ち着けよ上鳴」
上鳴「機神ぃ…お前状況分かってんのぉ!? ヘイト集まくりなんだぜ!?」
クラフト「こんな状況も跳ねのけるぐらいに強くねぇとヒーローになれねぇよ」
上鳴「！…それはそうだけどよぉ」
クラフト「まあそれはそれとして…」コッコッコッ…
耳郎「クラフト…？」
上鳴に偉そうなことを言ったなーっと思いながら教室の入口に向かう。
クラフト「いやーうちのクラスメイトがごめんねー、気分を害したなら謝るよ。アイツはちょっと
我が強すぎるから。今後ちゃんと躾けるから（笑）」
爆豪「テメェ何ふざけたこと言ってんだハゲ野郎!!」
帰ろうとしていた爆豪がキレながら振り返る。
クラフト「まあだけど…」

爆豪　「!……」
クラフト「たった1つの情報だけで俺たちが調子に乗ってると言うのなら…足元を掬われるのは
　そっちだぞ」
????　「!!?」
クラフト「まあお互い頑張ろうや」
　その後、耳郎と拳藤と一緒に下校していると校門のところで爆豪がいた。
耳郎　「あれ爆豪じゃん」
クラフト「おう爆豪、トップヒーローになるために多少言葉遣いを直した方がいいぞ」
爆豪　「余計なお世話だハゲ野郎」
クラフト「…何か用か?」
爆豪　「……テメーのさっきの言葉、普段のテメーにしちゃマシな言葉だったぜ、用はそれだけ
　だじゃあなハゲ野郎」
クラフト「爆豪…熱でもあるのか?」
爆豪　「テメっそれどういう意味だコラァ!!（怒）」
　そんなあんなことありながらも体育祭までの2週間はあっという間に過ぎ

ていき雄英体育祭を迎えるのであった。

第２０話　体育祭だ!!②

――雄英体育祭当日――

雄英体育祭…今では日本のビッグイベントの1つの為多くの観客・ヒーロー・マスコミが集まる。しかし雄英襲撃という大事件があったため入場の際の検査が例年より時間が掛かっていた。

　マスコミ「入場検査長いねぇ」「敵（ヴィラン）の襲撃受けてっからな、厳しくなるのは当然だ」

「それに今年に関しちゃ開催に批判的な声もあるからな」

「【物議をかもす】すなわち【数字がとれる】！今年の目玉は1年A組ね!!」

「ラストチャンスによる熱と経験値から成る戦略等で毎年メインは3年ステージだが…」

「今年に限っちゃ1年ステージは大注目だな!!」

襲撃を受けたことによって今年の体育祭は例年とは違い1年ステージに注目が多く集まっていた。そしてそれはヒーローからもであった。

（シ）カムイ「我らもスカウトをしたいところだが…」

デステゴロ「警備の依頼がきた以上仕方ねぇよ」
Mtレディ「なんか全国からプロヒーロー呼んだらしいですね今年は」
そしていよいよ体育祭開催の時間が迫る。
――1年A組控え室――
芦戸「あーコスチューム着たかったなー！」
尾白「公平にするため着用不可なんだよ」
砂藤「予選の種目って何なんだろうな？」
クラフト「毎年違うからなー」
常闇「何が起きても対応するしかあるまい」
障子「ああ」
切島「おうよ！それにこの2週間は機神や尾白と一緒に鍛えたからな！」
尾白「僕は教えられることを教えただけだよ」
クラフト「いや～それでも十分だったぜ？近接格闘は良く知らなかったから助かったぜ」
体育祭開催までの2週間、クラフトは尾白や切島たちと放課後になると訓練を行っていた。その2人の他にも毎日ではなかったが男子は障子や常闇、女子は耳郎、拳藤、葉隠、芦戸達も参加していた。

飯田「みんな!!もうすぐ入場だ!準備は出来ているか!?」
峰田「人人人人……」
緑谷「はあああ～～」
緑谷が緊張をほぐそうと深呼吸していると轟が声をかける。
轟「緑谷」
緑谷「轟くん…なに?」
轟「客観的に見ても実力は俺の方が上だと思う」
緑谷「へっ!?うっうん…」ビクッ!
轟「……お前、オールマイトに目ぇかけられてるよな?別にそこ詮索するつもりはねえけど……お前には勝つぞ。それに機神、お前にもだ」
轟による突然の宣戦布告ともいえる言葉にザワつくクラス。
上鳴「おお!?クラス最強の１人が宣戦布告!?」
クラフト「なんか俺ついでに感なかった?」
切島「急にケンカ腰どうした!?直前にやめろって…」
轟「仲良しごっこじゃねぇんだ、なんだっていいだろ」
緑谷「……轟くんが何を思って僕に勝つって言っているのかは分からない…実力も君

の方が上だよ、客観的に見ても……」
切島「緑谷もあんまりネガティブなこと言わねぇ方が…」
緑谷「でも!!…皆…他の科の人も本気でトップを狙っているんだ!僕だって遅れを取るわけにはいかないんだ!」
「僕も本気で獲りに行く!!」
爆豪「……っ!」
轟「……おお」
クラフト「轟」
轟「なんだ?」
クラフト「そこまで言うんなら両方の力使うんだろな?」
轟「!?―てめぇ…」
緑谷「機神くんどういう…」
飯田「3人とも!!それくらいにしたまえ!入場の時間だ!!」
緑谷が両方の力とはどういう意味なのか聞こうとしたが、体育祭開催の時間がきてしまい聞けなかった。そしていよいよ雄英体育祭は始まるのであった。
――1年ステージ会場――
(プ)マイク『群がれマスメディア!今年もお前らが大好きな青春の暴れ馬…雄英体育祭

が始まディエビバディィァユウレディィ!!?』

観客「「「「ワアアア

多くの生徒が入場する中、普通科の生徒が一言ぼやく。
普通科「俺らって完全に引き立て役だよなぁ」「たるいよねー…」
（プ）マイク『さあ主役は揃ったァ!!始めていくぜぇ雄英体育祭1年ステージ!!』
（ミ）ナイト「選手宣誓!!」ビシッ!
観客「おお!今年の1年主審は18禁ヒーローミッドナイトか!」「校長は?」「校長は例年3年ステージだよ!」
ミッドナイトが現れたため観客ステージの男は鼻の下を伸ばす。
切島「ミッドナイト先生なんて格好だ／／!?」
上鳴「さすが18禁ヒーロー／／」
常闇「18禁なのに学校にいていいのか?」
峰田「いい!!」
（ミ）ナイト「静かにしなさい!!選手代表1―A機神クラフト!!」
緑谷「はっ機神くんだったんだ選手代表」
瀬呂「あいつ入試トップだしな」
普通科「ヒーロー科の入試な」
緑谷「はっはい…」
瀬呂「対抗心剥き出しだな」

上鳴「爆豪、お前のせいだぞ」
爆豪「ふん…いちいちモブの言う事なんか気にするんじゃねぇ」
上鳴「でもある意味選手代表は機神でよかったな」
瀬呂「なんで?」
上鳴「爆豪だとヤベぇこといいそうだし」
瀬呂「あー納得（笑）」
爆豪「あいアホ面い醤油顔それどういう意味だ!!」
（ミ）ナイト「静かにしなさい!」
ミッドナイトの一言により再び静かになりクラフトは宣誓を始める。
クラフト「宣誓!我々選手一同はスポーツマンシップ並びにヒーローシップに則り正々堂々と戦うことをここに誓います!」
葉隠「なんだか普通だね」
尾白「いやこれ宣誓だよ葉隠さん?」
葉隠「えーなにかおもしろいことでも言うかなーって、機神くんって一見まともに見えて結構ぶっ飛んでるとこない?」
尾白「ぶっ飛んでるって…（苦笑）」
蛙吹「わたし…葉隠ちゃんの言ってること何となくわかるわ」

尾白「蛙吹さんまで…」

そんなことを話していると…

クラフト「あと1位は俺が獲る」

A組「「「「……えっ？」」」」

他クラス「「「「……」」」」

普通の宣誓をしたかと思うと彼は爆弾発言ともいえる宣言をした。当然そのような発言をすれば…

他クラス「ふざけんなあー!!」「調子のんじゃねー!!」「なんだとこの野郎!!」「このハゲ野郎!!」

Ｂｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ!!!

クラフト「フハハハハハッ!!そう思うなら掛かってこい！これは体育祭という名の戦争だ！勝利を欲するなら全力で戦え!!そうでない奴はここで何も言う資格はない!!!」

他クラス「上等だこの野郎!!」「吠え面かかせてやる!!」「後で謝っても許さねーからな!!」

クラフトの発言により生徒の士気が爆発する。

(ミ)ナイト「ああっいいわ！機神くんあなたやってくれるじゃない♡!!それじゃ早速始めていくわよぉ!!」

宣誓をし終え自分のクラスの所に戻るクラフト。
飯田「機神くん！なぜあのような事を言ったんだ!!確かに参加している生徒の士気が上がるのはいい事だ！だが他に言い方があっただろう!?」
切島「機神！おめえ漢だぜ！」
上鳴「ただでさえ爆豪のやつでヘイト集まってんのに更に集めるとか馬鹿なの!?」
峰田「そうだ！どうしてくれんだ!!」
爆豪「アホ面にブドウ頭！覚悟出来てんだろうな（怒）!?」
葉隠「やっぱりぶっ飛んでたね!!」
蛙吹「けろっそうね透ちゃん」
耳郎「なんとか言ったらどうなの？」
クラフト「……」
耳郎「クラフト？」
クラフト「……おらワクワクすっぞ!!」
耳郎「真面目にしろ!!」ドツクン!!
クラフト「ぐふっ!?」
そんなことをしていると最初の種目が発表される。
（ミ）ナイト「さあさあさあ！それじゃあ第一種目始めていくわよぉ!!」

麗日「雄英っていろいろやることが早いよね」
（ミ）ナイト「最初は予選よ!!毎年ここで多くの者が涙を飲む(ティアドリンク)!!さて運命の第一種目!」
ミッドナイトがそう言うと空中ディスプレイが表示されルーレットが回り始める。
（ミ）ナイト「今年は…これよ!!」バンッ!
緑谷「障害物競争…!」
（ミ）ナイト「計11クラスでの総当たりレースよ!コースはこのスタジアムの外周約4キロ!我が校は自由さが売り文句!フフフ…コースさえ守れば何をしたって構わないわ!さあさあ位置につきまくりなさい!!」
スタート位置に生徒たちが移動し位置に着く。そしてスタートランプがカウントダウンに入る。
……●（パッ…）……●（パッ…）……●（パッ…）
（ミ）ナイト「スタート!!」
ダダダダダッ!!!
（プ）マイク『さーて実況してくぜぇ!!アーユーレディ!?マイフレンド!!』
相澤『無理やり呼びやがって…』
（プ）マイク『早速だがマイフレンド!序盤の見どころは!?』
相澤『今だよ…』

他生徒「いたたッ!」「ちょ押すな押すな!」「入口狭すぎだろ!?」「なんだよこれ!?」
緑谷「……!（そうか…つまりここが最初の!）」
轟「最初のふるい」ヒュオォォ…パキパキィン!
轟が個性を発動させ足元を一気に凍らせていく
轟「悪いな」タッタッタッタッタッ…
他生徒「ってぇ!?何だよこれ!?」「冷てぇ!」「んのヤロォォォ!!」
八百万「甘いわ轟さん!」
爆豪「だあああああ!!そう上手く行かせねえ半分野郎おーー!!」ボォンッ!!
芦戸「うわっとっとと!あっぶな!?」
尾白「そいつはもう受けてる!二度目はないぞ!!」
麗日（超必はまだ使われへん!!）
????「使い慣れてんな個性…」
自身の個性を使い凍結を避ける者もいれば使わずに避けていく多くの生徒達。
轟「クラス連中は当然として思ったあより避けられたな（…そういうばあいつはどこに?）」
（プ）マイク『1―A轟!開始早々足もとを凍らせて動きを封じたアーー!!』
相澤『相手を減らすと同時に足止めを兼ねた手段…実に合理的な―ん?おいアイツ何

やってんだ?』

(プ)マイク『あ?アイツって誰のこと―おぉっとー!?選手宣誓で大胆な宣言をした1―A機神!なんでまだそんなとこにいるんだぁ!?』

スタートの合図が鳴ったにもかかわらずクラフトはまだスタート入り口前に1人突っ立ていた。プレゼントマイクの実況の声により会場の視線が集まる。

観客「ほんとにいるぜ」「なんでまだスタートしてないんだ?」ザワザワ…

クラフト「そろそろいいかな…いくぜ変身!」シュインシュイン!

観客「おいなんか光ってるぞ!?」「おいカメラ回せ回せ!」「あの生徒の個性か!?」

(プ)マイク『おぉーっと!ここで機神に動きがぁ!なんか光の粒子みたいなもんが体に纏い始めたぞっ!!』

相澤『あいつの何考えてんだ?』

クラフトは個性LBXを発動させ変身していく。そして変身が終わりその姿を現す。

クラフト「完了!アキレスディード!!」バーン!!

(プ)マイク『ななっなんと!?機神が黒いロボットに変身したぁー!!』

観客「「「わあああああああああ!!!」」」

マスコミ「こりゃあ画になるな!」「お茶の間も興奮してるだろーな!!」バシャバシャバシャ!

マスコミのカメラのフラッシュが多く光る。
　クラフト「では……クラフトいっきまぁぁぁぁす!!」ドウッ!!
（プ）マイク『なんとロボットに変身しただけではなく空を飛んだぁぁぁ!!つーかあれ有りなの!?』
（ミ）ナイト「有りよ!!機神くんアナタ盛り上げてくれるじゃない！最高よ♡!!」
　相澤『コース守ってりゃ何でもありだしな』
（プ）マイク『オーケーオーケー!!おっとその間に先頭は最初の障害物だ!!まずは手始め…第一関門ロボ・インフェルノ!!!』
　緑谷「入試の時の仮想（ヴィラン）敵!?」
　仮想（ヴィラン）敵☒ターゲット…大量ォ!!☒
　上鳴「いっ!?入試んときの0ポイント（ヴィラン）敵!?」
　他生徒「マジか!?ヒーロー科あんなのと戦ったの!?」「多すぎて通れねぇ!!」
　轟「一般入試用の仮想（ヴィラン）敵ってやつか…」
　八百万「どこからお金出てくるのかしら?」
　轟「どうせならもっとすげえの用意して―!」
　轟が個性で攻撃しようとしたその時、上空に何かが現れる。
　ゴウッ!!

クラフト「（グラグラの能力）ぶっ飛べデカブツぅぅぅ!!!」ドドゥン!!
耳郎「クラフト!?」
緑谷「機神くん!?」
八百万「?…空間に亀裂…?」
クラフトが飛んだ勢いのままグラグラの能力を発動し巨大仮想敵（ヴィラン）を殴りつける。そして空間に亀裂が入りワンテンポ遅れて凄まじい衝撃波が発生する。そして巨大仮想敵（ヴィラン）は頭部がひしゃげながらそのまま後ろに倒れる。
ピキピキキピキ……バゴオォォンッ!!!
（プ）マイク『なんとI—A機神！パンチ一発で巨大ロボットを粉砕ぃぃ!!そしてそのまま空を飛びながら第一関門を通過ぁー!!』
相澤『あの威力からしてただ力任せのパンチじゃなくて衝撃を発生させたものだろうな』
（プ）マイク『流石特選入学者ぁー!!』
八百万「なんてデタラメな力ですの…」
他生徒「凄すぎだろ…」「パンチ一発って…」
轟「チッ…」パキパキパキィン!!
轟は少しイラつきながらも個性を発動させ巨大仮想敵（ヴィラン）を凍結させ第一関門を通過す

る。
　他生徒「あいつが止めたぞ!」「今なら通れるぞ!!」
　轟「やめとけ、不安定な時に凍らせたから倒れるぞ」
轟が言ったように巨大仮想（ヴィラン）敵は前屈みになっていたためそのまま崩れ落ちた。
　ギギギィイイ…ドゴォォォン!!
（プ）マイク『機神に続いてI―A轟！攻略と妨害を一度に!!こいつはシヴィー!!すげぇな！機神もスゲェーけど！なんかあれだな！ずりぃな!!』
　相澤『合理的かつ戦略的な行動だ』
（プ）マイク『こちらも流石推薦入学者というべきかぁー!!1位通過の機神と2位通過の轟！初めて戦ったロボ・インフェルノを全く寄せ付けないエリートッぷりだぁ!!!』
　他生徒「おい！誰か下敷きにならなかったか!?」「死んだんじゃねえのか!?」「死ぬのこの体育祭!?」
　塩崎「……!」
　バキン……ベゴン……バゴォォォン!!
　切島「「死ぬかぁー!!」」
　鉄哲「「死ぬかぁー!!」」
（プ）マイク『あぁー!!A組切島とB組鉄哲が潰されていたぁー!!ウケるぅ!!』

切島「「轟のヤロー！ワザと倒れるタイミングで！俺じゃなかったら死んでたぞ!!…ん？」」

鉄哲「「轟のヤロー！ワザと倒れるタイミングで！俺じゃなかったら死んでたぞ!!…ん？」」

切島「おお鉄哲!!」

鉄哲「おお切島!!」

（プ）マイク『つーかハモリすぎだろ!!』

爆豪（先行かれてたまるか!!）ボッボッボォン!!

爆豪は仮想 敵（ヴィラン）は直接相手せずに爆破で上空に飛んで通過していく。

（プ）マイク『1―A爆豪！下がだめなら上ってか!?クレバー!!』

瀬呂「おめーこういうの正面突破しそうなのに避けんのね！」

常闇「便乗させてもらうぞ！」

瀬呂と常闇も自身の個性を使い巨大仮想 敵（ヴィラン）の頭上を通過していく。

――教師用観客席――

スナイプ「やはり一足早く通過していくのはA組が多いな」

（オ）マイト「他の科やB組も決して悪くないただ…」

――実況放送室――

相澤「立ち止まる時間が短い…機神がほぼ倒したとはいえそれでも、上の世界を肌で感じた者・恐怖を感じた者・対処し凌いだ者…各々が経験を糧とし迷いを打ち消している」

・
・
・

緑谷「（ワンフォーオール…）…デトロイトスマッシュ!!《ドゴォッ!!》…（よしこのまま…）」

ドゴォッ!ドゴォッ!ドゴォォン!!

緑谷「!?…八百万さん!」

八百万「ちょろいですわ!」

他生徒「道が開けた!」「あの0ポイント 敵（ヴィラン）がこんなに容易く!?」

――教師用観客席――

スナイプ「入試では避けるべきものとしてだったが、倒すべきものとしてみれば鈍くさい鉄の塊…

つけ入るスキも見えてくらぁな」

（オ）マイト「……（無茶を承知で発破をかけた…ギリギリでも良い通過してくれ!）」

・　・　・

（プ）マイク『おいおい第一関門ちょろいってか!?それなら第二関門はどうだ!?落ちればアウト!それが嫌なら這いずりな!ザ・フォーーール!!!……ん?おいなんかおかしいぞ?』

相澤『谷を渡る際の綱が減ってるな……なるほどアイツの仕業か』

（プ）マイク『あ?アイツって誰のこと…ってお前かよ!!』

ロボ・インフェルノを通過し第二関門に来た生徒達は目の前の光景を見て動揺する。谷の間を渡るために設置されたスタート地点の綱が5本中3本切られていた。そしてその犯人は…

（プ）マイク『1―A機神クラフトーーー!!!』

クラフト「あっ轟来たな、じゃあ次行くか」フィィィン!!

クラフトは個性で綱を切るとＬＢＸをアキレスディードからクィーンに変えホバー移動で第3関門へ向かった。そのまま飛んでいけばいいのにと思うが本人は色々と楽しみたいためこのように行動していた。

麗日「いつの間に作ったんや」

芦戸「てゆーか綱が減ってんじゃん!!これやったの絶対機神だよね!?」
蛙吹「でも見て三奈ちゃん、残された綱は切られた綱より最短コースだわ」
芦戸「それでも切るのはやり過ぎ!」
芦戸が足をジタバタさせながら怒っていると…
????「フフフフ…来ました来ましたアピールチャンス!!しかもより目立つ状況なので助かります!!見よ!全国のサポート会社!ザ・ワイヤーアロウ＆ａｍｐ；ホバーソウル!!」キラン!
麗日「サポート科!」
芦戸「えー!アイテムの持ち込みいいのぉ!?」
????「ヒーロー科は普段から実践的な訓練を受けているでしょう?公平を期すため私たちサポート科は自身が開発したアイテムコスチュームに限り装備オッケー!…っていうか寧ろサポート科にとっては己の発想・開発技術を企業にアピールする場なのです!!さあ見て出来るだけデカい企業ー!!私のドッ可愛いいベイビーを!!」
発目は装備していたワイヤーアロウを射出して谷の間にある足場に撃ち込む。そしてホバーソウルを起動させ谷に向かって飛び込み射出したワイヤーを巻き上げ足場に着地する。
麗日「すごい…でも負けない!」

芦戸「くやしい！悪平等だぁ!!てか梅雨ちゃんいつの間に!?」
????「いいなぁ…あれ」
(プ)マイク『実に色々な方がチャンスを掴もうと励んでいますねイレイザーヘッドさん？』
相澤『何足止めてんだあのバカ共』
爆豪「クソがっ！」ボボォン!!
轟（！…調子上げてきたな、スロースターターか）
飯田「恐らく兄も見ているのだカッコ悪い様はみせられん」ドゥルルルルルッ!!
(プ)マイク『カッコ悪いいい!!!』
脚を重ねるように揃えて腕でバランスを取り、個性のエンジンで推進力を生み滑るように綱を渡っていく飯田。やっている本人は大真面目、だがその渡っている姿は正直カッコイイと思うには無理があった。
――スタジアム観客席――
観客「1位のやつ圧倒的だな」「しかしどういう個性だ?」
「ロボットの個性かと思ったがあの巨大ロボを吹っ飛ばした力はなんだ?」
「複合型か?」「とりあえず強個性ということはわかるな」
「それもかなりの強個性だぞ?第二関門のとき綱切ってたけど明らかにロボットの個性

でなく別の個性で綱を切ってたぞ?」「まあいずれ分かるだろ」
「だけどその1位のやつに続いてる子もスゴイな」
「1位の奴と同様に個性も強いが素の身体能力と判断力がいいな」
「そりゃそうだろ!あの子…フレイムヒーロー【エンデヴァー】の息子さんだよ!!」
「ああー道理で!」「オールマイトに次ぐトップ2の血か!!」
「早くもサイドキッ(相棒)争奪戦だなー!」

・
・

(プ)マイク『さあ先頭が一足先に抜けて下はその先頭のせいでダンゴ状態!だが上位何名が通過するかは公表してねえから安心せずに突き進め!!そして早くも最終関門!かくしてその実態は…一面地雷原怒りのアフガンだぁ!!地雷の位置はよく見りゃわかる仕様になってるから目と脚を酷使しろ!!ちなみに地雷の威力は大したことはないが音と見た目は派手だから失禁必至だぜ!!』
　相棒『人によるだろ』
　緑谷「先頭はもうそんな所に!急がないと!」
(プ)マイク『そして現在トップを走り続けている1―A機神!なんと障害物の地雷原をものともせず突き進む!!どうなってんだぁ!!』

相棒『土煙が立っているからボバーみたいに若干浮いて移動してるんだろうな』
(プ)マイク『なんかズリぃー!!…ん?走るのをやめて後ろを向いたぞあいつ?』
相棒『どうせ何かする気だろ…』
相澤の言う通りクラフトは何かするつもりだった。
クラフト「避けてみな!必殺ファンクション!!」
!!!アタックファンクション!!!
☒グレイスミサイル☒
ドシュシュシュシュシュシュ!!!
LBXクィーンのスカート型ホバーの後方に備え付けられているミサイルが火を吹く。
そして容赦なく地雷原を慎重に攻略している生徒達にミサイルの雨が降り注ぎ、足元の地雷原を誘爆させていく。
他生徒「どわああ!?」「ちょおぉぉ!?」「なんでミサイルがぎゃあああ!!」
轟「くそ…余計なことしやがる!」
ボォン…ボボォン…ボォンボォンボォン!!
爆豪「はっはあ!俺には関係ねぇー!!」ボオンッ!!
轟「!!…」
爆豪が爆破で空中移動しながら先頭に迫る。

爆豪「おいてめぇ!!宣戦布告する相手間違えてんじゃねえよ!!それとハゲ野郎!1位を取るのはこの俺だ!!調子に乗ってんじゃねぇぞ!!」

（プ）マイク『ここで爆豪が轟に追いつくーー!!喜べマスメディアお前ら好みの展開だぁぁ!!このまま轟を追い抜いてトップを走る機神を追い抜くかぁ!?そして後続もスパートをかけてきたぁ!!』

クラフト「ふはははは！ならば俺は先にゴールさせてもらー」

ボオオオオオオン!!!

（プ）マイク『なっ？後方で大爆発!!何だあの力は!?偶然か故意か!?A組緑谷!爆風で猛追いぃ!!』

クラフト「おっとこうしては……ん?」

クラフトは変身しているＬＢＸの機体を変更しアキレスディードに変身し空を再び飛ぶ。そして変身する前に緑谷の行動で疑問に思ったことを現在飛ん(落下)でいるいる緑谷の腕を掴んで質問する。

クラフト「よっと」ガシッ!

緑谷「うわっ!?はっ機神くん!?」

クラフト「なあ緑谷1つ聞いていい?」

緑谷「えっこんな時にどうしたの?」

クラフト「なんで炎使わねぇの？」
緑谷「……わっ…」
クラフト「わっ？」
緑谷「忘れてたあああああ!!」
クラフト「何やってんだ…まあ思い出したならいいか、はなすぞ」ぱっ！
緑谷「えっいきなりはあああああ!!」
クラフト「頑張れ！…では最後はカッコよくゴールを決め…っる！」ゴウッ!!
速度を加速させ一気にゴールのスタジアムに向かうクラフト。緑谷も地面に落ち切る前に足を炎にし、それを推進力にしてスタジアムに向かう。その後ろを轟や爆豪などの他の生徒達があとに続く。
（プ）マイク『さあさあさあ！大胆な選手宣誓をしたかと思えば、予選の障害物競走ではコース上で妨害しまくった男がいまスタジアムに……飛んで還ってきたあああああ!!!』
クラフト「ハッハッハッーーーー（笑）!!!」
観客「「「「ワアアアアアアアアアアッ!!!!」」」」
（プ）マイク『そして華麗なヒーロー着地をし観客とマスコミを沸かせるぅぅ!!その後続も続々とゴールしていくぜぇ!!順位などは後でまとめるからとりあえずお疲れだぜ!!』

爆豪「ハアッ!…ハアッ!……クソッ!!」
轟「……」
クラフト「ふぃー楽しかったー!」
緑谷「はぁ…はぁ…はっ機神くん1位おめでとう…」グッタリ…
クラフト「おう緑谷サンキュー!あとお疲れだな?」
緑谷「機神くんに落とされたときにどっと疲れたよ…」
クラフト「あ～それはすまんかった」
麗日「デクくんすごいねぇ…!」はぁ…はぁ…
飯田「この個性で遅れを取るとは…やはりぼk…俺もまだまだ…」
緑谷「飯田くん、麗日さん…」
麗日「2位スゴイねー!悔しいよ!」
緑谷「いっいやぁ（近い／／）」
顔を近づけられ赤くなった顔を隠す緑谷。
八百万「くっ…こんなはずじゃあ…」
峰田「一石二鳥よ!おいら天才!!」ウヒョー!!
八百万「サイッテーですわ!!」
峰田は八百万の臀部にモギモギボールをくっつけ、それを利用して八百万の背中にくっ

付いてゴールしていた。
クラフト「とりあえず引き剥がす」
八百万「ありがとうございます、機神さん」
峰田「邪魔すんじゃねぇよ機神!!おいらの夢の時間をよぉぉ!!」
クラフト「そんなしてるからモテないんじゃね？」
峰田「うるせえぇぇ!!」
そうこうしていると順位の集計が終わり予選通過の順位が発表される。1位クラフト2位緑谷3位轟4位爆豪となっておりそれ以下は原作通りとなっていた。
(ミ)ナイト「予選通過は上位43名！残念ながら落ちちゃった人も安心しなさい！まだ見せ場は用意されているわ！そして次からいよいよ本選！ここから先は取材陣も白熱するからキバりなさい!!さーて第二種目よ！私はもう知ってるけど何かしら～何かしら～！…言ってるそばからこれよ！」
空中ディスプレイには騎馬戦と表示された。
上鳴「騎馬戦！…俺ダメなやつ～」
蛙吹「個人競技じゃないけど、どういうふうになるのかしら」
(ミ)ナイト「参加者は2人～4人のチームを自由に組んで騎馬を組んでもらいうわ！基本は普通も騎馬戦と同じルールだけど一だけ違うのは、先ほどの結果に伴って各自にポ

イントが振り当てられること!!」
　障子「なるほど」
　砂藤「入試みてぇなポイント稼ぎ方式か！分かりやすいぜ！」
　麗日「つまり組み合わせによって騎馬のポイントがわか変わってくると」
　芦戸「あぁ～！」
（ミ）ナイト「あんたら私が喋ってんのにすぐ話すね!!」
自身がこれから話すことを先に言われてしまうため若干怒るミッドナイト。
（ミ）ナイト「ええそうよ、そして与えられるポイントは下から４３位が５Ｐ…４２位が１０Ｐ…といった具合よ!そして１位に与えられるポイントが…」
「！　！　１　億　！　！　」
　クラフト「……はい？」
　（１億…ね）
　????????（つまり１位の騎馬を落とせば！）
　（（（（どんな順位からでもトップに立てる!!!）））））
クラフトが思考停止に近い状態にも拘わらず周囲の視線がクラフトに集中する。
（ミ）ナイト「そお…上位の奴ほど狙われる下剋上サバイバルよ!!!」

君は生きのびることが出来るか？

第２１話　体育祭だ!!③

障害物競走で様々な妨害をしながら見事1位通過をしたクラフト。そして次に行われる本戦の騎馬戦では通過順にポイントが振り当てられ、1位通過のクラフトにはなんと1億ポイントが与えらる。そんな桁違いなポイントを与えられたクラフトは格好の標的になってしまうのは誰もが予想できよう……果たしてクラフトはどのようにして騎馬戦を切り抜けるのか。それか今回も予選と同じように何かを企てているのだろうか……

――スタジアム――

（ミ）ナイト「上を行く者にはさらなる受難を！雄英に在籍する以上何度でも聞かされるわ！これぞＰｌｕｓ（プルス）　Ｕｌｔｒａ（ウルトラ）!!予選通過1位の機神クラフトくん!!持ちポイント1億!!!」

クラフト「……多すぎだろ」

予選通過者全員の視線がクラフトにこれでもかと集まる。そしてその視線は獲物を狙うハンターの如く鋭い。

（ミ）ナイト「それじゃあルールを説明するわよ！制限時間は１５分！振り当てられたポ

イントの合計が騎馬のポイントになり、機種はそのポイント数が表示されたハチマキを装着！制限時間が終了するまでにハチマキを奪い合い保持ポイントを競い合うのよ！奪ったハチマキは首から上に巻くこと！獲れば獲るほど管理が大変になるわよ!!そして重要なのはハチマキを獲られても、または騎馬が崩れてもアウトにはならないってところ!!」

八百万「ということは…」

砂藤「４３人からなる１０～１２組がずっとフィールドにいるわけか…？」

青山「シンド☆！」

芦戸「いったんポイント獲られて身軽になっちゃうのもありだね」

蛙吹「それは全体のポイントの分かれ方見ないと判断しかねるわ三奈ちゃん」

（ミ）ナイト「個性発動ありの残虐ファイト！でもあくまで騎馬戦！悪質な崩し目的の攻撃などはレッドカード！一発退場ととします!!」

爆豪「チッ!!…」

緑谷「……（汗）」

クラフト（誰と組もうかな…いやまてよ…）

（ミ）ナイト「それじゃあこれより１５分！チーム決めの交渉タイムよスタートよ！」

通過者「「１５分!?」」

最終種目通過をかけた運命のチーム決めが始まる。
――警備スタッフ控室――
デステゴロ「この雄英体育祭ってヒーロー気構え云々より…ヒーロー社会に出てからの生存競争をシミュレーションしてるよな」
Ｍｔ．レディ「どういうことです？」
デステゴロ「ヒーロー事務所がひしめく中でおまんま食っていくにゃあ時に他を蹴落としてでも活躍見せなきゃなんねぇのが障害物競走（予選）だろ？」
Ｍｔ．レディ「あれ心苦しいですよねー」
（シ）カムイ「貴様っ！嬉々としてやっていたではないか!?」
シンリンカムイはＭｔ．レディがデビューした時のことを思い出す。
デステゴロ「その一方で商売敵と言えど協力してかなきゃなんねー事案も腐るほどある」
Ｍｔ．レディ「あっ…騎馬戦がまさにそうですね、そっか自分の勝利がチームの勝利になっちゃう。相性やら他人の個性やら把握やら持ちつ持たれつ…サイドキックとの連携…」
（シ）カムイ「他事務所との個性合同訓練」
デステゴロ「プロになれば当たり前の生きる術を子供が今からやってんだなー…」

Ｍｔ．レディ「大変ですねー…」
どこか気持ちが棒読みのような感じで関心するプロヒーロー達であった。
――スタジアム――
１５分しかないためチーム決めの交渉は熱くなっていた。
砂藤「俺と組め爆豪！」
芦戸「えー爆豪！私と組もう！」
青山「僕でしょねぇ☆!?」
爆豪「……てめえらの個性知らねえ！なんだ!?」
砂藤「Ｂ組ならまだ分かるが！」
葉隠「爆豪くんほんと周り見てないんだね!!」
衝撃の事実に驚く面々。
（オ）マイト（性格はああでも４位２００ポイント…個性の汎用性を考えれば爆豪少年の人気は頷ける）
切島「轟のやろーソッコーでチーム決めやがった！爆豪！俺と組もう!!」
爆豪「クソ髪」
切島「切島だよ！覚えろ！おめーの髪とそんなに変わんねーぞ！おめぇどうせ騎手やるだろ!?そんならおめぇの爆破に耐えられる前騎馬は誰だ!?」

爆豪「……根性ある奴」
切島「違うけどそう!硬化の俺だ!ぜってーブレねぇ馬だ!獲るんだろ!?機神(1億)…!!」
爆豪「!?……」《ニッ…!》
切島の言葉を聞いて不敵に笑う爆豪。そして１５分という交渉の時間は終了し騎馬戦が始まろうとする。
物間「ここにいるほとんどの観客やマスコミがＡ組に注目している…何でだ?…そして鉄哲が言った通り調子づいてる……おかしいよね?彼らとの違いは?敵(ヴィラン)と会敵しただけだぜ?僕らＢ組がなぜ予選で中下位に甘んじたか…調子づいたＡ組に知らしめてやろう皆」
(ミ)ナイト「１５分経ったわ!それじゃいよいよ始めていくわよ!!」
(プ)マイク『おい起きろイレイザー!１５分のチーム決め兼作戦タイムを経てフィールドに１３組の騎馬が並び立ったぜ!』
相澤『……なかなか面白ぇ組が揃ったな』
(プ)マイク『さあさあさあ!さっそく始めていきてえところだが!その前に１つ聞くぜ!お前の騎馬はどうした!?機神ぃ!!』
相澤『またなんか企んでんのか?』
皆が２人～４人で騎馬を組んでいるのに対しクラフトは１人突っ立っていた。

（ミ）ナイト「機神くん、騎馬は最低2人で組むのだけどあなた組む相手はどうしたの？」
クラフト「大丈夫ですミッドナイト！今から出すんで！」
（ミ）ナイト「出す？」
クラフトはそう言うと個性ＬＢＸを発動させ3体のクィーンを召喚する。そして3体のクィーンに騎馬を組ませ騎手として騎乗する。
クラフト「お待たせしました！」
（プ）マイク『なんと機神！個性を使って騎馬を作り出したぁーー!!』
観客「「「「わあああああああああ!!!」」」」!!
（プ）マイク『それじゃあ行くぜぇ！上げてけ鬨（とき）の声!!血で血を洗う雄英の合戦が今！狼煙を上げる!!準備はいいかなんて聞かねぇぜ！いくぜ残虐バトルロワイヤル!!カウントダウン！』
物間「鉄哲、恨みっこなしだぞ？」
鉄哲「おう！」
（プ）マイク『3（スリィッ）…!!』
爆豪「狙いは…」
（プ）マイク『2（トゥー）…!!』
轟「ただ一つ…」

（プ）マイク『1(ワンッ)…!!』
『スタァアトオオオ!!!』
スタートの合図と共に一斉に他の騎馬がクラフトに襲い掛かる。
鉄哲「実質1億(それ)の争奪戦だ!!」
葉隠「はっはっは！頂くよ機神くん!!」
クラフト「そうはいかないね！クィーン回避行動開始！」
クィーン☒☒☒了解シマシタ☒☒☒
フィィィィン!!!
命令を確認したクィーン…下半身のホバーをジェット機のエンジン音のような音を発しながら起動させ動き始める。
鉄哲「浮いた!?くそ！これじゃ骨抜の個性が通じねぇ!!」
葉隠「耳郎ちゃん！彼氏だけど容赦なくね！」
耳郎「ここでそれ言われるのは恥ずいから言わないで／／!!」ヒュッ！
クラフト（バリバリの能力）キンッ！
耳郎はイヤホンジャックを伸ばすが防がれる。
葉隠「くそー！追ってリベンジするよ耳郎ちゃん！」
砂藤「つーか葉隠お前！ハチマキねぇぞ!!?」

葉隠「ハッ!?いつの間にー!?」

物間「漁夫の利」

物間の手には葉隠が頭に付けていたハチマキがあった。

(プ)マイク『さ～～!まだ始まって2分も経ってねぇが早くも混戦混戦!!各所でハチマキ奪い合い!!1億を狙わず2位～4位狙いってのも悪くねえ!!』

クラフト「このままエリア内を上手く逃げて…」

峰田「ハ～ハッハッハ!!奪い合い!?違うね!これは一方的な略奪よぉ!!」

クラフト「おっ…とおっ!?」

声のした方を向くと薄ピンク色をした紐のようなものが飛んできたが間一髪のところで避ける。

蛙吹「流石ね機神ちゃん」

クラフト「その声は梅雨ちゃんか!その前の声は峰田だな!?」

峰田「その通りだぜ機神ぃ～!」

(プ)マイク『峰田チーム!圧倒的体格差を利用してまるで戦車だぜ!!』

峰田「お前だけは許さねぇ!彼女がいるだけでも羨ましいのにそれが2人もいるだと!?ふざけてんのかぁ!!」

蛙吹「動機が思いっきり個人的理由ね」

クラフト「そんなこと言われてもな……とりあえず謝っとくわ、ごめんな!!」
峰田「てめぇぇぇ!!」
峰田の魂の叫びの如くの攻撃を避けながら逃げていると…
ボォンッ!ボボォンッ!
爆豪「調子乗ってんじゃねぇぞハゲ野郎!!」
クラフト「来たな爆豪!!（バリバリの能力!）」
爆豪「死ねやぁ!!」ボオンッ!!
クラフト「そうはいかない!」キィン!
爆豪「んだこれっ!?」
（プ）マイク『おおおおおおお!?騎馬から離れたぞ!?良いのかアレ!?』
（ミ）ナイト「テクニカルなのでオッケー!地面に着いてたらアウトだったけど!」
――警備スタッフ控室――
デステゴロ「やるじゃねぇのA組の連中…!」
――スタジアム観客席――
観客「派手な動きで見てるこっちも楽しいな!」
「敵（ヴィラン）と戦っただけでこうも差がでるかね!?」
「個性も粒ぞろいだなー!」「今年は豊作だね!」

・　・

（プ）マイク『やはり狙われまくる1位と猛追を仕掛けるA組の面々共に実力者揃い!!現在の保持ポイントはどうなっているのか…!7分経過した現在のランキングを見てみるぜぇ!!』

観客「あれ…」「なんかさっきまでとは…」「んん…!?」

（プ）マイク『あら…!?』

相澤『……』

（プ）マイク『ちょっと待てよコレ!?A組　機神以外パッとしねぇ…轟や緑谷が一応あれだが～…ってか爆豪!お前いつの間に!?』

1?機神チーム　1億P　8?爆豪チーム　0P　2?物間チーム　1360P　9?小大チーム　0P　3?鉄哲チーム　1125P　10?角取チーム　0P　4?拳藤チーム　685P　11?峰田チーム　0P　5?轟チーム　615P　12?心操チーム　0P　6?緑谷チーム　535P　13?葉隠チーム　0P　7?鱗チーム　195P

物間「単純なんだよA組」シュルッ…

背後から鮮やかにハチマキを獲られてしまう爆豪。

芦戸「やられた!!」
爆豪「このモノマネ野郎ゴラァ!!返せ殺すぞ!!!」
物間「ミッドナイトが第一種目と言った時点で予選段階から大幅に人数を減らすとは考えにくいと思わないかい？」
爆豪「あ☒？」
物間「おおよその目安を仮定して予選を走り、改めて後方から君たちの個性や性格を観察したんだ。その場限りの順位に執着しても仕方ないだろ？」
切島「組(クラス)ぐるみか!?」
物間「まあ全員の総意ってわけじゃないけどね、いい案だろ？人参ぶら下げた馬みたいに仮初の頂点を狙うよりさ」
爆豪「！…」ピクッ！
物間の発言が爆豪の何かに触れる。
物間「ああそう言えば爆豪くん、君ヘドロ事件の被害者だよね？今度参考に聞かせてよ。年に1回敵(ヴィラン)に襲われる気持ちってのをさ」
ブチッ!!
爆豪「切島ぁ…予定変更だ…」ズオオオオ…
切島「お？…いっ!?」

切島が顔を振り向けると爆豪が恐ろしいオーラを放ってた。
爆豪「デクとハゲ野郎の前に…こいつら全員殺そう…!!」
緑谷「（予選を捨てた長期スパンの策ってことか！確かにそれなら体育祭前からA組が食っていた空気を覆せるしより強い印象を与えられる…！でもその考えから察するに必ずしも1億Pを狙っているというわけではない）…みんな！このまま油断せず他のポイントを獲りに行こう！」
常闇「わかっ――！…緑谷」
緑谷「なに常闇く――！…機神くん…」
クラフト「おう緑谷、奇遇だな！（笑）」
緑谷「……僕らのハチマキ獲りに来たの？」ドキドキ…
緑谷がクラフトに問いかける。
クラフト「別に、逃げてたらお前とバッタリしただけだ」
緑谷「ほんとに…？」
クラフト「俺はこのハチマキ守ればいいしな、無理して獲りに行ってもメリットは少な……」
緑谷「？…機神くん？」
途中で言葉が止まったため問いかける緑谷。

クラフト「……あ～やっぱや～めた！どうせなら面白くしよ！」
緑谷「―っ!?」
クラフト「とゆーわけで緑谷！お前のハチマキを頂く!!（イトイトの能力！）」
緑谷「３人とも構えて!!」
緑谷の騎馬はクラフトの攻撃に備えるが…
ヒョイッ…
緑谷「えっ…?」
麗日「デクくん！ハチマキ獲られてるよ!?」
クラフト「直接手で獲ると誰が言った（笑）？ではさらば！」フィィィン！
緑谷「やられた！皆、追いかかるよ!!」
常闇「ああ！」
麗日「くやしー！」
発目「なんですあの人の騎馬は!?どっ可愛いいじゃないですか!!」
大人しくしているかと思えば暴れだしたクラフトであった。
拳藤「あんま煽んなよ物間！同じ土俵だぞ」
物間「ああそうだね…ヒーローらしくないし―」
クラフト「バラバラ砲！」

物間「ん?…なっ手が飛んで―!?」
拳藤「機神!?」
クラフト「ハチマキゲットォォ!!」
2つの手が飛んできたかと思えば次の瞬間には頭に付けていたハチマキがなくなっていた。
拳藤「なっ機神アンタっ!?」
物間「A組のっ!?」
クラフト「なんか爆豪に話してたみたいだけど……ねえ今どんな気持ち（笑）？」
物間「―っ!?…やってくれるじゃないか…」ピクピクッ
クラフトの挑発に苛立ちを覚える物間。
クラフト「（そういえば…物間の個性はコピー、もし万が一に触れられたりしたら面倒だな…個性に対して干渉してくる個性を防ぐ個性を作っておいた方がいいな…空想…個性防壁…個性として定着…定着完了…これでよし！）」
拳藤「機神！あんたハチマキ獲る必要ないだろ！」
クラフト「理由はある！」
拳藤「どんな理由だ！」
クラフト「全部獲ったほうがおもしろそうだから！」

拳藤「確かに…って納得するか！」
クラフト「そういうことだから…「機神ぃ～」…うん？なに取蔭ちゃん？」
クラフトが次のハチマキを獲りに行こうとしたら取蔭が話しかけた。
取蔭「ハチマキ何本かくれたらぁ～膝枕してあげるけど、どう（笑）？」
クラフト「えっマジで？……」
拳藤「彼女がいる前で悩むんじゃない!!」ブォン！
拳藤が手を大きくしクラフトに向かって振るう。
クラフト「おっとと！…こうはしてられない全てのハチマキを獲るために離脱!!」
拳藤「あっ待て機神!!みんな追うよ！」
物間「僕らも追うぞ!!」
（プ）マイク『ここまで大人しくしていた予選1位通過の機神が動き出したぁぁ!!喜べマスメディア！お前ら好みの展開だぁ!!』
観客「「「ワアアアアアアア!!!」」」
クラフト「オラオラオラァー!!ハチマキよこしなぁぁぁ!!」
宍田「むっ!?あれは機神氏か!?」
鱗「なにっ!?」
クラフト「ＲＯＯＭ！」ブゥゥゥン！

鱗「なんだこれ!?」
クラフト「シャンブルズ！」シュンッ！
バサッ…
鱗「むおっ!?なんだ!?」
鱗の頭に突然何かが覆いかぶさる。
鱗「…体操服の…上着？」
クラフト「それじゃあハチマキは貰うよ♪」
宍田「鱗殿！ハチマキがありませんぞ!?」
鱗「はっ!?なっいつの間に…そうかさっきの青いドームか!?」
クラフト「正解！一応体操服持っててくれる？それではさらば!!」
鱗「なっ待てこの野郎!!」
クラフト「あとは轟だけか…どうやって取ろうかな～」
轟を除くすべての騎馬から追われながらも余裕のクラフトであった。
八百万「轟さん、こちらに機神さんが向かってきてますが…」
飯田「だがそれと同時に他の騎馬…というか全ての騎馬が来ているな」
上鳴「うえぇ!?何してんのあいつ!?」
轟「関係ねぇ…向かってこようが対処するまでだ」

上鳴「うぇーい…イケメンかよ」
上鳴が感心していると…
クラフト「轟いぃぃぃ!!」
八百万「来ましたわ！」
クラフト「ハチマキ置いてけぇぇ!!」
轟「悪いがそれはできねぇ、飯田　回避だ」
飯田「ああ！」ドルルルン！
クラフト「バラバラ砲！」ドゥッ！
逃げる轟に向かってバラバラの能力で手を飛ばすが…
轟「！…そう簡単に獲らせねえよ」バシッ！
クラフト「あ痛っ！ふっ…ならこれならどうだ！（ドルドルの能力）、キャンドルロック!!」
クラフトはドルドルの能力で轟たちの足場に大量の蝋を流し込み動きを封じる。
どろろろ…ガチンッ!!
飯田「なっ何だこれは!?」
上鳴「動けねぇ！」
八百万「あっ足が何かで固まって…！」

轟「なっ!?」
クラフト「いただきぃぃ!!」シュバッ!
轟「なってめぇ!?」
(プ)マイク『あぁっーと!轟の騎馬の動きが封じられその隙に機神がハチマキを奪っていくー!!もはや何でもありだなアイツは!!』
クラフト「あとハチマキ持ってるのは…」
上鳴「おい機神!」
クラフト「お?なんだ上鳴?」
上鳴「この足のやつどうやって出るんだよ!?」
クラフト「ああ…それなら火を使えば簡単に出れるよ?」
上鳴「火っ!?」
轟(こいつ……)
八百万「…なるほど、この白いものは蝋ですね!」
クラフト「正解!さすが八百万まあそういうことだから!」
クラフトはそう言うと鉄哲の騎馬へ向かう。
八百万「早くハチマキを獲り返さないと…轟さん早く火でこの蝋を!…轟さん?」
轟「……」

飯田「轟くん!!」
轟「っ!!…なんだ飯田?」
飯田「早くこの蛹を溶かしてくれ!」
轟「あっ…ああ分かった…」
轟はそう言われて左の個性を使って蛹を溶かしていくのであった。
骨抜「鉄哲、こっちに向かってきてるぞ」
鉄哲「はっ!上等だそのハチマキ全部かっさらってやらあ!!」ガキンッ!
鉄哲は両拳をぶつけながら意気込む。
クラフト「獲れるものならやってみろおおお!!」
鉄哲「こいやあああ!!」
クラフト「っと見せかけて!（ノロノロの能力!）…ノロノロビーム!!」ポァンポァンポァン!
鉄哲「なっ!?……てぇめぇぇ…だぁぁまぁぁしぃ……」
クラフト「すまんな!」
（プ）マイク『なんと鉄哲たちの動きが止まってしまったぁぁ!!そして機神がついにすべてのハチマキを獲得ぅぅ!!』
観客「「「わあああああああああ!!!」」」

普通ならあまりありえない展開に観客も盛り上がる。
(プ)マイク『だがしかぁし！残り時間はまだあと約5分あるぜぇ！このまま機神はすべてのハチマキを持ったまま逃げ切るのかー!?』
相澤（たぶんというか…絶対何か企んでるだろうな…）
すべてのハチマキを獲ったクラフトは現在、自分以外の騎馬に囲まれていた。
葉隠「機神くん！君は包囲されている！無事でいたいならそのハチマキを全部を私に渡すんだ！」
クラフト「さらっと全部って言ってるの自覚ある!?」
峰田「機神いぃ!!てめぇは許さねぇ！」
クラフト「根に持ちすぎじゃね!?」
物間「まったく君はやって「機神！ハチマキは返してもらうよ！」…ちょっと拳藤まだ僕が話して―」
爆豪「おいハゲ野郎!!てめぇいい度胸してるじゃねえか!!どうなるか覚悟出来てんだろうな!?」
物間「ちょっとおぉぉ!!?」
緑谷「機神くん！ハチマキ獲り返させてもらうよ！」
轟「……」

鉄哲「さっきはよくも騙してくれたな!この借りは返させてもらうぜ!!」
各騎馬からいろいろと言われるクラフト。だがそれを軽く受け流す。
クラフト「いや～どうしようかねこれ……欲しい？」
爆豪「余裕ぶっこいてんじゃねぇぞハゲ野郎!」ボォン!
痺れを切らした爆豪が爆破を利用した移動でクラフトに迫る。
クラフト「(バリバリの能力!)…ちゃんと名前で呼べないのか!」キィン!
爆豪「チッ!またこれか…!」
クラフト「……(そういやこのままハチマキ全部持って終わったらどうなるんだ?)…ミッドナイト!」
(ミ)ナイト「?…何かしら機神くん?」
クラフト「このまま全部のハチマキ持って終わったらどうなるんですか?」
(ミ)ナイト「ん～そうね～…そうなっちゃうと本戦出場者があなただけになっちゃうから、もう一回騎馬戦をするか別の方法で決めることになるわね。それがどうかしたの?」
クラフト「なるほど、ありがとうございます…うーんオモシロいと思ってやったけど、それとは別に色々な事が面倒になっちゃうな……」
爆豪「なにごちゃごちゃ言ってやがる!!」ボォンッ!

クラフト「おっと!」キィン!
拳藤「隙ありっ!」グアッ!
クラフト「(バラバラの能力!)バラバラ緊急脱出!」パカン!
拳藤「くそっ!」
クラフト「このまま持っていたら色々あれだから返すわ」
爆豪「あ⊠?」
拳藤「返…す?」
鉄哲「何言ってんだ?」
葉隠「何言ってんの機神くん!?」
クラフト「それは…こういうことだ!!」フワアァ〜…
クラフトはそう言うとフワフワの能力で獲ったハチマキを上空高くに浮かす。
(プ)マイク『ああーっと!なんと機神ここで自身のハチマキ以外のハチマキを手放したぁー!!』
相澤『まあアイツは自分のハチマキ持っとけば問題ないからな…』
(プ)マイク『そしてその手放したハチマキは上空で滞空している!これはある意味チャンスなのかー!?』
鉄哲「なっ!?急いで回れ!塩崎!個性でハチマキ取ってくれ!!」

塩崎「お任せを!!」
峰田「障子急げ急げ!お前ら2人の個性なら取れるぞ!!」
葉隠「わあああ!?早く取らないと!耳郎ちゃんお願いね!」
耳郎「分っーてる!!」
緑谷「常闇くん!」
常闇「分かってる!黒影（ダークシャドウ）!!」
黒影『アイヨッ!!』
轟「飯田!」
飯田「くっ!してやられた!」
爆豪「はっ!俺には関係ねぇー!!」ボォン!!

クラフトがハチマキを突然手放したことで他の騎馬は混乱する。そして上空という場所にある為激しい争奪戦が残り時間1分にして始まる。爆豪は爆破で上空に上がりハチマキを獲り、鉄哲は塩崎の個性でハチマキを獲り、緑谷は常闇のダークシャドウでハチマキを獲る…各騎馬は個性を使って上空に滞空していたハチマキを取り、それを他の騎馬が隙を見て獲る。激しい攻防戦が1分と短い時間という中で繰り広げられる。しかしその攻防戦にもいよいよ終わりが訪れる。
（プ）マイク『そろそろ時間だ!カウントダウンいくぜぇ!!エビバディセイヘイ!!１０!

…9!…8!…7!…6!…5!…4!…3!…2!…1!…』

『タイムアップ!!』

（プ）マイク『予選に続き本戦の騎馬戦も予想を超える展開で盛り上がりを見せた!!そんな激しい騎馬戦を勝ち抜いた上位4チームを見ていくぜぇ!!1位機神チーム!!つーか圧倒的すぎだろ!!続いて2位轟チーム!3位爆豪チーム!4位鉄ｔ…あら心操チーム!?おいおい!いつの間に逆転してたんだ!?』

緑谷「くっ!…ごめん皆…」

常闇「気にするな緑谷、お前はよくやってくれた」

麗日「そうだよデクくん!」

発目「最終種目にいけないのは残念ですが少なからずアピールできたので私は別にいいです!」

緑谷「でも…「ヘイ緑谷お疲れ!」…機神くん!」

クラフト「緑谷、惜しくも5位だったか～」

緑谷「うん、それより通過おめでとう機神くん」

麗日「機神くん!きみ色々やり過ぎだよ!!」

クラフト「サンキュー緑谷&ａｍｐ;ごめんよ麗日、まあでももしかしたらどんでん返しあるかもよ?（最終種目は16人によるトーナメント形式だったはず…俺の騎馬は

含まれない、だとすればあと3人足りないから…）」
　緑谷「それってどういう…」
最終種目出場者上位4チームが決まりこれで騎馬戦が終わると思ったが…
（ミ）ナイト「なお最終種目は16人の選手が必要となるわ！なので5位の緑谷くんのチームから3名出場してもらうわ!!誰が出るかは4人で話し合って決めてちょうだい！」
　緑谷「えっ？」
　麗日「それじゃ…？」
（プ）マイク『5位の緑谷チームから3名が最終種目に出場決定だあああああ!!』
　観客「「「わあああああああああああ」」」
　緑谷「わあああーーー!!」涙ブシャー!!
　麗日「やったねデクくん!!」
　クラフト「おめでと～」
　発目「でっ誰が出るんですか?あっもちろん私は出たいです！」
　常闇「それはこの4人ともそうだろう」
誰が出るか話し合いで決めようとするが…
　相澤『話し合いなんかしてたら一生決まらねぇからジャンケンで決めろ』

相澤の鶴の一声でジャンケンで決めることになった。
緑・麗・常・発「「「じゃーんけーんっぽんっ!!!」」」
常闇「くっ…俺の負けか…」
ジャンケンに負けたのは常闇。これによって緑谷・麗日・発目が最終種目へ出場することになった。
(プ)マイク『さあ最終種目へ出場する選手が決まった!!これより1時間ほど昼休憩挟んだら午後の部だぜ!じゃあな!!おいイレイザー飯行こうぜ』
相澤『寝る…』
(プ)マイク『ヒュウ〜…』
昼休憩になり皆が食堂へ足を進め始めるなか鉄哲たちは暗い雰囲気に包まれており…
鉄哲「どういうことだ…いつの間にかポイントが0になっていたぞ…」
塩崎「あの小人の方のポイントを穢らわしい取り方をしてしまった罰でしょうか…？」
いつのまにかハチマキを失っていたことに打ちひしがれていた。

第２２話　体育祭だ!!④

騎馬戦が終わり1時間の昼休憩となり生徒達は食堂で空いたお腹を満たす中、緑谷とクラフトは轟に呼び止められスタジアムの通路にいる。

緑谷「話って…何かな轟くん…?」

クラフト「早くしねーと昼飯食えなくなるよ?」

轟「……なあ緑谷、お前オールマイトの隠し子か何か?」

緑谷「!?…なっ何を急に…ってもし本当にそうだったとしても違うって言うにきまっているから納得しないと思うけどとにかくそんなんじゃなくて…そもそもその…逆に聞くけど何で僕なんかに…」

轟「『そんなんじゃなくて』って言い方…少なくとも何かしら言えない関係がある、ってことだな?それに機神も…」

緑谷「……」

クラフト「さぁ…どうだろうね?」

轟「…俺の親父はエンデヴァー、知ってるだろ?万年Ｎｏ２のヒーローだ。お前(緑谷)がＮｏ１ヒーローの何かを持っているなら…尚更俺はお前に勝たなきゃならねぇ」

クラフト「何をそこまでこだわってんだ？（一応知ってるけどそれっぽく聞いとこ）」

轟「…俺の親父は極めて上昇志向の強い奴だ、ヒーローとして破竹の勢いで名を馳せた。がそれだけに生ける伝説オールマイトが目障りで仕方なかったらしい。自分ではオールマイトを超えられねぇと思ったのか、親父は次の策に出た。」

緑谷「とっ轟くん、何の話を…？、僕に何が言いたい―」

轟「個性婚…知ってるよな？」

緑谷「！…」

轟「―超常―が起きてから第二～第三世代間で問題になったやつ。自身の個性をより強化して継がせるために配偶者を選び結婚を強いる…倫理観の抜けた前時代的発想。実績と金だけはある男だ…親父は母の親族を丸め込み…母の個性を手に入れた。俺をオールマイト以上のヒーローに育て上げることで自身の欲求を満たそうってこった…本当にうっとうしい、そんな屑の道具にはならねぇ…。俺の記憶の中の母はいつも泣いている…『お前の左が醜い』と…そんな母は俺に煮え湯を浴びせた。」

緑谷「!?…」ゾッ…

クラフト「……」

轟「ざっと話したが俺がお前に突っかかんのは見返すためだ。クソ親父の個性なんざなくたって…いや…使わず一番になることで奴を完全否定する」

あまりにも違う世界のため慄然（りつぜん）とする緑谷。目指すところは同じでもこうも違うのかと…

緑谷「……」

轟「…言わねえなら別に別にいい、お前らがオールマとの何であろうと俺は右だけでお前らの上をいく。…時間とらせたな」

緑谷「（コミックだったら主人公だ、それほどの背景…それに対して僕が言えることなんて…）僕は…ずうっと助けられてきた、さっきだってそうだ…僕は誰かに救けられてここにいる。（笑って人を救けるヒーロー…）オールマイト、あの人のようになりたい…その為には1番になるくらい強くならなきゃいけない。君に比べたら些細な動機かもしれない。でも僕だって負けられない！僕を救けてくれた人たちに応えるためにも！さっき受けた宣戦布告、改めて僕からも…」

「僕も君に勝つ!!」

轟「…」

クラフト「あー俺はあんまりうまいこと言えないが…俺は宣誓で言った通り1位を狙う。まあ人様の家庭にあれこれ言うのもあれだけど…やるなら全部使ってこいや轟」

轟「っ！…」ギロッ…

クラフト「まあ頑張ろうぜお互い、それじゃ」

互いに話が終わり解散する。そして昼休憩が終わりレクリエーションが始まろうとする。

(プ)マイク『最終種目発表前に予選落ちの皆へ朗報だ!あくまで体育祭!ちゃんと全員参加のレクリエーション種目も用意してんのさ!本場アメリカからチアリーダーも呼んで一層盛り上げ…ん?ありゃ?』

相澤『なにやってんだアイツら?』

プレゼントマイクと相澤の視線の先には…

(プ)マイク『どーしたA組B組?!』

チアリーダーの格好をしたA組B組の女子の姿があった。

八百万「峰田さん上鳴さん騙しましたわね!?」

上・峰「ひょーー!」サムズアップ!

八百万「はあ…何故こうも峰田さんの策略にハマってしまうの私…」ズゥーン…

拳藤「ちょっと考えればわかったはずなのに…なぜあの時分からなかった私…」

取蔭「どんまい…」

耳郎「アホだろアイツら!」ブンッ

耳郎がチアが持っているポンポンを地面に投げつけたそのとき。

カシャ…

耳郎「ん?」
カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャ…!
耳郎「ちょっクラフト!あんた何撮ってんの／／／!?」
クラフト「永久保存!」
耳郎「話聞いてる!?」
クラフト「大丈夫!ちゃんと2人（響香と拳藤）のベストショット収めてるから!!そしてプリントして部屋に飾る!」
拳藤「そういうことじゃない／／!」
耳郎「恥ずいからやめろって言ってんの／／!」
クラフト「ヤダッ!!」
拳藤「子供かっ!!」
クラフト「まだ子供だ!年齢的には!」
取蔭「屁理屈すぎんだろw!」ケタケタケタ
葉隠「まあ本戦まで時間空くし張りつめてもシンドいしさ…いいじゃんやったろ!!」
耳郎「うえぇぇー!?」
蛙吹「透ちゃん、好きね」

角取「とってモ楽しそうデース！」

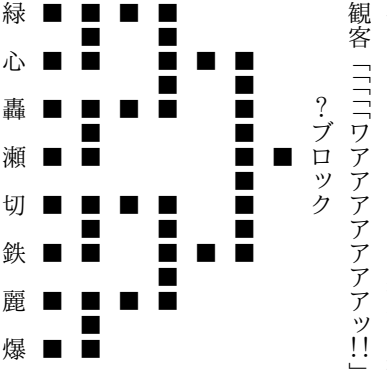
拳藤「角取まで…!?」

レクリエーションが始まる前に最終種目、16名からなるトーナメント形式の1対1のバトル。その組み合わせをクジによって決めようとしたそのとき尾白と庄田が原作と同じように棄権した。そして空いた枠で新たに進出したのは拳藤と鉄哲であり、人数が揃ったことでクジによってトーナメントの組み合わせが決定した。

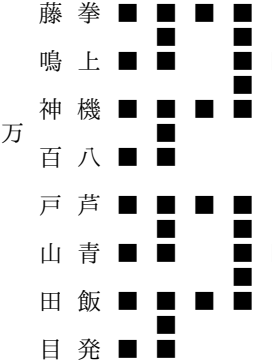
（ミ）ナイト「というわけで抽選の結果！組はこうなりました!!」

観客「「「「ワアアアアアアッ!!」」」」

？ブロック



緑心轟瀬切鉄麗爆

谷操　呂島哲日豪
?ブロック

拳上機八芦青飯発
藤鳴神百戸山田目
万

緑谷「心操って確か…」
心操「あんただよな?緑谷って?」
緑谷「《ビクッ!》…（この人が…）よろしモッ」
尾白「緑谷!」
緑谷が言葉を返そうとしたとき尾白が尻尾で口を塞ぐ。

尾白「奴に答えるな！」
緑谷「!?…」
轟（緑谷…意外と早かったな。来いよ、この手で倒してやる）
切・哲「お前とか！負けねーぜ!!」
青山「メルシィー！僕が相手で残念だったね☆！」
芦戸「ラッキーの間違いでしょ!!」
クラフト「初戦は八百万とか、よろしく」
八百万「望むところですわ！」
爆豪「あぁ?…麗日?」
麗日（ヒィィー!?!!）
発目「飯田ってあなたですか?」
飯田「むっ！いかにも俺は飯田だ！」
発目「ひょー！よかった！実はですね…」
（プ）マイク『よーしそれじゃあトーナメントはひとまず置いといてイッツ束の間！楽しく遊ぶぞレクリエーション!!』
束の間のレクリエーション…その時間はあっという間に過ぎてゆく、そして…
セメントス「オッケーもうほぼ完成」

（プ）マイク『サンキュー!セメントス!ヘイガイズ!アァユゥレディ!?色々やってきまが結局これだぜガチンコ勝負!!頼れるのは己のみ!!ヒーローでなくてもそんな場面ばっかりだ!わかるよな!?心・技・体に知恵知識!総動員して駆け上がれ!!』

観客「「「ワアアアアアッ!!!」」」

（プ）マイク『?ブロック第１回戦!成績のわりに何だその顔!ヒーロー科緑谷出久!!対（バーサス）ゴメンまだ目立つ活躍なし!普通科心操人使!!ルールは簡単!相手を場外に落とすか行動不能にする!あとは「まいった」とか言わせても勝ちだ!ケガ上等!こちとら我らがリカバリーガールが待機してっから道徳倫理は一旦捨ておけ!!だがしかし!もちろん命に関わるようなのはクソだからアウト!ヒーローは敵（ヴィラン）を捕まえる為に拳を振るうのだ!!』

心操「まいった…か、わかるかい緑谷出久。これは心の強さが問われる戦いだ」

緑谷「…」

心操「強く思う将来（ビジョン）があるならなり振り構ってちゃいけないんだ」

（プ）マイク『それじゃあ早速始めていくぜぇ!!』

心操「あの猿はプライドがどうとか言ってたが…」

（プ）マイク『レディイイイイイイ…スタァートッ!!!』

心操「チャンスをドブに捨てるなんてバカだと思わないか?」

緑谷「!!…何てこと言うんだ―!?」ピキィン…

心操「…俺の勝ちだ」

(プ)マイク『オイオイどうした!?大事な初戦だ!盛り上げてくれよ!だが緑谷!開始早々完全停止!?アホ面でビクともしねぇ!心操の個性か!?』

尾白「ああぁ!折角忠告したのに!」

麗日「デクくん…」

飯田「緑谷くん…」

(プ)マイク『全っっっっ然目立ってなかったけど彼ひょっとしてヤベえ奴なのか!?』

相澤『だからあの入試は合理的じゃねぇって言ってんだ』

(プ)マイク『ん?それは?』

相澤『2人の簡単なデータだ、個人戦になるからまとめてもらった。心操のやつ、ヒーロー科の実技で落ちている。普通科も受けていたのを見ると想定済みだったんだろう…あいつの個性はかなり強力なものだが…あの入試内容じゃポイントは稼げねぇよ…』

・

・

心操「お前は…恵まれてていいよな緑谷出久…そのまま振り向いて場外まで歩いていけ」

緑谷「……」クルッ…

（プ）マイク『ああー!?緑谷ジュ―ジュン!!』

心操人使　個性【洗脳】

彼の問いかけに答えると洗脳スイッチが入ってしまい彼の言いなりになってしまうぞ！本人にその気がなければ洗脳スイッチは入らない。また衝撃を与えることでも解ける。

相澤（体力テストの結果は、緑谷はヒーロー科でもなかなかの成績。対して心操は個性は強力だが…それ以外は緑谷に劣っている。これなら普通にやり合って勝つのは緑谷だが…洗脳さえ攻略できていればだが、まあなんにせよ決着は早い……）

相澤が状況を冷静に分析するなか緑谷が入場してきた通路の入口にいたオールマイトが焦った顔でオロオロとしていた。

（オ）マイト（緑谷少年…来ちゃダメーー!!）あわわわわ…

・

・

緑谷（ダメだ…体が勝手に…頭にモヤが…かかったみたいに…！ちくしょう！止まれ！止まれ！折角尾白くんが忠告してくれたのに！ちくしょう！こんなあっけなく！皆！託してくれたのに！こんなところで――）

洗脳によって体の自由が利かず、フィールドの場外ラインに差し迫ったそのとき緑谷に異変が起きる。

ザッ…ザザッ…ザザザッ……

緑谷（……何だこれ!?）

幻覚のようなものが見えたかと思うと体に力が走り左の指先に集中する。

ピクッ…

緑谷（動い――!?）

心操「分かんないだろうけど…こんな個性でも夢見ちゃうんだ」

緑谷（……）グッ…ヒュバッ！

ブワアアッ!!

心操「っ!?」

（オ）マイト「おぉっ!?」

緑谷がラインを超えそうになった瞬間突如激しい風圧が発生する。

緑谷「…ハアッーハァッハァッ…」

（プ）マイク『これは!?…何と緑谷ギリギリとどまったあぁーーー!!』

観客「「「「ワアアアアアッ!!!」」」」

相澤（指が…暴発させて洗脳を解いたのか）

尾白「すげぇ無茶を…！」
クラフト（めっちゃドキドキした…）
心操「なんで!?体の自由は効かないはずだ！何をした!!?」
緑谷（指は僕だ！――…でも指を動かせたのは!?…なんだ!?…知らない人達が浮かんで一瞬頭がはれた！…人…この力を繋いできた人たちの…気配!?救けてくれた!?あるのかそんなこと!?…いや今は目の前のことに集中だ…考えるのはあとだ！）
心操「（答えない!?…ネタ割れたか!?、いやはじめからあの猿の奴に聞いてたはず…ならまた口開かせるしか…）何とか言えよ…」
緑「――……」ジリッ…
心操「～～～……！、指動かすだけでその威力か！羨ましいよ！」
緑谷（僕もそれ昔思ってた…！）
心操「俺はこんな個性だからスタートから遅れちまった！恵まれた人間には分からないだろ！」
緑谷（分かるよ…でも…僕は恵まれた）
心操「誂え向き（あつら）の個性に生まれて望む場所に行ける奴らにはよ!!」
緑谷（人に恵まれた!!だからこそ僕だって…ＯＦＡフルカウル！）シュダッ！
心操「なっ早っ―!?」

緑谷「スマアァァァッシュ!!!」ドムッ!!
心操「ぐほっ!!?」
緑谷の攻撃をモロに腹に受けそのまま後ろに勢いよく飛ぶ心操。
ドサッ…
(ミ)ナイト「心操くん場外!緑谷くん2回戦進出!!」
観客「「「ワアアアアアアッ!!!」」」
上鳴「爆豪も一発殴られてたよな?」
爆豪「黙れアホ面」
上鳴「……」ズ―ン…
(プ)マイク『ＩＹＡＨＡ!!初戦にしちゃ地味な戦いだったが両者の健闘を称えてクラップユアハンズ!!』
パチパチパチパチ…
緑谷「…心操くんは何でヒーローに?」
心操「…憧れちまったもんは仕方ないだろ…」
緑谷「……!!(その気持ちはＯＦＡを継ぐ前の僕と同じだ…でも今の僕が何を言っても…)」
緑谷がそう思いながらも心操が入場ゲートに差し掛かると…

普通科「かっこよかったぞ心操ー!!」
心操「…!?」
普通科「おつー!」「俺ら普通科の星だな!」「障害物競走2位の奴といい勝負だったじゃねえか!!」「それによ…」
普通科の生徒の1人が観客席にいるヒーローに指を向ける。
ヒーロー「あの個性、対敵（ヴィラン）に関しちゃかなり有用だぜ?ほしいな…」「雄英もバカだなー、あれ普通科かー?」「まあ受験人数ハンパないから仕方ないっていう部分もあるけどな」「戦闘経験の差はなー」「どうしても出ちまうもんなー」
普通科「聞こえるか心操、お前すげぇぞ!!」
心操「……結果によっちゃヒーロー科編入も検討してくれるらしい…覚えとけよ!今回はダメだったとしても絶対諦めない!ヒーロー科入って資格習得してお前らより立派にヒーローやってやる!」
緑谷「――うん!!（あっやられ―試合終わったのになんで…?）」
心操「普通かまえるんだけどな、俺と話す人は…そんなんじゃすぐ足を掬われるぞ。せめてみっともない負け方はしないでくれよ?」
緑谷「（心操くん…）―うん!あっ…」
心操「……」

こうして?ブロック第1試合、緑谷ＶＳ心操の試合は緑谷の勝利で終わるのであった。次の第2試合の轟ＶＳ瀬呂の試合なのだがこれはもう気の毒としか言えない。轟の最大威力の凍結によって秒殺されてしまいスタジアムからはドンマイコールが響いたのであった。第3試合、切島ＶＳ鉄哲、両者引き分けにより2人が回復したあと簡単な勝負でによって決められるそうだ。?ブロック第一回戦第4試合麗日ＶＳ爆豪。原作と同じように爆豪の容赦ない攻撃に対してブーイングが起こるが、相澤の一括によって収まり結果は爆豪の勝利で終わる。そして?ブロック第一回戦の試合がすべて終わるといよいよ?ブロックの試合が始まる。

第２３話　体育祭だ!!⑤

?ブロック第一回戦の試合が全て終わり続いて?ブロック第1試合が始まろうとしていた。

――スタジアム――

(プ)マイク『さあ?ブロックの試合が終わったら次は?ブロックの試合だオーディエンス!!アーユウレディ!?』

観客「ニニニワアアアアアッ!!!」ニニ」

(プ)マイク『それじゃー早速始めていくぜぇっ!?ブロックの初戦はこいつらだぁ!!スパーキングキリングボーイ!ヒーロー科上鳴電気!!』

上鳴「へへっ悪いけど勝たせてもらうぜ?」

瀬呂「あいつ大丈夫か?」

蛙吹「そうね、上鳴ちゃんの個性は強力だけど…」

耳郎「あいつアホだからなー」

(プ)マイク『ＶＳ(ヴァーサス)!Ｂ組の姐御的存在!ヒーロー科拳藤一佳!!』

拳藤「悪いけどそうはいかないよ」

小森「一佳やっちゃえノコー！」
取蔭「そんなやつ簡単にやっつけちゃいな！」
物間「ハ―ハッハッハッ!!拳藤！A組の奴なんか捻りつぶへっ!?」バキッ！
泡瀬「物間うるさいぞ」
（プ）マイク『それじゃレディィ…スタァアトッ!!』
上鳴「あんた、機神の彼女さんなんだろ？」
拳藤「？…それがどうしたのよ？」
上鳴「あいつの彼女の1人らしいけど、彼女2人もいたら色々疲れてるんじゃない？今度よかったらお茶でもしない（笑）？」ヘラヘラ
拳藤「…はっ？」
上鳴「あっこれを機に俺の彼女に―」
拳藤「おい…」
上鳴「んっ…？」
拳藤「覚悟は出来てんだろうな…？」
上鳴「い☒っ!?」
拳藤の顔は般若のように怒っていた。
（プ）マイク『あん？なに話してんだ？なんか拳藤が怒っているようにも見えるが…？』

相澤『おおかた上鳴が余計な事でも言ったんだろ…』
（プ）マイク『おっと!そう話していると拳藤が仕掛けたぁ!!』
上鳴「やっやべっ!?無差別放電１３０万Ｖ（ボルト）ッ!!」
ＢＺＺＺ

大拳で思いっきり殴り飛ばされた上鳴は綺麗な曲線を描くように宙を舞って地面に落ちる。

（ミ）ナイト『……上鳴くん戦闘不能!!拳藤さんの勝利!!』

観客「「「「ワアアアアアアッ!」」」」

完全にのびている上鳴は救護ロボットによってリカバリーガールの元へ運ばれていった。ヒーロー達が様々な意見を言いながらも次の試合の準備が進められる。待たせたな…いよいよクラフト(あいつ)の登場だ!

（プ）マイク『さあさあ次の試合だ!!上げてけボルテージ!!それじゃあいくぜぇ!…万能創造!推薦入学者であってその才能は折り紙付き!ヒーロー科八百万百!VS(ヴァーサス)!!こちらは万能個性か!?特選入学者の名は伊達じゃねぇ!ここまでトップの成績!ヒーロー科機神クラフト!!』

尾白「緑谷はこの試合どう見る?」

緑谷「正直…八百万さんが勝てる可能性は限りなく低いと思う。だけど何か大きな隙を付ければ可能性は…」

尾白「隙か…」

八百万（プレゼントマイク先生の言った通り…相手は万能(それ)を思わせるかのような個性の持ち主の機神さん。しかも機神さんは個性に関しての情報は隠しており、いったいど

のような個性なのか分からない状態…下手をすれば何もできないまま場外に出される可能性もある。ここは素早く創造できる武器を作って接近し――）

（プ）マイク「それでは試合…スタァァトッ!!」

八百万「はっ―!?」

クラフト「……」

八百万「?…（攻撃してこない?…なら!）」シュアアア……

八百万は右手に鉄パイプ、左腕に盾を創造して構える。

クラフト「…準備できた?」

八百万「!?…まさか待っていてくれたのですか!?」

クラフト「そうだよ? いけなかった?」

八百万「いえ…ですが随分と余裕ですね? 私は簡単に倒せると?」

クラフト「まさか、相手が準備出来てから戦う。これは一応俺なりの礼儀だよ?」

八百万「そうでしたか…なら私もあなたが準備を待ちましょう」

クラフト「おっ悪いね、では…変身!」シュインシュインシュイン!

クラフトの体が光の粒子が纏いＬＢＸジョーカーＭｋ．２へ変身する。

（プ）マイク『あっーと機神!予選で見せたロボットへ変身したぁ!!しかしその姿は予選で見た姿とは違い今度はまるで道化師のようなロボットだぁぁ!!』

観客「「「「ワアアアアアッ！」」」」
八百万「（予選で見たタイプとは明らかに違う…）準備できましたか…？」
クラフト「悪いね～それじゃ始めよか？」
八百万「望むところですわ!!」ダダッ！
（プ）マイク『八百万！機神の変身を見届けるとソッコー仕掛けたあっ!!』
クラフト「（接近して近接戦っていうのもいいけど創造を警戒して一撃離脱がいいかな？）…近接戦がお望みか？」ガシャシャシャシャッ!!
（プ）マイク『機神も動き出したっ！ロボットだからか速ええ!!』
八百万「（速い！…ですが対応できない速さでは―）」
クラフト（まずは…）グアッ！
持っている武器（サイズ）を振り上げて八百万に向かって勢いよく振り降ろす。それに反応して盾を構えて防御する八百万。
ガァアン!!
八百万「くっ!!見た目に反してパワーが…」
クラフト「……」バッ…
八百万（？…後ろに下がった？）
クラフト「……（意外とゴリ押しでいけるか？）」

八百万「(…もしかして警戒している?)…機神さんどうしたのですか?」
クラフト「!……なにがだい?」
八百万「いえ…あなたの個性なら私の位置を変えるなりして勝つことが出来るはずですが…なぜそれをやらないのかと……」
クラフト「流石にその類の力を使うのはダメかなって思ってね」
八百万「なるほど…後悔しても知りませんよ!!」ダダダッ!
クラフト「そんな予定はない!!」
八百万「ハアアアッ!!」ブォンッ!
キィンッカァンッ!
八百万の鉄パイプによる攻撃が繰り出される。
(プ)マイク『八百万!機神を押しているー!!このまま勝利へ持っていけるかっ!?』
クラフト「こんな攻撃じゃ俺は倒せないぞ?」
八百万「ええっ!わかってますわそんなこと…だから次の手を打つまでですわ!!」
シュアアア…バババッ!
クラフト「これは!?うおっ!」バサッ!
八百万が何かを創り出したかと思えば次の瞬間クラフトに大きな網が覆いかぶさり絡まる。

（プ）マイク『ああーっ！ここで機神が網に掴まってしまうー!!これは絶対絶命かあっ!!?』

相澤『並の相手ならこれでもいいが…相手は機神だからな。そう簡単にはいかねぇだろ』

八百万「機神さん…詰みです」ガチャ…

八百万がそう言いながらサブマシンガンをクラフトの顔に近づけて構える。

クラフト「いやーちょっと油断しすぎたかな～…でもこの程度じゃ降参はしないね（スナスナの能力）」サアァァ……

八百万「―!?」

（プ）マイク『なっなんと機神！体が霧状に変化して網から抜け出したぁーー!!』

観客「「「ワアアアアアッ！」」」

クラフト「今度はこっちの番だ！」ガシャシャシャシャシャッ!!

（プ）マイク『機神！網から抜け出したかと思えば今度は八百万の周りを円を描くように高速移動を始めたぁっ!!』

八百万「くっ！速すぎて狙いが…！」

八百万が困惑していると…

ヒュゥン……ヒュゥン……

観客「おい、なんか機神ってやつ増えてね?」「はあ?何を言って…」「いや俺もそう思う!」「やっぱそう見える!?」
ステージで起きている異変に観客が気づきはじめざわつく。そして…
(プ)マイク『なっなんと高速移動して止まったかと思えば機神が…増えたぁー!?』
八百万「なっ!?これはどういうことですのっ!?」
クラフト「分身の術ってね!」
八百万「分身の術なんて…!(もしそうなら影を見れば…3体とも影が!?)」
クラフト「どうした驚いた顔なんかして?もしかして影を見ればわかるなんて思った?」
八百万「くっ!」ドタタタッ!!
思っていることを当てられたため焦ってサブマシンガンを撃つ八百万。
クラフト「おっと危ないな!」シュバッ!
八百万「ということはあなたが本体で―《ドガッ!》―っっ!?(後ろ…から!?)」
クラフト「影があるということは実体があるということ…戦闘訓練で俺がロボットを操っていること忘れた?」
八百万「(そう…でしたわ、私としたことが…)それでも私は―!」
クラフト「いや終わりだ」シュッ…ドゴッ!

八百万「―かっ!?…は」
八百万がダメージを負った隙にクラフトが接近し石突の部分で鳩尾に重い一撃が入りダウンする八百万。
クラフト「…卑怯くさいけど卑怯なんて言わないでね」
(ミ)ナイト「八百万さん戦闘不能!機神くん二回戦進出!!」
観客「「「ワアアアアアアアッ!」」」
無事二回戦へ進出したクラフト。A組の観客席に戻ると称賛とお疲れの言葉をかけられる。が「女子に対してやり過ぎ!」とクラスの女子から言われてしまう。主に芦戸と葉隠。
クラフト「そう言われてもなー、手を抜くわけにもいかないし…」
葉隠「君ならもっと優しく出来たはずだ!」クワッ!
芦戸「そうだ!」
クラフト「ええー…てか芦戸行かなくていいのか?次試合だろ?」
芦戸「はっそうだった!じゃ行ってくるね皆!」
蛙吹「頑張って三奈ちゃん!」
葉隠「頑張ってね!」
芦戸「ありがとー!」ドダダダッ!

そう言いながら走ってステージに向かう芦戸だった。
クラフト「ふぃ～危機は去ったってか?」
瀬呂「お疲れだったな機神ぃ～（笑）！」
クラフト「サンキュー瀬呂」
耳郎「お疲れクラフト」
クラフト「サンキュー響香」
耳郎「でも確かに葉隠の言う通りもうちょっと優しく出来たんじゃないの?」
クラフト「うーん…さっきも言った通り手を抜いたら失礼だし……」
峰田「おい機神ぃ…」
クラフト「…なんだ峰田?」
峰田「お前には失望したぜぇ…てめぇの鎌見て期待したのによぉ…!」
クラフト「何をだよ…」
峰田「決まってんだろ!あの鎌で八百万の服が淫らになることによお!!なのにてめぇは!!」血涙ダバー!!
瀬呂「お前なあ…」
切島「お前ダメだぞ?」
葉・耳「「サイテー」」

蛙吹「最低よ、峰田ちゃん」
クラフト「第一あの鎌に刃はついていないし、そんなことできる分けねぇだろ。てかまずそんなことやっちゃいけねーだろ?」
峰田「あ☒ぁん!?いい子ぶってんじゃねぇ!間近であのヤオヨロッパイを堪能したんだろ!?」
クラフト「!……峰田そのへんにしとけ、それ以上は身の安全を保障できないぞ」
峰田「うるせー!オイラがもしトーナメントに出れればあのヤオヨロッパイを―」
八百万「ヤオヨロッパイを…なんですの?峰田さん?」
峰田「――ひょっ!?」ギギギギ…
油の切れたブリキ人形のような音を立てながら顔を後ろに向ける峰田。そこには俺に受けたダメージから回復した八百万が仁王立ちしていた。
八百万「ヤオヨロッパイをどうするんですの?峰田さん?」ニコッ…
峰田「あわわわわ…おっおい瀬呂ぉ…」((ガタガタガタガタ…))
瀬呂「次の試合どっちが勝つかな～(汗)」
峰田「かっ上鳴ぃ…」
上鳴「さっさぁどっちが勝つだろうな～(汗)」
峰田「きっ切島ぁ…」

切島「おっおおそうだな…芦戸なんじゃねぇのか（汗）」
助けを求めるように周りを見るが皆顔をそむける。そして最後にクラフトの方へ顔を向けるが…
峰田「はっ機神ぃ…何とか…（涙目）」
クラフト「俺は忠告したぞ…安心しろ、命は保障されるはずだ…たぶん…」
峰田「おっおい！最後なんて言った!?たぶんって言ったか!?お―」
八百万「さっ峰田さん、少しあちらでお話しましょうか？」ゴゴゴゴゴ…ニッコリ
峰田「いっ嫌だ…いやだあああぁぁあああぁぁあああ!!」
峰田の断末魔と言える叫びはスタジアムの観客の声にかき消され、数分後に戻ってきた峰田は抜け殻となって帰ってきたのであった。ああ、一応試合の結果は言っておこう。まず芦戸ＶＳ青山は芦戸が青山のベルトを溶かし、青山が混乱してる間に接近しアゴに一発入れて勝利した。そして飯田ＶＳ発目は発目のサポートアイテムの実演説明会の鬼ごっこであった。最終的に満足した発目が自ら場外に出て飯田の勝利となった。そのことに飯田は色々と叫んでいた。
飯田「騙したなぁーーーー!?!!」
発目「すいません、あなたを利用させてもらいました」フフフ…
飯田「嫌いだきみーーー!!」

こんなことがありながらも二回戦出場者は決まるのであった。

第２４話　体育祭だ!!⑥

?ブロック及び?ブロックの第一回戦が終わり続いて第二回戦がもうすぐ始まろうとしていた。

――スタジアム――

クラフト「次は緑谷対轟か…」

瀬呂「轟か…緑谷はあの氷結をどう攻略するかにかかってるな」

飯田「緑谷くんはの個性は超パワーと炎だからそれを上手く使えば問題はないと思うが?」

常闇「だがあの最大威力のやつがきたら流石に厳しいんじゃないか?」

クラフト「炎で溶かせば問題はないとは思うが、それでもどうなるかはわからんな」

色々と予測していると試合が始まる。

・　・　・　・

緑谷「君の!!…力じゃないか!!!」

凍結しか使ってこない攻撃に対してＯＦＡと炎を使って無力化しながら、原作と同じように血に囚われている轟を救おうと緑谷は行動していた。そして…

轟「勝ちてえくせに…敵に塩送るなんて…ふざけた野郎だ…俺だってヒーローに…!!」ボオオォォ…

忘れていた記憶を思い出し左の炎を開放する轟。そしてお互い決着の為動く。その途中セメントスがやばいと思ったのか個性を発動させるが一足遅かった。緑谷と轟の攻撃はぶつかり合いスタジアムに嵐を連想させる程の突風を発生させる。そして煙が晴れステージに立っていたのは……

（ミ）ナイト「……轟くん場外!!緑谷くん３回戦進出!!」

観客「「「「ワアアアアアッ!!!」」」」

クラフト「……（さて行きますか！）」

クラフトは座席を静かに立ち上がり控室に向かう。その途中、試合を終えた緑谷と遇う。

クラフト「おう緑谷、お疲れさま」
緑谷「機神くん、ありがとう……」
クラフト「まあ何はともあれお疲れヒーロー!」スッ…
緑谷「!…うっうん!」スッ…
パァンッ!
クラフトと緑谷は互いにハイタッチをしその場を離れる。クラフトが控え室に到着すると爆豪ＶＳ切島の２回戦が始まり序盤は切島の優勢だったが、硬化の綻びをつかれ爆豪の連続爆破攻撃を受け最後に強烈な爆破をお見舞いされダウンし爆豪が３回戦へ進出した。そしていよいよＢブロックの２回戦クラフトＶＳ拳藤の試合が始まる。
(プ)マイク『さあお次はＢブロック２回戦コイツラだあ!!立ちはだかる相手を巨大な拳で打ち倒す女闘士拳藤一佳!!ＶＳ(ヴァーサス)何だコイツの個性は!もはや何でもありなんじゃねーの!?機神クラフト!!』
拳藤「女闘士って…」
クラフト「なんでもはいいすぎじゃない?」
拳藤「機神…」
クラフト「ん?…なに拳藤?」
拳藤「私が彼女だからって手ぇ抜くんじゃないよ…?」

クラフト「……手は抜いてるつもりはないんだけどね…さっきの試合は拳藤的にそう見えた?」

拳藤「八百万んは悪いけど私にはまだ優しく見えたね…アンタが本気になればあの程度じゃすまないでしょ…」

クラフト「…いいんだな拳藤?」

拳藤「そうでなきゃ私は納得しないよ」

クラフト「わかった…」

拳藤「サンキュー機神。それでこそ私の彼氏だよ」

クラフト「まぁな」

(プ)マイク『話は終わったか!?それじゃあ第2回戦…スタートォ!!』

クラフト(変身!LBX Gレックス!)シュインシュイン…

拳藤「!…」

(プ)マイク『機神!一回戦と同様にロボットに変身したぁっ!!今回の姿はかつて地上を支配していた古代の生物のなかでも最強と呼ばれる存在!!Tレックスを彷彿とさせる姿だあっ!!!カッコいいぃぃー!!』

観客「「「「オオオオオオオオッ!!!」」」」

拳藤「(大きいな…見た感じパワータイプかな…?)…もしかして私と同じ土俵で戦う

つもり?」
クラフト「手は抜いてねぇぞ。それに相手が格闘で来て銃で戦うってのはちょっとな…まあ俺はあんまり偉そうに言えないけど…」
拳藤「なるほどね…後悔するんじゃないよ!」ダダダッ!
そう言って拳藤は走り出しクラフトに攻撃を仕掛ける。
拳藤「喰らいなっ!!」グアッ!ドガッ!
クラフト「ぐぉっ!?（思ったよりパワーあるな…）」ヨロリ…
拳藤「ほらほらっ!次いくよ!!」グアッ!
クラフト「ふんっ!」ガギンッ!
拳藤「なっ…!?（今度はよろけなかった!?）」
クラフト（確かにこのパワーは脅威だがこのGレックスなら踏ん張れば余裕で耐えれるな…）
拳藤「ならこれはどうだ!」ドガガガガッ!
拳藤は大拳による連続攻撃をする。
クラフト「これは…なかなか…だが!」ヒュッ…ドゴッ!
拳藤「だっ…!?」
クラフト「この程度の攻撃じゃこの装甲にキズ一つ付けられないぞ」

拳藤「いたたっ今のは効いたよ機神…その程度の攻撃か…ならそれを上回る攻撃をするまでだ！」

クラフト「やってみな！」

拳藤はそう言いながら個性の大拳を解除しながらクラフトに接近する。

クラフト（？…なんで大拳を？）

拳藤（殴る瞬間に…）タタタ…

クラフト「なにをする気だ…」

拳藤「歯ぁ食いしばりな機神！」ヒュッ!!

双大拳!!

ドゴォッ!!

クラフト「ぐふっ!?（この技は…!?）」

（プ）マイク「ここで拳藤の技が炸裂ぅーー!!そして機神は思った以上にダメージを受けているようだーー!!」

防御をしていたが思った以上の威力に驚くクラフト。そして防御をしていた腕の装甲に…

ピキッ…

クラフト「!?…（マジか…まさか素手で装甲にヒビが入るとは…）」

拳藤「油断対敵ってね…その装甲を過信しすぎたようだね…あと攻撃しないの…?」
クラフト「いや今までのは様子見だ…」
拳藤「!…へぇ随分余裕じゃん」
クラフト「まあ…なっ!」ダダダダッ!!
拳藤（速っ!?あの大きさでこんな速さ出んの!?）
クラフト「オラッ!!」ボッ!
拳藤「っ!!（だけどまだ反応できる速さ!それに速いけど動きは素人!）」
クラフト「!!…（この速さを避けた…やっぱ格闘経験者だからか?）…なら数で圧倒するまで!!」ボボボボッ!!!
拳藤「くっ…!!」
（プ）マイク『機神!ここで攻勢に出て怒涛のラッシュゥゥー!!しかしそれを拳藤は避け続けるー!!』
観客「「「ワアアアアアッ!!!」」」
クラフト「くそっ…!」
拳藤「いくら速くてもその動きじゃ私には一生当たらないよ」
クラフト「そりゃどーも!」グアッ!ドゴン!!
拳藤「よっと!（いま!）」シュバッ!タタン!

拳藤はクラフトの強烈な右の一撃を避けその右腕を利用して後ろに回り込む。
クラフト「なっ!?俺の腕を利用して…!?」
拳藤「アンタが大きいおかげだよ！」
拳藤は大拳を発動して背中を攻撃しようとした次の瞬間。
ヒュッ…ドゴォッ!!
拳藤「かはっ!?」
突如わき腹に強烈な一撃が襲いそのまま軽く飛ばされ地面に倒れる。
拳藤「ゴホゴホッ…はーはー…（なっなにが…?機神は確かに前を向いていたのに…）」
（プ）マイク『華麗に後ろに回り込んだと思えば吹き飛んだのは拳藤う!?どういうことだあっ!?』
――A組B組観客席――
蛙吹「彼女さんなのに容赦ないわね機神ちゃん」
上鳴「うへー機神すげえな。俺なんてつい手加減を…」
蛙吹「ぶっ飛ばされてたわ上鳴ちゃん」
上鳴「あっあのな梅雨ちゃん…」
瀬呂「だけど機神の攻撃をすげぇ避けてたぜ拳藤のやつ」

切島「ああそれに後ろに周りこみもしたもんなすげえぜ！」
常闇「だがそれもここまで…」
葉隠「なんで後ろに回り込んだ拳藤ちゃんが逆に倒れてんの!?」
Ａ組が色々と話し込んでいると隣のＢ組からある男が壁越しに現れる。
物間「おやおや～！Ａ組の彼は彼女でもある拳藤に容赦なく暴力を振るのかい!?まさか本当は―」
ヒュッ！…
物間「っ!?」
耳郎「それ以上何を言う気…?」
物間「えっいや…」
耳郎「なに?」ゴゴゴゴゴ…
物間「ひっ!?なっ何でもありません!!」
物間は気圧されたのかそのまま客席に戻った。
耳郎「ふんっ…」
葉隠「耳郎ちゃん…」
耳郎「あいつがそんなヤツなわけあるか。彼女だからって手ぇ抜いたらウチが許さん」

八百万「耳郎さんは機神さんのことをとても大事に思っていらっしゃるのですね！」
耳郎「!!／／《ボッ！》…なっ何言って―!?／／／」
葉隠「耳郎ちゃん乙女～～!!」
耳郎「だあぁぁやめろぉ!!／／」
観客席で色々ありながらも試合は終盤に進む。
拳藤「はあ…はあ…（あの一撃もらって体に力がうまく入らない）」
クラフト「次で終わりだ…」ザッ…
拳藤「結構いけたと思ったんだけどな…そうだね…いくよ機神！」
クラフト「来いやあ！」
拳藤「うおおおおっ!!」ダッダッダッダッ!!
拳藤は最後の力をふり絞り大拳を発動させクラフトに向かっていく。
クラフト「個性がなかったらお前が勝ってたよ…必殺ファンクション!!」

アタックファンクション　蒼拳乱撃（そうけんらんげき）!!!

クラフトが変身しているGレックスが装着しているナックルダスター系の武器にエネルギーが集中すし、そのエネルギーが溜まった拳を拳藤に向かって4発打ち込む。

ボッ!ボッ!ボッ!ボッ!
打ち込まれた4発のエネルギー弾は曲がることなく拳藤に向かっていき…

ドオオオオオンッ!!!
(プ)マイク『ステージで爆発ぅ!!決着はどうなったぁ!!?』
爆発で発生した煙は徐々に晴れていきステージが見えてくる。そこには…
拳藤「……」
(ミ)ナイト「拳藤さん行動不能!!機神くん3回戦進出!!」
観客「「「「ワアアアアアアッ!!」」」」
クラフト「さて…」
変身を解き倒れている拳藤へ近づく。
クラフト「よっこらせ!ヒョイ!…ミッドナイト、このまま自分が医務室まで運びますのでロボットはいいですよ」
(ミ)ナイト「分かったわ!んはぁー!機神くんあなた青春してるわー♡!!」
クラフト「興奮しすぎですよ」
クラフトは拳藤を抱きかかえてそのままステージを降りて医務室に向かった。なおこ

の様子はもちろん全国放送されていたためネットでは嫉妬の声や黄色い声などが多く上がったのであった。

――医務室――

拳藤「……ん…」

(リ)ガール「おや目が覚めたかい?」

拳藤「ここは…」

(リ)ガール「ここは医務室だよ」

拳藤「医務室……そっか私負けたんだった…」

(リ)ガール「落ち込むことはないさね。あんたはあの子に対してよく戦ったよ」

拳藤「機神を知ってるんですか…」

(リ)ガール「ちょいとね、ああ一応言伝を預かってるよ」

拳藤「言伝?」

(リ)ガール「『今の個性があるからこそ俺は勝てた』だってさ」

拳藤「!(それってつまり)…う…ぅぅ…」ポロポロ…

(リ)ガール「全くこういうのは自分で言うもんだよ…」

涙を流しながらもこの試合とクラフトの言葉によって少し成長できた拳藤であった。

第２５話　体育祭だ!!⑦

?ブロック2回戦最後の試合。芦戸ＶＳ飯田の試合は飯田が開始直後にレシプロバーストを使い芦戸の後ろに回り込む。そしてそのまま両肩を掴み場外へ向けて押し出したことによって飯田が3回戦へ進出した。
(プ)マイク『飯田秒殺!さあこれで準決勝へ駒を進めた4人が出揃ったあっ!?ブロック準決勝は緑谷ＶＳ爆豪!?ブロック準決勝は機神ＶＳ飯田となったぜ!!さあここからさらに盛り上がるぜアーユーレディ!!?』
観客「「「ワアアアアアッ!!!」」」
決勝に近づくにつれてスタジアムのボルテージがどんどん上がっていく。
(プ)マイク『それじゃあ?ブロックの準決勝を始めていくぜっー!!その身に宿すパワーと炎で立ちはだかる相手を打ち破ってここまでやって来た!ヒーロー科緑谷出久!!』
緑谷「……」
(プ)『ＶＳ(ヴァーサス)!顔は凶悪だが圧倒的戦闘力!!その力を持って相手をねじ伏せる男!!ヒーロー科爆豪勝己!!』
爆豪「……」

幼い頃からの幼馴染同士だが、その2人の間に流れている空気はピリピリとしていた。
(プ)マイク『両雄ステージに立つ!さあこれ以上何かを言うのは野暮ってもんだ!始めていくぜぇ!レディィイ…ＳＴＡＲＴ!!』
そしてプレゼントマイクによって試合が開始されたのであった。

・・・・・・・・・

緑谷のＯＦＡと炎の個性で爆豪は爆破の個性、どちらも強力な個性である。試合の中盤までは両者接戦だった。しかし緑谷の炎の個性の隙をついた爆豪が流れを掴み勝利した。
(プ)マイク『白熱した接戦だったが勝利を掴み取ったのはヒーロー科Ａ組の爆豪ーーー!!?ブロックを制し決勝へ進出ぅー!!さあ?ブロックが終わったから?ブロック最後の試合を始めるぜぇぇ!!』
観客「「「ワアアァァァ!!!」」」

（プ）マイク『その足はどこまで加速する!?圧倒的スピードで相手を圧倒!!ヒーロー科飯田天哉!!』

飯田「勝たせてもらうぞ！機神くん!!」

（プ）マイク『ＶＳ（ヴァーサス）！お前の個性は一体何なんだ！まだ何か隠してるんじゃねぇだろうな!?ヒーロー科機神クラフトー!!』

クラフト「もはや紹介分が質問になってる…っとそうはいかないね委員長！」

飯田「（相手はあの機神くん…油断などできない！）」

（プ）マイク「準備はいいか２人とも!?それじゃあいくぜぇ！レディイイ…ＳＴＡＲＴ!!」

プレゼントマイクが試合開始の合図と同時に飯田はクラフトに仕掛ける。

（プ）マイク『飯田速攻ー!!相手に何かさせる前に終わらせる気だあぁ!!』

相澤『確かに相手が機神（あいつ）ならこの手は合理的だ…だが…』

クラフト「っと変身してる暇はないな…（オペオペの能力）…ＲＯＯＭ!!」ブウゥゥン…

飯田「―っ！あれは確か…！」

クラフトが右手を前に出すとそこを中心に薄い青色のドームが形成される。

クラフト「シャンブルズ!!」

飯田「むっ!?」

クラフトがそう言うとクラフトと飯田の場所が入れ替わる。

飯田「おっ!ととと!!やはり場所を入れ替えるやつだったか!!」

(プ)マイク『飯田!突然場所が入れ替わるも冷静に対処するー!!こんなのやられたら俺は普通にテンパるぜー!!っと飯田との場所を入れ替えたすきに機神は姿を変えるぅう!!!』

クラフト「(変身、ＬＢＸナイトメア!)…やっぱ場所を入れ替えたくらいじゃダメか」

飯田「(八百万くんとの試合で使用したロボットの雰囲気に似ているが見た目が違う…)もしやと思うが…スピード勝負をするつもりか、機神くん?」

クラフト「ダメかな?委員長」

飯田「…いや、望むところだ!機神くん!!」

飯田はそう言うと再びエンジンをふかしクラフトに勢いよく向かう。

クラフト「ありがとう委員長!!」ガシャシャシャシャ!!

飯田「(速い…!!)だが!」

飯田が得意の蹴りの間合いに入るとすかさずクラフトに向かって蹴りを繰り出す。しかし、ＬＢＸナイトメアの反応速度をもってクラフトは飯田の蹴りを容易く躱す。一発目を交された飯田は隙を与えず蹴りを繰り出すがことごとく躱される。

飯田「俺の蹴りをこうも躱すとは…流石だ機神くん！」
クラフト「いやいや、その蹴りなかなか怖いよー？」
飯田「もやは出し惜しみはしてられんな…」
クラフト「―！（レシプロか…いけるか…？）」
飯田「レシプロ…バースト!!!」ＤＲＲ!!!
レシプロバースト…トルクの回転数を操作して爆発的な加速を生み出す技。その速度は脅威的である。
クラフト「っ！はや―！」
クラフトがそう思った次の瞬間には、飯田の右足の蹴りがクラフトの頭に直撃した。
飯田「ふっ!!」
ゴッ!!
クラフト「っっっ～～！」
――観客席（Ａ組）――
瀬呂「もろに入ったぞ！」
尾白「あの機神に一発入れるなんて…！」
上鳴「こりゃ番狂わせあるか!?」
クラフトに一撃を食らわせたことによりざわつく観客席。しかし、飯田が二発目の蹴り

を繰り出しクラフトに当たろうとしたそのとき…

飯田「このまま決め――!?」

ガシっ!!

クラフト「痛って～～!、避けれると思って余裕かきすぎた…まさに油断大敵」

飯田「くっ!」

クラフトに止められた片方の足をクラフトの手から引き剥がし、一旦後ろに下がり再びクラフトに攻撃をしようと超加速で接近するが…

クラフト「今度はこちらのターン!!」

飯田「なにっ!?」

飯田が驚くとクラフトは飯田と同じように加速を始める。その速度はどんどん上がっていき、やがて八百万のときと同じように分身が現れる。しかし、その分身は1つ違うことがあった。それは分身が加速によって生まれた本物の分身であるということ。

(プ)マイク『機神!八百万との戦いで見せた分身をここで発動ー!!しかもその数は3体ではなく5体だとぉぉぉ!?』

飯田「(あと5秒…)ヌウゥゥ!!」

クラフト「捌ききれるかな!」

クラフトは飯田のレシプロバーストを超える速度で分身を形成しながら接近する。そ

れを飯田はレシプロバーストを用いた蹴りで対処しようとするが、焼け石に水と言うように自身に近づいたクラフトを蹴るもそれは分身。そしてクラフトの本体に攻撃を当てられぬままレシプロバーストの使用時間が経過してしまう。

プスン…

飯田「しまっ…!!」

クラフト「どうする委員長？いや、飯田」

クラフトはナイトメアの標準装備武器であるロッドを飯田に突きつける。

飯田「くっ…降参だ…！」

（ミ）ナイト「飯田くん降参！機神くん決勝戦進出!!」

（プ）マイク『機神！圧倒的速度で飯田を翻弄し勝利を掴み取ったァァァ!!!さあこれで決勝の役者は揃ったァ!!決勝戦は爆豪ＶＳ機神!!果たして栄光の優勝はどっちが取るのか!?１５分の休憩ととったら始めるぜ!!気合い入れてけぇーー!!』

観客「「「「ワアアアアアア!!!」」」」

決勝戦へ駒を進めたクラフト。相手は才能マンの爆豪。果たして勝利の女神はどちらに傾くのであろうか。

体育祭だ!!（終）

?ブロック?ブロックの準決勝が終わっり残すは決勝戦のみになり会場のボルテージは最高潮に達していた。
（プ）マイク『待たせたなリスナー!!!さあいよいよラスト!!雄英1年の頂点がここで決まる!!決勝戦爆豪ＶＳ機神!!!』
観客「「「ワアアアアアアアアア!!!」」」
（プ）マイク『オーケーオーケー!!それじゃあ始めるぜ!!爆豪ＶＳ機神！いま…ＳＴＡＲＴ!!』
爆豪「死ねぇぇぇー!!!」
クラフト「（ボムボムの能力…）言葉使い直そうか！」
ＢＯＯＭ!!!
爆豪が爆破でクラフトに接近し右手の大振りで爆破攻撃をする。それに対しクラフトも右手でパンチを繰り出す。しかしそのパンチは普通のパンチとは違った。
爆豪「っ！…てめぇ…」
クラフト「俺がどういう個性を使おうとも俺の勝手だ。それにこの個性（爆破）は強いんだろ

？」

　爆豪「～～このハゲ野郎がっ!!…まあいい、てめぇをブッ殺しゃあいいだけだ。それに戦闘訓練での借りを返させてもらうぜ!!」

　クラフト「悪いが負ける気はない!!（ＬＢＸジ・エンペラー!）」

クラフトはＬＢＸジ・エンペラーに変身し、専用武器であるエンペラー・ランチャー（ミサイルを内蔵したハンマー）を構える。

（プ）マイク『機神!ここでもロボットに姿を変える!しかしその姿からにじみ出る雰囲気はまるで王者の風格!!』

　爆豪「ハッ!勝者は自分ってか!?勝つのは俺だ!!!」タタタタっ!!

　クラフト「だったら避けてみな!!」

クラフトはエンペラー・ランチャーのミサイルが搭載されている面を、向かってくる爆豪の方へ向けるとミサイルを発射した。

　ドドドドドっ!!!

（プ）マイク『機神!爆豪にミサイルの波状攻撃!!爆豪ピンチかー!?』

　爆豪「こんなもので俺がやられると思ってんのか!!」

（プ）マイク『しかし爆豪!そんなミサイルとものともせず爆破を使ってミサイルを迎撃ぃーー!!その戦闘センスはもうプロだぜ!!』

観客「「「「ワアアアアアア!!!」」」」

クラフト「この程度じゃダメか。だったらこれを直接お見舞いさせるだけだ!!」

(プ)マイク『機神が動いたぁー!遠距離がダメなら近接ってか!?』

相澤『だが爆豪相手にどこまで通用するかだな…あいつは個性は強力だが、体の動き…近接となると爆豪の方に分があるだろうな』

(プ)マイク『ほうほう、なるほど…そりゃ見物だぜー!!』

変わる試合展開、実況も観客もなお一層盛り上がり続ける。

爆豪「いいぜぇ…戦闘訓練での借りを返してやらぁあ!!」

クラフト「ケガする前に降伏することをおすすめするぜ!」

爆豪「言ってろカスが!!!」

クラフト「後悔すんなよ!オラァ!!」

ドゴォっ!!

爆豪「っと!んな遅い攻撃当たるか!!オラぁ!!」

クラフト「おっと!そっちもそっちで大振りじゃん!!」

爆豪「うっせぇ!!くたばれっ!!」

両者一歩も引かぬ攻防が続く。クラフトのエンペラーランチャーを用いた攻撃力の高い攻撃と、爆豪の爆破を用いた動きの攻撃。それに呼応して会場の観客もさらに盛り上

がる。
観客「すげぇ!!ホントにあれ1年かよ!?」「もう動きプロじゃん!!」
観客「サイドキックの指名数ヤバくなるそうだな！」「これどっちが勝つだろうな!!」
（プ）マイク『レベルの高い試合に観客も盛り上がってるぜぇー!!』
クラフト「オラオラオラぁ!!そんな爆破じゃ俺にかすり傷すらつかねぇぜ!!」
爆豪「クソがっ!!だったらこうするまでだ!!」
スタングレネード!!
カッ!!!
爆豪が手の平を丸みを作る様に合わせるとそこから強烈な光が発せられる。その光は相手の視界と聴覚を奪い行動不能にする程であった。
クラフト「がっ!?（やられた…早く防御用の個性を…！）」
爆豪「背中がガラ空きだぜっ!!!」
クラフト「マズっ―!?!!」
爆豪「喰らえやっ!!!」
ＢＯＯＯＯＯＯＯＭ!!!!!
授業の戦闘訓練、今体育祭の麗日戦でも使った特大火力をクラフトの背後から撃ち込む爆豪。

（プ）マイク『爆豪！機神に容赦なしの爆撃ぃーー!!機神ダイジョーブかぁーっ!?』
爆豪「ハアッ…ハアッ……」
クラフト「痛っっ～～…君ってホントに容赦ないよね…」
爆豪「フン…これでテメェがくたばるわけねぇだろーが…！」
クラフト「これ生身の人間に撃っちゃダメだからね？そこ分かってる？」
爆豪「安心しろ、撃つ奴は選んでやっている…そしてテメェはその1人だ」
クラフト「マジかよ（パムパムの能力）…いや～嬉しすぎて感激だね」
爆豪「…（何する気だ…？）」
クラフト「今度はこっちの番ね。くらいな!!」ヒュッ!!
クラフトは爆豪の爆破で出来たステージの破片を数個拾うとそれを爆豪に向けて投げる。
（プ）マイク『あーっと機神！自棄になったか!?爆豪に向けて石をなげたぁぁーーー!!!』
爆豪「んなもん爆破で…」
クラフト「……」ニヤ…
爆豪「――っ!!」
クラフト「破裂石（バンクピエトラ）!!」
バンっ!!!!!!

耳を裂くような炸裂音。しかし爆豪はそれだけではなかった。全身にくる凄まじい衝撃波が彼を襲う。その衝撃波で爆豪は危うく場外になりそうになるがすんでの所で何とか耐える。

爆豪「っ――…やってくれんじゃねぇかハゲ野郎…！」

クラフト「その言葉そのままお返しするよ」

爆豪「ケッ…！だが勝つのは俺だ!!」ボボンッ!!

クラフト「いや俺だね！ＬＢＸトリトーン!!」

爆豪は爆破で上空に飛び、クラフトはＬＢＸでトリトーンに変身する。

クラフト「必殺ファンクション!!」

クラフトを中心にして包むように水の球が出現する。クラフトは錨をモチーフにした武器《シーホースアンカー》を用いて水の球の中で回転し始める。そして爆豪は爆破で推進力をどんどん高めていく。そして…

!!! 榴弾砲着弾（ハウザーインパクト）!!!

!! オーシャンブラスト!!

ドゴオオオオオオオオン……!!!

両者高威力の技の激突。コンクリートのステージは抉れ、破片が飛び交い審判をしてい

たミッドナイトやセメントスは爆風で飛ばされてしまう。高威力の水の渦による攻撃《オーシャンブラスト》、爆破のエネルギーを溜めてその溜めたエネルギーを一気に解き放ち、相手に桁外れの爆破を食らわせる《榴弾砲着弾（ハウザーインパクト）》。決着はどうなったのかとスタジアムにいる全員が思っていると煙が晴れていく。

（プ）マイク『互いにチョーっパネェ攻撃を行使した両者!!結果はどうなったぁ!?ミッドナイト!!』

（ミ）ナイト「ゴホッゴホッ…!!少し待ちなさい!……爆豪くん場外!!よって機神くんの勝ち!!」

観客「「「ワアアアアア!!!」」」

（プ）マイク『以上で全ての競技が終了!!今年度雄英体育祭1年優勝は…機神クラフトぉぉぉ!!!』

クラフト「痛ってぇ…（やっぱバリバリか自然使（ロギア）えばよかったかも…）」

大歓声に包まれる1年スタジアム。そして、気を失っていた爆豪が目を覚ますと表彰式が行われた。

――表彰式――

（ミ）ナイト「それではこれより表彰式に移ります!」

地面がせり上がり1位2位3位の高さに止まる。1位機神クラフト、2位爆豪勝己、3位緑谷出久、飯田天哉。だが…

爆豪「んーーー!!!んんーー!!」

耳郎「なにあれ…」

瀬呂「たぶん結果に納得してねぇんじゃね？」

（ミ）ナイト「3位には緑谷くんともう1人飯田くんがいるんだけど、ちょっとお家の事情で早退になっちゃったのでご了承くださいな♡！」

クラフト「メディアサービス…」

蛙吹「飯田ちゃん、張り切っていたのに残念ね…」

飯田の兄、ターボヒーローインゲニウムが敵（ヴィラン）にやられてしまった。緑谷はそのことを飯田から聞かされたことを思い出し、どうか無事でいてくれと願うのであった。

（ミ）ナイト「さあメダル授与よ!!今年メダルを贈呈するのはもちろんこの人!!」

（オ）マイト「私が!!メダルを…!!」

（ミ）（オ）「我らがヒーロー!オールマイト!!「持ってきたぁ!!」」

（オ）マイト「……」

（ミ）ナイト「かぶった…!」

観客「今年の1年はいいなあ!」「オールマイトに見てもらえるなんてなー!」

（オ）マイト「うぉっほん！それでは…緑谷少年！おめでとう!!」
　緑谷「ありがとうございます…！」
（オ）マイト「本戦では色々と大変な試合だったね。だが君らしくてよかったぜ！しかし無理は良くない！そこら辺を意識できるように頑張ろう！改めておめでとう！」
　緑谷「はい！ありがとうございます!!」
（オ）マイト「さて次は…おっとこれはあんまりだ…（汗）」
オールマイトは暴れる爆豪を拘束している高速具の一部を外す。
（オ）マイト「爆豪少年！2位おめでとう！」
　爆豪「オールマイト!!こんな順位！俺には意味ねぇんだよ!!俺が獲りてぇのは完膚なきまでの1位なんだよ!!」
（オ）マイト「うむ！相対評価に晒され続けるこの世界で、不変の絶対評価を持ち続けられる人間はそうはいない！受け取ってよ、傷として忘れぬよう！」
　爆豪「要らねっつってんだろ!!」
（オ）マイト「まあまあ…！」
拒否する爆豪に無理やりメダルを掛けるオールマイト。結果的に爆豪の口にメダルの紐がかかるのであった。
（オ）マイト「機神少年！1位おめでとう!!」

クラフト「ありがとうございます!!」

（オ）マイト「見事な伏線回収だ!様々な個性を駆使しながら見事この結果を勝ち取った!しかし個性に頼りすぎるのはいざという時何かあってはいけない!もっと地力を鍛えるといいだろう!」

クラフト「御意…!」

（オ）マイト「さて…!今回は彼らだった!!しかし皆さん!!この場の誰にもここに立つ可能性はあった!!ご覧いただいた通りだ!!競い!高め合いさらに先へと昇っていくその姿!!時代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている!!好敵手と書いて《とも》と読む!!それでは皆さんご唱和ください!せーの…!!」

「プル「プルス「プルス「おつかれさまでした!!」ウル…」ウ…えっ?」ウルト…えっ!?」

観客「えっ?」「そこはプルスウルトラでしょ!オールマイト!!」

（オ）マイト「ああいや…疲れだろうとなと思って…（汗）」

こうして怒涛の雄英体育祭は終了した。これから彼や彼の友人たちには様々なことが身の回りで起きる…それに立ち向かうためにも個性だけに頼らず自分自身の素の力も鍛えて立ち向かっていこうと彼、機神クラフトは心に強く誓うのであった。

打ち切りという名の終わり

完